ポケモン不思議のダンジョン 探検隊物語?―闇の創世者

アニー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケモン不思議のダンジョン　探検隊物語？―闇の創世者

【Ｎコード】
Ｎ３５７４Ｉ

【作者名】
アニー

【あらすじ】
ピカチュウとなってしまったエムコルスとチコリータによる、探検隊チーム『エレンシア』は、時の破壊を食い止め、世界は星の停止を免れた。そして、その後も、深い絆を結ぶこのコンビは様々な物語を繰り広げていく。
オリジナル要素や設定を組み込んだ、ノベライズもどき小説。主にエンディング後のストーリー。

プロローグ

今はごく普通の平和世界。夜半の空々には、無数の星が散りばめられて点滅するように延々と輝いている。誰が見ても感銘受ける夜景である。

しかし、その心和むはずの光景を見て、なぜか悔しがって唇を噛み締めている者がいた。頭からは白い毛のようなものが伸び、首の周りは赤の突起を持っている。キラキラとする星を見て、自らの負けを思い知らされていた。

何としてでも奴らは殺さなくては――ダークライは、宙に浮かびながら、自らの野望を打ち砕かれ、世界大戦と並ぶ大事件とされる、時の歯車事件の際、自分が手出しをしなかったことを後悔していた。

「また来るか……クレセリア」

美しく薄い光、本来なら空に浮かび上がるはずの光がダークライのそばに飛んでくる。ダークライは簡単に避けた。かなり遠距離からの攻撃だった為である。ダークライを襲った光とは、クレセリアと呼ばれた女性が放ったオーロラビームであった。

「……ダークライ、残念だったわね！　小さな二匹……いや三匹の英雄によって、もうアンタの野望も終わりよ！　諦めなさい」

そのクレセリアはダークライのやや遠くの距離から声を張り上げる。どうやらお互い顔見知りであるようだ。ダークライは彼女の言葉を嘲る。

「諦める？　フフフ、時の神と来たら、次は何の神だと思う？」

「ま、まさか……いや、そうはさせない！」

クレセリアは時の神、恐らくはディアルガとはまた別の神をダークライは狙っているのだと気付き、動きを速めた。ダークライの不意打ちを防ぐ為、念の為にも神秘の守りを張った。しかし、張る時間がロスだった。

「まぁ良い。いずれ頂点の神と言う場所に、私が辿り着くのだから

な……。この汚れた醜い世界を潰す！　そして私は暗黒の住み易く、愚かな争いのない、苦しみのなくなる世界をまた作り上げて見せるのだ。知っているか？　自分の生きる意味を疑った者は、やがて自殺して行くのだ……。だからこそ、そういう思考が至らない世界を私は望むのだ」

ダークライはクレセリアから悠々と逃げて行った。

「う……以前より速い……！」

ダークライに逃げられ、肩を落とすクレセリア。計算では神秘の守りを張る時間を利用されて逃走されるとは思ってもいなかったのである。　その時、彼女は予感するのだ。また、何かが起こるということを……。

プロローグ（後書き）

いやぁ、連載を再び始めた訳ですが、これからはまた忙しくなる為、更新頻度を下げさせて貰います。
そうですね……4日おきをメドとさせて頂きます。某作者のパクリとか言わないでくださいｗ

1話　一流探検隊（前書き）

章方式を廃止しました。理由？　話に大まかな区切りみたいなのがないからです。

それでは、またよろしくお願い致します。

今回の話は、前の３０万文字の面倒なの読まなくても、簡単な物語振り返りの文とかありますんで、ポケダンやってないし、見てないと言う人はそれを見るといいかと思います。

1話　一流探検隊

英雄となった探検隊の片割れが、時の神の慈悲により復活したあの日から、またしばらく経った。雲一つとしてない青空の中で、太陽が力を増して、地上を明るくし、辺りの景色も、生きる者達の心根も美に染める。底が透き通る川も、絶えず流れていた。

少し前まで活気を失っていたトレジャータウン。最近はまた元通りに活発になった。町に幾らかある店が積極的に活動を行い、探検隊をサポートしている。また、パッチールの営業するカフェも、注文メニューという物も登場し、充実した喫茶店となった。だから客も最近は多いのだ。

今は、こういう平和な世界である。それも、『時の探検隊』と称したエムコルス、チコリータ、ジュプトルの三匹による、長い歴史の中の一つに刻まれるであろう功績のおかげだ。

――エムコルス……通称エム。今でこそピカチュウであるが、彼は元々人間であり、更に、今日の世界よりも時間の進んだ世界に存在した者、つまり未来の者である。しかし以前まで、未来では時が停止し、自然による出来事が一切起きない、ただあるだけの真っ暗な世界、暗黒世界になっていた。だから、彼は、また未来の者であるジュプトルと出会い、共にとある事を決めた。暗黒世界を変えようと。ジュプトルは、他の未来のポケモンよりも、行動力があり、意志が強いポケモンであった。一時期は誤認による指名手配で四面楚歌となったのだが、それでも諦めることはなかった。

彼らは、時の歯車を時限の塔と呼ばれる場所に五つ嵌めればいいという事が分かる。しかし、その暗黒世界でそうする事は無駄だ。だから過去へ飛んだ。

だが、事故が発生し、エムコルスとジュプトルは離ればなれに。しかも、エムコルスに至っては記憶を失った上、人間からネズミポケモンであるピカチュウになってしまった。そこで戸惑う彼が信用

できたのは、自分を起こしてくれたチコリータであった。それも、異性同士。

チコリータは、優れた才能を持っている上に、純真な心であった為に、選ばれし者となった。そしてそこでエムコルスを見つけたのは何たる偶然、幸運であるのだろう。本来なら仲良くなる種族同士ではないはずなのだが、そこでチームを結成し、絆を深め合い、やがてはジュプトルと再会する。三匹はタイムパラドックスによる消滅の阻止の為、歴史改変に関わる者を、部下のヤミラミなどに殺させていたヨノワールに未来に連れて行かれる。だが、そこでジュプトルはピカチュウとなったエムコルスに気付き、そしてその後にまた元の世界へと戻ることができた。

やがては、時の歯車も集め、後は時限の塔にそれらを嵌めるだけとなる。だが、時限の塔の目前で、ジュプトルはエムコルスとチコリータにその使命を託し、ヨノワールごと未来へと帰って行った。使命を託された二匹は、見事にそれを果たし、世界を救ったのだ。

だが、未来から来たエムコルスは、タイムパラドックスで消滅してしまったが、それを深く悲しんだチコリータを見たディアルガが同情し、自身の力を使い、エムコルスを復活させた。ジュプトルは消えたままなのかは、分からない――

「……だってさ、チコ」

パッチールのカフェの入口付近の席に、あの英雄チームがいた。エレンシアは、活動を再開してからはまた多くの依頼こなしの為に不思議のダンジョンの探検をこなし、今やダイヤモンドランクにまで登りつめていた。その一匹であるエムコルス、つまりエムは、ジュースを飲みながら、店に置かれるようになった新聞に目を通し、自分達に関する記事を見つけて、軽く読み流していた。

「へぇ～。私達も有名になったものね。このポフィンもそういうのが分かるけど。にしても、これ上手く纏まっていると思うよね」

エムの相棒であるチコリータ、幾つかの理由でチコと呼ばれる彼女は、どこかの探検隊からのプレゼントとして、パッチールの方か

ら受け取ったポフィンを食べていた。大して腹が減った訳でもないので、ムチを伸ばし、それをポフィンに先端を小さく回して掴み、口に入れている。

「まぁ……悪いとは思わないけどな。だが、俺達で自伝書いた方がいいんじゃないか？」

エムは新聞を閉じ、椅子の右の地面に置く。やや不満気味であるというように、後の方の言葉を強調させた。

「でも、そんな時間無いんじゃない？」

逆にチコはあまり興味が無さそうに、カウンターの方を向きながら言った。

「はぁ……そうだよな」

エムもこれぐらいもういいかと頷き、話を別の話題へと変えた。もっと違う問題があった。時間無いと言われ、思い出したのだ。彼は何かが不自然だと思っていた。一流になってみて初めて感じることだ。不自然な物とは、今彼が言った、実績を残していながら、プクリンという、超えられない壁があることだった。彼は言葉を続ける。

「にしてもだ、何故俺達はこれだけやって来たのに、未だギルドの弟子に過ぎないんだ？　正直な、ああいう場所で何時までも一番下の後輩って立場はいい加減勘弁だな……」

ギルドによる探検活動の統制にエムは苛立っていた。ランクの割には、宝の発見は多くはないのだ。

確か、しばらく二匹でバカンスに行っても良いと許可が出た時に、ちょっと俺達は遠出をした。で、あまり調べなくて知らないダンジョンの探検に行ったんだよな。そこで珍しい色の付いたリボンやシフォンを手に入れたぐらいか――再会してからの事を回想している。探検したという事実以外に何をしたかは、エムとチコだけの秘密である。エムは腕組みをしながら視線を真っ直ぐに向けている……ようだが、チコと目が合うと、微妙に目線を逸らす。

「うーん……今でも十分楽しいと思うけど……。でもね、ギルドに

はちゃんと卒業があるみたいよ」
　チコは1ダースになったポフィンケースを閉じる。最近、妙にエムは愚痴っぽく感じられた。いや、高位を目指す為にそうなっているのかもしれない。自身の正体、謎などの悩む物も消え去ったからか、探検に関して、今はとても真剣に取り組んでいる。一番意識する事が探検になったからだ。
　それ以外の事も、エムコルスは少し変わったかもしれない。ギルドの梯子で足を滑らせて地面に転落したのだ。エムがそんなドジを踏むなんて事は、到底無かったのにも関わらずだ。
「果たしてそうなるまで認められているか……だな」
「そうでない訳がないと思うけど……。だから、今にその時が来るだろうし。……よし、もう行こうよ」
　もう飲み食いがお互い終わったのを確認し、チコは椅子から飛び降り、バッグを担ぐ。
「ああ。また何か貴重な物が売ってないか見て来ようか」
　少しの一服も終わったし、トレジャータウンに行こうか――お互い席を立ち、パッチールのカフェを後にした。　トレジャータウンまでは1分もかからない距離にカフェはあるので、町にはすぐに着いた。これまでと変わらない風景であり、幾つもの探検隊がウロウロとしている。今や星の停止という熱りも冷めており、最初は辺りからチヤホヤとされたチコも、エムが復活する辺りから、誰にも声をかけられなくなった。エムがまたこの世界に戻ってきた際に少し言われた程度である。
「ん……何か揺れてないか？」
「うん？　……どこかな」
　地震っぽい揺れに、エム、チコの脳裏に時限の塔が浮かび上がる。辺りを見回して震源地を探すと、その揺れは、向かって左側に見える建物を震源とした物なのだとすぐ気付く。
「そこみたいだな」
　エムはその建物を気分が乗らないような声を発しながら指差した。

そこで何があったのかは分からない。そもそも、どういう事をする場所なのかすらも分からない。

「エム……ちょっと行ってみよう」

行った事の無い場所ではあるが、何があったか気になる為に、そこへ走って向かった。事件があれば、この二匹はすぐ現場に向かおうとするのだ。

鉄製の建物の前に、マジックペンで直接鉄に書かれたのを見てみると、ガラガラ道場と書かれている。道場と言うと、修行場であり、恐らく想像するに、戦闘訓練ができる場所だ。

「古臭いな……」

第一印象を、素直にエムが口に出した。鉄が錆びたような臭いが止まらないが、中に入って行った。「うお……客が……客が来ただよ！」　建物の中には、右手に長い骨を持つポケモン、ガラガラがいた。嬉しさのあまり、床に骨を叩き付けていた。

「ねぇ、何があったのか教えてくれない？」

チコは興奮気味なガラガラの持つ骨をムチを伸ばして押さえてから、尋ねた。

「説明すると……何とだ、壁が崩れただ。爺ちゃんの封印が突然解かれただ。爺ちゃんは、とても危ないとか言ってて、オラはビビりまくってたもんだが……最後の間とか言ってただ。とにかく、そこには絶対に近付かない方がいいだよ！」

奥には二つの穴があるが、その内、右側の方は整備された様子だが、左側の穴は、壁が崩れ落ちてできたようだ。どうやら、そこがその危険な場所、最後の間らしい。

そもそも、ここには不思議のダンジョンが埋め込まれていた。それを生かして、道場にできたのだ。しかし、その中にはとても強いポケモンが潜む場所もあり、実力者でなくては危険で入れないと言う。

「そ、そうなの……」

別にそう言われても――無理と言われても、自分達なら行っても

大丈夫であろうと、チコは思った。と矢先、エムがその思うことを口に出す。

「ならな、今から俺達が行って来ようか？」

エムは、今から探検すると訴えるように、体格に見合わず、余裕たっぷりな表情の二匹。普通なら恐がるはずだと、ガラガラは思っていた。しかし、そうではなかったのだ。

「な、何故そんなに強気なんだ？　って……もしかしてオメエ達、世界を救ったとか言う探検隊じゃないか？」

ガラガラはハッと気付き、思い出したように言った。エムとしても、チコとしても、久々にそう言われると目頭が熱くなる。

「そうよ。良く分かったね」

チコは嬉々としてにガラガラに微笑みかける。

「だったら話は早いだ。特別な探検隊なら料金は無料！　ただし、そしはオラとしょ……いや、勝てる訳ないだ。オメエ達でお互い探検隊の間で勝負してくれたら、オラはオメエ達に使用料を要求しないだよ！」

面白い戦いを見たいが為に、ガラガラは、骨を二匹に突き付けて、そう提案した。

「勝負……エムと？」　チコは驚くようにしてエムの方を見る。彼の反応を伺うと、実に面白そうな、自信に溢れた表情で鼻を掻いていた。

「面白そうじゃねぇか。もっとも、相手側がビビってるかもしれないがな……」

エムは遠回しな言い方でチコを挑発した。そうでも言わなければ、受け入れてはくれないだろうと思ったのだ。

また意味の違った威嚇で、尻尾を振り回したり、ジャブを放ったりしている。

「残念ながらね、そんな訳がないのよ。こっちも、エムと戦いたいと思った事があってね……本当に丁度いいよ」

こちらは葉を振り回し、今度は本当に葉を放ち、エムの後頭部ス

レスレを通過した。
「……やってくれるじゃねぇか」
エムはこの行為に少しムカっと来たのか、彼の頬が帯電している。チコの方も戦う意志があった。常に共闘してきたのに、勝負した事がないと言うのもおかしな話だ。これを機に修行の意味も兼ねて戦おうと、お互い思ったのだ。
そしてガラガラと共に探検隊の間に向かい、広々と戦えそうな位置で、エム、チコは向かい合った。
「エム、手加減はいらないよ」
前屈みになり、チコは戦闘態勢をとった。
「そっちこそな……」
エムは両手を構え、格闘するかのような姿勢になる。電気技は効きにくいので、それ以外の技で勝負しようと考えたのだ。
とにかく、負けたくない。その想いだけが、エムコルス、チコリータの頭の中を巡り続けた。

2話　相棒との対決

「どこからでも来い……」

エムは手の平を自分側に向けて仰ぐように振って軽く挑発する。

来いと言う指示を出す時のジェスチャーと一緒だ。

「その余裕を後悔することね！」

チコは葉を回転させて、左右上下、身長の五倍にまで、大量に葉っぱカッターを放った。エムとしては、横っ飛びに避けるには隙が大きい。防御しては腕が痛くなる。ジュプトルのように穴を掘ることもできない。そして、伏せれもしないまで下に広げている。ならば、上だけだ。

葉っぱカッターの上への攻撃範囲を超越する高さにまでエムは飛躍して避けた。

そうして避けることを想定していたチコは、上へ向けて片方だけムチを伸ばす。そのムチはエムの真正面、胸の部分に向けて放つ。微妙な位置である。

エムは右腕でそのムチが目の前まで伸びた時にフックし、薙ぎ払った。しかし次に、もう片方のムチを上方まで伸ばしてくる。叩き付けだろうとし、後ろ回転のアイアンテールでそれも振り払う。その瞬間、前への宙返り一回転から、尻尾で叩き付けようとする姿勢に入った。

（どう反応してくるか……）

エムが反応を伺っていると、真正面からの特攻に等しいと思ったチコは左にかわし、攻撃に備える。しかしエムは一回転した所で向きを調整し、チコの方へと射程圏に再び入った。

来るっ！――直感的に頭の中でそう叫び、チコは再び避ける。そしてエムは地面に尻尾を叩き付ける直前に攻撃を中断した。空振りしたのでなく、ただ地面に着地したのみなのだ。

お互い至近距離にいる。エムの方が接近戦で先手を取り、両手に

電気を溜め込み、連続での雷パンチを狙った。ストレートはチコが葉で受け止めた。続くフックもエムは葉で止められる。何気に葉っぱのガードが堅いと、エムは感じ、後ろに一歩退き下がる。少し自分の腕が伸びたかも……と、体感できた。

一方で、チコも、このパンチは重いと感じていた。直後、ピカチュウのリーチの短い足でも届く蹴り、飛び蹴りメガトンキックを、チコの背の高さの都合上、ほぼ一直線で前へ飛んで繰り出す。これなら威力も十分で、葉のガードでも止めきれないだろうと判断したのだ。

しかし、チコは、彼が後ろへ下がっても隙を全く見せずに、素早く電光石火をしてくる予想しており、上へと飛んでいた。

「く……！」

エムは攻撃を空振りしてしまうが、素早く姿勢を立て直そうと、足を引き戻し、クイックターンをする。チコが葉っぱカッターを放っていた。その一枚一枚は避けてられないと感じ、体に向かってくる葉っぱカッターに電光石火で突進した。

葉はその勢いを突進スピードにより掻き消され、エムもかすり傷程度で済んだ。振り出しに戻るように、再びお互い向き合った。

「やるな……流石だ」

エムは構えを解かずに立ち続け、ここまでの感想を一言述べる。そして、ここまでチコに全く攻撃をヒットさせていない事に気付く。

「ありがと。でも勝つのはこっち……！」　チコは褒め言葉に対して軽いウィンクで受け答える。淑やかなその表情を見ていたエムは思わずはにかんで目線を逸らした。

「……お、お喋りはここまでだ」

まだ戦っている途中なのだと気付き、エムは解きそうになった構えを元に戻した。

ハイレベルな戦いだと言いながら、ガラガラは骨を振り回して、階段の部分に座りながら戦いを観戦していた。妙なムードが一瞬流れたと言うことに、彼は気付いていなかった。

「そうね、じゃあ行くよ！」
そう叫んでからチコは左右それぞれに葉っぱカッター……しかし今度は少し狙う位置がズレていた。だが、激しく回転しており、弾道が曲がっている。しかし、エムは葉が後ろに行った後、音が逆に近付いていることに気付いた。反射的に後ろを振り向き、飛び上がって何とかそれを避けた。まるでブーメランだった。
「ふっ、いつの間にこんなの編み出したんだお前は……。それでも、俺が負ける事はないがな！」
お次はこっちだと言わんばかりに、エムは自分の影分身を作り出した。そして、その分身でチコを取り囲んだ。本物は、チコが背中を見せる瞬間を狙った。そして、分身を見極めようと、チコが背中を向けた瞬間、分身を消して、尻尾を横に振り回したアイアンテールで叩きにかかった。しかし、またしても頭の葉に封じられる。
チコの背後に向かって大きく飛び込み前転をする。チコはそれを目で追う。そして間髪入れず、エムは電撃波を放った。最近は威力が足りないと言う理由で使っていなかったが、正直言って大怪我させる訳には行かないこの戦いで使うには、結局十分だった。
しかし、技を出すタイミングはチコと一致していた。チコは試験的に、普通の葉っぱカッター、ブーメラン葉っぱカッターを同時に出そうとした。通常の方は横幅を広げて、ブーメランの方は縦幅を広げようとし、二つに意識を集中させ、少し長い瞬きをしてから、葉を振った。すると、二方向に葉は分かれて飛んで行った。しかし、やや勢いが足りなかった。
そして電撃も飛んで来たと思い、チコは右に避ける。しかし、その電撃は自分に追尾してきた。
それと同時に、エムも思惑にはまり、通常の横幅の攻撃が広い一直線の葉っぱカッターは、上に飛躍して避けた。しかし、直後に背後からまた葉っぱカッターが来ている。
「うあぁっ！」
チコに電撃が当たり、痺れたという声を出して軽く後ろに飛ばさ

れた。
「ぐあっ！」
　同時にエムも少し勢いの無い葉っぱカッターを当てられて、滞空状態の姿勢も崩されて、空中から地面にうつ伏せで落とされた。
「くっ、相打ちか……」
　どちらもダメージは少なく、すぐに起き上がった。しかし、ガラガラが立ち上がり、声を張り上げた。
「オメエ達、これ以上仲間同士で戦うのも嫌だろうよ！　素晴らしい戦い見せて貰っただよ。ここで試合終了すればいいだよ」
　ガラガラがそう言い終えると、お互い一瞬向き合ってから、構えを解いた。そしてお互い近付き、健闘を分かち合うように頷き合った。結果は引き分けだ。
「エム……相変わらず強かったね」
「チコこそ……強かったな」
　一先ず、お互いに簡単に感想を述べて、階段を上る。とにかく、一度戦えて良かったと、二匹共に思っていた。
　勝てはしなかったが、負けもしなかった。どちらともにもボロが出ていたと、気付いた。この勝負には勝ち負けや引き分けとは別の結果、結論も出たのだと。表ではそうなる。ちなみに、裏ではこれが絆の深め合いという事になった。
「何か、私にもエムにも、お互い結構動きにクセがあったと思うのよね。現に、エムが見た事が無い攻撃をしたら、対処に戸惑ったよね？」
「確かにな。しかしだが、挟み打ちを俺達良くやるだろ？　そうなると、自分も後ろへの警戒がかなり強くなるんだよな。だから背後から来た葉っぱカッターを避ける事ができた……。普通なら喰らう」
　エムコルス&チコリータによる、戦闘議論が始まった。敵では無いので、いつもはできない、戦いで思った事を語る事ができるのだ。
「前後からの同時攻撃は避けれなかったね……。でも、あれはそっちも電撃波で攻撃してきた上に、元から避けにくい攻撃だった。そ

して、エムも見た事がなかったからね」
「そう、つまりお前が最初に言ったクセ……それはお互いいつも見ている動き。しかし、最後はあまりない動きだった。だからああいう結果になったんだ。これから、見る世界はきっと広くなる……。精進しなければならないんだ」
　エムはチコの言った事に頷いてから、手を用いて話した。いつも見知らぬお尋ね者などをいつも倒してきた、基本的に行う攻撃方法が通用せずに対処された。見られていたからである。そして、最後の相打ちでは、威力が低い技にはなったが、逆に攻撃が読めなかったので戸惑ったのだ。
　話の結論、そして戦いの教訓を言えば、身内、仲間での戦いの場合は、見られた事の無い動きでしなければならない、ということだった。もしかしたらこれから、少し重要になるかもしれない。道場の中で二匹は立ち止まっていたが、そろそろ出ようと出口の前に立った。
「最後の間は……今度行かせてもらう」
　道場から出る間際、エムは何かが潜んでいそうな穴を見ながらそう言った。できれば、今行きたいのだが、もう時間が無い。
「……とにかく、これからも頑張るだよ！」　ガラガラのエム、チコを見送る言葉はそれだった。彼もご機嫌になったし、これで良かったのだろうと、エムもチコも思っていた。　そしてトレジャータウンに出ると、ビッパが慌ただしく誰かを探しているのが見えた。一体何をしているのだろうと思い、彼に近付いた。
「ビッパ、何をしてるの？」　チコに声をかけられると、喜ぶようにビッパは素早く振り向いた。
「見つけたでゲス！　早く、ちょっとギルドで召集がかかってるんでゲスよ」
　ビッパは大事件が起きたと言うように慌てふためいている。また何か重大な罪を犯した犯罪者でも出たのだろうか……と、エムは不意にもジュプトルを思い出し、唇に手を当てた。

「また……誰かお尋ね者の話なのか？」
「いや、違うでゲス。……少なくとも悪い話では無いゲスよ！　とにかく、来るでゲス！」
ビッパはたらけたような顔をして首を横に振る。エムは少しだけ安心して、吐息を吐いた。エム、チコはビッパの言葉に頷き、とりあえずギルドへと戻った。

2話　相棒との対決（後書き）

どう考えても今まで通りの関係じゃないと分かる気が。
本当に危ない方々になってしまいましたね。色んな意味で。

3話　卒業試験

「卒業……試験だって！？」

ギルドの地下二階に行くと、ギルドのメンバー全員が集まっていた。そして、ペラップから伝えられた事は、ギルドから卒業できるという内容だった。つい朝に話したばかりではないか。そうチコは思っていた。

「そうだ。ギルドを卒業だ♪　卒業すればギルドから出られるし、毎日の辛くて面倒な修行からもオサラバだ。ただし、卒業試験に合格しないと駄目だがな……」

ペラップは卒業に関して簡単に説明した。打ち合わせ表のような用紙を持っており、何だか壮大に行いそうな様子だ。

「ヘイ！　ペラップ！　オイラ達先輩をさしおいて、エム達が先に卒業試験受けるなんて、やっぱり酷すぎじゃないか！？　ヘイヘイ！」

エムやチコが、体は小さいながら、一人前として黙って立ち尽くしていても、ヘイガニは不服そうにペラップに抗議した。

「お前達とは既に実績が違うのぐらい分かるだろう？　エレンシアは世界を救った♪　どんなに宝を手に入れようとも、超えられはしない事だ。試験を受ける資格があるのも当たり前と、親方様は判断なされた。そして、そろそろこのギルドにいる事に苛立っているだろうと、親方様は言っていたし……」

「ヘイ……そうだよな」

まだ不服そうな表情をしているものの、渋々納得したようにハサミを腰の横に下ろした。

そして、見事に心中を打ち抜いたプクリンに、エムはかなり驚いた。やはり別格なのか……とエムは考える。

「……という訳だ。これから卒業試験を行う」

突然告げられた卒業。もうすぐギルドの仲間との別れの時も近付

いているという事実も、まだエムもチコも実感できてはいなかった。
「去年、ドゴームが卒業試験を受けたわよね」
「でも呆気なく落ちたけどな。ヘイヘイ！」
昔話をしみじみと、キマワリとヘイガニが語った。ビッパとエレンシアの二匹以外が笑い始める。
「う、五月蝿いっ！　あ、あれはな……」
相変わらずの爆音で、場の笑い声を掻き消すドゴーム。
「で……何をするんだ？」　エムが大きな態度を取るように腕組みをしながらプクリンに聞いた。
「まず、今日はこれ以降は自分の部屋でずっと待機してね♪　そして翌日、神秘の森という森の奥に光の泉という場所があるんだよ」
「光の……泉？」
チコは首を傾げて尋ねて、エムの方はコクンと頷いた。
「うん♪　元々進化できる場所だったんだけど、時が壊れた影響なのか、今は泉に光が差さなくて、進化もできないんだけどね」
プクリンはペラップより持っている用紙に目を通しながら話している。
進化ができない……この現象により、エムやチコのように、見た目に合わず強いという事が多く発生しているのだ。
「その光の泉に行き、そこにあるお宝を取って来て欲しいのだ♪　お宝を無事持ち帰ることができれば合格だ。お前達は一端の探検隊として認められて、晴れてギルドから卒業できる♪」
「そっか！　お宝を取ってくればいいのね」
ペラップの説明にも納得が行き、分かったと言う風に、エムもチコも頷いた。
「ただし、気を付けて欲しいことが一つ。あそこには、とても恐ろしい悪の大魔王が棲んでいるんだよ」
「はいぃ！？」
「えええぇ！？」
プクリンの言った言葉に、エムもチコも驚いていた。ほぼ同時タ

イミングで声をあげた。
「うん。大魔王はとても凶悪で誰も関わりたくない恐ろしい存在だけど頑張ってね♪」
「以上、終わり！　仕事に戻ってくれ♪」
ペラップの指示で、全員が知らん顔をして梯子を登って行った。
そして、試験のルールを破る訳にもいかない為に、エムもチコも、部屋へと戻った。
今日はまだ、訓練という命名で相棒同士での勝負ぐらいしかしていない。とにかく、暇でしょうがなかった。部屋で一日中待機……。
「どうしよう？　悪の大魔王だなんて……。どうしてそんな場所で試験するのかな？」
チコはスペードのKのカードの上に、スペードの2を置きながら、心配しながら試験の不安要素を話していた。
「馬鹿か。自分達を何だと思ってる？　ディアルガを倒せたんだからそんなの、ただの雑魚に決まってる。あ……パス」
グラードン、ディアルガ……既に伝説のポケモンを幾度か倒してきている。だから負ける訳もないと、エムは思っていた。エム、チコは古代からある遊びのトランプをしていた。それらで時間を潰している。
部屋の中で暴れ回る訳にも行かないし、トレーニングができる用具も無い。特訓するのにも、ここでは無理な話だった。
「あ、おいおい、ジョーカーであがるんじゃねぇっ！」
大富豪をしているのだか、エムが引いたカードは弱く、必殺の革命も返されて、手も足も出ずにチコに完敗したようである。そこで、負け惜しみかルール違反だと、立ち上がって抗議している。
「手札見せてよ。どっちにしても私の勝ちでしょ？」　チコはさっき出したハートのAと、今出したジョーカーを見せつけた。
「く、くそっ……もう一回！」
エムは中央のカードをゴチャゴチャにして、寄せ集めてカードをシャッフルした。こうしてトランプを楽しんでいるのだが、実際に

トランプで楽しみ始めたのは少し前からである。こういう娯楽も、楽しめるようになったのだ。

その頃、ギルドの中では再び会議が開かれていた。卒業試験の打ち合わせである。ただし、ビッパを除いて。

「……落とし穴と梯子は以前親方様と提携している仕事屋に任せて設置済み。……さて、この試験方式は二回目だな」

ペラップが説明し、プクリンが恐ろしいぐらい黙りながら、全員に見通し眼鏡を渡していく。久々の試験に親方はワクワクしているのかと思うと、唾液を飲まされる。あのトラウマになる試験を受ければ、恐ろしくなる。しかも、明らかに声に聞き覚えがあるのだ。

ドゴームも落ちたという、試験の内容とは、受験者を穴に落として蓋を閉めて、ギルドの弟子の中で、卒業試験を受けた事がある者達で受験者を襲うというものなのだ。

「見通し眼鏡は、暗闇の中でもポケモンの姿が見える道具だ。ちゃんと相手を暗闇の中でも狙う事ができる。そして、そうする事で、絶望的状況の中でどう対処できるかが見所なのだ。ただし、ドゴームには対処できなかったがな♪　それで……」

ペラップが作戦説明中にも、辺りで嫌らしい微笑みが、ここにいる皆の顔に浮かんでいた。

どんなリアクションをするだろうか、抵抗はしてくるのか……並大抵の実力では成功しない試験である。後輩として大切に見守っているが、簡単には合格させまいと意気込んでいた。

・　・　・

翌日、いつもと違う、妙な雰囲気の中で迎えた朝。どういう雰囲気かと言うと、今から暗殺にでも行く団体のようである。もちろん、そんな雰囲気を、エムもチコも感じ取っていた。

「ねぇ……」

昨日の悪の大魔王がいますよ宣言に加えて、この不自然さに肝を冷やされているチコがドゴームに尋ねた。
「な、何だ？」
見透かされたかと、ドゴームは振り向いた。
「悪の大魔王って何者なの？」
「いや、悪いがそれだけは教えられん。ギルドのしきたりだからな。だがこれだけは言っておこう。とても恐ろしい出来事が待ち受けていると……」
ドゴームは頭を振り、教えてくれない。そして、怖い話でもするかのような表情で喋られた。
そんな顔にどう反応すればいいのかと思うが、とにかく昨日の外出禁止といい、ギルド側で仕掛けた罠があるという可能性も高くなってきた。
「うーん、ドゴームに聞いても分からなかったね……」
「いやだから、そんなのぶっ飛ばせばいいだけだろ」
エビワラーとでも戦っているかのように、自信満々といった様子で前にフックパンチをするエム。
前方からは顔見知りであるヒメグマとリングマがやってきた。
「あ、チコリータさん、エムコルスさん、こんにちは。今から私達は神秘の森に行くの」
ヒメグマが口に指をくわえながら言った。
「神秘の森？　あそこ大魔王がいるとか噂あるのよ？」
「大魔王……？　聞いたことないぞ？　ガセじゃないのか？」
魔王と言われても全く噂を知らない……そんなヒメグマとリングマの反応だった。何言ってんだかと、呆れた様子で、とっとと去って行ってしまった。
「……やっぱり変ね。絶対何か仕掛けたみたいね。気を付けていかないと……」
「ああ。だがそれがどういう物なのか、見てみないと分からないけどな」

どういう罠をギルドは仕組んだのか。誰かを雇って敵として登場するのか、それともトラップを仕掛けたのか……。予想もつかない。それ相応の準備も必要。そういえば、自分で早くギルドを抜けたいと、ついさっき言っていたのを、エムは思い出した。だが、はやらずに、いつも通りに冷静にやらなければならない。だから、ここで自信過剰になりすぎないよう、マインドコントロールを心がけていた。

「……よし、頑張ろうね。行こう！」

「何を気合い入れ込んでる……これまでのようにやるだけだ」

心の落ち着きを自らで確認したエムから出た言葉。今まで頑張ろうと言い合うのが常だったが、今回は違っていた。

二匹は準備を整え、トレジャータウンから出ようとする。久々に引き締まった姿のエレンシアを、タウンの者達は目撃していた。

4話　大魔王

不思議な程に輝きを放ち、緑の木が生い茂っている、神秘の森。
花が咲き乱れ、そして時折舞い散る。その心安らぐ美しさもあり、ここには、森の妖精が棲むとも噂されている。そこの奥地にまで、エムとチコは宝物を取りに行けと言われているのだ。
「奥地か……この奥に光の泉があるのか」
見渡す限り、辺りには太い樹木しかない。しかし、何者かの気配を、エム、チコは感じていた。だが、大して強くも無い、鈍くて緩い気配である。
「ねぇ……ここ何かいない？」
不安げに、その気配をチコが語る。エムは両手を地面に置き、左右を振り向き、溜まりに溜まったかのように、頬の電気を軽く放出する。それにより、気配は何か怯えたように感じる。ただの野生だったのだろうと思い、エムは気配に対する警戒を解いた。
「大丈夫だ。大した奴じゃない」
草のクッションのように、葉が大量に円上に並べられた場所を見ながら、エムは言った。誰かここで住んでいるのかと思いつつ、逆側に目を通す。すると、ヒメグマとリングマが来た。
「あ、来てたんだ。で、噂の大魔王はいたの？」
ヒメグマが体を伸ばしながら言う。
「いや、全然……」
「ほら、やっぱりただの噂だったんだ」
勝ち誇るように、リングマは腰に手を当てる。彼にとって心落ち着く場所なのか、大きなあくびをしていた。
「で、大魔王探しにきたの？」
「いや、光の泉に用があるの」「ああ……そこならこのすぐ向こうだぜ。ついて来いよ」
「本当？　なら行こうよ」

チコは目を輝かせて、奥側をムチで指差すようにした。ヒメグマとリングマは大量の葉の地面のすぐ隣を歩いて行った。そしてそれについて行こうと、エム、チコはその葉の上を通過した。

しかし、その時だった。いきなり地面が抜け、足が軽くなる。体は下へと落ちて行き、崖の下へと真っ逆さまだ。

そう、これは立派な落とし穴だ。大量の葉は、上手く穴を隠していたのだ。

「わあああぁっ！」

いきなり落とされて、チコが悲鳴をあげた。まるで、滝壺の洞窟の罠の時のようだ。

「……ふん。チコ、着地しろよ！」

と、エムは言い、空中で体を一回転させて、地面には四つの手足を使って着地した。そして、チコも無事に、無傷で地面に降りた。

そして落ちてみて辺りを見回すと、誰かにより掘られたような跡の残っている壁とそして、梯子があった。

「落とし穴に落とされたのか……俺達は」

エムがそう言った瞬間、上部の穴に蓋がされて行き、穴の中に差し込む光が消えていく。そしてやがて、中は、何も見えず、真っ暗となった。

「ああっ、真っ暗！」

目を開けても閉じても、見える景色が変わらない状況になる。閉じ込められたが、ここで何をされるのかが分からない。

と、突然、大量のポケモンの気配が一気に近付いてきた事に気付いた。

「……誰だ？　俺達の目の前にいるんだろ！？」

エムが暗闇の中にいる誰かに言葉をかけた。正面にいるポケモンからが、最も強いオーラを感じるからだ。

「フッフッフ。良くぞ気付いた。ようこそ闇の世界へ！　僕……いや、我は悪の大魔王♪」

いかにも演技臭く、そしてどこかで聞き覚えのある声だった。

「そして、その子分もいるぞ♪　貴様らは完全に包囲されている♪」
やはり、気配の通り、複数の誰かが暗闇に存在しているようだ。
……しかし、この声にも聞き覚えがある。
「だ、大魔王!?　ほ、本当にいたのね?」
チコが辺りをキョロキョロしながら言う。見回しても、包囲されているのかも分からない。
「我こと大魔王と、その子分九傑に会ったからには、生きては帰さないよ♪　皆の者、かかれ～♪」
大魔王と言う男が命令した直後、エムもチコも、気配が急速に接近するのを感じた上、足音すらも聞こえるようになった。
（周囲にいる……。音だけでタイミングを……！）
耳をピクピクと動かし、耳の反応が敏感になった所でエムは後ろ回転から逆立ちをし、地面に付けた手を軸に、尻尾をカポエラーの高速スピンのように振り回した。それが壁となり、尻尾に様々な衝撃が加わるのを感じた。
チコの方はと言うと、地にべったりと伏せたと同時に、前方へ光の壁とリフレクターを張り、こちらは主に飛んでくる攻撃を防いだ。
弾かれたことによる、やはり聞き覚えのある声による悲鳴がそこら中から聞こえる。……と、その時、蓋が再び開かれ、穴の中に光が戻ってきた。……そして、そこに辺りにいる、エムとチコを襲ったものの失敗した者達の正体は、紛れもなく、プクリンのギルドのメンバーだった。
「あ……」
姿を完全に見られ、プクリンは固まっていた。
「プクリン……何故ここにいる?」
エムは逆立ち状態を解き、手の埃を払う。エムの周りを囲んでいたのはドゴーム、グレッグル、ヘイガニ、そして一歩退いてペラップだった。そしてチコの方は、キマワリ、チリーン、ディグダ、ダグトリオが囲んでいた。中央にはプクリン。これは、エムにとっては、昨日の怪しさからすれば、別に驚きでもない結果なはずなのだ

が、やはり驚かされる。ドゴームが恐れていた理由が、ようやく把握できた。そして言葉を続けた。

「手加減してくれるようだな……相性的に」

明らかにできるだけ不利がないように相手が構成されていることに気付いた。女相手には女を……ということにも拘られている。

「こ、こらビッパ！　何で蓋を開けたのだ？」

ペラップが穴の外まで飛んで行き、傍にいたビッパを激しく突く。

「ひ、ひぃ！　い、痛い！　痛いでゲス！　み、見づらいだろうと思って開けたんでゲスが……まずかったんでゲスかね？　あっしはただ落ちたら閉めろと言われただけで……試験の手伝いなんて始めてなんで分からないでゲスよ……ううっ」

ビッパが震えて半泣きになりながら、言い分を説明する。エムとチコが落ちる前に感じた、大したことはない気配とは、ビッパのことだったのだ。ペラップは目を細めて更にビッパに顔を近づけた。

「デッパ……じゃなくてビッパ、お前ねぇ……この見通し眼鏡！　これが分からないのかい？　私が前に苦労して集めたのだ！」

「ううっ、ごめんなさいでゲス……」

文句を言い終えると、ペラップは穴の中に再び降下して行った。

「ねぇ、これは……どういうことなの？　とりあえず説明してよ、プクリン」

チコに聞かれると、一斉に沈黙が始まった。誰も動かず、口も動かさず、目も動かさず。ゴタゴタしてないかと、受験者のエムもチコも、少し気まずくなってきた。

おいおい……何だよこのムード――エムは呆れるように顔を掻いた。そして、チコは防御の壁を解き、攻撃の気配がないので構えを解いた。すると、プクリンが一瞬だけ目線を上にあげた。

「……プ、プクリンって……だあれ？」

強引にこう押し通し、とぼけた顔にプクリンはなった。記憶喪失にでもなって馬鹿になったような、まるで顔芸でもしているようだ

った。
「げっ、マジかよ……」
本当に襲う気が満々だと言うことに、エムが気付く。それと、何故バレバレなのに、そこまで押し通そうとするのかが、本気で疑問でしょうがなく、悩んでいる。深刻な顔になっていた。
「ねぇエム。そんなに真剣に悩まなくてもいいと思うけど……」
エムが考えているそばから、チコからのツッコミが入った。
「フッフッフ♪　そしてこの私達もその子分！　大魔王とその子分九傑！」
「私も知りませんわ！　キマワリなんて！」
ペラップも、キマワリも、強引に全くの赤の他人であるということを押し通した。ならさっきのは何だったのかと言われれば、そこまでである。
「えっと……我らは正義の勇者。悪の大魔王を征伐する者なり！」
エムは分かりきっていたが、あえてそれに受け答えた。再び腰を下ろして構える。そして、チコも同じくして戦闘態勢に入った。
「とにかく……やればいいのね。本当に、仲間内のみんなより私達が上だと見せ付ければ……」
チコの言うことは大体は合っている。辞めるなら勝手にしろ。ここを辞めるなら自分達を殴ってから出て行け……様々な場所でそう言われている。しかしギルドはそれを許さない方針でいて、一度やると決めたならやり通せ、逃げるような根性の腐った奴は叩きのめす。そういう場所である。
一人前と認められる、つまりやり通せたのだから、辞めてもいい。ただし、全員を殴れたらだ。そういう試験なのである。
「ならばエ……じゃなくて、正義の勇者とやらよ、大魔王の恐怖、とくと味わうがいいよー！　たぁーーーーーっ！！」
プクリンの決め台詞とも言える「たぁーっ！」をシグナルとして、卒業試験の戦いが幕を開けた。

5話　子分（？）との激闘

まず先陣を切ったのはヘイガニで、放った技はバブル光線。エムは地に伏せつつ、振り向いて周囲の動向をはかった……ふりをして、いきなりヘイガニに向けて十万ボルト。泡の一部はかき消され、不意打ちに近い攻撃に、ヘイガニはエムの電撃を浴びた。

「へ……ヘイ……」

焦げ音を体から出しながら、ヘイガニは一撃で気絶していってしまった。

強い……と、素直にエムコルス撃退組の他の二匹は思う。

一方でチコは出始めに葉っぱカッターをディグダとダグトリオに放った。一瞬のことに反応できず、潜ろうと思った途端に、親子もろとも倒されてしまった。……と、次に、チリーンのサイコキネシスが襲う。しかし、チコは確実に光の壁で抑えきった。

「覚悟ですわっ！」

上手く背後にまわり込み、キマワリが近付いてくる。手の葉で叩こうとしているのだ。チコは葉に葉をと、頭の葉っぱで対抗した。力勝負となり、葉同士で押し合うが、チコリータとキマワリを比較しても、パワーは互角だった。

（この頑張ってる顔……エムの方も……やっぱり可愛いですわー！きゃー！）

チコ、エムの戦闘中の研ぎ澄まされた目を拝む為に、押し合い中にもよそ見をするぐらいの余裕がキマワリにはあった。というより、本気で強力な技をぶっ放したりはしないと決めていたのだ。ただし、立ち回りは本気で行く。

「梯子……。よし！」　チコの方から後ろへと下がり、チリーンの位置がどこかを確かめようと辺りを見回すと、先に金属製で壁に固定された梯子を見かけた。梯子の足場の一つ一つの感覚は、自分の体およそ二つ分。更に梯子の後ろ側に、周囲をまわっても大丈夫な

ぐらい大きなスペースがある。
チコは梯子にツルの鞭を伸ばして、引き、そこへと移動した。ツルを紐代わりとして、宙にぶら下がる。
「あ……あんなやり方があったなんて、驚きですわー！」
そこまでチコがやれるとは思っていなかったキマワリが、手の葉を口でくわえながら驚きの声をあげた。そして言葉を続けた。
「あれだと狙ってもムチを自在に動かされて、簡単に避けられますわ」　キマワリがじっと、ぶら下がっているチコを見つめる。
「キマワリ、それならムチを狙い落とせばいいじゃない？」
チリーンがそう言いながら、サイコキネシスをしようと構える。なお、チリーンはキマワリに対してだけは友好的であるというか、殆どのポケモンに対する企業における社交的な振る舞いではなく、友人として呼び捨てにして、タメ語で話すのだ。
「うーん……とにかく行きますわー！」
キマワリは梯子へと近付いた。しかしチコはまだ上方へいる。
「花弁の舞を覚悟ですわ！」
キマワリは手の葉から桃色の大量の桜を上へと散らす。チコは、もう片方の側の手を置くつまみへ移動して避ける。避けきれないものは、葉っぱカッターで威力を弱めつつ、葉で受ける。葉っぱカッターでは花弁の舞には勝てない。
「これ以上攻撃を受け付けないよう……」
投げ上げの攻撃だからか、重力の力もあって多少は弱まっていた花弁の舞の猛攻を抑えきり、チコには余裕ができ、チリーンのサイコキネシスを読んで横に光の壁を張った。
やはりチリーンはサイコキネシスをしてきた。しかし、その念波を、壁で完璧に防御し、無力化させる。そちらにチコが気を取られるうちに、キマワリは梯子を一気に駆け上ってきた。
チコは金属音に気付き、速やかに下を向く。梯子の周りをグルっと梯子に巻き付いたムチを頼りに一周し、ムチの先端の力を抜き、遠心力を生かしてキマワリの頭上へ体当たりをした。更に、勢い付

けたことで威力は高まっている。
「きゃー！」
チコはキマワリの首に足を押し付け、のしかかってトドメを差そうとしている。キマワリは汗をたらして声をあげていた。
「ごめんね……キマワリ」
それなりに仲が良かった相手であったからか、地面にキマワリが叩きつけられた時、チコは頭を軽く下げ、そう言って謝った。
「油断してる場合じゃないですよっ」
その忠告のような口調が飛ぶと同時に、チリーンが今度は念力を仕掛けてきた。今はチコは地上におり、光の壁の防御の範囲外にいる。そこを狙った。
「……っ！」
念力に操られそうになり、それにチコは必死に抵抗しようと気張り、顔をしかめる。その中で、自分のもとへ戻ってくる葉っぱカッター、ブーメラン葉っぱカッターをチリーンに向けて放つ。
「おっと、当たらなければ意味な……きゃぁっ」
正面からの葉っぱカッターはチリーンは避けた。しかし、さすがに後ろからの攻撃には気付かず、背中の中に仕込まれてる鈴にまで攻撃が直撃し、チリーンは仰向けにダウンした。
「ふぅ……」
まだ余裕があると言った様子で、チコは首を回した。
一方でエムコルスは、グレッグルとの格闘戦を制した。凄まじい姿勢での毒突きの連発を全てかわし、更にミスを誘ってからアイアンテール。強烈な一撃をお見舞いした。
「……ただ攻撃し合うだけがバトルじゃない。そんな動きしてれば……いつかは自滅すると分かった」
エムは冷徹な目つきで目線をグレッグルに向けながら、ドゴームの方に手をしゃくらせた。
ドゴームはエムとグレッグルの戦いに介入できずにいた。下手に近づいても巻き込まれるだけだからだった。しかし今、ドゴームは

両手の拳を握り、構えている。
「勇者！　これについてけるか！？」
ドゴームはそう言って上へ飛びあがり、踏みつけを狙った。だがエムはそれを超越した高さへとジャンプして見せた。
「悪いな……デカい声にはお世話になったな」
尻尾でドゴームの頭を叩く直前、エムはドゴームにだけに聞こえるよう小さく呟いた。
「ぐあぁぁっ！！」
ドゴームの穴の中全体に広がる木霊が、ここにいる全員の耳をつんざいた。
エムは耳の鼓膜が破れそうと、声にやられ、地面に着地できず背中を打ちつけた。しかしこれで、プクリンとペラップ以外は倒したことになる。
「さ、さぁ、我は大魔王一味の幹部であり、子分九傑のリーダー♪正義の勇者達よ、我を倒せるがやってみるが良い♪」
まだプクリンは傍観している。しかしペラップは前に出てきた。確かに、ギルドの中では二番目に強いということになるペラップ。だが、最初のどこか頼りなかった時代から、大きな進歩を遂げたエムコルスにもチコリータにも、もはや弟子では太刀打ちできなくなったのだ。だからペラップもまたしかり……。
エムが十万ボルトを宙にいるペラップに向けて放つ。ペラップは苦手な電気を恐れもせず、軽々しく左へ退いた。しかしその直後、ペラップの腰にムチが巻かれていく。更に、翼も緑のムチで押さえられる。ペラップの視界に入らない同時攻撃で、チコがツルのムチで狙ったのだ。
ペラップをチコはムチで縛り付けて押さえている。プクリンはまだ動かないと確認してから、エムはもう一度同じように十万ボルトを放つ。そのままムチごと、ペラップは電撃を浴びた。「ぎゃーーっ！！」
ペラップのハイパーボイスが響き渡る。――道連れか……と、そ

う思ってしまうぐらい五月蝿かった。焼き鳥のように焦げて目を閉じ、撃ち抜かれたかのように彼は落ちた。

「恩を仇で返しちゃったね……」

「いや、ちゃんと強くなったという形で恩を返したじゃん♪」

「ん……大魔王、何か言ったか？」

「あ……何でもない。フ、フフフ……その鳥など我ら大魔王幹部の中では一番の小物よ」

うっかり普通に会話をしてしまった後はごまかし、プクリンが劇で悪役を気取っているかのように、目の色も変えず言った。全く驚いていなかった。ここまで実力があったのも予想していた。

次は自分が行かなければならない。挑戦を受けなければならない。下克上も十分ありえる。いや、そうしなければ、エムコルスとチコリータの卒業は許せない。

（まずは小手調べで……攻撃を受け流そう。それから少し本気を出させてもらうよ。さぁ、今の実力、溢れた才能を僕に見せてみてよ、エレンシア）

プクリンは心の中で言葉を伝えていた。しかし、伝達はされなくても、そのオーラはエムにもチコにも伝わってきた。プクリンの目つきが座っている。

エムはプクリンの前で身構えているが、顔に余裕が見られない。額から汗を垂らしている。そしてチコは、プクリンの鬼気迫るような覇気に驚いていた。

（プクリン……。奴は天才と呼ばれてきた。まさにその通りだ。呆けてるんじゃない。そう見せてるだけに違いない。アドバイスは的確らしい。チコに対してしたらこうして成功した。話は聞いたがドクローズにも忠告したらしい。だが奴らは聞かずにいた。そうしたら死んでしまった……。それと、無敗とかいう噂だ。果たして俺が勝てるのか……？）

（本当に改めて見ると凄いよプクリンは……。今がまさにそう。初めて見た時は何とも思わなかったけど、徐々に凄みを外観から感じ

れた……。そして、私達の心理を時に的確に読み取る……。勝てるのかな？）

様々な思考をめぐらし、二匹は最強とも呼ばれるプクリンに戦いを挑む。

勝つなら挟み討ち――エムは気付かれないようにスッとプクリンの視界から消えようとし、チコは注意を引きつけるように横へ横へとムダに動きつつ、距離を近付ける。しかし、その動きは、プクリンが想定していたよりも、かなり速かったのだ。そして――

5話　子分（？）との激闘（後書き）

昨日、うっかり寝ちゃいましたとさ。
更に、今もかなり眠いです。

6話　光の泉

（……速い！　駄目だ、受け流せない……！　僕の考え方は失敗だった……）

エムが背後に回ってから1秒も経たずにすぐに電光石火。プクリンも気付いていたが、反撃せずにかわすつもりだった。しかし、その考えが間違っていたのだ。

「うわっ」

プクリンは背中から崩れ、倒れかけるが、手を地面に付けて持ち応えた。

「終わりだ！　大魔王っ！」

エムが追撃を叩き込もうと、尻尾を向けてプクリンに振り下ろす。プクリンは攻撃を当てられる前に、片手でその尻尾を受け止めた。

チコが葉っぱカッターを放ってきても、プクリンはもう片方の手で軽々しく振り払った。そして、エムの鋼の硬さの尻尾を体ごと押し返した。

「さぁ……これで終わるが良い♪」

プクリンは往復ビンタで反撃に臨む。エムは空中で受け身を取って姿勢を戻す。しかし地面に着地した時にはすぐにプクリンの攻撃が待っていた。

全てをかわしていくのは容易ではなかった。後ろに飛び退いて避ける度に空気が通るのを肌で感じていた。要するに、重いビンタだということ。

（やるね……。そして、さすがはチーム、いつの間にか背後を取ってるじゃないか）

エムの方にプクリンが集中していた時、チコはプクリンの背後にまわっていた。気付かれていないつもりだったが、プクリンには気付かれていた。背後の気配ぐらい分かるのだ。　チコが背後からもう一度と、葉っぱカッターを放った時、プクリンも、なぜか同じ葉

っぱカッターを出してきた。プクリンの持っている技、真似っこ、と呼ばれるものである。

「ひっ……！」

遠距離からこのような手段で攻撃してきたことに驚きながら、反射的に左にスレスレで避けたチコ。

「たぁーーっ！」

プクリンがあの雄叫びをあげ、その音波で葉っぱカッターの勢いは失われて、辺りに散る。エムもチコも、距離は開けていた為に、ハイパーボイスの音波にやられることはなかった。

チコの葉っぱカッターを完全に無力化するとは……と、エムはプクリンの強さに驚かされていた。

だが、彼はプクリンがチコの方を気にして、ハイパーボイスで葉を全て吹き飛ばした直後、技の僅かな反動を起こした時狙い、プクリンとの距離を、一メートルもないであろう、すぐ側まで詰めてきた。

（もう……これは僕の負けでいいよね？　お互いにここまでいがみ合わなくても、僕には卒業を得る資格がある強さだと十分分かるよ。ダメだったならこの時点で僕にやられるものだと思うよ。必死になってまで勝とうとは僕は思っていない。卒業、おめでとう……）

プクリンは内心舌を巻く思いでいた。自分がこのぐらいの若さだった時でも、ここまで強かったのかと聞かれれば、首を傾げるしかないだろう。

エムは手が届く距離と判断し、右手の集中を高めた。この少し間に邪魔されることもなく、右手から渾身の気合いパンチをプクリンに向けてぶつけた。

――ドッ！

プクリンは体を固くして、できれば威力を少なくしようとする。だがそれでも、プクリンは吹き飛ばされた。

「ぐうっ。……わ、わぁ～。やられた～！」

最初以外は、苦しみの欠片もない声で、倒れながら言うプクリン。

そして次の瞬間に立ち上がり、それに続いて、倒れていた自称子分の皆も立ち上がった。

「勇者よ～覚悟しておく……必要もない。我など大魔王九傑の中では一番の大物よ。という訳で、みんな逃げろ～！　ひゃーーーーー！」

「ひゃーーーーー！」

「きゃーーーーーー！」

「へイへイーーーーーー！」

二匹ずつ梯子に並んで、何かから逃げるように高速で登って行き、何事もなかったかのように消えて行った。

何が起こったのか……と、疑問に思いながら、もう用もない穴から梯子を登って脱出した。

「何だったんだろうね……？」

「さぁ……中途半端すぎて分からない」

プクリンは明らかに手加減があった。それに、まだ痛くもかゆくもなさそうなのに負けたと言った。これで大丈夫だったのか……とエムは思って言った。

確かにやれるだけのことはやった。やられてはいない。しかし、合格と判定して逃げたのか、不合格だと判定して逃げたのか……それはどちらとも言えなかった。まだ目的を終えておらず、宝を持ち返ることに失敗すれば不合格になるだろう。それに、ギルドはまだ奥で罠を用意しているかもしれない。

「試験は奥にある宝物を取りに行くことよ。忘れて……ないよね？」

「ハハ、忘れるわけないだろ。早く行くぞ」

そう、卒業試験の目的は明らかにプクリンである大魔王を倒すことではなく、探検隊らしく宝物を取って帰ること。ヒメグマやリングマを待たせているので、奥にある光の泉へとエムとチコは向かった。

・　・　・

・

光の泉にまで来た。光の泉とは言うが光が殆ど差し込んでいない。ここには、滝壺の洞窟や静かな川で流れている水が流れ込んできている。そして、その水は、この泉で水溜まりになっている。

「おう、お前らどうしたんだ？　俺らのすぐ後をついて来たと思っていたが？」

エム、チコが来ると、金色の宝箱の前で立ち竦んだままのヒメグマとリングマがいた。リングマが聞く。

「うん、ちょっと色々あってね……」

ギルドの者達に襲われたなんて素直に言うはずもなく、チコが苦笑いする。

「それより、その宝箱はどうした？」

エムが箱を指差して聞いた。

「分からないわ。以前はこんなの置いてなかったのにね。開けてみたいけどなんか怪しいし……」

ヒメグマは何度も何度も、手を差し出してもすぐ引いていた。

「これは宝箱よ。手を出し渋る必要もないんじゃない？　それと宝なら、今はギルドの卒業試験で取ってくるように言われているし」

チコは箱の横に近付き、身をかがめて何かないか見ている。

「ほう……でも、何か罠とかあったら嫌だろ？　ずっと長い時間開けようかどうか悩んでいたんだ」

「あぁ……それなら俺が開けよう。ギルドの卒業試験で、ここの宝物を取って来るようにと言われてるからな」

「じゃあ、開けてくれ」

と言って、リングマは後ろに下がり、ヒメグマも後ろに一緒に下がった。エムが箱の開け口の前にしゃがみ込み、無駄に周囲を観察し、箱の辺りも確認した。

「時空の叫びを？」

「ああ。一応何もないとは思うが、念の為に……」

最近は使っていない時空の叫びだが、ちょっとした使い道ができ

た。エムは目を瞑り、箱に触った。
　目眩が来て、世界を飛ぶように感じる。エムが見たのは、後ろ姿を見せているプクリンが、独り言とともに宝箱を置いている光景だった。そして、目眩は止んだ。
（プクリンか……本人直々にご苦労なことだ。結局、全部ギルド側が仕掛けたんじゃないか。さて、となると中身は……）
　エムは宝箱を開けた。すると中には、いつもプクリンが食べている、より赤く熟れた大きなリンゴ、セカイイチが入っていた。
「セ、セカイイチ！？」
　これで宝なのかと、チコは懐疑的に思って言った。そして意外だと言いながら、ヒメグマとリングマは見ていた。
「……ま、セカイイチだという辺り、プクリンらしいとは思うが……」
　エムが丁寧に扱うように、サイズの割になぜか大きな道具まで入るバッグにセカイイチを収めた。
　と、次の瞬間、水溜まりに光が差し込まれた。
「ここに光が降ってきた……だと……？」
　と、リングマが言った。
「ってことは、光の泉も復活したのかしら？」
　ヒメグマが光の前へと向かって行く。すると、どこかからか声が聞こえた。
『……目覚める者達よ……時が動き出すことで、光もまたここに流れ始めた。進化したい者は前に来るがよい』
　見回しても誰もいないが、確かにこのように聞こえている。ヒメグマは飛び上がって喜んでいた。
「やっぱり！　光の泉が復活したのね！」
「良かったなヒメグマ！　お前ずっと進化したがっていたからな」
　リングマはしゃがんでヒメグマの肩を叩いて祝福した。それにヒメグマは頷いて、光が照らしている地面の目前に立った。
「『しんか』？　あ、そういえば前にプクリンが……ここは元々進

化できる場所と言ってたよね。でも進化って？」
　このまま一生自分はこの姿であると思っていたチコに、進化ということは分からず、リングマに聞いた。
「なんだ、進化を知らないのか？」
「ポケモンは元々ある条件を満たすと、自分の姿が変わったりするのよ」
　リングマが少し冷笑し、ヒメグマが説明した。そして、エムに今、激しい頭痛のようなものが襲った。
　進化……？　どこかの誰かが話していた……プクリンじゃない、誰だったか……どういう話をして……まさか失われた記憶の中の話なのか……？――進化にまつわる話を、ずっと以前に聞いた覚えが微かにエムには残っていたような気がした。だが、全く思い出せもしなかった。
「ええ！？　自分の姿が変わるの？」
　話を聞いて、他と比べて見劣りする体であると感じたことが幾度もあったチコには驚きの話だった。
「ああ。それに姿だけではないぞ。自分の持つ能力も上がることがあるんだぜ？」
「ほぉ……興味深い話だ」
　今でも十分能力は備わっているが、進化すれば更に能力を加えれば、最強の称号も目前かもしれない……と、エムは顎に手を当ててそんなことを考えていた。
「うん♪　もっと強くなりたかったから、だから進化したかったのよ。早速試してみるね」
　ヒメグマは遂に光照らされる水溜まりの上に立った。すると、何者かの声がまた聞こえた。
『目覚める者達よ……ここは光の泉。汝、新たな進化を求めるか？』
「うん！　お願い！」
　声に対してヒメグマが答えた。
『汝、道具は必要か？』

道具とは、進化に必要な道具のことである。しかし、ヒメグマに必要なのはレベルアップだけだ。
「いや、要らないです！」
正しくヒメグマは答えた。
『……承知した……目覚める者達よ……では、始めるぞ』
ヒメグマへ更に光が入り込んで行く。そしてヒメグマの体に変化が起き、光に包まれた。そして、みるみる姿が大きくなり、光が解かれたかと思うと、ヒメグマはリングマになっていた。
「……ヒメグマが……リングマみたいになっちゃったよ！　し、進化って凄いね！」
確かにそこにはリングマが二匹……。同じポケモンがまるで分身のようにいる。チコは不思議に感じていた。
「やったー！　それでリングマ、どうお？　私進化したわよ」
元ヒメグマがリングマになったことに対する喜びを表した。
「おめでとう！　今まで頑張った甲斐があったな。何か俺達見分け付きにくくなったけど……でもまあ、良かったな！　よし、俺達で今度名前を付けないとな」
リングマが言って、
「うん」
元ヒメグマが頷く。とりあえず声で見分けが付く。今微笑んでいる方が元ヒメグマである。
「エム、私達もやってみよう！」
「ああ、やってみろよ。ふぅ……進化したらまた次の呼び方考えないとな。まぁ、俺は変わらないが……」
「ふふ、変わってからね」
ややエキサイトしているチコ。上を見ながら、光の差し込まれている場所に立った。
『目覚める者達よ……ここは光の泉。汝、新たな進化を求めるか？』
「うん、したい！」
さっきと同じ声だが、チコはヒメグマと同じような意味の言葉で

答えた。
『汝、道具は必要か？』
「……意味分からないけど、いいや。要らないよ！」
ヒメグマが要らないと言っていたので自分の場合も要らないと答えておけばいいのだろうと思って言った。
『……承知した……目覚める者達よ……では、始めるぞ』
と、ここまでの全ての言葉が前と全く変わらない口調で言ったので、今にチコに変化が始まって、もっと立派な姿に進化するだろうと、三匹は見つめていた。……が、しかし、何も変化が起きない。何かがおかしいと気付く。すると、一息置いてから、ハッキリとした口調でこう伝えられた。
『……いや、汝は進化できない』

7話　さよならから始めよう！

チコリータは進化できない……思いあたる理由を出してみれば、自分が弱いから……となってしまう。

「ど、どうして？　どうして進化できないの？　もしかして進化できる条件が揃ってないの！？」

まさか私はこの進化したリングマに強さが劣っているの？――瞬間的にチコはそう思い、後ろを振り向いて強く訴えた。

『いや。そうではない……。条件などの問題ではない……』

「だったら何故？　ヒメグマは進化できたのよ？」

チコが再び聞くと、しばらく泉の主の声が止まった。何かしらの感情があり、今、何かを考えているということが分かる。

『分からないが……とにかく、汝の存在が空間の歪みを引き起こしている……。その影響で汝のみ進化はできない……。いや、汝だけではない……。もう一匹いる。汝の真後ろにいる者もまた、進化できない……』

感情のこもらない口調で淡々と説明する。どうやら、エムコルスも同じ理由で進化できないらしい。もっとも、彼は本当に進化ができない。ピカチュウが進化するのは、強くなることでは不可能なのだ。

「空間の歪み……？」

「それで進化できないのが、チコだけでなく……俺もだと？」

あろうことか、相棒同士である二匹が両方進化ができないらしい。しかも、空間の歪みと呼ばれる、特別な理由でだ。何かしらの謎が、チームの二匹に潜んでいると察する。

『分かることはここまでだ……。ここは光の泉。新たな進化を求める者は、また来るがよい……』

その言葉を最後に、差し込む光はなくなった。さっきの明るさにみんな目が慣れていたのだが、光がなくなったおかげで、暗く感じ

る。

「どうやら私だけでなく、エムも進化できないようね。リングマ達はどうしてなのか分かる？」

「うーん、何も分からないなぁ」

チコがリングマに聞くと、男の方のリングマが答えた。

「やっぱり分からないかぁ」

と、チコが言う。一方で、エムはこのことについて考えていた。

（何故だ……。どうして進化できない？　空間の歪みって何なんだ……。俺が本当なら消えた存在だからか？　いや、それならチコはどうなる？　一体どういうことなんだ？）

エムは下を向き、頭を抱え、空間の歪みに関して考えていた。確かに本来、エムはここにはいないはずなのだ。未来から来た挙げ句、一度は消滅した。しかし、それが原因となると、セレビィやディアルガの特別な能力には、問題点があったということになる。

ふと、自分の手を見る。姿が変わるとはどのようなことなのか、少し考えた。もし人間なら、日に日に体は成長して行くだろうが、姿の根本は変わらない。だが、ポケモンなら変わる。しかし、自分は変えられない。自分がそうであった人間のように。朝、チコと戦った時に、腕がやや伸びたと感じた。しかし、リングマのように、劇的に変わってはいない。

「ねぇ……そんなに考え込んでないで。お宝のセカイイチも取ったのよ？　もうギルドに帰ろう」

「あ、ああ……帰るか」

今はそこまで悩む必要もないかと、エムは進化を素直に諦めて、事実を受け入れて、チコと共にギルドへ帰ることにした。

・　・　・

ギルドに帰ると、絆創膏を付けた弟子が多くいた。見つけたのはこれだと、セカイイチを差し出すと、プクリンはしばらく形などの

確認を行った。軽く叩いてみたり、模様で区別をしたり。周囲に弟子達が集まり始めた。

「エレンシア、卒業試験、ごうかーーっく！　おめでとう！　君達はギルドの卒業試験に合格したんだよ♪　やったねっ♪」

プクリンから卒業試験は合格という宣告が出された。待ちに待っていた、卒業である。周りが騒ぎ立てるが、当の本人であるエムとチコは極めて冷めていた。

「……あれ？　どうして喜ばないの？　もしかしてあまり嬉しくないの？」

プクリンが首を傾げて聞いた。

「いや、確かに嬉しいけど、なんかピンと来ない所があって……。大したことしてないような気がするし……。中途半端にやられてあげちゃうし……」

最後の言葉に妙にプクリンは反応する。まるで自分が八百長していたような言い方だ。

「えっ？　……まぁ君達は、とてつもないことをやってのけたんだよ！？　だってセカイイチという、凄いお宝を取って来た訳だし……何よりあのとても恐ろしい悪の大魔王を倒したじゃないの！？」

またプクリンはこのように墓穴を掘るようなことを言った。ついつい口から出てしまったのだ。

「……悪の大魔王を倒したことをどうしてプクリンが知っているの？」

「……何となく……かな？……」

プクリンは目を泳がせて、言葉を詰まり詰まりに言った。

「悪の大魔王ってプクリンだろ？　しかもあれだけ手加減して……本気でやってくれなきゃ困ったもんだ」

プクリンとの戦いが中途で終わったと、やや不満気味なエムが、プクリンに言った。傷を全く受けていなさそうな状態で、プクリン達は弟子ごと逃げ去ったのだ。

「えっ？　な、何のことかな？　ぼ、僕は知らないよ。あ、悪の大

魔王なんて……」　倒し合う為の戦いじゃなかったんだと心中で言いながら、プクリンは言った。
「つ、ついでに！　私も知らないからな♪　子分九傑とか幹部なんていうのは……」
　焦ったペラップが補足説明で言う子分九傑は、明らかにあの場にいた者しか聞いていないものである。
「オイラも……」
「私も……」
　ヘイガニとキマワリも口を開いた。墓穴を掘った弟子達は、決定的な証拠である絆創膏を貼っていながらも、シラを切り、みんなでゲラゲラ笑ってごまかし通せたとさ。
「は、はぁ……」
「な、何なのよ……」
　そこは気にしたら負けだと言われているような気がして、エムとチコはため息を吐いた。
「とにかく、お前達はギルドを卒業できたのだ♪　これからはギルドのしきたりに縛られず、好きなように探検隊の活動ができるんだぞ♪」
　ペラップが言った。制限をかけられず、探検へ行く幅が広がるという点では、とても良いことだった。しかし、エム、チコにはもう一つ重要なことがあった。
「ああそっか！　じゃあ、これからは掲示板の賞金もギルドに取られずに丸ごと貰えるんのね？　やったね、エム！」
　と言いながら、チコがエムとハイタッチしようとすると、
「いや……。残念ながらそこだけは同じだ。いつも通り報酬の殆どはギルドに支払ってもらう」
　ペラップが薄笑いを浮かべて言った。電卓を取り出して、１００から０．１をかけて１００の数字を見せ、いつも通りの九割徴収を強調させた。
「ええっ～？」

チコが不満そうに言うと、エムの方も不服と、ペラップから電卓を奪い取り、カタカタと入力して、今度は１００から１０をかけて、１０００になった計算結果をペラップに見せつけた。それを見てペラップはやや呆れた。

「あのな……。ええと、卒業と言ってものれんわけだ。エレンシアの探検活動も親方様のギルドがあってこそ。それに、今は不況とも言われているしな……。その代わり、お前達にはこれを授ける」

ペラップは翼でズタ袋のような、ボロボロな布袋を指した。それをプクリンが持ち、エレンシアの二匹の前にまで持ってきた。

「そこにある大きな袋……。あれは、いつかここをお前達が離れるだろうと予測した時に、親方様が用意した支度金、１００００ポケだ。だから、そこについては我慢しな♪」

ペラップがエムから電卓を奪い返して、今度は１０００００の数字をエムに見せた。この分はあげるという意味合いである。

「そ、そいつはありがたい……」

エムが少し驚いて言った。支度金には納得せざるを得ない。その驚いた顔を見て、自慢するような表情をしてペラップは、頷きながら電卓を閉まった。

エレンシアの所持金はある程度は溜まっているが、１００００ポケはそのうちの5割である。

「うん、プクリン……ありがとう！　大切に受け取っておくよ」

チコも納得しながら、ムチで袋を持とうとするが、かなり重くて思わず手放した。さりげなくがめついコンビである、エムとチコを納得させるプクリンはさすがだと、ペラップは思っていた。

「いやいや、そんなのすぐに使っちゃいなよ♪　じゃあみんな、祝福の言葉を一言ずつ言っていってね♪」

プクリンが首を振り、壁によしかかって言う。いつの間にか卒業式になっている。みんなが手にクラッカーを持っており、壮大に祝う気満々だ。パッチールのカフェで送別会を開かないかという意見もあったが、そこまでやることでもないと、却下されたらしい。

順不等でギルドの弟子による一言の祝辞が述べられ始める。
「ギルドを卒業できるだけでも凄いですわ！　折角いい奥さん旦那さん持ったんですもの。……あまり無茶しないように頑張ってほしいですわー！」
キマワリの自重しない冗談半分の言葉に、エムもチコも思わずはにかんで目線を下に逸らした。
「このワシが卒業できなかったくらいだ！　お前達は超天才だ！これからも遊びに来いよな！　ガハハハ！」
自分が弱いとは認めたくないので、ドゴームはエレンシアを持ち上げておいた。現に、エム相手に手も足も出せなかった。
「ヘイヘイ！　これからも元気にやってくれよ！」
次は誰が言うんだと沈黙した数秒間の後、ヘイガニが声をあげた。
「ううっ……嬉しすぎて……あっしは……あっしは……！」
ビッパが感動して泣いていた。身近にいた英雄達が大きく出世することとなったことが、寂しくもあるし、何だか本当にここまで強くなってきたのだと、嬉しくなってもいた。
「おめでとうございます！　エムコルスさん、チコリータさん」
「うぉー！　お前達本当に凄い！　私は見れなかったが凄いっ！」
「見張り番とかやってくれて、ありがとうございました」
「ワシはお前達が卒業なんて興味ないが、ワシより強かったんだからまぁそうなるわなぁ。トレードとかしてくれよな、お前達ぃ。グヘヘ」
皆に続いてチリーン、ダグトリオ、ディグダ、グレッグルが何か言うのを考えて言った。
「コホン。お前達よ、これからも頑張るのはいいが、体は大事にな♪」
ペラップはみんな言い終えたのを確認すると、弟子を代表しての一言を述べた。厳しい戦いが原因か、幾度か体調を崩した時があるチームなので、そこがペラップには、自分を超越する実力を持つとはいえ、不安だった。

プクリンが前に出てきた。ギルドの弟子達は、彼の台詞を期待する目で彼を見ていた。

「君達のこれからの探検活動は、僕達とのさよならから始めよう！もう、それしか言えないよ。頑張ってね♪」

プクリンの言葉にわっと歓声が上がった。チコは頭を下げて、ありがとう、と感謝していた。卒業式は終わり。後は部屋の荷物を纏めて、ここから去るのみ。恐らく最後になるかもしれない、自分達のチームの部屋。

「このにおいの部屋にいるのも今日が最後か……」

麦藁ベッドを畳みながら、しまうことによって段々と道具が消えていく部屋を見て、エムは小さく呟いていた。

出発の支度を終えてギルドの外へ出る。もう、プクリンのギルドは今日から「家」ではなくなる。さっき自分達が決めた、チームの拠点となる新しい住み場所へ行かなければならない。

ギルドから去って行く時、プクリンとその弟子がみんな手を振っている。エムは手を振り、チコは葉っぱを振っていた。実際の所、すぐ戻れる場所なのだから別に寂しくはないだろうと思っていた。

これからは、ギルドの制約もなく、自分達の思うがままに探検活動をすることができる。ギルドの探検隊ではなく、一つの探検隊となる。ギルドとの別れから、新生エレンシアが始まるのだ。

8話　新生

ダークライが空の裂け目と呼ばれる場所にいた。実は空間を司る場所であり、更にその場所を知る者はいないに等しい。もっと調査する者がいれば分かったのかもしれない。しかし、残念ながら誰しもが、暴走するディアルガにより、崩壊して行く時限の塔の方を見ていた。

時限の塔には、ディアルガと世界の時の命の源となる、「光」があった。ディアルガは光によって、時を動かしており、は規則正しく時を進行させているその光に触れ、彼の持つ闇の力を侵食させていくということをやった。闇は光と対の存在であり、光の全てを否定し、時は彼の計画通りに崩壊したのだ。そして、時は闇に支配されながら流れることを拒絶し、強制的に停止した。そして、ディアルガは光の状態から、闇の状態へと変化を遂げたのだ。

ならば空間もと、ディアルガは今、こうして空の裂け目に来ている。空間により、世界そのものの秩序は守られている。何もない場所や、全ての方向への果てしない広がりが、空間という意味である。もし、本来そこにいてはならない者がいると、矛盾が発生して、その空間は僅かに歪んでしまうという。もちろん、これも光によって動いている。太陽があるから、こうして守ることができる。

もし空間が崩壊すれば、時が崩壊して時の停止、すなわち星の停止の状態に近い、暗黒の世界が生まれてしまう。しかし、ダークライはそれを望んでいた。

「さて……ここはどうする？　空間を司る場所と言うより、空間を司る者がいるようだな」

ダークライが誰かいると思い、陰に隠れながら覗くと、そこには、白色の体に紫の線があり、背中に鰭のある、空間の神であるポケモン、パルキアがいた。

自分は神である……ダークライが自分のことをそう思うのは、自

分が時の力も空間の力も自在に操れるからである。
「パルキアだったか……。ふっ、何も空間を歪ます能力を持つのはお前だけではないのだ……」
ダークライは目をしかめ、空間を歪ませる為に、自らの体に眠る闇のオーラを絞り出した。そして、光でも戻せないよう、そのまま空間を歪ませるのみだった。
「ぐぉ……！　空間が歪んでるっ！？　早く戻さなければっ」
パルキアは元気たっぷりな声をあげつつ、両手を前に出して、手元から光を発した。その光から、空間を操る力を出しているのだ。
「くっ……何故だ？　戻らない！」
パルキアが焦る。捻れた空間を元通りにしようとしても、全く効き目がなく、手を弾かれた。それどころか、段々と歪んでいく。それもそのはず、ダークライが光を拒絶する闇で、空間を歪ませたのだから。

・
・
・

エレンシアのエムコルス、チコリータは、以前に少し自分達が住み込んでいた場所である、サメハダ岩に拠点を置くことにした。結局、ちょっとしたただの引っ越しだが、これからは朝早く起きる必要性もないので、快眠を妨げられず、朝をスッキリとして迎えることができる。　またしばらく藁で塞いでいた穴に近付きながら、朱色に染まる夕日が沈み行く姿を、崖の近くからエムとチコは眺めていた。朝日と比べて、どちらが素晴らしいのだろう？　それは甲乙つけ難いことだった。
「綺麗ね……」
チコが言って、
「ああ、いい眺めだ」
エムが藁を取り除きながら言った。この夕日は自分達が守った。しかしその為に犠牲になった者もいる。そのことから、果たしても

うポケモン達は、滅ばずに済む術を、自分達やジュプトルから学んでくれただろうか。朝日を一度見てくれと言い、きっとそれが伝わってくれたと、信じている。

もし新たなる世界を滅ぼしかねない悪意が生まれようとも、何度でも戦い、守ってみせると、エムもチコも決意していた。それが使命なのだから。

「さて、入るか。今日からずっとお世話になる場所だから、よーく掃除しておか……うわっ！」

エムが「また」足を滑らせて階段からゴロゴロと転げ落ち、下の地面に頭を打ち付けた。

「ぷぷ……だ、大丈夫！？」

チコが笑いをこらえながら何事もなく普通に階段を降り、うつ伏せでピクピクしながら倒れているエムの安否を問いた。

「気を付けろ、誰かの罠でここの階段滑りやすいぞ！」

エムはむくっと起きあがり、地面に打って痛い頭部を手で押さえながら言った。

「いや、何ともなかったけど……。階段は至って普通よ」

と、チコが言う通り、ただ単にエムが足を踏み外しただけだった。何回か降りたことのある階段なのに、何故こんなドジをするのか、チコには分からなかった。

「んだと？　まるで俺が馬鹿をしたみたいな言い方だな」

エムは自分のドジを認めずにいた。そして、手に電気を溜め込んで脅す。

「いや、前科あるし……」

・
・

「……明日はとりあえず依頼やってくからな」

「うん、いきなり無理はできないし、そうしよう」　一先ずエムコルス階段転げ落ち事件（チコが命名）の議論は終わり、明日の予定

の話し合いになった。
エムは麦藁ベッドを二枚用意し、以前ジュプトルと寝た時のように、置いた。余った一枚は、ジュプトルが使っていた物だった。そして今、エムが階段から滑り落ちたのは、ジュプトルの残魂か何かを感じたからだった。
しかし、そのことは、地面に頭を打ちつけた瞬間頭が真っ白になって忘れてしまった。それでもエムは、余った一枚の麦藁ベッドで、ジュプトルのことを思い出した。
「そういえばさ、ジュプトルって消えたと思うか？」
エムが先程のことに拗ねたのか、ぶっきらぼうにチコに聞いた。今、彼は何をしているのだろうか……。もしかしたら生きているのか。さっき、そんな風に感じたのだ。二度と会うことはないだろうが、生きているならば、元気でいてほしいと思っていた。あの墓が英雄の名前を刻むだけの物になるなら、それでも良かった。
「どうなんだろう……。エムが復活したってことは、もしかして……ね。同時に、セレビィも生きてるのかな。でもね、歴史が変わり、あの世界自体が丸ごと消滅したのじゃないかな」
チコの頭の中に、れっきとした悪人として消えたヨノワールは入っていなかった。
「その可能性もあるが、未来は時が再び動き出した平和な世界になっているのかもしれない。昔、最初にヨノワールが言った時に、俺達、いや、みんなが想像したような未来にな」
「なるほど……。その可能性に賭けるとして、更に生きているとしたら嬉しいよね」
「ああ、問題はディアルガがどうなっているかだ。未来では闇の存在だったなら、それがこの世界でのように、元に戻ったのかだ。元に戻れば、ディアルガの力で戻してくれるかもしれない。俺のように……な」
エムはベッドに寝転がり、天を仰ぎながら言った。未だ、エムは過去でも未来でもない別世界に行った時のことを覚えている。電気

球を持ったサードに会った。今思えば、時限の塔に落ちていたあの電気球は、恐らくサードが天から落としたのだと思えた。

そして、どこかに流されて行き、様々な不思議なことが起こり、気付けば戻っていた。あれには、不思議と、時の力を感じた。ディアルガの力を感じた。あの時は別のことしか考えていなかったが、未だに彼の力があったことを体で感じているおかげで、ディアルガへの感謝の気持ちを想えた。

――ディアルガよ、我が親友に救いの手を……。

エムはそう念じた直後にはもう寝ていた。チコもぐっすりと眠り始めた。日が沈んだばかりだと言うのに、よほど今日はエムもチコも疲れたのである。

・
・
・

翌朝、卒業後、自立して初めての探検生活が始まった。目覚めはスッキリ。ギルドのように起床時間も定められていない為に、気も楽だ。

トレジャータウンがすぐ側にある為に、準備も楽だ。タウンで色んな探検隊と雑談をしている中では、卒業おめでとう、という祝福の言葉を聞くのが殆どだった。

銀行に金を預ける時も、ヨマワルからおめでとうと言われた。またしても、エレンシアは街の有名人になった。

そんな中、一つ、気になるちょっとした再会があった。カフェへ行こうとした時である。

「なっ、ＭＡＤ……？」

エムが目に入ったのは、紛れもなく昔、自分達が全く叶わなかった相手。因縁のある、マニューラ、アーボック、ドラピオンだった。盗賊団チームＭＡＤの名前は、最近は知れ渡ることはなかったが、今になって突然、それも思いもよらぬ場所で現れ、驚いていた。ＭＡＤの三匹は声に気付き、そっちを向いた。

「ど、どうしてここに？」

今更恐れることは全くなかったが、不思議に思ったチコが聞いた。

「おぉ、お前達か、覚えてるぜ。久しぶりだな！　ゼロの島を見つけたんだ、やっただろ？」

相変わらず気性の荒そうな態度でアーボックが言う。ＭＡＤは、倒した中でも印象に残る相手だけはよく覚えている。この場合は、極めて弱々しそうなのに立ち向かってきたから、覚えていたのだ。

もっとも、現在はその弱々しそうな風格はエレンシアにはない。

「だから俺達は暇じゃないんでな。相手はしないぜ。どうした？気になっているようだな。何かの縁だ、教えてやる。ゼロの島はここから南に海を渡ると行ける。だから俺達たちゃまさに今から乗り込むところだったからここに来たワケさ。そこに眠る宝を真っ先にいただくのだ」

ドラピオンが説明するがここまではさすがにエムもチコも覚えてはいないが、あの時には、ゼロの島の宝が最終目的と言っていた。

「おいドラピオン、行き先言うなよ」

自分達が独占するつもりだったのに、わざわざ味方でもない他人に親切にする必要は全くないと思い、アーボックがドラピオンに苦言を呈した。

「問題ないアーボック。何故なら、誰がゼロの島に行こうと、私達が真っ先に突破するからだ。ＭＡＤ以外の者が奥深くに到達した頃には、お宝は消えているだろうね」　女ボスであるマニューラが、他の二匹とは違うオーラを漂わせて言った。喧嘩っぱやい二匹に比べて、戦いを好まないような雰囲気が目立つが、そこには、絶対的な自信、そして威圧感が見え隠れしている。

「それで……そんなに突破が難しい場所なのか？」

エムはそんなオーラを全く気にせずにいた。負けたことのある相手を前に、余裕の態度を見せている。

「そりゃ難しいね。島のとある部分は、強さよりもセンスが必要と言われ、またとある部分は、神よりも恐ろしいであろう、怪物当然

のポケモンが大量に潜むと言う。多少実力があろうと、下手すれば……」

マニューラは大きめのサイドバッグから、瓦を取り出し、それを自分の持つ大きな鉤爪で叩き付けるように突き刺した。すると、瓦は粉々に砕け散った。

「この瓦のようになるという、そういう場所。……また邪魔したね。どうやら以前見た時より、かなり強くなったようだけど……。まぁそれでも、ＭＡＤに入る気も、喧嘩売る気もないようだし。アーボック、ドラピオン、そろそろ行くよ」

マニューラは自分で撒き散らした瓦の鉄くずを足で一カ所に纏めた後、アーボックとドラピオンに向けて手をしゃくり、それにその二匹は従い、去って行くマニューラについて行った。

「じゃあな、おチビちゃん達よぉ！」

「ドラピオン、余計なことは言わないでいいよ！」

「……はっ、申し訳ありません」

ドラピオンが去り際に一言残すが、マニューラがそれを注意して、ドラピオンは素直にマニューラの方に謝り、姿を消す。因縁の再会をしても特に何もなかったことが意外と、エムとチコは思った。しかし、以前のようなゾッとする威圧感を感じることはなかった。

「……偉そうに。お前らに負けることはもうありえねぇんだよ」

からかう最後の一言にエムはムッとしている。だがもし、また戦い合うようなことがあっても、勝つだろうと確信していて、つい口から本音が出た。もちろんＭＡＤの三匹は聞いていない。その後、エムとチコはパッチールのカフェへと入っていった。

8話　新生（後書き）

多分今後ＭＡＤは悪役で出ないと思われます。
てかそもそも出番はあるのか（殴

9話　縄張り

エム、チコがカフェに入る。今日はやたら混んでおり、席探しに苦労しそうだった。そんな中、色んな意味で浮いたポケモンがいた。そのポケモンは全身が紫がかり、両手両足全てが翼になっている。

「おー、本当に有名人がきたぁ……！」

その者は、よく評判を聞くピカチュウとチコリータの小柄なポケモンがカフェに入ってきた瞬間、大いに喜んでその二匹に近付いた。

「あのー、おはようございます」

エムとチコは見知らぬ誰かに挨拶され、カフェのアルバイトの新入りかと思い、特に意識もせず話しかけられた方を向いた。

「お、おー、英雄がこっち向いてくれたぁ……。俺はクロバットという」

クロバットと名乗った男は、ゆっくりとした話し方をしていた。とりあえず、相手が有名人だから、高貴的な存在であると思っていたからであろう。

「バイトのポケモンじゃないの？」

チコがアルバイトにしては妙なポケモンだと思い、クロバットに尋ねた。

「俺は違うんだ。……にしても、今日もいい天気だね」

とりあえずいきなり本件を話すのもなんだかなぁと思ったクロバットは、リスクの少ない天候について、話題を出してみた。しかし、その話題は逆にエムもチコも混乱させた。

「あ、ああ……全くだな……」

「……晴れるっていいよね」

少し間を置き、双方困った表情をしてエムとチコは言った。

「ポワルンによれば、今日あたりは、南西の大陸の天気も回復して青空が広がるみたいで、大陸南の果ての湖から北東の幸せ岬では、冷たい風が吹くようだ。風速は四メートルぐらいらしい」

クロバットのこのかなり怪しい言動に、エムとチコは完全に困惑していた。体内警報が五月蝿いほどに鳴り響き、表情がこわばり始める。

（いきなり何言ってんだコイツ？　初対面の相手に、聞いた訳でもないのに詳しく天気の話するか普通？）

とんだ不審者に出会ってしまったと思ってしまったエムは、さっさと席を探そうと考え、クロバットの目の前から立ち去ろうとする。

「行くぞチコ」

クロバットから見てエムの顔が横に向いた瞬間、クロバットは焦り始めた。

「あー！　待ってくれよミスターエムコルスー！」

クロバットは四つの翼をパタパタ振りながら、エムを引き止めようと叫んだ。

「……何だよ」

とにかくミスターと呼ばれようと、段々と不機嫌になってきたエムは、顔をしかめてクロバットに聞いた。

「えーと、簡単に言えば、縄張りを取り返して欲しいんだ」

「縄張り？」

チコが数々の縄張りに足を踏み入れたことによる被害を思い出して、やや懐かしそうに微笑みを浮かべた。

「そうそう縄張り。情報屋の友人メタングの情報を得ながら、俺はコロコロ洞窟って所の奥地でひっそりと縄張り持って暮らしていたワケだ。しかし洞窟内も不思議のダンジョンになっていたから、メタング以外の、探検隊も多く来た。俺は緩いからな、事情も分かるし、探検隊に特に何もしなかった。

ところがだ！　ある日、野生の探検隊でもないフカマルが大量侵入してきて、ここは俺達の場所だと主張しやがった！　多勢に無勢だ、俺は何もできず追い出されたんだ。だから頼む、十匹ぐらいで偉そうに群れたフカマルを凝らしめて追い出してくれないか？」

少し長い、クロバットの説明は分かった。しかし、これを聞くと、

クロバットもフカマルも野生だ。フカマルを追い出したとしても、フカマルは困るのではないだろうか。こんな疑問にチコは駆られる。

「報酬は？」

直接頼み込まれたとはいえ、できればタダ働きは避けたい。エムの場合は先に報酬のことを聞いた。

「銀の針を三ダースあげるさ」

クロバットがこう言っているが、本当にくれるかは疑問。だが、クロバットは約束を破りそうにも見えないということで、エムは納得し、頷いた。

「……でもねクロバット、フカマルはその後どうするのって話よ」

チコが首を傾げながら、さっき思っていたことを、名前を初めて呼んで聞いた。

「……俺がいた場所は広い洞窟だが、アイツらは本来、洞窟の横穴のような狭い場所にいるべきなんだ。だから追い出しても問題ないのさ」

名前を呼んでくれたことに少しクロバットは嬉しくなっていた。

「へぇ……そうなの。じゃ、場所教えてくれる？」

「ここから東に行けばある。って、行ってくれるのぉ？」

チコが地図を取り出すと、クロバットはトレジャータウンからちょうど東にある山の最西端を指した。

「まぁ行くが……着いて来るのか？」

エムは肩を掻きながら言った。何もしていないが、カフェはもういいかと思い、エムは体の方向をカフェ内部から外へとUターンさせた。チコもカフェから出る姿勢になっている。

依頼で依頼主を連れて行く仕事なんて滅多にやらないが、今回の場合は仕方がなかった。

「おーおー、さすがさすが。じゃ、早速行きますか。英雄の戦いっぷり、とくと拝見させてもらうよ」

9話　縄張り（後書き）

体調不良の中必死になって書きました。こんなんでも必死なんですorz

体調が悪いと文章力もモチベーションも頭もかなりダメになりますね……。

4日おき更新を優先した為に、量は半分ですが、まぁ、次回をお楽しみに。

１０話　洞窟の奥地で

「へぇ～色んなことあったんだなぁ」
コロコロ洞窟の中を歩いている間、エム、チコはクロバットに様々なことを語っていた。自分達やその周りに関する昔話をしていた。
今となってはもう過去のこと。偉大な者であることに意味はなく、また何かをすることに意味があるのだと思っている。
洞窟の中には石が多く転がっている。山から転がってきて、トゲができている石が足元に散らばっている。しかし、その石の一つが、まるでマグマから吹き出したかのように赤みを帯びている。
「……？」
エムがその石が気になって足を止める。それにつられてチコもクロバットも足を止めた。
「どうしたの？」
チコが聞いてきた。しかし、エムは石を拾い上げて、それを見ることに集中していた。
「……なぁ、ここって溶岩あるのか？」
石は熱く、とても長時間触っていられず、手放した。まるで、長期間に渡って、溶岩で暖められていたかのようだったのだ。
「どっちもない……。フカマルがやったとしても、アイツらが石をこんな風にできるかどうかと言われれば、違うとは思うなぁ」
クロバットが自分で意見を出し、自分で否定した。
「……立ち止まって悪かった。行くぞ」
妙にこのダンジョンの温度が高くなっていることに気付きながらも、一行は奥に足を進めた。しかしその数分後、エムとチコが、暑さで汗を流し始めた。こんなに暑いのかここは？　疑問に思っていた。更にはクロバットすらも、暑さで汗を流し、暑い暑いを連呼していた。いつもいたくせに何なんだよとツッコむような気力は、エレンシアのどちらにもなかった。

しかし、更に先に進むと、とうとうエレンシアが反応するような威圧感を、ダンジョンの奥から感じ取った。この感じには、エムもチコも覚えがあった。闇のディアルガだったか。

（暗黒に包まれたような……そんな気配を感じる。闇のディアルガ？　いや、それとはまた違うな……。どういうことだ？）

エムは間違いなく誰か強敵がいると踏んでいた。消えたはずの闇。なのに、今またその気配を感じる。一体何なのか、それが疑問だった。

クロバットは、進むごとに思慮し始めて顔を険しくするエムとチコに気付いて驚いた。改めて本物だと気付かされていた。

「な……なんだよ……何もそんなに警戒しなくても……」

「ちょっと黙ってて！」

囁くように言葉に出すと、チコに止められた。断層を登り、ダンジョンの奥近くまで来て、扉のような壁の隙間から奥地に繋がっている所で立ち止まった。そこの隙間の手前の壁をエムは背にして、こっそりと隙間から覗き込んだ。そこにはフカマルが結構な数を揃えていた。フカマル自体が、自分が感じる威圧感を発しているわけではないと分かる。

とにかく、フカマルは大したことないから突撃しよう――チコと頷き合い、次の瞬間、奥地へと突入した。

「お前達がねぐらにすべき場所はそこじゃない……出て行ってもらおう」

淡々とした物言いで、エムはフカマルの集団に突っ込んで行った。そしてチコも。クロバットは後ろで傍観している。

「むっ……誰だ？　……うわっ」

エムとチコは突撃してから、いとも簡単にフカマルの集団をなぎ倒して行く。

「コ、コイツら何もんだぁ！？　つ、強すぎるぅ！」

目にも止まらぬ速さでダッシュし、一気にエムにアイアンテールを叩き込まれ、フカマルの一匹はぐうの音も出ない。だから、かー

えーれ！　お前らだろ！　ここを暑苦しくしたの！」
　抵抗しようとして、軽くあしらわれて二匹相手にボコボコにされるフカマルを見て、虎の威を借るように四本の翼をうるさく振りながらクロバットは言った。
「ぐうぅ……、そういやここ必要以上に暑くなってやがるな……。これを期にねぐら変えよう。みんな行くぞ！　お前ら覚えてろよ！」
　クロバットが言ってから、フカマルの集団は一斉にその場から逃げ出した。しかし、ここの温度を高くしたのはフカマルでないと分かった。まだ誰かがいるということなのだ。
　現に、上機嫌なクロバットに対して、エム、チコは、身構えたまま、周囲を見回しているままだ。
（とりあえずフカマルは追い出した……しかし、まだ誰かいる……誰かが……）
「いるの分かってるよ。早く出てきな！」
　エムが汗を拭いながら見回し、チコはこの中にいる「誰か」に対して挑発する言葉をかけた。もちろん、それはここにいるクロバットではないと、体から伝わるオーラから分かる。
　恐らく、この暑さから、その「誰か」は炎タイプであると推測できる。
「……まだこんな所に住みたがる奴がいたのか」
　どこからか聞こえる篭もった声が、洞窟の中で響いた。眠りから覚ましたように、眠そうにマグマに包まれたポケモンが、上方にある壁の穴から出てきた。
　何者かは分からないが、エムとチコがオーラを感じる相手はこのポケモンであると見て間違いなかった。
「だ、誰だお前は！？」
「私はマグカルゴ。ここを去るが良い」　クロバットの質問に対して、マグカルゴと名乗ったポケモンは、三匹に立ち去るよう命令した。目つきが鋭く、エムやチコには、暗黒化したようなオーラを纏っているのが分かった。ただ者ではないかもしれない。クロバット

も雰囲気に恐れ、これ以上言葉を出せずにいた。
「……ここで何がしたい？　何の目的だ？」
命令には聞きもせず、エムがマグカルゴに顔を向けて聞いた。何かをしたがっているように見える。企みがありそうと感じた。
脅しか、マグカルゴの火炎放射が早速飛んでくる。エム、チコはそれを横回転をして避けた。するとマグカルゴはこう答える。
「ここを拠点とした、闇の創世。それにより、世の秩序を変えるのだ。世界の再構築は既に始まっている……」
「闇の創世？　何言ってるの？」
チコが首を傾げるが、マグカルゴが、何やら壮大な計画を企てているということはすぐに分かった。エムにとっても、具体的にどのような計画なのか、いまいち理解できず、そんな前兆もなかった為に、世界が危なくなるということも分からない。
「とにかく……私は危害を加えるつもりはない。帰れば今のように襲ったりはしない」
と、マグカルゴは戦っても負けないという自信を覗かせて言った。
「ふっ、世界の再構築だとか言ってる奴を、野放しにはできねぇな」
鼻で笑ってから、エムは、とにかく叩くべきと考えたこのマグカルゴに突っ込んで行った。高速移動で、まるで周囲をテレポートしているかのように動く。マグカルゴはエムがどこにいるか分からず、惑わされているようだった。
「くらえ！」
ここだ！――と焦点を合わせ、マグカルゴの斜め上から雷パンチを叩き込む。確かにそれはマグカルゴの顔面を直撃した。しかし、マグカルゴはマグマでできた鎧を体の表面から出し、威力を弱めた。
殴られても吹き飛ばされず、マグカルゴはエムに火の粉を吹きかける。エムは素早く飛び退いたものの、全てをかわすことはできず、横腹の部分に少し火を受けた。
その火を受けた部位を見ると、そこが焼けただれていて驚いていた。火傷を負っていたのだ。

（たったあれだけの火でこの威力なのか……？　くそっ、どう戦う？）

マグカルゴは炎タイプであり、今の軽い一粒のような粉だけでも強さは分かった。となると、相性的に言うと、チコを積極的に戦わせるのはリスクが高すぎる。

「チコ、後ろでアレをやりまくってくれ！」

「うん、分かった！」

この場にいる誰もが聞こえるような声でエムとチコが会話した。アレとは、エムは放ってからまた戻ってくるブーメラン葉っぱカッターのことを指す。そのことをチコは分かってくれたのかとエムは心配するが、後ろでできる最善のことはそれしかないということぐらい、チコには分かっていた。

「とりあえず一発喰らっておけ！」

エムはまずは一発どう対処するか見る為に、十万ボルトを放つ。とは言っても威力十分。場を閃かせる電撃は、後ろで見ながら、頭の中で色々考えているクロバットも震えさせた。

（すげぇ……さすがだ。何とも言えないけど、音の大きさが他の電気ポケモンと一段階は違う……！）

クロバットが心の中で絶賛するが、マグカルゴは、背中を隠すような動きをして正面に十分ボルトに向き合い、炎の鎧で十分ボルトを防いだ。

防御力は高いようであり、簡単に崩すことはできなさそうだ。しかしエムには、マグカルゴの今の動きが気になっていた。何故背中を守るように動いたのだろうか……もしかしたら、あの背中の殻は、一見鉄壁のようだが、もしかしたら脆いのかもしれない、と。

こいつは行ける――オーラは一目見て他と違ったが、実際には重大な弱点があったと気付き、エムは自信を持ってマグカルゴに再び接近した。マグカルゴの正面で尻尾を向けて、アイアンテールをするように見せた。

「フフフ……何をしようが、真正面からでは無駄……なにっ！」

エムは後ろ回転をしてマグカルゴの頭上を飛んでみせた。こんな動きをされるとは予想外である。エムはマグカルゴの背後に着地し、今度こそと、刃物のように尻尾を向けて、殻に叩き込もうとそれを振り上げた。

「ぐぉふっ！」

マグカルゴはその殻から突然、多量の灼熱の炎を噴き出してきて、エムは叩き付ける前に炎を喰らって、逆に叩かれることとなった。さっきも見たように、威力は強烈であり、この一撃で体のあちこちを火傷に追い込まれた。

「これは噴煙……。さっき無駄だと言ったであろう」

マグカルゴの言う噴煙とは、ほぼ全身から周囲一面に炎を噴き出して、背後に回った敵に対して、素早く回転して対処するスピードを持っていなくても対抗できる技である。

まだ攻撃は止まなかった。立ち上がろうとエムが足を立てている間、チコが動き始め、葉っぱカッターをマグカルゴに向けて放った。それをマグカルゴは、左にわずかに動くだけで軽々しくかわした。

「だから無駄と言っているだろう！　そろそろ痛い目遭ってもらわないと分からないようだな」

マグカルゴは余裕という口調をしていたが、今の攻撃も、岩の属性がある彼にとって、草はやや苦手だからと言って避けるべきではなかった。受け止めるべきだったのだ。

「よしっ、いい感じ」

チコが技の調子がいいと、自分で納得して頷いた瞬間に、葉っぱカッターは方向を変えて、今度はマグカルゴの背中へと向かった。スピードのないマグカルゴにとって、シュルシュルと空を切る音に気付いた頃にはもう遅く、殻に葉が直撃した。威力で殻はボロリと崩れ、殻の内部の空洞を露出した。実はこの殻はマグマが冷え固まった岩であり、脆く、それは体の神経と繋がっているので、痛みを発し、高い防御力を持ってしても耐えられない。

「ぐうっ……よくもやったな……！」

やはり殻が弱かった。そのことに完全な確信を持ったエムは、マグマでできた殻の残りの部分に狙いを定めた。少し下がってから、後ろ足に重心をかけて、地面に手を置き、体の周囲に電気を帯びて構える。

マグカルゴ……確かにダンジョンに来た時から気配を感じたが、実際は勝てない相手ではなかった。でも、凶暴化したような表情をしていたので、その影響もあったのかもしれないのだ。

「ボルテッカー……これで終わりだ！」一気に助走を付けて、自身が持つ技の中で最強である、ボルテッカーをマグカルゴの残りの殻に叩き込んだ。殻は粉々に跡形もなく砕け散り、エムの耳にはうるさいマグカルゴの断末魔も聞こえた。

１０話　洞窟の奥地で（後書き）

フカマル（笑）みたいになってるのが何とも悲しいような。
さて、マグカルゴの正体は、お気付きの人はもうお気付きだと思います。

二部に入ってからは、４日おき更新方式を取ってるワケです。
開始から1ヶ月ぐらいは経ってますが、小説のおかげで楽しみが増えています。良いことです。悪いことしか起こらない今年ですが、小説に少々救われているのかもしれません。
でも、読者に「これはダメ。つまんない」とでも言われたらそこで試合（？）終了ですからね。何とか頑張らなくては。

11話　新たな危機感

「なっ……？」

倒したはずのマグカルゴ。闇の創世だとか、仲間だとか、様々なことを聞き出すつもりで近付いた。しかし、マグカルゴは一瞬のうちに、時空間の狭間に引き込まれて消えてしまった。

何者かの力が働いたのか……それは分からない。

「くっ、逃したね……」

チコはマグカルゴは引き込まれる前に、ムチを伸ばして捕らえようとしたが、残念ながら届かず、思わず下唇を噛んだ。

「ああ、捕まえれずに終わったこの戦いは無意味だった。恐らく奴にはまだ仲間がいる。奴は下っ端が何かだろう。トップを叩かないと意味がない……」

エムがそう呟いた瞬間、背後に何者かの気配を感じ、彼は後ろを振り向いた。

「……誰だ!?」　しかしそこには、クロバットしかいなかった。更に、クロバットからは何も感じない。

「……いや、お、俺がどうかしたの？　と、とにかく、お、おかげでここの縄張りは再び俺の物になった。だ、だから、この洞窟を探検したからって、仲間にはできないよ。ほら、これが約束の道具、じゃ、じゃあね、英雄さん」

見ての通り自分は普通ですと主張するような様子である。銀の針を約束通り、３６本入った袋ごとチコは受け取り、一言どうも、とだけ言ってバッグに入れた。

「いや、誰もお前を勧誘しようとは思わないが……。まぁいい、これから何かあったら『サメハダ岩』にまで連絡をよこしてくれ。今のマグカルゴのような奴が何なのかを知りたいからな」

ストイックな表情でエムは連絡先の紙を渡し、このコロコロ洞窟のダンジョンから帰ろうと、クロバットに背を向けた。

「は、はぃ～。さよなら～」

ダンジョンから去ろうとするエレンシアの二匹を見て、クロバットは今になって、凄いのと一緒にいたのだと気付いて、甘えたような声を出した。あのエムコルスの表情は、修羅場をくぐり抜けた奴に違いない！　と確信して見ていた。実際、そのくぐり抜けた数を合計すると、彼が一番多いのである。

他にも、エムコルスはチコリータをどう思っているのかな、だとか色々と考えてるうちに、エレンシアは消えており、元通りの誰もいない奥地が戻ってきており、クロバットは有名人がいなくなったことを一瞬だけ寂しく感じるが、数秒後に縄張りを取り戻した喜びを感じていた。

・
・
・

エム、チコはトレジャータウンに戻り、カフェに寄った。

どうやら、カフェで結成されているグループ、プロジェクトPによって、新しい、それも大規模なダンジョンが見つかったらしいのだ。更に、そこは伝説のポケモンが住んでいるらしく、カフェの者は、ワクワクしているようである。

エレンシアの二匹も、その話を楽しみにしつつ、新しい家となったサメハダ岩に帰った。エムはマグカルゴと戦って受けた火傷の傷を、癒しの種で作られたドリンクを飲んで治し、静養していた。

「あれだけの攻撃でこうなるとは……厄介な奴がまた出てくる前兆か？　弱るな……。いい加減消えないのか？　悪人って言うのがよ……。全く、たまったもんじゃない……」

火の粉、噴煙、二つの攻撃によるダメージをエムの方は受けたのだが、その影響で、運悪く体の数カ所に火傷を負った。こういう綱渡りを続けると、こういうこともたくさん有り得る。エムは少し、不安げに愚痴っぽい、後ろめたいことを呟いた。

「ねぇ、大丈夫なの？」

「……心配はいらねぇな。……それより……なんだ、俺に感謝したらどうだ？　炎タイプが苦手なお前の方がやり合ってたら、どうなっていたか分からなかったもんな。モヤシにでもされてたんじゃないのか？」

チコの心配に対して、さっきの弱音を吐いた時とは打って変わり、何かにハッとしたかのように、エムは胡座をかき、腕組みしながら悪態をついた。勘違いするなよ、と言っているかのように。

「うわっ、意地悪ね」

なぜか、ホッとした表情で言った。チコには、エムがネガティブなことを言ったことが心配になったのだが、そういうことを言われて、怒るというより、安心したのだ。

「ふぅ……明日は何やるかな。ま、適当に考えとけ」

今、エムは、自分が今言ったことを整理していた。

「うん……」

チコは思慮深そうに返事をした。

悪人が減らずに、はこびり続けていることに、果たして俺は嫌気が差しているのか？――ふと無意識に言っていた、今日のような、テロを企むようなポケモンが多く現れては、自分が弱るということ。

始まったばかりの新しい世界は、未来への隊列を光溢れた方向へと向かっているだろうと信じている。それなのに、どうして今、こうして自分の体に傷ができているのだろう？　エムは、こんな疑問に抱かれていた。

トレジャータウンでは紛れもなくエースチームであり、何度も言われるように、時の破壊を食い止めた。胸に名状できない、親友を失った虚しさを去来させながら。その日やそれ以前に感じた、暗黒の力という恐ろしさ。それを今日、感じてしまったのだ。つまり、新たなる危険が迫っているということになるのだろう。

――俺は怖がってるのか？　何が怖いんだ？　何があったとしても、ただ止めるだけじゃないか。何を考えているんだ？　そんな展開になった時、相棒をまた失うとでも？　馬鹿馬鹿しい……。

エムが考えていることは、根拠のない予感に過ぎないと思った。勝手にそういう結論に頭の中が持っていったとも言えるが、毎日毎日このことを考えてもキリがない。

それでも、何かがおかしいことには気付いていた。また崩壊へのカウントダウンが始まるのなら、それを止めるのみなのだ。闇の創世……マグカルゴの言葉により、新たな危機感を、エムコルス、更にはチコリータも、感じていた。

「さっきは悪かったな」

最初に呟いたことに対して自分に嫌悪感を抱き、その後で性悪な者のようなことを言ったことを少し悔やみ、言った。

「別にそれくらい……いつも言ってるじゃない」

全く無関心な口調でチコは言った。言われてみれば、他人を内心で批判することがエムは良くある。それに関することを後にボソッとチコに対して口を開くというパターンがある。それをチコは理解していた。

「……おい、それはどういう意味だっ！？」

そういう自覚が彼にはあまりないらしく、チコに反論した。

・　・　・

その頃、ギルドの中で不穏な動きがあった。……とは言っても事件ではなく、もっと別のことなのだ。

「……親方様、やってきましたね。この時期が」

ペラップが、一通の手紙を持って、引きつった顔をしながら言った。プクリンはそれを受け取り、それを見る。更に、周囲には弟子が集まっている。

「あ♪　僕の友達の結婚記念日パーティーだ♪」

「ひぇぇぇぇぇっ！」

プクリンが手紙のタイトルを読み上げた瞬間、数匹の弟子が悲鳴

のような声をあげた。
　プクリンの友達と言うのは、プクリンが幼少時代に一緒に遊んでいたというポケモン、プクリンの幼なじみのことである。そのポケモンは、ルージュラと言う。もちろん、そのルージュラは、プクリンにしか面識がないが、立派なギルドの弟子の顔を見たいということで、毎回、結婚記念日パーティーに、プクリン以外にも、その彼の弟子も二名招待するのだ。しかしどうやら、その弟子は、招待されることをとても嫌がっているらしく、指名されてもいないのに、なぜか弟子が全員、恐怖で震え上がっていた。
「えーと、『プクリンちゃんへ♪　ルージュラよ♪　今年も私の夫ウソッキーとの結婚した日を記念して、どかーんとパーティーやるわよ♪　いつものようにヌオーちゃんとロゼリアちゃん、ドラピオンとジュペッタも一応呼ぶから、プクリンちゃんとプクリンちゃんの弟子も二匹来てちょーだい♪　待ってるわよ♪』……だってさ♪　どうお？　ペラップ、来る？」
　この時点で既に、ハイテンションなのはプクリンだけである。他は皆、震えている。それも、さっきより。
「親方様、私は経営で忙しいので……お断りさせていただきます……」
　ペラップは明らかに目を泳がせていた。確かに、彼はエレンシアが卒業して以降、忙しくはなっているが、パーティーを休むほどではないはずだ。
「そうかぁ……残念だね。君達、誰か僕と来たい？」
　と、プクリンが周囲の弟子にクルクル振り向いて尋ねるが、誰一匹として、首を縦に振る者はいなかった。ただ、首を横には振っている。どうやら、この様子だと、結婚記念日パーティーには、恐ろしいことが待ち受けているようだ。
「……そうですわ、親方様、エレンシアの二匹なんてどうです！？」
　キマワリがふと閃いたように、手を合わせて嬉々としてプクリンに提案した。

「……そ、そうだぜ！　エムとチコの二匹だ！　アイツらなら耐えられ……楽しめるぜ！　何つったって、トレジャータウンのチームの中でもエースの存在だからな！」

「それ、本当にいいですね！　一回りまたエレンシアさんが成長するんですよ！」

「……エム達がかわいそうでゲスよ……」

ドゴームやチリーンなども喜んで賛同している中、ビッパだけが小さな声で、エレンシアに同情することを言っていた。

「フフフフフ……」

最早、プクリンのギルドが、探検活動を支える場所なのか、悪の組織のアジトなのか、見分けが付かないような気味の悪い笑い声を、弟子達があげていた。

11話　新たな危機感（後書き）

咳がまだ止まりません。誰か助けてください＞＜

１２話　災難続き（前書き）

本当にすいません。三日後に更新致します。

12話　災難続き

翌日以降も、エレンシアは探検活動を続けた。後の英雄に逮捕されたが、起訴猶予処分になったとされるスリープ以外は知りようがなかった、トゲトゲ山の奥底の小さな穴。その中には宝があるという情報が、久々にも広まった。実は情報の発信源はルリリであり、何気なく探検隊と仲良くマリルも含めて会話していたら、怖い思いをしたという話題の中からその情報が出て、広まったらしいのだ。

情報ソースがとても幼い子供とだけあって、なかなか信じる者が現れない中、先陣を切ってエムとチコが調べに向かった。色々と関わりもあり、自分達が先に見つけることにより、マリル兄弟に与えた恩を、今度は受け取ってあげたいと思い、噂を信じていたのだ。

……が、しかし、スリープと同じ罠にかかった。中に入ろうとしても、後もう少しが穴が小さくて入れないのだ。体は小さい方ではあるが、それでも入れない。

「よし……ここは強行突破だ。頼むぞ」

「うん」

チコがエムを穴の中に、斜め向きの姿勢で無理矢理葉で押し込む。それでも、途中でぎゅうぎゅうに詰まってしまった。

「ダメだ……これ以上行けないな……。体のどこかが引っかかっている」

「うーん……一旦出てきて」

「ああ。……っておい、出られねぇじゃねぇか！」

体が全く前にも後ろにも動かない。岩にすっぽり引っかかってしまったのだ。

「はぁ……」

あまりにも失敗しているので、チコは思わず溜め息をついた。

「なにが『はぁ……』だ！　俺は悪くないだろ。むしろ悪いのはお前だろ！　Ａ級戦犯だ！」

「……ちょっと我慢してね」
バタバタしていたりと、言動の幼稚臭いエムにチコは半ば呆れ、言葉は無視し、エムの尻尾をムチで無理矢理引っ張った。
「いててててっ！」
エムは非常に痛がっていたが、それでようやく、強引ながらも穴から抜けて戻った。
「へぁ……てめぇ……俺で遊んでやがるな？　散々こき使いやがって！　ムカつくからこの痛みをお前にも味わせてやろうか？」
「……ごめんって」
穴に入ると言ったのは誰なんだとチコは思いながらも、キレると何を仕出かすか分からない彼をこれ以上怒らせるべきではないと思い、謝った。エムは相棒であるはずの相手にボルテッカーでも喰らわせるのかという姿勢になっている。ちなみに、ピカチュウには尻尾を触られたり引っ張られたりすると、酷く怒るという性質があるのだ。
「ねぇ……私がやっても結果は見えてる。もう今回は諦めて帰ろう？」
結局穴に入れずに終わった結果として、その後五時間ぐらい機嫌が悪い状態のエムコルスだけが残った。機嫌を直した方法は、トランプのハーツで自分が負けるようなプレイングを繰り返して勝たせたことだそうな。

・
・
・

その翌日の朝は、起きるのは遅かったが、今日も活動を始めようと、サメハダ岩の中から出てきたエレンシアのもとにペラップがやってきた。彼がエムに手渡した一通の手紙と共に、プクリンと同行してほしいと、ペラップは懇願し始めた。昨日説明しようと思っても、既に留守だったらしい。

「という訳だ！　頼むぞエレンシア！」
　すっかりペラップからも、色んな意味で頼りにされるようになったエレンシア。
「……結婚記念日パーティーねぇ……。プクリン、ルージュラって誰なの？　それと、どうしてそれを私達に？　お尋ね者討伐依頼って訳じゃないのに……」　何も知らないエムやチコは、パーティー参加に関して楽観視している。しかしペラップは、「親方様の幼なじみとだけあって、みんなやたら凄い上に、参加し辛いパーティーだから、とにかく気を付けてくれ」などと、慎重に説明した。
　ギルドの者は心が弱いからだろうと、エムは内心で思い、まだパーティーに危険を感じないでいる。
「……よし。じゃあ、パーティー行ってくるからね！」
　パーティーということで、逆に楽しみにしているチコが、ペラップに微笑む。ペラップは不安で不安でしょうがなかった。
「アイツら……どんな顔して帰ってくるんだろうか……。親方様じゃないからなぁ」
　プクリンと合流し、タウンから去って行ったエム、チコ、プクリンを見て、ペラップは下を向きながら呟いていた。
　こうして、少し遠くの会場にまで向かう三匹。プクリンとこうして歩くのは、実は初めてだった。すると、プクリンは歌を歌い始める。
「むかーし私が、いつか手渡そうとー♪　ポケーットーに入れてたー手作りのプレゼントー♪　いつでも時々～顔が赤くなるのよーぉー♪　プレゼント渡せなかったの？　さあ、どうだったかしら？」
　プクリンのテンションは高く、何やら会話が混じる歌を口ずさんでいて、その声が段々と大きくなっている。その様子は、相変わらずだとしか、エムやチコは思わなかった。
「君達、調子はどうお？」　さっきからずっと機嫌良く歌を歌っていたプクリンなのだが、歌い終えると話しかけてきた。
「まぁまぁ」

エムが答えた。そして、チコは気になっていることをプクリンに尋ねる。

「ところで、プクリンの幼なじみらしいけど、具体的に誰なの？」

「ああ、それはヌオーとロゼリアだよ。他の二匹は去年から来なくなったなぁ。昔、僕はここは違う大陸に住んでいて……」

プクリンはこの長い道のりの間、ププリンだった時のことを話し始めた。その幼なじみ以外にも、自分には親と、探検の師匠がいたということを。エム、チコは思い出話を興味深く聞いていた。（詳細については、いずれ書くだろう！）

・

「今も探し続けている、か……。で、落とし穴に落ちた奴を集団で囲むという考えはそこからきたんだな？」

エムは、自分がジュプトルに生きていて欲しいという願いがプクリンと一致していると感じた。やはり、何かの縁があるのかもしれないと思っている。そして、話の中の一つが、卒業試験の中にあったと思い出して、試験に関することを言った。

「あ、そう……いや、何も知らないよ」　プクリンはまだシラを切るつもりであり、頭をかきながら、バラしかけるのを途中で止めた。

「はぁ……」

こんな調子で雑談は続くが、会話も尽きてくると、プクリンはまた機嫌良く歌を歌い始めた。

「あーるーきーつーづーけーて、どーこーまーでー行ーくーの♪　かーぜにたーずねらーれーてー♪　立ーちー止ーまーる♪」

・　・　・

ようやく三匹は到着した。ダンジョンはありそうだが、それ以外は何もなさそうな場所だ。汚れのない、奇麗な外見一軒家が建っている。建物の裏のようだが、そこにはカイリキー建設のロゴ入りの

ダンボールが山積みにされており、いかにも最近建てられたような雰囲気だ。

「やぁープクリンちゃんとそのお弟子ちゃんいらっしゃい♪　お久しぶりね♪　そして始めまして♪」

正面玄関に行くと、何もアクションを起こしていないのに、ルージュラが出てきた。

「いやぁ、年月が経つのは早いね。君も立派になったかい？」

「私は変わらないよ？　プクリンちゃんはますます逞しくなったけどね♪　さ、プクリンちゃんも、可愛いお弟子ちゃん達も、入って入って♪」

ルージュラは手をしゃくった。プクリンをちゃん付けするような身分なんだなとか、可愛いなんて滅多に言われないから、可愛がりでもされるのかなとか、ギルドの弟子達はそれで酷い可愛がりでもされて嫌になったのかなとか、様々な推測を立てつつ、家に入った。

「ルージュラ、誰が来たんだい？」

「あなた、ギルドの方々よ」

低い男の声が家の中の遠くから聞こえ、それにルージュラが答えた。呼び方からして、男の声は、ルージュラの夫のウソッキーと考えていい。

「嘘ぉ！　方々ってことは、今回は三匹来てくれたんだね！」

高い声を最初の三つの言葉だけ出して、ウソッキーが言った。ちなみにウソッキーは、驚く際には全て、「嘘！？」などと言う。

プクリンが小声で説明するに、どうやら前回は弟子枠で来たのはビッパだけだったようなのだ。計三匹も参加者が減ったと嘆いていたから、今回、また増えて喜んでいるのだ。まだ、何も起きていない。

・　・　・

数十分後、準備ができたようであり、そして、ルージュラが望む

人数が集まったことにより、パーティーが始められようとしていた。ルージュラ以外には、ヌオーの男性と、ロゼリアの女性が来ている。プクリンは大々的に、エムとチコを、時の破壊を救った英雄と紹介する。その功績は、ルージュラなどにも知られており、これは素晴らしい有名人が三匹も来てしまったのと、ルージュラとウソッキーの夫婦は喜んでいた。

「さて……。おっとケーキ切る物忘れた。取って来るよ」

「あら、本当ね。行ってらっしゃい」

「相変わらず忘れんぼな夫婦なことよね」

リンゴが大量に乗せられた、円上の巨大なショートケーキが用意されるが、切るナイフなどがなく、ウソッキーが取りに行った。それをロゼリアがからかうように、ルージュラの肩を花でつつき、プクリンとヌオーは笑っていた。まだ、何も起きていない。

こんなに和やかな雰囲気なパーティーじゃないかと、エムもチコも思った。しかし次の瞬間、聞いたことないような音が後ろで響いた。ブィーンと、音が鳴っており、何だろうと、エムとチコは何が起きたんだと、後ろを振り向く。

見ると、ウソッキーが、ナイフにしては柄がやたら大きく、刃先が丸く、その回りにチェーンのような物が取り付けられ、回転している物を持っていた。あれで体を切られたらとんでもないことになるだろう。「お、やっと食べれるかぁ。早く切ってくれよ。いい加減待ちそびれたなぁ」

呑気にヌオーはあくびしている。どうやら、あれでケーキを切るらしい。

「ちょ……プクリン。あ、あれ何なの？」

チコが音のインパクトに驚き、プクリンに近付いて聞いた。

「あれ？　あれはチェーンソーだよ」

13話　ＣｈａｏｓＰａｒｔｙ（前書き）

結局、１日遅れの４日後更新じゃないですかｗｗｗ

13話　ChaosParty

「チェ……チェーン？」

プクリンからは、ウソッキーの持つあれはチェーンソーという説明を受ける。しかしチコには、ポケモンの名前にしか聞こえなかった。

「……ま、まさか、俺達をぶった斬る気か！？」

エムはウソッキーから離れようと後ろに下がり、チコの横に立った。しかしエムとチコの、チェーンソーに恐れる様子とは裏腹に、他の者は至って平静。ケーキを待ちわびているようだ。

「そらぁ！　斬られる立場から斬る立場へ、伐採術！」

ウソッキーはチェーンソーを上に振り上げてから飛び、ケーキの円の中心に向かって、一気に振り下ろした。ケーキのスポンジやクリームの一部が飛び散り、ケーキの周りを囲んでいたポケモンに付いた。しかし、誰もそのことを気にしよいとはしない。ケーキは崩れずに上手く切れた。更に、ケーキを置くテーブルにまではチェーンソーが届いてはいない。ウソッキーが止めたのだ。それを計四回も繰り返した。

エムとチコは、少しパーティーメンバーから距離を置いていたので、難を逃れている。そして、ウソッキーはチェーンソーのスイッチを切った。一旦は危険を回避したことになる。それでも、何故わざわざケーキを切るのにチェーンソーを使うのかが疑問だった。さすがプクリンの幼なじみと言うだけあるのだろうか。　ウソッキーの元である木が、いつもチェーンソーで切られるから、今度はこっちが何かをチェーンソーで切ってやろうとでも思ったのか。恐らく、ウソッキーの台詞を聞く限り、そうだろう。

拍手が湧き起こり、ルージュラは「さすがはアナタ」とか言ってウソッキーにキスした。どうやらパフォーマンスショーだったのか。ルージュラはケーキを8個分に分けられたケーキを一個ずつ大きめ

の皿に乗せ、みんなに配っていく。余った一個はまだ残っている。
「……普通に食えるじゃねぇか」
試しに毒味という気分でケーキを食べてみるが、甘くておいしく、とりあえずまた一安心といった所だった。
「うん……これおいしいね」
チコも言った。背の高さが足りなくてテーブルでは食べることができないので、エム、チコは床に座って食べている。プクリン達の会話を聞いていると、こっちの製造業の会社は赤字続きだの、卒業者が出てからギルドに来る探検隊も増えて良い傾向だの、やたら経済的な話が多い。探検隊を組んでいるのとは世界が違った。
ふっ、なんだ。大したことなかった。している会話もどうやら平和なようだ。あのチェーンソーが嫌だったんだな、なるほど。確かにあれは驚くが、二度と行きたくなくなるほどではないな。全く、みんなどうかしてる……。忍耐力が弱いのか――エムは警戒して損したと、ケーキを食べている時に思った。
「リンゴ酒とビール持ってくるね」
しばらく経つと、ルージュラはそう言って席を立った。アルコール飲料に関して、見たことがないエムや、チコは何も知らないので、何とも思わない。
ルージュラが瓶をそれぞれ一升ずつ持ってきた。しかし瓶の色は黒く、この時点では中身は良く分からない。
そしてテーブルの上では、ルージュラによってグラスに注がれていく飲み物が一瞬見えた。色は、両方共に黄色っぽかった。リンゴジュースなのだろうか、と思った。
「リンゴ酒は、プクリンちゃんと私とウソッキーで独占だからね♪　みんなはビールでね。ねぇ、お弟子ちゃん達も飲むかしら？」
「結構だ」
「遠慮しておくよ」
ルージュラが、ビール瓶を持って近付いてきたが、あまり知らないのは飲みたくないと、二匹共に断った。そもそも、それ相応の年

齢でない為、この判断は正解だった。
「別に遠慮しなくていいのにねぇ」
ルージュラはそう言いながらテーブルに戻り、乾杯と五匹でグラスを叩き合った。グビグビと飲んでいき、実にみんなはリラックスしている。
……そして、数分が経った。
「暇だ……」
「ええ、トランプ持ってくれば良かったかなぁ……」
何もすることがないので、エムとチコはボケーッとしていた。トランプをバッグの中に入れておくべきだったと後悔する。探検バッグを持ってきたのだが、今日は探検はしないのだから。トランプと聞いて、エムは昨日のことを思い出し、腹立たしく思った。
……その時だった。ふと前方で妙な音が鳴り響いたので、エムとチコはそっちを振り向いた。
「……!?」
酒を飲んでいた者全員が酔っていた。顔が赤くなっているのがその証拠である。
「ぐらぁ！　何やっとんじゃわれー！」
明らかに酔っていると分かる様子で、ヌオーがマッドショットをエム達に向けて放った。戦闘慣れしている為、簡単に避ける。しかし、まだ狙っている者がいた。
「エム、これは一体何が起こってるの？」
「し、知らん！」
エムもチコも、酔いというのを知らない為に、状況把握もできない。プクリンは訳も分からずにハイパーボイスを家中で響かせているし、ルージュラはウソッキーにキスしている。しかし、ウソッキーはルージュラから離れ、とある物を拾った……。
「げっ……」
ウソッキーが手に持ったのは、チェーンソー。もう、嫌な予感しかしない。

「チコ……ちょっと逃げるぞ」
「うん」
もう暴れるとしか思えないので、先にどこかへ隠れることに決めた。しかし、部屋から一旦出ようとした時、やはり酔っているロゼリアの花びらの舞か飛んできた。が、背後からの攻撃にも関わらず、簡単に避けた。
ぶいんぶいんという音が響いた。早くしようと、さっさと廊下に出た。
「隠れる場所がない……いや、棚があればその上に……」
エムとチコがやり過ごせる場所を探しているうちに、チェーンソーを振り回して暴走しているウソッキーが来た。それと同時に、廊下内にある物置を見つけた。天井近くに、自分達程度の背なら入れそうな棚があった。
「ひぃ……お、おい、早く登れ！」
「わ、分かってるって！　うん」
どこかのホラー作品に出るような、布袋や包帯を巻いた男を彷彿とさせる、奇声をあげながら襲ってくるウソッキーに、思わずエムとチコは戦慄が走る。チコは柱にムチを巻きつけて、埃被った棚の上に乗った。
「うぉっ！　コイツもう目の前に！」
ウソッキーはエムの目の前にまで迫ってきた。ウソッキーを見てみると、酔っていて、チェーンソーがあるとは言え、隙がある。振り下ろした隙に、一発だけ体当たりを叩き込んで怯ませた。その隙に、チコはエムもムチで巻きつけて、棚の上に引っ張る。
「ふぅ……」
ウソッキーはエムとチコを見失い、再びどこかへと行き、エムは安堵の表情を浮かべた。ふと気が抜けると、家の中は破壊する音ばかりが聞こえた。
「うわぁ……やべぇ。ようやくどういうことか理解できた。お前も分かったか？」

エムは、大したことないと一瞬だけでも思った自分を反省し、頭を抱えて、今まで被害に遭ったギルドの弟子達に心中で謝った。

「もちろん……」

チコは溜め息をついた。もう帰りたいという一心だった。それにしても、こんな手段で逃れるのは卑怯ではないのかと、何となくチコは思った。

奇声と物音が飛び交うのが止んだのは、それから数時間後だったと言う。

・
・
・

「やれやれ……またやっちゃったわねぇ私達」

「また後始末が大変だぞぉ」

正気を取り戻し、見るも悲惨な部屋の中を見て、夫婦が言った。協力すると言って、酔っていた他の者も後始末を始めた。しかし、その頃、被害者の方は……

「ねぇ君達、ごめんってばー」

けっこんパーティーはまだ終わっていないにも関わらず、早々と帰って行こうとするエレンシア。さすがにもう懲りたらしい。心構えが足りなかったのが原因とも言えるが、やってられないのは当たり前だ。プクリンが引き留めようと、必死に追いかけて行く。

「帰る！　今帰っても、もう罰を喰らうこともない。とにかく帰る！」

「あんな所にいたら命がいくらあっても足りないよ！」

プクリンの言葉を無視し、昨日同様、しかも今回はチコもお怒りの様子であった。

「ねぇー僕が悪かったからさぁ」

結局エレンシアは帰ってしまい、プクリンにとって、これほど虚しいこともなかったそうな。

１４話　空の頂

「……あー。だりー」

エレンシアは昨日行ったパーティーで、無駄に疲れた為に、朝の目覚めや、気分が悪かった。

全く、さすがはプクリンの幼なじみってだけあったか。本当にありえん集団だ……。ああなるの分かってんなら飲むなよアイツら。ギルドにやられた……。

エムにとって、ギルドの弟子達はきっとほくそ笑んでいるに違いないと思うと、ちょっと悔しかった。最近、朝はだらけ気味なチーム。もう目が覚めたというのに、まだ寝転がっている。

「ちょっと散歩してリフレッシュしよう……」

「ああ、行ってくるか」

気分転換とチコが提案し、エムもそれが最善と思い、ようやくベッドから立ち上がった。

すぐ側はトレジャータウンなので、まずはそこを通る。しかし、そこにはギルドのメンバーの一員であるキマワリがいて、表情を伺いつつ、ニヤニヤしながらエレンシアを見つめていた。ビッパもいたが、こっちは同情する視線を送っていた。しかし、エムもチコも、ギルドに対してご機嫌斜めなのか、ひたすら無視していた。

「俺達は仏じゃないんだ……。絶交されたと思って反省してやがれっつーの……」

エムは、心中で言っていたつもりだったが、うっかり口に出していた。しかも、キマワリやビッパにも聞こえていた。だがそれには気付いていない。

「まぁ、なんと怒ってるですわ。私達の罠にはまって！　初めて見ましたわー！」

キマワリは、あんなエムの言葉を聞いたことがなかったので、沈むより逆に喜んでいた。

「キマワリ……いい加減仕事にやろうでゲス」
「ああ、そうでしたわね。早く親方様へ直通の依頼をこなさなければ……」
ビッパとキマワリは、共に組んで依頼に行く所であったようだ。相変わらず、ギルドの弟子であると、自由に探検ができないようであった。
エレンシアがトレジャータウンを通り過ぎると、パッチールのカフェの前に集りができていた。その殆どは常連客であり、何か重大発表があるとのことだ。
「おい！　ここで何かあるのか？」
「今からそれをパッチールに聞くんですよ」
「そうか……なら俺達も行くか」　エムがパチリスに話しかけ、パチリスは答えた。ちなみにこのパチリスは、カフェの常連客だ。
カフェの中に入ると、多くのチームや探検家が集まっていた。空気的にはお祭り気分と言った所で、さして重大な事件があるわけでもなさそうだ。エレンシアも含めて、「ハッピーズ」と「かまいたち」と「マックロー」を合わせた四つのチームと、六匹の探検家が集まっている。
「皆さーん！　今日は嬉しいお知らせと、一大イベントがあります！」
探検隊にとって不要な道具をカフェが引き取り、その道具を開拓に必要な資金に変えていくという、パッチールのカフェが結成した、プロジェクトP。それまでさしたる成果はなかったが、ようやく成果が出たらしい。話を真面目に聞こうと、パッチールの側にまで寄る者、エムや、かまいたちのサンドパンのように、そこまで興味はなさそうに椅子に腰掛けて、しかも無駄に態度の大きい様子である者、カフェの中で様々だ。
「さぁて、早速眠そうな顔した方もいらっしゃいますが……皆さん、空の頂という、世界一の高さを持つ山をご存知でしょうか？」
パッチールがフラフラしながら説明を始めた。エムの横にいるサ

ンドパンの目が大きくなっている。
「ああ、それなら知ってるよ。ここから東の方角にある、物凄く高い山のことだよね。何でもその高さは天に届くとも言われているけど、険しい山脈に囲まれているせいで、ルートが開拓されていないんだ。誰か挑戦したこともあるらしいけど、失敗したようだよ。一流の探検隊に行かせてみないと分からないんだけどね。とにかく……調査はあまりされていないんだ」
バリヤードが言った。彼の妙な情報通っぷりに、その場にいる者全員が唖然としていた。そもそも山の名称自体、誰も知らなかったのだ。宝があまり見つからないとされる単純な登山というものは、ここでは流行ってはいないのだ。
「おーその通りです。バリヤードさんよくご存知で。彼のおっしゃる通り、空の頂は今まで殆ど調査されておらずー、今まで謎に包まれていました。誰にも関心を持たれずに！　天に届くまで高く！　そして、多くの謎を持つミステリアスな山……。ああ！　なんて探検心をくすぐる響きなのでしょう！　行ってみたい！　見てみたい！　皆さんもそう思うでしょう！？」
ますますたくさんの者が、パッチールの話を、同意しながら熱中して聞き、特定の者はまだ冷めた様子で座っていた。
「……ったく……マルチ商法にでも釣られてる奴に見えるぞおい……」
輪になって、話をワクワクして聞いているチコを見て、エムが心配そうに言った。単に、あまり知らない者達の輪に入るのが嫌だという、人見知りの激しい彼の気持ちもあるのだが。パッチールは話を続けた。
「……そこでてまえ共プロジェクトPではその願いを叶えるべく、こっそり空の頂へ繋がるルートを開拓してきたのです。距離は？　道に無理はないか？　様々なデータを分析した開拓は大変でした。そして、先日ついに、そのルートの開拓に成功したのですっ！」
空の頂という山に行けるとなって、大いに盛り上がった。パッチ

ールも報告書を読みながらニヤついていた。
「いやいや、それだけではありません！　なんと山の麓に小さな隠れ里を発見してしまったのです！」
「隠れ里？　忍者みたいだね。写輪眼でもゲットできるかな」
「はい、さすがに忍者だったり、忍術を使われたりはしないのですが、とても珍しいポケモン、シェイミというポケモンが棲んでいるのですよ。具体的には知らないのですが、何でも、とても可愛らしい形のポケモンだそうでー♪」
　パッチールがシェイミと呼ばれるポケモンを可愛いと表現した時、エムの隣にいたサンドパンが突然立ち上がった。
「……そ、それ気になる……！」
　今まで無関心そうだったサンドパンが、急に興味を持って、パッチールを囲む輪に近付いていった。それを見て、エムが半ば呆れ気味になった。
（おいおい……可愛いってなんなんだよ。分かんねぇな俺には。馬鹿じゃねえのか）
　しかし、もはや無関心そうなのはエムコルス、彼だけだ。ちなみにかまいたちのサンドパンは、これは通称ロリコンと呼ばれる者に属している。今の行動がその証拠である。
「それから更に！　調査チームの報告によると、そのてまえ共が命名したシェイミの里の外れに、空の頂に続く登山道を発見したとのこと！　まだあまり調査が進んでいないらしいですから、まぁ推測ですが……お宝ザックザク！　新発見がドッゴドゴ！　なんてあるかもしれません！　古い言い伝えによりますと、どんな宝にも勝る秘宝が隠されているとか！」
　カフェの中は大盛り上がり。そろそろ空気を読んで参加するべきなのかと、エムも思い始めた。
　誰も行ってないなら、宝が残されるはずもないはず。でも、そんな言い伝えがあるのなら、もしかしたら……。
「里への地図は人数分だけ配布しますから、夢とロマンへ向かって

張り切って行きましょー！」
　パッチールがそう言った瞬間、多くの者が飛び出して行った。
「ハッ、伝説だの英雄だの知らんが、真っ先にたどり着いて伝説の秘宝を手に入れるのはこのニューラ様だからな！　お前らより実力があるんだよ！」
　ニューラが、エムとチコにそう言い残して、先頭でカフェから飛び出して行った。チコは気にも留めず、エムは鼻で笑った。しかし、今の言葉をやや気にはしている。探検隊の中で、エレンシアはカフェの中に取り残されていた。
「テンション高いな……ついてけねぇ……。まぁなんか昨日から気分悪いし、山登りのピクニックにでも行ってスッキリするかな」
　険しい山の登山をピクニックと軽い表現で、エムは言った。
「宝とか新発見とかも気になるね。シェイミも気になるかなぁ。いやいや、エムの言うように登山の楽しみも……。よし、とにかく行こうよ！」
　すっかり空の頂の話にはまり、エムよりもテンションが高いチコであった。
「まぁ、これだけは言える。何があろうと、真っ先に頂上に辿り着くのは俺達だ。こう言いたいな。あんまりナメてんじゃねえぞ、てな」
　まだあのニューラに見せていない実力を、ベールを脱ぐかのように、エムコルスはゆっくりと椅子から立ち上がった。そしてエレンシアは、空の頂へ向かう為に、シェイミの里へ向かっていった。

１４話　空の頂（後書き）

さて、活動報告の通り、色々と苦労しそうな回ですね。
ちなみにシェイミは映画版ではありませんのであらかじめご了承ください w

15話　シェイミ

空の頂のふもとに、ある隠れ里があった。戦国中に本拠地として構えるには適する場所だ。しかし、住むのはそういうポケモン達ではなく、伝説ポケモンの一種であるシェイミだ。

シェイミの里は賑わっていた。伝説と呼ばれてはいるが、ここには多くのシェイミがいた。ハリネズミを思わせる姿、背中には草のようなものが広がり、側頭部には飾りのように花が咲いている。そして一番気になるのが、ピカチュウであるエムコルスや、チコリータの背の高さよりも小さいということである。だから、里の中の住居は全体的に小さかった。まるでジオラマのようだ。

「ここがシェイミの里。みんな集まってる。のどかな所ねぇ」

チコは山の空気を吸いながら言った。ある程度小さな山を進み、エレンシアはこの里まで来た。既に数名はここに辿り着いている。プロジェクトPのチームもいた。

一匹のシェイミが新たに来た二匹に気付き、近付いた。

「はじめまして、私はシェイミのエイヤルと申します。……というか、ここの住民はみんなシェイミなんです。分かりにくくてすいませんね」

エイヤルと名乗ったシェイミは物腰が落ち着いている。いつもそうなのか、それとも見知らぬ他人が来た時の為だけの礼儀なのかは分からない。一説によれば、とても特徴的な喋り方えおして、嫌味ある性格をしていたとも言われているのだが、それも代々変わってきているのかもしれない。

「自分だけの名前があるのか……？」

そのまま種族名で名乗らないことに疑問に思い、エムが聞いた。

「はい。分かりにくいですから、区別の手段として一匹一匹に名前があるのです」

エイヤルと名乗るシェイミがこう説明した。どうやらエムが一瞬

考えた、人間だからということではないらしい。
「ははは、そうなんだ。私達は探検隊チームのエレンシアよ。よろしく」
「はい！　エレンシアさんも登山に来たんですか？」
「そうよ。ここのシェイミ達、みんなこの山に詳しいの？」
「ええ。私達はずっと昔からここで暮らしながら、登山する方々の案内役をしておりました。山の中は不思議のダンジョンになっておりますし、遭難したら危険ですからね」
「あー、やっぱりダンジョンになってるのね」
　このようにエイヤルとチコが会話している間、エムはニューラの方を凝視していた。ニューラは集まっている探検隊を尻目に、真っ先に山へ突入しようとしている。
　あの野郎……楽しむ気はゼロらしいな……。だが長いからな。逆転はいくらでも可能……――エムは異常にニューラの動向を気にしており、カフェでの挑戦状のような挑発が彼にはかなり効いたらしい。
　エイヤルはエムの視線の先に何かあるのかと思って後ろを振り向き、山に入っていくニューラをチラッと見た。単独で身軽で入って大丈夫なのかと少し心配になった。
「……ええと、はい。この山はそこら辺りで見るような地形になっています。案内役をしたのも昔の話です。地震でここに通じる山道が崩れてしまい、外から探検家がなかなか来られなくなってしまったんです。だから調査チームの皆さんがやって来た時は、とても驚いたんですよ」
　エイヤルは大丈夫だろうと思い、構わず言葉を続けた。
「へぇ、だから今まで言い伝えしか語られてこなかったのね。あ、そういや、この山なはどんな宝にも勝る秘宝が眠っているって本当なの？」
「さぁ、どうでしょうね。単純に道を案内するのが私達の仕事ではないのです。あくまでも、主役は山を登る皆さんであり、私達はそ

れを支える脇役でしかないのです」
「へぇ……奥が深いのね。楽しみにしておこうと思うよ！」
空の頂の頂上に何かあるかのようなことをエイヤルが暗示し、チコは期待に胸を膨らませた。
「ところで……こうしてお話できたのも何かの縁かもしれません。もし良ければ、私を案内役にいかがでしょうか？　何だかエレンシアさんと話してたら一緒に登りたくなりまして……。断る方ばかりなんですけどね」
エイヤルはねだるように言った。さっきから探検家達に言っても、わざわざ案内役付けるのはプライドが許さんということで、断られてしまうのだ。
人数が揃っているチームの方を誘うのは初めてだが、親近感が湧く雰囲気だったので、エイヤルはエレンシアの答えに期待している。
「それは願ってもないよ！　ね、エム。このエイヤルに案内役お願いしてもいいよね？」
チコはエイヤルにいい返事を返し、エムにも聞いてみた。しかし、エムはエイヤルの話を全く聞いていなかった。
「……ん？　案内役？」
「そう……エイヤルを案内役に」
ボケッとしてて全く聞いてなかったなと、チコは思った。
「……そんなのいるかよ。俺達だけでできることを一々案内してもらってどうすんだ！　俺達を誰だと思ってる？　遅いペースに合わせたくねーから」
「ええー？　やっぱり山の構造知らないから危険だし、いた方がいいと思うよ？　何しても登ればいいんだし、やっぱりお願いしようよ、ね？」
エムが首を横に振って断るのに対し、チコも彼の意見に食い下がらずにいた。
「はぁ？　断る断る。せめて俺より強けりゃいいけどな。それに、俺達は毎日危険だろ。昨日とか特にな。それに、他の奴らは案内役

付けていない……」
エムはやはり首を小さく横に振って断るが、表情や言い方に嫌味はない。
「……あ、あの、私達は元々伝説の存在ですし、戦闘に関しては自信があります。ですからどんなに実力ある探検隊のペースにもついて行けると思います……」
明らかにエムからは足手まといになると思われているようなので、エイヤルは心配ないということを、笑顔を見せながら謙虚に言った。しかし、見知らぬ者を信用しない、もしくはできないのであろうエムを納得させるのは難しかった。
「……分かった。そこまで言うなら仕方ないな……。言い訳は……仲良くなりましたってことで」
頭を片手で抱えながら、エムは渋々受け入れた。正直、誰かに引っ張られるのも楽だとは思うし、悪いポケモンとは思えないのだが、やはり自分達だけ案内役付きというのも気が引けたのだ。
「気が変わってくれたようで良かったです。では、登山道の入り口から行きましょう。空の頂へ！」
次々とカフェの者達が山へ向かっていくのに続いて、エレンシアとシェイミのエイヤルは、空の頂へと入っていった。
入った直後の山の中の登り坂は緩やかだった。地図には等高線が引かれていないので、その感覚を測ることもできず、どこで急になるのかも分からない。襲ってくる山の野生ポケモンを簡単に返り討ちにしながら進んで行く。
「とてもお強いこと……やっぱり案内役は必要なかったかもしれませんね」
素早い動き、正しい判断力や読み、火力ある攻撃。エレンシアの双方にそれらが揃っており、エイヤルは褒め称えた。
「驚いたのか？」
自慢げに誇るようでもなく、調子に乗っているようでもない口調でエムは聞いた。

「いや、元々そんな感じがしましたし、驚きではありませんよ。……ところで、そろそろエレンシアさんのお二方の名前を教えてもらえますか？」

「ああ……まだ名前は言ってなかったな。俺はピカチュウのエムコルス」

「私はチコリータよ」

チーム名だけで言うのも不便なので、エイヤルが聞き、エレンシアは名前をエイヤルに教えた。

「エムコルスさんとチコリータさん……。なるほど、改めてよろしくお願いします。……あ、一合目に着きます！」

名前を教え合っているうちに、エムとチコとエイヤルは山を登る途中にある一つの休憩ポイントに辿り着いた。

１６話　贈り物（前書き）

更新→番外編更新→更新

まぁ、６日も開いてるけど、更新頻度は３日ってことになるな。うん（デイダラ風）

16話　贈り物

一合目の地点には多くのポケモンが集まっていた。ここは休憩地点の役割を果たしているので、ここで休んで雑談している者も多い。

ここ辺りは草原になっており、空の頂の自然に親しむ余裕がある。登山なんかじゃなくて、ただのピクニックかハイキングじゃないかと、エムやチコは思っていた。

「休憩ポイントは十カ所あります。まだまだ先は長いですが頑張りましょう」

エイヤルが言って、

「なんだ、休憩できる場所がそんなにあるなら楽じゃねぇか」

エムが登山はまだまだ余裕といった顔を見せて言った。入り口に入ってからこの場所までは、通常のダンジョンの五分の一程度の距離しかなかった。しかし、総合すれば、相当距離のあるダンジョンになる。坂があることを考えれば、二流か三流の探検家、もしくは探検隊には難しいのかもしれない。

しかし、登山にトラブルは付き物である。少し前にも、探検以外のことで有名な登山家であるポケモンが、山で遭難するという事件があったという。この休憩ポイントでは、あたふたしているポケモンがいた。頭に角を生やした紺色のポケモンのヘラクロスだ。

「しまったぁーー！　オレンの実忘れたーー！　特攻しながら進むスタイルの俺には必須なアイテムなのに、俺はなんて馬鹿なんだぁー！！」

ヘラクロスが一人で叫んでいるのを、エムとチコは横目で見ていた。救助活動の成功も多いこのチーム。エムとしては、何だか助けてあげたくなった。

「……はいよ」

エムがバッグを弄って取り出したのは水色のオレンの実。それをヘラクロスに対して穏やかな顔をして差し出したのだ。

「うぉー！　これを俺に？　マジすかーー！！　君はなんていい奴なんだー！　何かお礼を……！　そうだ、これだ！　今持ってる中では一番いい道具！　穴抜けの球！」

エムはヘラクロスにお礼として、不思議な球の一種である穴抜けの球を受け取った。だが、受け取ったエムとしては、感謝は分かるが、道具には全く価値観を感じなかった。

いらねぇ……これ心底いらねぇ……！――これならまだ何も貰わなかった方がいいのではという気がしてたまらず、明らかに作ったと分かる、複雑な笑い顔を見せた。

「……どうも」

「この恩は忘れないよ！　ありがとうーー！」

ドゴームほどではないが、ヘラクロスの無駄にうるさい声も段々と気になってきた。

「うふふ。エムコルスさんって、案外いい方なんですね」

一見冷たい性格に見えるエムの意外な一面を見たと思ったエイヤルが、微笑んで言った。

「そうよそうよ。何気に優しい面が多いのが彼なのよ。じゃ、早く先に進もう」

エイヤルの意見にチコは同意し、声に出して笑っていた。

「にしても、案外って……何気にって……。……いや、ここは耐える場面だ。耐えてやる……」

エムは自分の性格を過小評価されていると思い、顔には出していないけれども、少しショックを受けていた。

だが、以前から彼の言動は反感を買うことがある。ギルドでのある時、皆が思っていても、口を堅くして誰も言わなかったのに、彼だけは口にしてしまうことがあった。普段の態度からして付き合いづらい雰囲気を持っており、こういう評価は間違っていないのだ。

「さぁ、山登りは持ちつ持たれつ。困った時はお互い様ですよ。行きましょう」

エイヤルの案内は再開され、エレンシアと案内役エイヤルは、二

合目の道を進み始めた。
　この山登りは、現在ニューラが先頭である。楽しむより、宝を渇望しているようなのだ。まともに誰とも話さず、厳しくなった登り坂の中でもハイペースのまま突っ走っている。
　その次に順調なのは、プロジェクトPのチームであるフロンティアだ。リーダーのゴーリキーと、キノガッサ、そしてクチートで構成されている。今回は、山登りを徹底的にサポートする役割を持っているのだ。基本的にやっていることは自分達の利にはならないが、様々なことにおける「境目」で働くことが誇りなのだ。一度登山して途中まで行っている為に、順調なのだ。
　皆のサポートすることはエイヤルも知っていたがそして、そのサポートは、エイヤルの想像を超えていた。
「さぁ、あっという間に二合目……って……こ、これなんですか？」
　エイヤルが見た二合目の休憩所は、まるで家のようになっていた。様々な木の実が詰まった箱が用意されていた。
　また、プロジェクトPの一員のフワライドによるゴンドラもあった。これで、ふもとにまで行き来できるという仕組みだ。今後、また別の場所にも繋げておくという。
「自由に使いなよ。これらは全部リサイクルで賄ってるからタダだよ」
「……すげぇな」
　二合目の掃き掃除をしているキノガッサが言った。これにエムが驚いていた。何故こんな面倒そうなことを明るくできるのだろうか……と。探検隊にも色々あるのだ。
「すごいです！　ここから先もお願いします！」
「はは、任せときな」
　エイヤルは素晴らしいとフロンティアを絶賛し、キノガッサは胸を叩いて、親指を上に突き上げる。去り際にエレンシアは会釈をし、先の三合目を目指して歩み始める。
　三合目を目指す、このダンジョンの山道の途中に洞窟があった。

しかし、この洞窟を抜けなければ、先には行けないようなのだ。
その洞窟の手前に、青と白の曇っぽい色で、花のようなリボンがかかっている不思議な小さなの箱が落ちていた。何ともこんな所に落ちているのは不自然に思い、エムはその箱に近付き、その箱を持った。
「……なんだこれ？」
誰かの罠なのかもしれないと思い、今すぐにはエムは開ける気にはならない。
「ああ、それは空の贈り物ですよ。でも、今開けてはいけません」
「何かあるのか？」
「はい。これは空の頂にしかない特別な物です。これは誰かにプレゼントする為の贈り物なんですが、開けてみるまで何が入っているか分からないとても不思議な宝なんです。ただし、拾った自分が拾っても中身は空なんです。気を付けてくださいね」
「誰かにあげる為のものか……。どういう仕組みになってるんだ？」
「それは私にも分かりませんが、感謝の気持ちをこめて贈ると幸せになると伝えられています。エムコルスさんも、日頃お世話になっている方々に贈ってみてはいかがですか？」
「そ、そうだな……っていうか、直接手渡しでいいんだよな？　何というか……」
歩きながらエムとエイヤルは会話していた。この箱を見つけたのは幸運なのかもしれない。時の仕組みのように、空の贈り物もまた、神の力が働いているのかもしれない。そんな気がした。
問題は、この一つの贈り物を誰に渡すかだ。やはり、すぐそばにいる相棒にだろうか。しかし、それは少し気恥ずかしい気がした。真っ直ぐにありがとうと言って渡すのも、彼にとったらちょっと気まずい。
「……チコ、いつもの探検の行いに感謝し、誠意を込めてこれを贈ろう」
エムが照れ隠しに言いながら、贈り物を渡した。

「ああ、やっぱりそうなるのね！？　はは、ありがとう」
チコは笑顔で受け取り、そして中身を気にしてすぐに開けた。すると中には、ドリンクの小さな瓶が入っていた。アンノーン文字で「Ｔａｕｒｉｎｅ」と表記されている。
「タウリン……」
「ああ、あの噂の、『ファイトー！』とか言いながら崖を手でよじ登るアレ？」
「……知らんけど、飲むと火力上げるんだよな」
エムが読み上げると、チコは以前に宣伝されていたものを連想する。何故かアンノーン文字をエムが読めていまっていることに、チコどころか、本人も気付いていなかった。恥ずかしかったことしか考えていなかったからだ。
「おっと、もう三合目ですよ」
エイヤルが言う。もう全体の３０％を進んだことになる。洞窟を抜けて、草原に差し掛かっている。
「やれやれ、淡々としたもんだ」
「いや、何かあったら困るでしょ……」
ここまで何もないことを平和に感じ、エムが言った。しかしこれでは疫病神みたいじゃないかと思い、チコが突っ込んだ。
「あのおー。エレンシアさん」
エムとチコが休んでいる所に、カフェでたまに見かけるポケモンであるパチリスが話しかけてきた。
「なんだ？」
「僕、空の贈り物を見つけちゃったんだ。誰に渡そうか考えてたんだけど、エレンシアさんには世界を救ってもらったりしてるし、お礼をしようと思っていたんだ」
パチリスの手には空の贈り物。世界を救ったとか、やたら軽々しい言い方をしている。空の贈り物とは、あの洞窟前で見つけた道具だ。
「世界中のポケモン達がエレンシアさんに感謝しなければいけない

と思ってるんだ。だからどうか受け取ってくださいなっと！」
「どうも……」
そうしてエムが贈り物を受け取り、花を取り除いてバッグにしまい、開けると、クジの券が入っていた。正直、一合目に受け取った物よりも不要に思えてしまった。カフェの道具がもらえるクジ引きで使えるのだが、ソーナンスがボケて鬱陶しいので、あまりエムはやらないのだ。
そうして四合目に向かった時である。フロンティアはフワライドのゴンドラも繋いで先回りし、基地を作っていた。超人的な仕事の早さであると、エムは感じていた。その時である。
「大変ですよー！　五合目でニューラが変な奴らに絡まれているの。アタクシじゃ無理だから誰か助けに行ってあげてちょーだい！」
オクタンが奥から下山して四合目にまで戻ってきた。フロンティアはそれを聞くなり支度を始め、こう言いながら先に進んで行く。
「出動！」
「はいきた了解ー！」
四合目にはエレンシアとエイヤルだけが取り残されたが、エムだけは特に関わる気がなさそうだった。
「私達も行こうか？」
「そうですね……。ってあっ！　五合目ってもしかして……！　やっぱ急ぎましょう！」
チコとエイヤルも急ぎ足で五合目を目指して行く。
「結局行くのかよ……。ニューラとか潰されろ……」
エムだけは、被害者が要因で、この発生した事件を収めようとは思っていない。最後の一言に、あまり口に出してはいけない言葉が入っていた。

17話　迷惑な方々？（前書き）

年内の更新はこれで終わります。

17話　迷惑な方々？

「どけっ！」
　ニューラは五合目で先に進めずに手こずっていた。ニューラは舌打ちしてから五匹のポケモンを相手に爪を振り回す。そのポケモン達はマスキッパと言う。彼らはニューラの爪振り回しをガード。しかしニューラにまだ手は出さない。
　彼らはマスキッパと言い、この空の頂の五合目を縄張りとしているのだ。
　縄張りと言っても、麓に住むエイヤルからは、誰ともいざこざすらも起こすなと指導を受けているが、マスキッパにとっても、見つけた宝を盗られては黙ってはいない。
「やーだね。お前が俺達の宝盗ったんだろうがよー」
　マスキッパは道を空けずにニューラの前に立ちふさがっている。マスキッパは木の実を奪われたらしい。
「ちょっと待ったぁ！」
　五合目に新たにチームがやってきた。フロンティアだ。
「誰だ？　お前ら何様だぁ？」
「私達はフロンティア。アンタ達、大人数で一匹に寄ってたかって卑怯じゃないか！　今度は三対五で相手するよ！」
　クチートが身構え、背中にある口を開閉させる。マスキッパはその構えで戦う気というのを見て取り、ニューラを放置してフロンティアの三匹の前に立った。
「いや、六対五よ」
　またやってきたチームが増えた。今度はエレンシアだ。実力的に申し分ない者達が揃った。
「ああ……やっぱり……。皆さんちょっと待ってください」
　エイヤルが五匹並んだマスキッパを見た瞬間に溜め息をつき、顔を下に向けた。待ってくれという言葉は全く誰にも届かなかった。

一方でニューラは隙を見ていた。マスキッパは完全にフロンティアとエレンシアに気を取られている。自分に注目しているポケモンはいない……。スタミナ的には厳しいが、踏ん張り所だろう。そう思い、ニューラはどさくさに紛れて五合目を去って先に進んで行った。

しかし、ニューラがこの場から逃げたことにはエムが気付いていた。

「あの野郎……逃げやがった」

誰にも聞こえないような声で言った。助けて貰うのに汚い男だと感じた。それにしても、何故ニューラはこの酸素が薄い場所で、未だにあのハイペースでいられるのだろうか。エムには疑問だった。

「はっはー。そっちこそ大勢でぇ……喧嘩上等だぁ！」

マスキッパ達が声を張り上げて威嚇する。しかしそんなものは全く効かない。

「そうだな……30秒。いや、この味方の数だし一匹あたり5秒で倒してやる」

「ありゃ、エムもやる気になっちゃったみたいね！　じゃあ私は4秒で」

気力のなかったエムだが、何となく触発されてこのマスキッパを討伐しようという気になり、フロンティアの隣に立とうとする。同時にチコは背後から攻撃を仕掛けようと思い、右端へと寄った。

「えっ、ちょっ、エムコルスさんもチコリータさんもちょっと待っ……」

エイヤルが止めようとした頃には遅かった。エムは一気にマスキッパの方へ走り寄り、宣言通り5秒で一匹のマスキッパを殴り倒していた。チコも、葉っぱカッターの葉を放ってからのしかかり、最後には葉で顔を叩いた。

「だから、みんな待ってーっ！」

マスキッパがこうして全員怯んだ時、エイヤルが間に割って入った。

「ん……お前は……あ！　麓のシェイミのエイヤルか！　久しぶりだなー！」

エイヤルがマスキッパの方を向いた時、マスキッパは構えを解いた。

「どうも……お世話様……。全くもう、マスキッパさん達全然変わってませんわね！　探検家達とのトラブルはやめてくださいとあれほど……」

エイヤルの言葉に、マスキッパは平伏すように後ろに下がった。

「……だってよぉ、あのニューラって奴が悪いんだじぇ。俺達が先に見つけた宝横取りしやがったんだからよお。そしてアイツから手出してきたんだから俺達に過失はないなぁ」

「そんな馬鹿みたいな言い訳してないで……とっとと辺りを見ろ。そのニューラがいないぞ」

マスキッパがグチグチ文句を呟いていると、エムがニューラがいないということを教えてあげた。マスキッパ達は言われるままに辺りを見回す。確かにニューラはいなかった。

「ああっ！　アイツいねぇし！　逃げやがったな！　くそっ、あの野郎め」

マスキッパ達は悔しそうに地面を頭で叩いていた。

「ちょっ……死んじゃいますからやめてくださいっ」

エイヤルが止めに入る。

「そうだったの……？」

「私達てっきり悪者かと……」

事実にキノガッサとクチートは納得し、驚いていた。

「ポケモンは見かけによらないって言うし……良いポケモンに見えたら悪いポケモンかもしれないし、悪いポケモンに見えたら良いポケモンかもしれないのよね」

「いや、良いポケモンでもないんですよねそれが……」

経験を基にしてチコが言うが、エイヤルはマスキッパ達は別に善良なポケモンではないと、否定した。

「けっー！　久々に会ったってのにエイヤルちゃんってばつれねーなぁ」
「まぁいい。今回はエイヤルに免じて許してやらぁ。山登りは自由だけどよ、あんま好き勝手やんなよ。今回、俺いきなり殴り倒されたからな……あんま強い奴に来られたら山も危ないぜ。じゃあなー」
　マスキッパはまとめて五合目から去って行った。殴り倒されたとは、エムに5秒で倒されたことを言っている。
「すみませんねぇ。マスキッパさん達この辺を縄張りにしてるんです。根はいい方達なんですけど、ちょっとガラが悪くて……」
「話も聞かずにいきなり戦ったりして悪かったよ……」
「……スマン！」
　エイヤルが言う。マスキッパは元々この空の頂に生息しており、昔からシェイミ達とは親しい。しかし、彼らは代々少しガラが悪いらしい。そういう遺伝子があるようなのだ。
クチートとゴーリキーが謝った。
「やっぱり見かけの性格によらないのよ。どっかのピカチュウみたいに……」
「お前は黙ってろっ」
　チコが得意顔で言ったら、エムが横から文句を言った。具体的に名前を出していつわけではないのに。
「本当に見かけによらないね……」
「いえ、分かってくれればいいんです。さて、後半分ですから頑張りましょう」
　キノガッサがチコの言う事に納得して頷いた。エイヤルは笑顔で言い、頭の花を揺らした。
「うん。先行って基地作っておくよ」
「なら、お願いしますね。酸素が欠乏しないよう、お気をつけて」
　偶数の休憩ポイントで基地を作ることにしているようだ。エレンシアの二匹より先に支度を済ませ、六合目へと向かおうとする。荷物も大分少なくなっているように見える。去り際に、クチートはこ

んなことを言って悪態をついていた。
「……にしても、あのニューラなんなんだい。助けたのに何も言わず行っちゃうなんて全く……」
・
・
　そのニューラは七合目の近くにまで来ていた。しかし、体力が限界に近付いていた。こんなに体力がなかったのかと思っていた。しかし実際は、気圧の低下や酸素の欠乏による影響が強い。そのせいで体力を失っているのだ。頭がズキズキするし、目の前が歪んで見える。吐き気も酷い。これは高山病によるものなのだが、そのことをニューラは知らなかった。
　この時点で下山すべきなのだが、傾斜が厳しくなってもなお、ニューラは登り続けている。しかし、彼は七合目の雪山に来た途端崩れ落ちた。
――おれさまはまだ行けるっ……助けなんか……。

17話　迷惑な方々？（後書き）

それでは、皆さん良いお年を！
次の更新は4日か5日になると思います。

18話　エムコルス頑張る（前書き）

皆さん、改めてあけましておめでとうございます。
ポケダンＥＳ二年目での初投稿です！

18話　エムコルス頑張る

フロンティアは六合目にも基地を作った。が、この先はもう基地を作れないらしい。積雪量も多く、荷物を置いておけないからだ。しかしエイヤルは、これまで基地を作り続けてくれたことに深く感謝していた。

「さて、俺達は本格的に頂上目指して行くから、会った時はよろしくな！」

「はい！　よろしくお願いします」

身軽になったキノガッサが陽気に言い、軽そうに肩を回す。エイヤルも笑顔で答えた。

そしてエレンシアとフロンティアの二つの探検隊が他の探検隊よりもリードして七合目を目指すのだが、頂上が近くなるにつれ、空の頂の中は冷え込んでくる。

草原や洞窟を抜けた先にあったのは、通路に降り積もる雪。何センチもの高さがあり、背が低いと進むのにも苦労する。現実、エレンシアは悩んでいた。

それでも、エイヤルの提案による幅跳びをして行くなどすることにより、前へ進むことができた。

「エレンシアさん……良くこの道で先に進もうと思えますね」

エイヤルは不思議そうに首を傾げた。エムもチコも多少考えはしていたものの、全く苦しそうな後ろめたい表情をせずにいる。こういう苦境にエイヤルはある程度慣れている。

しかし、他の者達はそうではない。エイヤルは、この状況で登山を断念し、下山したポケモンも知っている。

「いや、そんなに私達は臆病じゃないのよ」

「『エレンシア』はもう二流じゃねえんだ。分かるな？」

チコ、エムが順番に言った。チコは最初は臆病だったとしても……様々な出来事の積み重ねで根が変わり、勇敢な探検隊の一員にな

ったのである。そして今、エレンシアは、探検隊ランクを大きく上げ、ダイヤモンドランクになっている。しかし実際は、それ以上の実力があるのだが。

「とても精悍な精神を持っているんですね。全く、関心させられますよ」

エイヤルは本当に素晴らしい探検隊と会えたのだと思い、明るく微笑んだ。

「いや、そこまで誉めなくていいよ。私だって、エムだって、結構脆いんだし……」

友と別れる時、双方共に目から落ちる涙を阻止することはできなかった。エレンシアは、そこは忘れていなかった。

「お、今度は案外を付けないんだな？　そこに俺は関心したよ」

・　・　・

何とかエレンシアは七合目に辿り着いた。しかし、そこには既にフロンティアがいた。どうやら何かを囲んでいる。

「ん……どうしたの？」

「それが……」

チコが聞くと、キノガッサがお手上げというジェスチャーをした。エムが隙間から覗くと、ニューラが倒れているのが見えた。

一瞬、フロンティアは悪者で、今はこうしてニューラをリンチしているようにも見えてしまった。しかしそんなワケはない。

「やっちまったな。こりゃ」

挑発して挑戦状のようなものを仕掛けられても、倒れてはもう意味がない。エムの口から出てきた感想はそれだった。自業自得と、本当は言いたかった。

「なんで倒れたんだろう？」

「これは高山病ですね……。酸素が薄くなる山で起きる症候群です」

「なるほど、じゃあ早く何とかしないとなぁ……。でもここから下

山するには遠いし」

「いや、実は八合目に救助のエキスパートがいるんです。デンリュウという方なんですが、その方がいる八合目は、地上と変わらないぐらい酸素が濃厚……。そこで休ませるといいと思います。ゴーリキーさん辺りか誰かが担いで行ってくれませんか？」

キノガッサは首を傾げて考え込んでいたが、エイヤルが山の知識を基に指示を出す。やはりエイヤルの存在は重要だったのだ。

「残念だが……俺は、これまでの荷物で肩を痛めてしまったんだ。治るのにもしばらく時間がかかるし……。いや、肝心な時に役に立てなくてスマン！」

ゴーリキーは両肩を押さえて叩く。力持ちなポケモンなのに、なぜか肩を痛めたらしい。そこをここにいる全員が思っていた。

どんな不注意があったのかは分からないが、とにかくなってしまったのはしょうがないのだとゴーリキーの方は思っていた。

「しょうがないなぁゴーリキー。ならば……」

「俺がやる」

他に背中に担げそうなポケモンもいないので、キノガッサが名乗り出ようとしたその時、エムが口を開いた。

「マジで？」

「えええ！？　君、このニューラよりも小さいぐらいなのに……大丈夫なの？」

キノガッサとクチートが心配している。確かに、エムコルス＝ピカチュウであるが、その身長はニューラより下……。八合目まで行けるのか疑問だった。

しかしチコは楽観視している。恐らく意地でやりきるだろう。簡単に放棄したりはしない。それに、もしかしたらやると言うかもしれないと思っていたのだから。

「大人の事情でな、俺にやらせてくれ」

エムが背中にニューラを担げるようにバッグの位置を調整し、信用されてない言葉にも明るめの表情で返した。　というかお前は姿

と声からしてどう見ても大人じゃないだろと、またこの場にいる全員が心の中で突っ込んでいた。

エムはこれは「助ければこっちの勝ち」と踏んでいるのである。しかし、それだけを理由に登り道をポケモンを担いで行こうとは普通は思わない。それは、彼に行動力があるからなのだ。

「ちょっとこの背中にこのニューラ乗せてくれないか？」

エムが三本の茶色の線の模様がある背中を見せて、要救助者を乗せるように頼む。キノガッサがニューラを抱え上げて、エムの背中にまで運ぶ。爪を肩に乗せさせて、できるだけニューラの頭をもっとエムの体の上にまで持って行かせる。何とか背中に担がせるのに成功した。

「どーも。……ふっ、まぁこれぐらいなら、何ともないな」

エムが、背中にニューラを乗せても余裕そうな口調で言った。実際は少々重く感じている。

「急ぎましょう！　とにかく早くしないと危ないですよ！　フロンティアさん達は八合目に行って応急処置の準備をさせておいてください」

「はい了解っ」

フロンティアが真っ先に七合目を去って八合目を目指す。その次には、ニューラを乗せたエムを、チコとエイヤルが野生ポケモンを倒して護るという形で三匹が向かった。

「にしてもさすがよ……。その体でポケモンを運ぼうなんて、本当に」

「そうか？」

「いや、そうよ。……考えてみると、エムは、人間の時に消えてもいいから歴史を変えようと決めて、この時代に来ちゃったんだからね。そこまで行動的なんだから、何ら不思議なことじゃないかも……」

チコの言う通り、エムは活力に溢れている。無茶と言える行動の

時もあった。「せっかち」と言える面が多い。せっかちなのはジュプトルだって一緒だった。

ジュプトルの影響を受けたのだろうか。もしくは逆で、エムがジュプトルに影響を与えたのだろうか……。今では知る由もないことだ。

しばらくして、八合目にまで来た。エムが急ぎ足でデンリュウと思われしポケモンの前に近付いた。フロンティアが既に来ており、ニューラを寝かせる準備はできている。

「おお！　なんとピカチュウが担いで……。エイヤルもお久しぶりだなぁ。早くベッドへ運んでくれよ」

デンリュウが、ニューラをピカチュウのエムが担いでいることに驚きながら、早くしてくれと促す。エムはベッドの側で座り込んでニューラを下ろし、彼を寝かせた。

デンリュウは首元に耳を近づけて、脈の確認をする。そして首を縦に振る。無事のようだ。そして、とりあえずすぐにそばにある毛布をニューラにかけ、火元のやや近くにまでベッドを近付けた。すると、ニューラが目を覚ました。

「……ここは？」　ニューラは目を開けると、数匹のポケモンに囲まれているのが見えた。空気がしっかり吸い込める場所だが、体のそこら中が痛くて動けない。

「ここは八合目だよ。七合目で倒れてたんだ」

キノガッサが温厚な口調で説明する。

「そうか……俺は倒れたのか。誰か助けてくれたのか？」

「みんなで救助したんだ。そして、ここまで運んだのはあそこにいるピカチュウだ。俺に任せればよかったのにな」

「な……に！？　っ！」

ニューラは驚いたあまりに体を起こしてしまい、全身に痛覚が走る。エムはニューラの遠くで、肩こりをした年寄りのように、自分の手で肩を叩いている。

「まだ動いたらダメ。それに今は何も言わなくてもいいです。ゆっ

くり休んでいてください」
「というか、何を驚いてるんだ？　こういう時はお互い様だろ？」
エイヤルがニューラを止めてまた寝かせる。そしてエムがニューラの方を向いて、誇らしげな顔をしながら言う。でも確かに、エムもチコも、両方がダンジョン奥で倒れていた所を救出してもらったことがある。勝ちを認めさせる以外に、そういう訳もあったのかもしれない。
やっぱりそこは優しかったのかなと、つくづくチコは感じていた。それでも、やはり自分から進んでやったのは疑問であり、まだ挑発を気にしているのだろうという考えは消えなかった。
「まぁ、峠は越したようだし、後は俺だけで大丈夫だ。みんな頂上行くんだろ？　ここは八合目だから後ちょっとだ。頑張って行ってきな」
デンリュウはニューラの腕を動かすなどして、どこか凍結してないか確認している。
しかしフロンティアの方は躊躇していた。見捨てて先に進むのはどうかと感じたのだ。
「何を遠慮してるのよ……。私達がここでできることはもう何もないと思うけど……。ほら」
チコが指す先では、エムがせっせと最後の道のりを目指して準備を始めていた。他人を思いやりすぎているから、遭難者を置いて先に進むことに躊躇するのだとエムは今この雰囲気を見て思っている。
「このチコリータの言う通りだ。やることは何もない。ニューラは俺に任せて頑張ってくれ」
「そ、それじゃあ、お言葉に甘えて……」
キノガッサから切り出す。ニューラが心配だが、せっかく来たのだからと、次の九合目から頂上をエレンシア&エイヤルと、フロンティアは目指すことにした。
雪山の道も終わり、道はまた元に戻って行く。しかし坂が険しい。さらに、九合目に着いた辺りでエイヤルは違和感を感じていた。

「あれ？　なんか前に来た時と様子が違うような……」
「ん、どうしたの？」
エイヤルがおかしいなと首を傾げるのでチコは聞く。
「……いや、何でもないです。気のせいですね」
「待て、気のせいとか思った時は必ず何かあるんだ。絶対この奥で何かある」
エイヤルの様子を見て、エムはそういうことことを思い出し、すかさずエイヤルに突っ込んだ。
「ならば、早く行かなければなりませんね！」
エレンシアとエイヤルは、九合目を後にしていよい、よ空の頂の頂上に向かって行った。

18話　エムコルス頑張る（後書き）

タイトルに主人公の名前が入ったの初めてです。是非とも今後も彼に頑張ってもらいましょう。

19話　空の探検隊

空の頂上。いよいよエレンシアとエイヤルは先にたどり着いた。フロンティアもいない。しかし、ここの場所はヘドロなどの、悪臭放つ汚物などにまみれていた。見るも無惨で、酷い有り様だ。地面には草があったようだが、緑は全く見れない。

「これが頂上なの？　ちょっとこれは汚いんじゃ……」

「な、何故こうなったか、分かりません」

久しぶりに来ない間に、ここはどうなってしまったの？　エイヤルは定期的に行けば良かったと後悔していた。あちこちを動き、何か原因となる物体がないか探す。誰かに汚されたと考えるにしては、これは自然な汚れ方。そして何もない。

「あちゃー。先を越されちまったかー。俺達より速いなんて、かなり腕の立つ探検隊だねぇ……って、何だこれ!?」

後からフロンティアもやって来た。しかし、このような有り様の頂上を見て驚いていた。

「何か来るぞ……。みんな構えてくれ」

誰かの気配を感じ、エムは反射的に構える。邪悪な気配ではないが、縄張りにしているポケモンがいるのだろうと感じる。

「ベットベットのベッタベタぁー」

案の定ポケモンが地面から這い出るように現れた。同じようなヘドロのような姿のポケモンが八匹。ベトベトンとベトベター。ベトベトンが三匹で、ベトベターが五匹だ。溶けるようにのそのそと歩き、エレンシアとフロンティアを囲んだ。

「どこから出やがった……？」

エムが物陰もなく、誰もいない状況からどうやって囲んだのかを疑問に思う。影から姿を表す訳ではなく、地面から飛び出してきた訳でもない。ヘドロに隠れ、そこから思い通りの場所に出ることができるのだ。だからこうして今、六匹を囲んでいる。

エイヤルはこれが誰かを知っている。しかし様子が変で、話を聞いてくれるかが分からない。みんなは既に誰を狙うかを目線を動かして見ている。だが、この状況になればそうするのは当然だ。場合によっては自分も戦闘に加勢しなければならない……。話し始める前にエイヤルは頭ですぐ後のことを考え、ベトベトンの方へ一歩近付いた。

「ベトベトン達。ここはあなた達のねぐらじゃないでしょ。早くお家に帰りなさいな」

「やだやだー」

「うそうそー」

「汚いの大好きぃ～。華奢な奴は追い払っちゃうぞぉ～」

エイヤルの話を聞く気は全くなかった。一瞬目を閉じてから開き、彼女は決断した。

「……どうやら少し目を覚まさせてあげないといけないようですね。皆さんよろしくお願いします！」

エイヤルが戦うことを許可すると、戦い慣れた様子で戦闘を始める。ベトベトンやベトベターはヘドロ爆弾を飛ばしてくるが、反射神経の優れたこの六匹にとって、これらは一つ一つ避ければ何の問題もない。

が、問題は他にあった。打撃系や特殊系のあらゆる攻撃を、ベトベトンやベトベターは溶けて地面の中に入り込むようにして消え、避けてしまう。その後、全く別の場所からまた出てくる。

（ちっ……。これでは疲れ果てた後に負けるだけだ……）

エムもこのようなベトベトン達に苦労していた。しかし、打開策はあるはずだと考える。ここは足の踏みごたえからして、元は草原だったに違いないが、地面はヘドロだらけになっている。そのヘドロに隠れていくのに違いないのだ。

これが六回繰り返された時、六匹が再び中央に偶然なのか集まった。

「厄介ですね……長期戦になりそうですよこれは」

「うん、これはちょっとまずいよ……」
エイヤルとクチートが言う。ベトベトンとベトベターはまたヘドロから円になって出てきた。そしてジリジリと近付いてくる。しかし、エムはこの囲まれた状況で何ができるかが閃いた。この固まった状況でしかできないようなことである。
「いや、この状況ならもうすぐ終わる。チコ、八匹に葉っぱカッターを放ってくれ。普通のでいいから」
「え？　……うん」
エムに指示されるが、それではどうしようもないのではと思った。しかし、何か策があるに違いないと、チコは彼を信じ、味方には当たらないように飛び上がって、宙で少しずつ体を回していき、一匹ごとに一、二枚ほど、回転させた葉を放て。放つ葉全てが、ベトベトンやベトベターに向かって行くが、これだけではどうしようもないのは分かっている。
また彼らは全員溶けてヘドロの中に潜っていき、チコの放った葉を避けた。
「ああっ、またか！」
キノガッサが、また敵に隠れられたと焦るが、これがエムの思い通りだったのだ。
「おいみんな、ちょっと一回だけジャンプしてくれ」
エムに皆がそう言われると、五匹は思わず上にちょっと飛び上がる。するとエムはしゃがんで片手を地面に付き、息を止めて顔をヘドロまみれの地面に近付けて、頬から周囲に電気を放出する、放電を放った。
すると、ヘドロには電気が流し込まれ、飛び上がっている皆の足元を通って行き、化け物のようなベトベトン達のうめき声が聞こえた。流し込まれた電撃が効いたのだ。これは「放電流し」とでも言えるだろう。
電撃を受けたベトベトン達はヘドロからとろけるように、麻痺状態で無防備に出てきた。

「す、すげぇ……」
キノガッサは、一瞬何が起きたかが分からず、呆気に取られていた。
「今です！　一斉攻撃です！」
怯んでいる今がチャンスだと気付き、エイヤルは指示を出す。ゴーリキーとキノガッサとエムはベトベトンとベトベターをボコボコと殴り、クチートは挟み、エイヤルとチコはエナジーボールや葉っぱカッターを放っていく。そして……
「……どう？　目が覚めた？」
「ん……ん……？　あっ！　エイヤルちゃーん！」
やられて大きくうめいたベトベトンは首を振って目をパチクリと大きく開けると、エイヤルの姿に気付いた。
「ベトベトン達。ねぐらはここじゃないでしょ」
エイヤルは再びベトベトンに話した。
「えー、こんなに汚いのにぃ～？」
「汚いって……あなた達がやったんじゃないの？　そっか……ごめんね。ここは山の頂上なの」
「ええーっ！　うっそぉーん！？」
「ずっとここに来てなかったからね……。荒れ果てちゃったみたいなの。でもこのままにする訳にも行かないからお願い、ね？」
優しく諭し、エイヤルはベトベトン達にねだる。
「そっかー。頂上だったのかぁ。ごめんよエイヤルちゃん。僕達お家に帰るねぇ～」
「うん、ありがとう！　またお礼の物持って行くからね」
「ありがとぉー。じゃあ、バイビィ～」
エイヤルと話しつつ、ベトベトンとベトベターはこの頂上のどこかへと消えていった。それにしても、エイヤルはさり気なく凄い権力者であるということに、皆が気付かされた。しかし決して、それを濫用したりはしないのだ。
「……さて、元に戻しますよ」

エイヤルは中央に立ち、縮み込むような姿勢をとった。
「こ、こんなのどうしようもないだろ？」
エムが首を傾げ、一瞬自分達が掃除をさせられるのかと思う。
「いえ、私達シェイミには大地の汚れを吸収する力があるんです。しかしこれだけ汚れていると大変かもしれませんが……。皆さん離れて伏せていてください。行きますよ……シードフレア！」
エイヤルは辺りの有害物質を全て吸い込み始めた。エムコルス、チコリータ、ゴーリキー、キノガッサ、クチートの体にこびりついたベトベトンとベトベターのヘドロを含めて全てだ。エイヤルを囲む光の規模が大きくなり、それと同時に、辺りの汚れが消えて行く。が、エイヤルの様子が少し変だ。
「大爆発……？　離れとけ、これは危ない」
エムが見る限り、エイヤルはマルマインなどが起こす大爆発を起こそうとしているように見える。手をしゃくって、エイヤルから離れるよう誘導する。しかし、思いのほかエイヤルの起こした爆発は小さかった。代々で力が増し、爆発の規模を抑えることができるようになったらしいのだ。
そして、この頂上には、果てしないほど広がる秀麗な景色があった。空の風に揺れる草花に、空を舞う桜のようなグラシデアの花、まさに天国のような場所へと変わり果てた。エレンシア、フロンティアは感銘を受けて、感激の声をあげていた。普段あまり喋っていなかったゴーリキーでさえも。エイヤルは足元の花を探っている。何をしようとしているかは分からないが、花が気になっているようだ。
「ねぇ、みんな、こっちに来て！」
クチートが目を輝かせて崖近くに呼びかける。見たいと思ったがために、他の四匹もそこへ行く。まさに魂を奪われる眺めだった。眼下には、ふわりとしたような雲の隙間から浮かび上がる山々が広がっている。雲の上にまで到達して見下ろす眺めなど、ここにいる者は、エイヤルを除けば見たことがない。口で説明するのは難しか

った。すごい、としか言いようがない。
「雲の上からか……。いつでも心は気高く、清らかでありたい……。そう感じさせる景色。アイツ（ジュプトル）にも見せたかった」
エムはこの景色を見て、そう言っていた。健やかな顔の中に、僅かな悲しみが浮かんでいるようにも見えた。
「ねぇエイヤル。どの宝にも勝る秘宝ってこれのことだったのね。それと……ここまで連れて来てくれてありがとう」
チコはエムの方をチラリと見た後に、エイヤルに向かって頭を下げる。
「はい、私からもありがとうございました。皆さんも優秀で、とても楽しかったです！」
エイヤルも頭を下げた。そして、その後彼女は口笛を吹く。この動作の意味は誰にも良く分からなかったが、誰かを呼んだとも考えられた。
「さて、ふもとに戻りましょう」
「……おい、ちょっと待て。ここ帰るスイッチないじゃねえか」
エムは今まで見たダンジョン全てに設置されていたワープ装置がないことに気付き、少し慌てたように言う。
「うわぁー！　帰りのこと考えてなかったー！」
そしてキノガッサも、忘れてたと頭を抱えた。
「いえ、大丈夫です。皆さんを帰せます。このグラシデアの花……。私達シェイミにとって特別な花なんです。どう特別かと言うと……ほら、こうして一時的にフォルムチェンジできます」
エイヤルは花粉を吸い込むと、突然姿が変異して、別の姿へと変化してしまった。その姿は元のフォルムよりも勇ましそうで、身長も多少伸びて、緑の髪も立ったものだった。
「あ……あれ？　君があの可愛いエイヤル……ちゃん？」
「……」
キノガッサとゴーリキーが、妙にショックを受けたような表情をしていた。どうやら元のフォルムが好みらしい。このシェイミの今

のエイヤルのフォルムがスカイフォルム、さっきまでのフォルムがランドフォルムと言うのだ。ちなみに彼らは、クチートが冷ややかな目線を送っているのには気付いていなかった。

「ふふ、こうなると私、空を飛べるんですよ。……そう、私に乗って空を飛び、ふもとへ帰るんです！」

「え……でも、エイヤルちゃんだけで、みんなを乗せられるわけないだろう」

「心配なく。アリオー！　イリヤ！　ウレモ！　オリオット！」

いくら空を飛べると言っても、エイヤルだけじゃ五匹は乗せられないだろとキノガッサが突っ込むと、エイヤルは何者かの名前を呼ぶ。すると、エイヤル以外のスカイフォルムの四匹のシェイミが、この頂上にまで飛んできた。

「頂上に来た探検隊を乗せて帰って欲しいんですね？　エイヤル？」

「はいそうですよ、アリオー」

スカイフォルムのシェイミ同士で会話する。しばらくして、一匹一匹に乗るように言い、エレンシアとフロンティアの五匹は、シェイミ達の上に乗り、雲の上からの景色を眺めつつ、ふもとへと帰っていく。エムはエイヤルの背中に乗りながら、こんなことを考えていた。

風が気持ちいい……。このふわりとした雲の景色……。上から見る眺めは美しい。探検隊が楽しい理由、この世界を守る理由がまた一つできたと言える。そして、探検を終えた今のこの、気持ち良い心境こそが宝なのだろう。

……そうだな、俺達は自分達を「時の探検隊」と言ったことがある。それなら今度は、頂上を一番乗りして、この果てしない「空」を見た俺達を、「空の探検隊」と名乗ろうかな。

１９話　空の探検隊（後書き）

６日間……だと……？

ふぅ、まぁとにかく、ようやく空の頂編終了！

20話　変な女？

案内役だったエイヤルを含め、シェイミ達に精一杯のお礼をした。エイヤルからプレゼントを贈られる。空のジュークボックスと呼ばれる物だ。「ノイジ」と呼ばれたシェイミが作曲した演奏曲などが多数入っている。そしてそのようなささやかなプレゼントを貰ったエレンシアが、トレジャータウンに帰ってきた。そして、フロンティアもそこに立ち寄ることとなり、その夜、カフェでは盛大なパーティーが開かれることとなった。カフェがやりくりするプロジェクトPが大々的な探検スポットを発見するのは初めてだったからだ。

もちろん、エムとチコにとってはパーティーは嫌な予感しかしなかった。ちょうど昨日、パーティーで酷い目に遭ったからである。しかしもちろん、昨日のメンツは一匹もいない。

しかし、いざ開かれたパーティーでは、様々な話で盛り上がっていた。

「この前なんてよー。ダンジョンで結局行方不明者見当たらずだったんだぜ？　もう申し訳ない気分だったさ」

「俺はなぁ、あの場所まで連れてってほしいって奴がいてよ、そいつが途中で迷子になりやがったんだ。迷惑だなぁ」

「僕、お尋ね者を捕まえに行くのにジバコイル保安官がついて来たんだけど、その保安官が弱くてさぁ……」

愚痴で盛り上がるのも不思議な話である。

「よーし！　オレンジュース飲もーか！　かんぱーい！」

パーティーは基本的にこうしてキノガッサが仕切っていた。ちなみに、どうやら酒は誰も飲まないようだ。そもそも、アルコールを含む原材料の木の実はここ辺りでは見当たらず、また、オーナーのパッチールが酒を飲まない為に、カフェで酒が造られることはないのだ。

「さぁ、ここで一曲いきますか～！？」

「……キノガッサ、行っちまえ」
カフェは周囲がおだてるように盛り上がる。
「じゃあ遠慮なく！　オーケィ♪　次に進もうぜ～♪」
基本的にこのパーティーは楽しかった。酷い目に遭うこともなく、追いかけられることもなく、現実を忘れる空間から離れたくないと、カフェに集まった探検隊は素晴らしい夜を満喫していた……が、終わった時には外には誰にもいなかったとか。
「はー。エム、こんなに真っ暗よ。現実に戻ったらもう眠くなったし、早く寝ようよ」
「……」
チコがあくびしながら呟くと、エムが眠そうに細目で無言で頷いた。もうエムは半分寝ている。
・
・
・
そして昨日の今日の昼、ようやくサメハダ岩の中の探検隊は始動した。とっくに町は活気付いてるが、昨日夜遊びしすぎたエレンシアは、朝は起きれずに、昼でようやく目が覚めた。
「おそよう」
「おそようってなんだ……。あー……」
チコは、この時間帯で「おはよう」はおかしい為、「早」の反対の「遅」を使った。久しぶりにエムの顔が寝ぼけており、チコは彼の顔を見ていると、自分までボケそうだと思い、目を逸らした。
「なんかね、やっぱり探検って楽しいよね！」
チコが目覚ましにと話を彼に振る。反応して眠たさが吹き飛びそうな話をするのだ。
「そうだよなあ……」
エムが頭を掻いて言った。そして言葉を続ける。
「だから、今日も張り切って行こうか」
ようやく目が覚めたらしく、首を回すなどしてストレッチする。

それにチコは頷いた。
エレンシアは、とりあえず何も情報のない日は依頼をこなすと決めている為、ギルドへと向かった。
「……ダンジョンで迷ってしまいました、助けてください、か」
エムは適当に掲示板の紙を見回して偶然、目に留まった物を見る。依頼主はモココとある。相変わらずこういった遭難も耐えないもので、未だに多くの探検隊が救助に向かっている。
あまりこだわる必要もないかと思い、エレンシアはとりあえずこのありがちな依頼へ向かうことにした。

・
・
・

モココは電気的なニオイなどの跡で比較的簡単に見つかった。このチームには朝飯前の依頼だったのだろう。
「あ、ありがとう。後でお礼に行くね！」
このモココは、元気の良い少女という印象を受ける声をしている。エムが探検隊バッジを使ってギルドにまで帰す。この救助作戦は苦もなく成功した。
そして、お礼の報酬の５０００ポケは自宅であるサメハダ岩で受け取ることとなった。……しかし、４５００ポケは納めなければならない。
「これがお礼の５０００ポケ！」
「はいどうも……」
モココから救助のお礼で金を貰ったはいいが、またこれもほとんど没収されるのかと思うと、エムは少し悲しくなった。
しかし今、モココが少し驚いたような様子をしているのが見えた。しゃっくりでもしているのかと特に気にしていない。
「私が納めてくるから、待っててね」
「頼んだぞ」
チコは掟通りに報酬の九割を納めにサメハダ岩から出て行った。

もうじきモココも帰るからもういいだろうと、エムは自分だけでいるようにして座り込む。そして、目を海の方へ向けると……。

「君は私の愛しのダーリンだったのぉ～！」

モココは目を輝かせてエムにすり寄ってきた。手で抱きついてきて、顔をすりすりとしてくる。エムは一瞬命を狙われるのかと思って驚き、立ち上がろうとするが、力で押さえつけられて立てなかった。

「なななななな……なんだ！？」

エムは激しく困惑し、抵抗しようにもこんな所で暴れるのにも行かないので、しばらくすりすりされたまま、座っていた。

「……ん！？」

チコが帰ってくると、モココがくっついているエムを見て驚いた。その二匹の右隣に立ち、その後左隣に立ち、次に正面に立つ。

「ど、どうしたの？　何してるの！？」

エムの顔は呆れかえっていて、モココの笑顔と見比べると惨めに見える。チコもどうしたものかと首を傾げる。

「ダーリンダーリン♪」

「……ダーリン？　もしかして知ってたの？」

「こんなの知るワケないだろ……。おいお前、あんまりしつこいと殴るぞ」

やっぱり、そろそろ何かしないとまずい上、やはりイライラするので、エムはモココに脅しかける。

「殴るなんてやっぱり恐いよぅダーリン♪」

「……ダメか」

ああいうこと言っても無駄で、モココは形相を変えない。エムはため息をついて小声で呟いた。

「……ま、まぁ、しばらく仲良くしてればいいんじゃない？」

チコは複雑な気分ではあるものの、たまにはいいだろうと思い、散歩に行こうとした。

――あ、アイツ、俺を見捨てるな！　仲良くしたくないから！

頼みの綱であるはずのチコがどこかに行ってしまうことに、彼女にちょっとした怒りを覚える。

「ブスは消えなさい！　ダーリンにつきまとう馬鹿は消える運命よ！」

出て行く間際のチコに、モココが一言浴びせた。チコは聞こえないふりをして出て行くが、もちろん思いっきり聞こえていた。そういう関係で探検隊をやっているつもりはないし、あっちはその気でやってる訳じゃないので、しばらく放っておこうと思ったが、あのモココの一言でこう思うのである。

――絶対に何とかしてあの女追い払う……！

21話　技無しバトル

「どうしてこうなった……」

エムは依然として、モココに顔をすりすりとされていて、頭を抱えていた。何故突然このモココはこのような横暴な行為をしてきたのかが分からない。

とにかく、早く離れて消えてほしいという、嫌悪感で一杯で頭が回らなかった。

「私の愛しのダーリン♪　今日は一緒に寝ようねー♪」

モココはエムを押し倒すのではないかというぐらい、一層抱き付く力を強める。

――もうムカついた！　強行手段だ！

エムはこのモココの相手するのにはもう我慢の限界になり、モココの顔を一発だけ殴った。……もちろん、それだけでも非道な行為とも言えるが、彼は「正当防衛だから仕方ない」という考えでいる。

ところが、モココは殴られても吹き飛ばず、更に離れる素振りどころか、痛がる表情すら見せなかった。

「いやーん♪　ダーリンのパンチ最高よー♪」

「そう来るのか……。コイツは果たしてどうすりゃいいんだ……？」

「もちろん、この私と結ばれるのみ～♪」

エムは、これまでにない、不思議なイライラを感じた。脅しも効かず、鉄拳制裁も効かず……。そもそもどうして突然このように接近してきたのかが分からない。次は今こうしてくる理由を聞くべきなのかと思った。

「あのビッチがまた来てもさっさと追い払ってね～♪」

モココは依然としてチコに対してこのようなことを言い続けるので、エムは少し反論したくなった。

「ビッチって、何だよ……」

「ウザい女って意味よ～。ダーリン超ウケるー。あのビッチはねぇ、

ダーリンと一緒にいるからウザいのよー」
　モココは終始ハイテンションなのに対して、エムは終始沈んだテンションだ。大体、チコをビッチだとか言う理由が滅茶苦茶だと感じた。
「そうかい……。あのなぁ、何も知らないクセに。どこが『ウザい』ってんだ？」
　この馬鹿女はずっとチコを見てきているワケじゃないのに――エムは呆れかえっていた。意が食い違う時はやたらあったが、性格が悪いとは思ったことは一時もないのだ。
　エムはこのモココを今すぐにでも納得させてどこかへ帰したいと思っている為に、彼女の良い面を見ようなんて気は甚だ起こらない。もし正しいことならば、今すぐこの岩の外へ放り投げてしまいたい気分なのだ。
・
・
・
「――と、こんなワケなのよ」
　その頃、チコはギルドにいる仕事を終えた弟子二匹の、キマワリ、チリーンと相談していた。女の弟子部屋での会話をしている為、ほぼ密談に近い。
「……こ、これは一大事ですわ。一刻も早く、何とかして私達も協力してこの事件を解決しないと！」
　キマワリは深刻そうな顔をするが、ただ単なる個人の事件なので、その表情は大袈裟だ。
「そうねぇキマワリ。ではチコリータさん、この麦わらベッドと、今まで使っていたベッドをすり替えてみてください」
　チリーンは部屋の奥から念力で予備の物らしき、睡眠用のベッドを引き寄せる。キマワリはそのベッドを潰すように押してみると「ブー」と、気が抜けるような音がした。
「やっぱり……チリーンも好きですわねそういうの」

「うん、しかしやはり後は自分次第ですね」
チリーンがちょっとした悪戯好きなのはキマワリ公認である。
「でも、どうしてエムは一方的に嫌ってるようなのに無理矢理追い出さないんでしょう？」
ふと疑問に思ったキマワリがそれを口に出す。
「うーん、なぜかエムはあのモココにやられてる感じなのよ。抵抗したがっているのに」
「それは謎ですわね……。そもそも、何故いきなりそのようなことをしたのか。何か過去にあったとか！？　または、勘違いをしているとか……。そうだったらきゃーですわ！」
「もしかしたらそれもあるかもね……。よし、キマワリとチリーン。今日はありがとう」
キマワリが様々な説を考え、語るのに熱くなっている。しかし、サメハダ岩に戻ろうとするチコは、モココを追い出すことで頭が一杯だった。キマワリはその彼女の脳内すら読み取って予測する。今はこうして普通でも、後からドロドロとした醜い戦闘が起こるだろう、と。
ルナトーンのような形をした三日月が昇り始めた時、チコはエムとモココがいるサメハダ岩に戻ってきた。中を覗くと、やはりモココがエムにすり寄っていた。
「やぁ～みんな」
気分は最悪なのだが、たまに見せる笑顔を作って中に入る。この時点ではモココはこっちを見ていない。チコは隙を見てジュプトル用に使っていたベッドと今チリーンから貰ったブーブーベッドをすり替える。
「帰ってきたわねビッチ！」
モココがチコの方を向いたのはその後だった。当然モロに聞こえている。
「お……おい薄情者。もっと早く帰ってこいっつーの」
あんだけ言われてるんだからちょっとぐらい怒ってみろよと思い、

エムはチコに文句を言う。
しかしもちろん、チコもモココに怒りを覚えていた。自分ですらあんなにすり寄ったことはないと言うのに……と。
「さ、もう夜だし寝ようよ。モココもそんなにここに居たいなら、ベッド用意してあげるよ、ほら」
チコはモココの目の前にあの例のブーブークッションを置く。踏まれないうちに離れ、自分のベッドに戻る。
（まぁ、随分と受け流しが上手いとも言えるな。でも、それじゃコイツは追い払えない……）
エムがそう思った瞬間、モココはベッドを踏み、ベッドから気が抜けるような音が鳴り、とても驚いて腰を抜かす。そして更に、チコはベッドに寝転がろうとした瞬間、腰に鋭くチクリと来る痛覚を感じ、起き上がる。実はモココが隙を見て設置していたのだ。
「……！？」
エムも驚いて、モココとチコの方を向いた。モココも一時的にエムから離れ、ブーブーベッドに入る。
（前言撤回！　モロ暴言に反応してんじゃねーか。……待てよ、ということは、俺の邪魔者を潰す為に頑張ってくれてるってことか。となると……。馬鹿、だから何を考えてるんだ俺は！）
エムは何か言われたワケじゃないのに勝手に顔を赤くしていた。彼が妙な妄想をしているそばで、チコとモココが睨み合いをしていた。
「……」
「……」
両方が無言でこうしている内にお互いが思ったのは、戦闘バトルで勝負するのは、この争いでは正しくないということである。
「ふっ、そうよねえ♪　明日もブスビッチ潰す為に頑張りましょう♪」
「ははは、確かに明日は桃色の奴を追い出す為に頑張らないとね」
モココとチコが、間接的な表現でお互いの悪口を言う。エムはそ

れを聞いて、良く言われることのある女のドロドロとした世界というのを感じた。

しばらくして、エムはモココが体から離れて気分がスッキリとしたように眠ったが、チコとモココはずっと睨み合っており、「先に寝た方が負け」という勝負をしていた。

22話　秘密

翌朝、エムが起きるとモココが寝ながらくっ付きかけていた。「げっ」と驚いて尻尾をひきずりながら離れる。しかも、彼女何やら夢を見ているようだ。

「ねぇ……ダーリン、どこに行くのー？　私が存在したらどうしていけないの……？」

モココは嬉しい夢を見ているように最初は見えたが、そうでもなかった。しかもモココは、エムが昨日言った覚えもないことを言っている。しかし、夢の中ではそうでもないのかもしれない。第一、夢の中に登場している「ダーリン」が、「エムコルス」というピカチュウだという保証がない。

「こんな奴放っておいて早く行こうよ、エム」

「待て、様子が変だ。何故か悪夢にうなされているようで……」

チコはモココの方を見向きもしていないが、寝起きから気になったモココの様子を見ていた。しかしその後すぐに、彼女は目を覚ました。

むくりと起き上がって、左右を見回すと、エムが目に入る。それでもしばらくは抱きには向かわず、じっと見つめていた。

「何があったのか、正直に言ってみろ」

モココの今の様子は妙だった。昨日から終始元気はつらつだったのにも関わらず、この朝は全くそうでないのだ。エムは腕組みをし、相変わらずな上から目線のような物言いだ。

「……」

モココは目をキラキラさせたまま黙っている。エムのような、そういうのが好みなのだ。しかし彼女は、具体的にタイプを決めているワケではなく、直感的に決めているのだ。

「……な、な―んにもないわよ♪　今日、私はダーリンについて行きます♪」

昨日のようなテンションの高いモココに戻る。結局エムにくっ付いてきた。エムは留守番にして、チコだけで行くという案を出したが、またモココが「不細工」だの「さすが、ビッチだからケチなのね！」だの文句を言い始めたので、結局モココ付きのエムも一緒に行くことになった。

トレジャータウンにまで行くと、周囲の目はエレンシアの方へ向いていた。不機嫌そうな顔をしたエムとチコに、ご機嫌な顔をしてエムにくっ付きながら歩くモココ。

「……な、何やってんだアイツ？」

「やっぱりモテる男は辛いんじゃないっすか？」

「おいおい……。それはともかく、もうすぐペリッパー飛行隊との話がつきそうだ。早くしようぜ」

トレジャータウンで、エレンシアの様子を見ながらこのような会話をしていたのはチーム『かまいたち』である。結局、エレンシアとフロンティアの後に続いて、空の頂の頂上にまで到達していた。

・

・

チコはギルドの中で、依頼掲示板を見回していた。やはりここでも、周囲の視線はエレンシアに向いていた。

「だ、誰なんでゲスかあれ？」

「アレは絶対モココ……。昨日チコが相談に来ましたわ。友情を奪ったり、他人の旦那さんを強引に奪う奴なんて許せないですわ！」

ビッパが尋ねてくると、キマワリが答える。彼女は、あの光景をいざ見ていると我慢ならなくなり、エレンシアとモココの方へとすたすた歩いて行く。

「あっ、ちょっ、キマワリ……」

「とっととそこの奴は離れなさいですわー！」

ビッパが小声で静止するも聞こえず、キマワリはモココをエムから引き離そうと引っ張る。しかしモココは離そうとせず、結局引っ張られて行くのはモココだけでなく、エムもだった。

「いやよいやよ！　アンタこそ離れなさいよ！　この細目腐女子！」
「おいおいおい！　ちょっとやめろっつー……どは！」
モココがここらに現れてから三回目ぐらいの爆弾発言をした後、エムから手を離し、エムは地面にうつ伏せに転げた。そしてモココとキマワリはお互いに近付いて睨み合い合戦を始めてしまう。
ギルド内の探検隊は慌てる様子もなく、その光景をしらーっと見ているだけである。
ちょっとして、チコがうつ伏せに倒れているエムに近寄り、
「ね、ねぇ、大丈夫？」
と、聞く。するとしかし、睨み合いを終えたモココがすぐにエムの方へ走ってきて、
「ごめーんダーリン！　しっかりー！」
チコの前に強引に割り込み、エムを激しく揺する。
「あのさぁ……、もう頼むからお前ら止めてくれ……。もう俺が被害受けるだけだからさ、このモココの気が済むまで、コイツはコイツでもう好き勝手に。そしてコイツは全員無視で、誰もちょっかいも出さないこと。特に女の奴！　もうコイツはいないことにすれば問題ないんだよ。いいな？　おい、お前はこれから誰にもケンカを売るな」
エムがたった今閃いた考えを口に出す。そして、モココにも命令する。今、こうしてトラブルや罵言の吐き合いが勃発しているのは、モココがいるからなのだ。自分はモココと付き合いたいなんて微塵も思っていないし、チコは理解しているから「浮気」呼ばわりされることもない。また、モココが色々爆弾発言をしてくるから争いが起こる。しかし、無視してしまえば何も起こらない。つまり、このモココが「存在しない」ことにすれば、解決するということだ。
「確かにそれでいいけど……」
チコやその他大勢は頷くが、モココが色々と言いたいだろうから、そんなこと言っても言うことを聞かず、何も解決しないのではと思う。

「分かったよー♪　ダーリンの言うことなら賛成！　私はダーリン以外の誰にももう喋らないよー♪」

エムの指示にあっさりモココは従ってしまった。そしてまたエムに抱き付いてきた。彼はかなり勝ち誇ったような顔になった。これは、モココの一途な好意を利用した、悪っぽいことと言えるのだが、誰も「エムコルスは驕った奴」などと思う者はいなかった。むしろ名案だと、皆は思った。

チコは再び掲示板をあさる。エムの方はケガをしているということにするので、連携プレイをしないと通過できないような場所へ行ったりするのは、できるだけ避けなければならない。

もっとも、バトルに負ける気はしないので、敵の強さで行くのを断念するのは誇りを持つ上で避けたいことだった。

そんな中でチコの目に留まったのは、フォルド島と呼ばれる、この大陸の東側にある島での依頼。しかし、内容が重々しく、何故こんな所に来るか分からない物だった。依頼主も分からない。

『この大陸の東にある、フォルド島が、恐らくは闇の者達に支配され続けている。空間の神が生息すると呼ばれる島で何が起きているのか。そういう闇に支配されている事実を知る者が全くいない。誰か島で調査を行い、情報を外部に持ち帰ってほしい。だが、島の状況からして相当厳しくなりそうだ。だが、自分は精悍な英雄を待つ。そして、自分は必ず闇に復讐する』

チコはこれを読んだ瞬間、激しくこの依頼を実行したいという衝動に駆られる。いや、むしろ自分チームが実行しなければならないという義務感すら感じていた。だが、今はエムの体には羊がくっついて離れない為、彼が戦力になれない。だから、身の危険が考えられるこの依頼を今実行する訳にはいかない。結局、エレンシアといないことにしてあるモココは、黄金の間があると噂されるダンジョンに行くことになった。

――そして、そのダンジョンの中での出来事。いつものように野生が襲いかかってくる。ヨーギラスだ。即刻倒してしまおうと、チ

コが駆け足で前に出る。
「あ……！」
ダンジョンの中なのに呑気にエムにくっついていたモココだが、それをやめ、ヨーギラスを見て驚くように言葉を発する。
しかし、チコがあっさりとブーメラン葉っぱカッターで倒してしまう。
「あっ……」
モココは肩を落としていた。エムはその様子を疑問に思う。言われてみれば、朝もそうだった。何か様子がおかしい時が今日だけでもこれを含めて何回か。エムは口に手を当て、視線を上に向けて考える。と、その直後に、チコのブーメランで戻ってきた葉が彼女の頭に当たった。
（やった！　これなら故意じゃないと言い訳できる！）
（まだやってんのかお前……）
チコは音で当たったのを聞き、表情をエムにもモココにも見せずに、内心大喜びし、エムは半ば呆れていた。しかし、モココは痛がる様子もなく、ただボケッとしているだけで、誰にも近寄らずに黙々と歩いているだけだった。様子が変わったのだ。時々、エムの表情をチラチラと見ているだけ。
結局、黄金の間へは実質単独でも簡単に辿り着いた。幾つかエムとチコで宝箱を集め、狭い一本道の池を超えなければならない場所は、エムが壁の岩を蹴りながら進んで取りに行けた。ちなみにこの時、モココは追跡しようとはしなかった。

「やった。エム、今日もお宝仰山だったね！」
自宅であるサメハダ岩に帰還した後、チコは黄金に輝く箱を並べて喜んでいた。
「そうだな。……それよりおい、お前。やはり何か隠しているな。誰の目にもごまかせない。秘密を話すなら、話していい」
エムが、座って何か考え事をしているモココに話しかける。秘密

を暴けば、この「事件」の解決の糸口を見いだせるかもしれないからだ。

「分かったわ。今は、昨日から今日まで、自分が何をしていたのか理解できなかったから、考えてたの……」

今までとは全く違うモココの口振り。エムとチコが不思議そうに思いながら、話を聞こうとする。

「あなたには私が探し続けていた者の姿が見えた気がしたの」

「俺に誰かの姿が見えた？」

モココには、エムから誰かの姿が見えたと言うのだ。しかし当然、幻影に違いない。

モココは次に、チコにとっては見覚えのある単語を言い、チコはそれを聞くことになる。

「うん……。ちょっと昔……私はフォルド島と呼ばれる場所で暮らしていたの」

23話　過去のこと（前書き）

今回は、過去編となります。

23話　過去のこと

モココは時間を遡った話を口にする。この大陸の東側にあるフォルド島。そこは空間の神が棲むとも奉られている。島にも不思議のダンジョンがあり、多くの探検隊もいた。そこは独立した場所であるので、島に政府があり、ＰＥＬの一員が政治活動を行っていた。

しかし、治安に関してはトレジャータウンほど良くなく、町で犯罪が起こることもあった。というより、全体的にポケモン達の心優しさが足りなかった。

そういう島に、モココはまだ幼いメリープの時に住んでいたのだ。彼女は元々その島の草原で暮らしていた。そんなある日、彼女は良くこの辺りで、体力を鍛える為なのか、走っているポケモンと恋が芽生えた。そのポケモンはギラノという名前の男の、ヨーギラスだった。「……いい空気だな」

「そう？　そう思ってくれるなら良かったー♪」

ギラノとメリープは、話したり一緒に散歩したことでお互いいるのが楽しくなった。女なんて、と敬遠気味だったギラノに、彼女が元気な所が可愛いと思ってしまい、自然と惚れ込んでいたのだ。ギラノは当時は、普段からクールな男であった。でも、彼はなかなか素直にはなれなかった。

「あのさメリープ。俺……その……えっと……」

「好きだと言いたいんでしょ！？　ダーリン♪」

「うっ！　ダ……ダ！？」

ギラノはダーリンと言われてとても恥ずかしがっていた。恋のことになると取り乱すことも多かった。動揺してしょうがない。ある日、メリープはヨーギラスのギラノに自分の住む町に案内してもらった。

ギラノにはバンギラスの母親であるメリルと、ドサイドンの父親がいた。ドサイドンの父親の名前はアーサーと言い、ＰＥＬことポ

ケモン探検隊連盟の一員として働いていた。つまり、島の平凡な政治家でもあった。

「あの馬鹿親父は今日も帰って来ないのか」

「そうよ。でも仕事にしても、連絡一つないのが不思議よねぇ」

ギラノは父親を間抜けな男だと思っていた。少し気が弱く、仕事でもミスが多いらしく、怒られたと家で愚痴を言うこともあったと言う。

ギラノは「強くて立派」な探検家になるつもりだった。弱いは罪と思い続け、その為に家の裏庭で修行をしたり、誰かに付き合って貰ったりする。でも、メリープに会ってからは全くしていない。

ギラノはメリープを呼んで、町を案内する。ただ、町の治安が良くないとあるので、気を付けなければならない。そう彼が彼女に説明したそばから、誰かがヨーギラスとメリープに近付いてきた。……ドーミラーだ。

「おいこらガキぃ。さっさ……」

ギラノは、このドーミラーは喝上げするのに自分達の体が小さくて弱そうだから勝てると思っているのだと分かっていた。悪タイプ仕様の波動を叩き込み、あっという間に倒した。

「ふっ……とっとと失せろ……」

「か、カッコいい！　さすがね♪」

ギラノは倒れ込むドーミラーに囁き、メリープはそのあっけなさに感動していた。

「で、何もないか？」

「あるわけないじゃなーい♪　もう、ダーリンったら意外と心配性♪」

「……そうか」

ヨーギラスのギラノとメリープ。とても対照的だった。こうしてこの二匹は、ちょっと危険がある町の中でも幸せに暮らしていける、そう思っていた。しかし、ギラノは、身に危険が迫っていることを知らなかった……。

・　・　・

「話すの疲れた……。ちょっと休ませて」

「で、話をまとめると、お前はそのギラノとやらと付き合っていたと」

「うん……」

モココは調子の乗っていない口調で喋り続けていた。エムコルスのちょっと大きな態度が目立つ。しかし、それこそが彼女のタイプだった。

チコはギラノというポケモンの性格を考えてみる。話の内容、モココが一緒にいたいと思える男、それをまとめると、一つの事実が出てきた。

「ねぇ……まさかモココは、エムに執着してくる理由は、その話に出て来るギラノと、性格や仕草などが似ているから？」

「そ、そうかも……。私の彼氏、まさにこんな感じの雰囲気だったし。やっぱり、私は頭がおかしくなって、だから彼がこのエムコルスの後ろに見えたような気がしたのかも……」

嫌悪していたはずのチコの質問に、モココは素直に答える。「何じゃそりゃ」とエムはずっこけたくなるが、ひとまずもっと彼女の話を聞こうと耳を傾ける。モココは再び話し始めた。

「続き、話すね……」

・　・　・

しばらく経った時である。数日後に、またギラノはメリープを誘いに来て、町へとやって来たのだが、前と雰囲気が違うことに気付いていた。

えらく全員が静かだし、物騒な場所になっていた。でも、誰も何もして来ず、更に、以前はたまに見ることとなった、犯罪の現場を

見ることもない。不思議な光景だった。
ここにメリープを連れて来て、何か危険な目に遭おうとも、絶対に彼女は守ってみせるから、安心して楽しんで貰いたいとギラノは思っていたが、これでは保障できない。試しにリンゴ飴を売ってくれる店に行ったけれど、店員の目つきが悪く、今にも襲いかかってきそうだった。
「ねぇ……ダーリン。私怖いよ～」
「確かにな。今日、お袋は何ともなかったのに……」
町にはあまりいたくないと思い、ギラノは家に戻ることにしたのだが、それこそが、ギラノとメリープの一生を変える出来事となったのだ。
まず、玄関の扉が開いていた。何故こうも大ざっぱに開いているのか、ギラノは疑問に思い、首を傾げた。
「お～い！」
ギラノはお袋を呼ぼう、と家の中で声を張り上げるが、それに誰も反応する者がいなかった。まさか……と思いつつ、リビングの中へギラノは顔を覗かせる。そこで見たのは、信じられない光景だった。
「……！」
彼が見えたのは、横たわっているバンギラスの姿だった。そして、まだ誰かいた。間違いなく、倒れていたのは母親であるメリル。詳しく確認することなくギラノはメリルであろうバンギラスから目を逸らし、素早く手をメリープの口に当て、静かにしろと表情で伝えた。
「やれやれ……ようやく奴の息子さんも帰ってきたか。だが残念……。お前達の家族は全員抹殺することになったんだ」
気付かれていた。リビングの外へと鋼に包まれたポケモンが出て来た。このポケモンの名前はボスゴドラ。
「な……何で俺達が殺されなけりゃならないんだ……？」
ギラノは恐怖で震え上がった身で、口元を歪ませながら聞いた。

バトルはそれなりにできるはずなのに、そのボスゴドラの表情から発せられる、今にも体を引き裂いてしまいそうな威圧で、体が動かなかったのだ。同様にメリープも。ギラノの背後に隠れようとしたが、その彼の状態では、殆ど無意味に近かった。

実は、このフォルド島ではクーデターのようなことが起こっていた。とある、悪夢が見せるポケモンがいて、そのポケモンは自らを「闇の創世者」と名乗り、この島を支配しようとしたのだ。

新たなる世界を象徴、そして、その本拠地としようとしたのだ。その闇の創世者の能力により、殆どの島の者は逆らわなくなった。心を奪われたのか、支配されたのか、自然と治安もそれからは良くなっていったらしい。

だが、一部のポケモンは支配されていなかった。それがギラノの父親、ドサイドンのアーサーだった。彼は勇気を振り絞り、乗っ取らせまいと抵抗したが、あっさりと負けてしまったのだ。なぜか殺しはせず、そのまま牢獄へ送ったらしい。

闇の創世者は、アーサー達の家族もいずれ抵抗運動などを起こす危険因子となりうると判断し、それを阻止する為にこのボスゴドラに、メリルとギラノの抹殺を命令し、向かわせたのだ。

……そして、ボスゴドラはメリルをあっさりと殺し終え、残りはギラノのみだ。哀れに見えてしょうがないギラノに、殺す前にと、ボスゴドラはこれらの事実を教えた。

「……さっさとお前も親の元へ送ってやるよ」

ボスゴドラは腕を振り上げる。殺傷能力を大きく高めたメタルクロー。これでメリルも殺したのだ。でもギラノは抵抗しようとしない。急所へ一直線……。

メリープは絶対に手を出させまいと、反射的に動いた。すぐさまギラノの前に立ち、攻撃から庇った。

「ぎゃぅっ！」

メリープを狙った攻撃ではない為に、手は腰部分に当たり、急所は外れた。

「メリープ……！」

ギラノは目の前の光景を目の当たりにして、目を丸くする。ボスゴドラはもう一度腕を上に振り上げようとするが、すぐさま下ろした。

「我にも情があったようだ……。母親の場合、抵抗してきたからすぐ殺せたが、お前の場合、全く抵抗の素振りもなく、必要としているポケモンがいるようだ。それを殺すのは、やはり我としても抵抗がある。……そこのメリープよ、そこまでして生かしておきたいなら、お前達を生かしておいてやろう」

そう言って、傷が深くて倒れ込むメリープと、殺されるという恐怖で、まだガタガタと震えているギラノの横を静かに通過し、去って行った。しばらくするとギラノはハッと気付き、メリープを介抱し、すぐにゆっくりと寝かせる。次に倒れている、母親のメリルを確認する。……しかし、残念なことに、既に事切れていた。ギラノは未だにこの現実を認識できない。父親も逆らって連れて行かれた、実質殺されたなんて事実も受け入れられない。

冷静になって考え、メリープの体から出ている血を止めようと、自分の持つハンカチを使って押さえている。

一晩経っただけで、彼女は元気になったが、ギラノはとあることに気付く。このメリープに会ってから、自分は浮かれていて、何かを怠っていなかったか。そう、強さを求める修行をしていなかったのだ。弱いと罪だと思い続けていた彼にとって、敵を相手にして何もできなかったことには、深い罪悪感を感じていた。

――親父……気が弱いクセに、なんてこと……。お袋もそのせいで……。いや、一番問題なのは俺なんだ。俺だけ今、弱いクセにこうしてのうのうと生きている。親父は強大な何かに逆らおうとしてたってことじゃないか！　度胸があったってことじゃないか！　だけど、俺は何もしなかった挙げ句、本来は死んでいるはずじゃないか！　メリープが守ってくれたから、生きている……。

生きてて良かったと、すり寄ってくるメリープをギラノを引き離

し、頭の中で彼は大きな決断を下す。
「悪いが……俺にとって、お前は存在してはいけない奴だ」
「え……な、何が！？」
「メリープ、お前の存在が俺を弱くしていた。確かにお前を可愛いとは思ってる。だが、お前といることにうつつを抜かした結果がこれだ……。もう悪いがお前とはいられない。俺の弱点となっている」
この、理不尽な理由で親を殺されたということへの復讐を果たす力が欲しい。そう思ったギラノにとって、メリープの存在が、とても邪魔な物と感じてきたのだ。
父親は正しかったのだと気付く。何故自分やメリープがそうはなっていかないのかは分からないが、町の民の心は、正しい傾向にあった健全なポケモンですら失われているような気がしている。母親を殺したボスゴドラ達は、紛れもない悪なのだと、ギラノは思っていた。
「達者でいろよ！　じゃあな！」
ついて来ないようにと、ギラノはメリープを容赦なく鉄に近い頭で頭突きをし、走って去って行く。
「ダ……ダー……リン……」
気を失った後、メリープが目を覚ました時には、既にギラノは消えていた。それから、彼女は彼を探し続けていた。
そして今、モココへと進化した彼女は、偶然にも「英雄」と会うことができた。その一匹であるエムコルスは、彼女にとってギラノを感じさせる物がとてもあったと言う。

24話　遥々東にある島へ

モココは話し終えると、溜め息をついて寝転がり込んだ。こうして話している間にも、ギラノがどこかにいるのかもしれない。もしかしたら、もう命を落としてしまっているのかもしれない。

父親を敬っていない節があったが、本当は信じていたのだろう。本心を打ち明けるのが苦手なようである彼は、魅力的だった。頭の中で、彼は今、何をしているのか、モココは過去を話してから考え続けていた。

「自身の精進か、幸せか……。恐らく事件でそれの踏ん切りがついたんだろう」

ギラノ、モココ、それぞれの目的は、全て一致している訳ではなかった。ギラノにとって、モココとの関わりは、強さを求めることとは全くの別物であったのだと、エムは気付いた。

「で、何かそれから手がかりはあったのか？」

「いいや、全く……。死んだとすら考えたわ」

そうしてエムは話の全容をつかむ。こうして困っているポケモンは、もう帰すことができるだろう。しかし、それでは探検隊としてはダメ……エムは、言われるであろう、ギラノという男を探して欲しいという依頼を引き受けるつもりでいた。しかしエムとしては、これからどうすればいいのか分からない。

だが、チコには思い当たる節があった。確か今日、ギルドには意味深な文の依頼があった。更に、今このモココが言ったのと、あの文にあったのとで、島名が一致していたはずなのだ。

「まさか……ちょっと、私ギルドに行ってくるよ」

もう取られたかもしれないが、まだあるかもしれない。日が落ちそうな中、チコは急ぎ足で、まだ開いているギルドに向かった。

「んー？　チコ、今更何なんだ？」

ドゴームは、もう一日の中での探検活動は終わりだという時に、

単独で来たチコを疑問に思う。近日では英雄の浮気スキャンダル…とはキマワリが言ったことだが、とにかくトラブルを起こした所だ。

チコは、残り僅かな左手側の依頼掲示板を見て行くと、今日見つけた、あの依頼が残っていた。大きな危険を伴いそうなことをやろうとは、やはり誰も思わなかったのだ。

その紙を持ち、チコは急いでサメハダ岩へと戻る。

「あったよ！　さあ、この字はあなたの探しているポケモンの物か、確認してね」

チコは真っ先にモココに渡す。十中八九、チコはこれがモココの言う「ギラノ」という者の書いた文に違いなかったが、関わりある者に聞かなければ分からない。

「『この大陸の東にある、フォルド島が、恐らくは闇の者達に支配され続けている。空間の神が生息すると呼ばれる島で何が起きているのか。そういう闇に支配されている事実を知る者が全くいない。誰か島で調査を行い、情報を外部に持ち帰ってほしい。だが、島の状況からして相当厳しくなりそうだ。だが、自分は精悍な英雄を待つ。そして、自分は必ず闇に復讐する』……な、これ、もしかして……。いや、フォルド島で復讐するなんて、ダーリンしかいないじゃない……！」

ほぼ間違いないというようなことを、紙を強く握りながらモココが言った。まさか、こんな形で手がかりを見つけることになるとは、思いもしなかったのだ。

「ちょっと貸せ」

エムがとあることをひらめき、モココから依頼文の書かれた用紙を奪う。すると、字を読み始めようとした瞬間、彼は目眩を感じた。

（やはり来た……こういう時に来るのが、この能力の特徴……）

叫びの世界に入ると、エムは、バンギラスらしき、緑色のポケモ

ンが、ハッキリとは見えないが、顔先にドリルを付けた、茶色のポケモンに襲いかかろうとするのが見えた。声は全く聞こえてこない。未だにそこの特徴が掴めないのがこの能力の特徴なのだ。

（……今のは、未来なのか？　何だったんだろう……。あのバンギラスか誰かは、この文を書いた奴だったのだろうか？　ヨーギラスはバンギラスにまで進化する。だとしたら、あれはギラノということに……）

現実世界に戻ると、チコが注目した顔をして彼の方を向いていた。時空の叫びが発動したと分かったのだ。

「バンギラスが誰かに攻撃を仕掛けていた。未来と仮定しておこう」

「……バ、バンギラスだって？　それってもしかして、モココの話に出てきた『ギラノ』じゃないの？」

「まだ確証はないから分からない……」

このエムとチコの会話を聞いて、モココは胸に手を当て、心臓の鼓動を感じる。噂で聞いた、物やポケモンに触れて夢のようなものを見る、時空の叫びを使える能力者がいることより、ギラノのことを考えていた。

彼女は、今日の朝とは打って変わっている。もうエムにすり寄ったりしないし、チコを毛嫌いすることもない。ただ今は、この二匹へ、この依頼を実行してほしいと望むだけだった。

遂に会える――そう思ったモココは震えが止まらない。喜び、そして、またいらない存在と言われるかもしれないという不安と緊張。様々な気持ちが頭をよぎっていた。

「落ち着いて」

チコは初めて、モココに諭すように、穏やかな表情で話す。

「んと、お……お願い！　エムコルス、チコリータ、私と一緒に島に来てくれない！？」

モココがここで名前を呼んで頼んできた。まだこのチームが「エ

レンシア」だという事実には気付いておらず、エネコの手も借りたい気持ちなのである。

「エムコルスの言っていた通りなのかもしれない……。私はギラノという男の望みを理解していなかった……。恋なんて、彼にとっては真の望みじゃなかった。だから要らないと言われたのだと、今思ったの！　エムコルス、ギラノかと思って変なことしてごめん！　チコリータ、彼氏奪おうとしてごめん！　だからお願い！」

エムが話し終えた後に最初に言ったことから、モココは今更ながら、ギラノの気持ちが少し分かったような気がした。彼は、己の強さが目的だった。ならば、それに協力するという姿勢を見せるべきだったのかもしれない……と。

「だから落ち着いてって言ってるでしょ。それと、彼氏だなんて……ちょっと止めてくれる？」

チコは少し恥ずかしがっていた。

「よし、チーム『エレンシア』に任せろ」

「あ……ありがとう♪」

依頼が出てからもう一日が経とうとしている上に、モココのこの焦りっぷりからして、一晩寝るのもできないだろう。エムはこの夕方から夜中にかけて、島へ向かうつもりで、エムは了解と受け答えて、準備を始める。モココは精一杯の感謝の意を述べていた。

「え……ちょっと待ってよエム。今から出るつもり？」

「当たり前だ。そんな朝から放置されてた依頼、明日まで待ってられるかよ。それに、別に俺達は不思議のダンジョンに行くんじゃない。あくまで島に行くだけだ。チコも早く準備しろ」

「もう夜だというのに……。相変わらず無茶したがるというか、せっかちなのね、全く。まぁ、今までだってエムの判断が正しかった場合がほとんどだし……」

そう言っている頃には、チコは既に準備を始めており、エムはそれを終えていた。モココはこの時、やっとこの二匹の正体に気付く。

思えば先程、エムは時空の叫びと呼ばれるものを間違いなく使っていた。

「ねぇ……。もしかして、エレンシアって……噂の、時を救った探検隊？」「今更なんだよ」　モココが恐る恐る聞くと、エムが驚きもせずに答えた。

「そ、そうだったのね！　ど、どうりで。そりゃ、エムコルスにはどんな女も惚れるワケよ！」

「ああ、お前はやはり馬鹿だ……」

　モココがまたテンション上げて言ってきたのに対して、エムが呟いた。

「ちょっと手を貸してくれる？」

　モココは立つのが面倒なのか、手をエムに差し出して言ってくる。しょうがないなと、エムは仕方なく彼女を立たせる。……その時だった。

（……あ、また時空の叫びが……！）

　抱きつかれた時は、発動しなかったというのに、エムはこの時だけ、モココに触れた時に目眩を感じる。

『ダーリン、どこ……？』

　声だけの時空の叫びだった。モココの声のようだ。いや、少し幼く聞こえたから、メリープの時と考えていい。悲痛さの混じる声。失いたくない者を失った時とは、このようなのかと、つくづく感じた。

　ここで、エムはギラノの考えに、一つの誤りを感じる。ギラノは、自分本意ではないかと、この時空の叫びで思った。

　そしてついでに、時空の叫びは都合がいい時に発動するのだなとも思った。

「……お前の過去が聞こえた」
「そ、そうなの？　まぁいいけど」
エムは時空の叫びが働いてくると思われる頭部に触れながら言った。しかし、時空の叫びで聞こえたものとは違い、モココが気にした様子はない。
「ねぇ、ところでさ。島にはどう行くつもりなの？　依頼文に付いた地図によると、フォルド島とは、ここのほぼ真東にある島のことのようね」
「……ラプラスに頼むか？」
実はそこは全く考えておらず、チコに聞かれて少し迷ったエムだが、海を渡れるポケモンがいることを思い出した彼は、海岸に行って頼むことにした。ラプラスはしばらくトレジャータウンの海岸周辺に滞在することになり、会おうと思えばすぐに会えるようになったのだ。
そうして、モココと共にサメハダ岩を出て、海岸へと向かった。しかし、その途中で、妙にペリッパーが空を飛んでいるのを見かける。そして、海岸には、いつの間にかこんな物が開設していたのだ。
「ペリッパー飛行隊……だと？」
立っているテントにはそう書かれている。エムは腰に片手を当てて、テントの中を覗く。そこには多数のペリッパーが集まっていた。
すると、それぞれトゲピー、ニョロトノ、レディバを乗せたペリッパー三匹が、そのテント周辺に戻ってきた。
「探検楽しかったねー♪」
「だよね～♪」
彼らはこの辺りに住む探検隊、ハッピーズ。エムはペリッパーに乗って何をしていたか聞く為に、駆け寄る。
「何をしていた？」
「んー？　チーム『かまいたち』さんの方々が、ペリッパーさん達と相談して作られたサービスだよ。ペリッパーさんが、カフェ運営だから無料で、海を渡る遠くの島のダンジョンなどまで送迎してく

れるんだ」
　ニョロトノが説明した。ここから離れた島へ向かう為のもの……何と好都合なのだろう、とエムとチコは思った。
「本当に？　いやぁ、凄いサービスよね。なら早速利用して向かおう！　フォルド島に！」
「いよいよ……」
　エムが三匹、ペリッパーを頼み、目的地を教える。
「了解しました。では早速ご案内しまーす」
　エムコルス、チコリータ、モココはペリッパーにそれぞれ乗り、星空の浮かぶ空への長旅へと向かって行った。

・　・　・

　数時間後、エレンシアとモココは遂にフォルド島へと到着した。足を踏み入れれば、何か危険が待ち構えているかもしれない。心して行こうとエムとチコは頷き合い、島へと入った。ペリッパーからは、ここから帰りたい時はまたここに来てくれと言われ、散歩するつもりなのか、上空へ飛び去って行った。
「……妙。昔と何か違う感じがしてたまらないわ……」
　モココは、久しぶりにこの島に足を踏み入れて、島の雰囲気に違和感を感じていた。辺りを見回しても、何もおかしくはないのに。
　だが、この雰囲気に、エムとチコは覚えがあった。もう記憶の底にしまったはずの未来世界のような。島そのものから殺伐したものがある上に、未来で見た闇のディアルガのような悪魔の威圧感すら感じる。
　依頼の目的は、この島で起きていることを実際に見て伝えること。恐らく、それで強者は動いて何かしらの行動を起こすというのが、ギラノと思わしき依頼主魂胆なのだろう。となると、凶悪な敵が登場し、命の危険に曝されることもあり得る。また、モココもきちんと護衛しなければならない。

しかし、こういう時こそ、『エレンシア』というチームの真価は発揮されるのだ。戦いへの包囲網が噛み破られていく。

――戦いは終わっていなかった？　馬鹿な……もう、とっくに終わったはずなんだ。きっと気のせいに違いない。

25話　動く闇

昼も夜も関係のない独房。そこで彼は、気が遠くなるほど過ごし続けていた。ずっと孤独で。

プロテクターに身を包み、茶色の肌が見映るポケモン、ドサイドン。……いや、彼は本来名前があったはずだった。でも、それすら忘れてしまった。彼はずっと悪夢を見せられ続けている。醒ましたくても醒ませない悪夢だった。即ち彼はずっと眠っている。

彼はうなされ続けている中ふと、何かが蘇るかのように夢の中が変わる。無限に連なるかのような螺旋だった。

誰かが笑っている。しかしその直後に冷たい表情に変わる。やがて最後には、何者かが自分の周りの者を殺して行ったり、眠らせたりしている。そんな状況の中で、リーダーらしきポケモンに突っ込んで行く……そこで、記憶は途切れた。

歳月は瞬く間に記憶の向こう側で過ぎる。彼はついに目覚めた。しかし、先程蘇ったはずの記憶はすぐに失ってしまっていた。どういう訳か、ポケモンの技では絶対に壊すことが不可能な拘束具で縛られ、そして激しい頭痛が襲う。麻酔か何かを盛られたのだと、弱った頭で悟る。身体は全く動かず、縛る拘束具はきつい。体もじわじわ弱っていくようだ。直に永遠の眠りにつきそうな予感がしてたまらない。

彼は哀れな存在だった。強さが足りず、目の前に現れた悪を倒そうと抵抗も叶わず、あっさりと敗れ去り、こうしてずっと、記憶を全て奪われて眠らされている。それは、殺されるよりも惨めだった。更に、彼が起こした行動は、幾人の人生を狂わせた。彼の妻はあっさり殺され、子供は将来を誓いかけた恋人を捨て、父親のようになるまいと強さを求め、実質行方不明なのだ。もちろん、そのことを彼は知らない。

自分とは何だったのか？　何の為に生きていたのか？　その答え

も全く分からない。
　満足な食事も与えられずにいる彼。心は闇に染まりきり、今にも発狂しそうな彼の眠った肉体が、体を粉々になりかけるぐらいにまで高まっていく。悪夢で衰弱することはなかったのだ。
――ガタッ。
　彼は久々に光を見ることとなる。扉が静かな音を立てて開き、同時に何者かが、彼に近付いていく。一匹ではない。二匹だ。
「……島に入り込んだ者が四匹いることが分かった。入り込むのは構わないんだが、その入り込んだ者が問題なのだ。その四匹のうち、二匹は私が何としても抹殺したい者達。そして一匹は……フフフ、貴様の思い出の者。そいつらを殺すのだ」
「見えるだろう？　それぞれ貴様が殺す三匹の似顔絵だ」
　一匹は抹殺作戦の説明をし、もう一匹はポケモンの絵を見せた。絵の上には種族ナンバーが書かれている。Ｎｏ．２５ピカチュウ、Ｎｏ．１５２チコリータ、Ｎｏ．２４８バンギラス。もちろん、これらが誰か、記憶を奪われた彼が知るはずがない。
　排除しなければならない……その脳内命令が、彼の体を襲う。身を繋いでいたはずの拘束具をいとも容易に引きちぎり、彼は立ち上がった。
　彼の名前はかつて「アーサー」と言った。悪夢を見せられ続け、心が完全に闇に染まった亡者当然のポケモンが、緩慢に歩み始める。

「フフフ……では、貴様らも行け」
　実は、このようなことをしたのは、最近、遂にパルキアから空間の支配権を手に入れたダークライだった。もう、この辺りはダークライの思うがままなのだ。彼に命令され、アーサー以外の数多くのポケモンも、アーサーが捕らえられていた場所の近くの部屋から飛び出し、走って出て行く。　ダークライは決して社交家ではないが、人心掌握が可能な彼は、この辺りの不思議のダンジョンで捨て駒の

下っ端として勧誘したのだ。
「そうだ……ボスゴドラ、お前も行け」
ダークライは隣にいたボスゴドラにも出動命令を出す。何より、殺さなければならない者達が直々に島まで来てくれたのだ。大規模な攻撃をお見舞いしなければならないと感じていたのだ。
「はっ、了解しましたダークライ様」
「私はマグカルゴのような失敗報告は聞きたくないぞ……」
頭を丁寧に下げるボスゴドラを見て、ダークライは彼の返事が建前だけの自信のように見えて、嫌な予感がする。何より、相手は破滅する世界を平和に戻した強敵なのだから。
「ふっ……そこは御安心くだされ」
十分わきまえたように答え、ボスゴドラも、数多くのポケモンの後について行った。

・
・
・

エムとチコは目を疑っていた。試しに町にまで来てみると、ポケモンは多くいるものの、目に輝きが全くない。目が死んでいると形容した方がいいのか、どのポケモンにも生気がない。
たまに、この♂ポケモン一匹と♀ポケモン二匹が並んで歩いている光景をじろりと睨むポケモンもいて、不気味だ。でも、今の所は誰も襲ってきたりはしない。
「これ、町自体が不思議のダンジョンになっていたりしないよね……？」
「それはありえないわね」
トレジャータウンと見比べると、あまりにも見劣りする町を見て、チコが元気のない口調で言う。モココはそれに普通のテンションで答えた。
「よくこんな所で暮らせてたね」
「いや、私がここに来たのはギラノに誘われた時だけだから、そこ

まで馴染み深いってわけじゃないのよねぇ」
「でも、光景に慣れた顔してるけど……」
「えー？　だってギラノという私のダーリンと再開できると思うと、周りなんてどうでも良くなるもん♪　……そ、それに、不安そうな顔してると、うるさそうだもん。エムコルスが。ギラノがそうだったし……」
「あっ、確かにそれ分かるかも」
自分の身に何かあった時は良く心配してくれる。そんな時がしょっちゅうだったから、チコはモココの今の態度も理解した。
「わ、分かってくれるの？　さーすが♪　モテる男はやっぱり分かる女に持ってかれるわねぇ」
普通なら、今のこのモココの発言をエムは否定するはずなのだが、今回はしなかった。なぜなら、エムは、この町を見て、深い考えごとをしていたからだ。
彼は町に入ってから一言も言葉を発していない。エムは久しぶりに、失っている記憶から何かを感じ取っているのだ。
――この町……。俺が来たことがあるという感じはない。だが、この感覚はなんだろう？　トレジャータウンという賑やかな領域にいたせいで平和ボケしているのか？　本来俺がいた場所に戻って来たような気がする。俺は暗黒の未来にいたのだから、その人間の時の感覚か？
だが、島に来た時も思ったが何故だろう。もう暗黒の未来世界なんて、全て消え去ったはずなんだ。どうしてそんな未来世界のような感覚を感じなければならないんだ。時の歯車がある場所が止まったワケじゃないだろうに、一体どうなっているんだ……？
「……ぇ、ねぇってば、エム」
「……あ？　どうした？」
酷いぐらいに考え込んでいるエムに、チコが話しかけると、反応に数秒かかった。
モココはギラノの家があった場所にまで案内していた。しかし、

その家は跡形もなく消え去っていたのだ。恐らくは、証拠隠滅の為に取り壊したのだろう。

「あそこに、ギラノという男の家があったみたい……」

「そうか、壊されたのか……」

エムは小石が散らばっているという跡を見て、モココの話に現実味というのを感じた。

「残念だけど……当然ったら、当然の行為なのよ。……それよりも早く、ギラノが来ると思わしき議事堂まで行こうね」

ギラノのかつての住処がなくなってしまったことに、モココは落ち込んでいたが、気を取り直して、目的地まで行こうと誘導する。

いよいよ本格的な行動に出る。ただ見て回るだけではダメだ。見て回ることに危険は無かった。自分達がしなくてはならないと感じたことは、中枢部にまで入り込んで、フォルド島を支配しているポケモンを倒すことだ。

議事堂の手前にまで行くには、大きな階段を上る必要があった。ふと、エムはそれを上る前に、あることに気付く。まだ敵らしき者には会ってないが、もしこれから戦闘するとなると、モココを守りながら戦わなくてはならない。それでは力を発揮できない。ならば……と、ここでエムは一つの提案を出す。

「チコ、ここでモココと待機していてくれ。悪いが、ここから先は俺だけで行く」　エムがスカーフを締め直し、辺りの気配を伺って言う。

「え～！？　それって、まさか、私のせい～？」

「その通りみたいね」

事実なので反論しようがないが、絶対に足手まといに思われてるのだと気付き、モココは頭を抱えて残念がって言った。チコは了解という返事も兼ねて、縦に首を振る。

本当ならもっと離れた場所でそうするべきなのだが、それではモココの目的である、ギラノと会うということができないのだから仕方がない。

「だからさ、モココは大袈裟にならないでよ。それがエムの作戦なのよ。指示通りにしてれば何とかなるって。ついてっても大変なだけよ？　今までのは、相手が大したことなかったからだしね」

チコは、モココにこれはれっきとした作戦だと諭す。いつの間にか仲良しな友達となっているチコとモココだが、モココの説得には未だに苦労させられている。

「その通りだ。そうならない為にチコがいる。近い場所にいればギラノに会える確率も高くなる。だがもしそっちに敵が来たら……頼んだぞ。ちゃんと、気を付けろよ」

エムはチコに念を押す。モココは裏切ったりはしないだろうとも確信しており、護衛させてもそこは安心だと思っている。でも、もしものことがやはり心配だ。

「心配しないで。……エムも、気を付けて、頑張ってね」

「無事でねー！」

エムはチコのかける静かな声と、モココの声援に無言で頷き、背中を向け、無事を祈るかのように右手を上げてから、階段を上って行った。

チコは、後はモココの様子を見ておくだけだった。エムコルスの戦闘能力なら無事だろうと確信し、落ち着いて待つことにする。……しかし、チコにも落ち着く間は全くなかった。

「……？　モココ、ここらはずっと黙っててね」

チコは小声でモココに囁き、モココは一瞬で震えるように頷く。エムがここから去った瞬間から、チコは辺りの様子がおかしいことに気付いたのだ。まるで狙いすましたかのように、誰かの気配が迫り来る。

――数は一……いや二？　も、もっといる！？

チコが辺りを見回し始めた瞬間、まるでモンスターハウスのようにポケモンが一斉にチコを囲んで現れ始めた。円になっていることから、ポケモン達には隠密力があったようだ。この集団で現れたポケモンこそが、ダークライの雇った下っ端なのだ。

「……な、何なのよあの数……！」
モココの声はとても震えていた。モココから見えたポケモンは、それぞれ、ユンゲラー、サンダース、ドンカラス、エルレイド、ソルロック、ドーミラー、ドクロッグ、トロピウス、ルナトーン、スリーパー、ポリゴン。計１１匹だ。こうして見ると２対１１。いや、実質１対１１だ。
「真ん中で伏せてて……モココ」
「た、戦う気!?　無茶だわ！　無理よっ！」
これでは、いくら英雄と呼ばれる探検隊の一員であろうとも、この数相手ではどうしようもないと、モココは嘆きかける。
「……大丈夫よモココ。私が絶対……絶対に何とかしてみせるからね」
チコは辺り一面１１のポケモンをざっと見てから、覚悟を決めてそう言った。チコをどのポケモンも睨んで来ているが、負けじと睨み返す。
こんな所でやられては後もない。目の前の絶望に恐れて震えていたのはずっと昔の話。目の色を変えて、今は意地でも全員をなぎ倒すつもりだった。

26話　窮地

エムは階段を上りきると、木で塞がれて見えなかった前方が見えるようになった。その前方には建造物が見える。

「……そろそろか」

どこからか針でも飛んできそうな予感……エムは邪悪な気配を感じ、エムは速やかに木の陰、草の茂みに隠れる。木に背中合わせになり、顔をしかめて中腰で誰がいるかを伺おうとする。

見えた。確かに姿はハッキリと見えた。あのボスゴドラだ。ボスゴドラも誰かがいると気付いているのか、キョロキョロとしている。と、その瞬間、ボスゴドラは銀の針を投げ、それがエムの頬を掠める。

「見つけたぞ……。お前が我々の要抹殺リストに載っているポケモンの一匹、エムコルスだな。隠れても無駄だ。出て来い」

ボスゴドラの声を聞いて、エムは舌打ちをしながら立ち上がり、ボスゴドラの目の前に現れた。そして更に、ボスゴドラの後ろからはあのドサイドンが無言で現れた。

「そうだが……お前らが島を乗っ取る悪質な組織だな？」

「悪質だと？　何を勘違いしている。我々は正当……とにかくお前には死んでもらおう。そして直に、お前と一緒にいるはずのチコリータというポケモンも死ぬ。確かもう一匹いたから、雑兵を十程度送った。それだけいれば十分に殺せると踏み切ったからだ」

そうボスゴドラは宣言した。このボスゴドラは、およそ下っ端十匹分の強さを誇るのだ。ボスゴドラは見るからに屈強そうな姿をしており、全身が鉄鎧に囲まれている。

「十匹……？　そんなにいたのか？　なら何故……。大丈夫かな……？」

エムはチコのことが心配になってきた。自分の指示が失敗したと後悔しかけている。最初は大丈夫だと思っていたが、そんな数のポ

ケモンを対処できるとは到底思えず、不安がつきまとい始める。なぜか、数多くいたはずなのに、このボスゴドラは殺しに来たのに、他にはドサイドンしか連れて来ていない。そこまでこの二匹は強さに自信があるのか、と思う。

「……お前ら、まさかここに来てからの俺達の動きを全て把握してないか？」

そもそも、何故別行動していることを知っているのか。もしかして最初から監視されていたのかと、エムはボスゴドラに聞く。

「見通しメガネだよ……我はそれを使い、お前達がどうしているかを察知していたのだ」

見通しメガネとは、周囲のポケモンの行動を透視できる装備品の一種である。ボスゴドラはそれを駆使し、エムやチコがどうしてくるか見ていたのだ。

「そうか……」

少しやられたと思いながらも、行動を見透かされた理由はエムはそれで納得し、ボスゴドラの攻撃に対処する為に身構える。ボスゴドラはそれを、戦い始めようという合図と見て取る。ドサイドンはボスゴドラの背後で無言で突っ立ったままだ。

「……そうだな。そろそろ抹殺リストに処理済の印を付けさせてもらおうか」

・
・
・

その頃、付近でチコは懸命に戦っていた。四方八方から飛んでくる放射状の攻撃や、突撃してくる攻撃も全てかわしていき、隙の見えるポケモンから順番に倒していく。群れるだけあって、そんなに強くはないが、決して弱くはなく、集団となると激しく動かされて体力を消耗させられる。残りは……八匹。

次に、ルナトーンとソルロックを、コスモパワーと呼ばれる技で同時に力を溜め込んでいる所を二方向に広げた葉っぱカッターで捉

える。残り六匹。
「後半分……」
そう呟いたチコが、そこで気付いたのは、誰もモココを狙ってこないということだ。全員が殺意を剥き出しにして自分を狙っているのだ。
気付けば今度はドクロッグがすぐ後ろにまで迫っていた。間一髪で毒突きをかわし、空振りしてよろめいた背中に体当たりをし、更にツルの鞭で追撃を成功させる。残り五匹だ。
二回の攻撃で立ち止まって隙が出てしまった。的となったチコに次はドンカラスが右から迫り、仕掛けてきた翼で打つを避けきれず、体を翼で叩かれる。
「っ！」
攻撃を凌いで、後退りされるだけにまで耐えきり、すぐさま葉っぱカッターで反撃に移る。自分を狙われると分かっていたからか、ドンカラスは簡単にかわすが、その横を素通りしたはずの葉っぱカッターは、ブーメランのように戻っていき、ドンカラスの背中を直撃した。残りは四匹。サンダース、エルレイド、ドーミラー、ポリゴン。
少し追い込まれ始めたのは、相性の悪いポケモンを少し残した上に、自身の疲労により動きが鈍ってきたからだ。とは言っても、もう相性が悪い相手は今倒した。だが、乱戦状況な為に傍観せざるを得なかったポケモンも襲い始めてくる為、後もう一踏ん張り。
「はぁ……はぁ……」
同時に七体もの相手をしてきた為に、チコには目に見えて疲れが目立ってきた。それを応援するしかないのがモココだった。
「頑張って……！」
・
・
・
一方、エムはボスゴドラの方と対峙していた。ドサイドンは、ボ

スゴドラがいるせいか、全く手出しをしてこない。ボスゴドラがしばらく手出しするなと指示しているのだ。

接近戦バトルとなり、ボスゴドラは様々なやり方で正面から突撃してくるが、エムは全て軽々しく避ける。

かわしたその時にわずかなボスゴドラの膠着状態が見え、エムは尻尾を鋼のように硬くし、振り回してボスゴドラの背中へ叩き込む。

「ぐぅ……！」

この一発が大きく効いたのか、ボスゴドラはうなだれながらふらふらとする。しばらくすると動きを止めて、エムに背中を見せて呼吸の音を聞かせながら固まる。

「……隙ありっ！」

ボスゴドラは不意討ちを狙っていた。すぐに向き直り、破壊光線を口から放つ。だがこれも計算内の行動であり、放射状に進む光線を地面に伏せてかわす。

技の反動でボスゴドラには何もできない時間というのが存在する。また、形の大きかった破壊光線で、ボスゴドラの目線には死角があった。その死角をかいくぐり、また背後に回る。

「どこだ！？」

「こっちだ」

ボスゴドラはエムを見失ってしまっていた。ドサイドンも助言をしようとしない。エムは距離を大きく縮め、ボスゴドラにモーションのいいストレート、気合いパンチを入れる。格闘技に弱いボスゴドラはとうとう痛みに耐えきれずに倒れ込んだ。

「恐らくお前の意図は、電気を吸収して無力化させるドサイドンを連れてきて、技を封じ込めようとすること……。だが、お前にはそれ無しでも十分だったな」

「ぐおお……！」

エムはボスゴドラにトドメを……と思うが、次はドサイドンを倒さなければならないことに気付く。ドサイドンは腕に自信がないから何もしなかったのかもと、エムはドサイドンを倒すことは楽観視

していた。
……が、そのドサイドンがいなかった。さっきまではそこで立っていたはずなのに。ボスゴドラは倒れながら笑い声をあげた。
「フフ……残念ながらお前は終わりだ。何も電気を吸収する避雷針の為だけではない。このドサイドンは、最初からお前を貫くチャンスをうかがっていたのだよ」
「……！」
エムがとっさに辺りを見る為に振り向くと、ドサイドンが顔のドリルを回転させて目前にまで迫っていた。今、ボスゴドラが言ったように急所を貫かれる危険を感じたエムは、反射的に防具代わりに身につけたバッグを胴体の前に突き出す。
角ドリルはバッグを貫通し、防ぎきれずにエムの体に僅かにめり込み、その衝撃で小さくうめき、ボスゴドラの横に倒れる。だが、このバッグが身を守ることとなっていた。これがなければ、体を丸ごと貫かれて即死していたのだ。
「よくやった。……だが、こちらは殺せても、どうやらあちらは全員蹴散らされそうだ。使えない下っ端だ。ドサイドン、後は我に任せ、お前はあっちのチコリータの方を殺せ」
ボスゴドラがドサイドンに命令すると、ドサイドンは頷き、ここから去って行った。
エムが立ち上がろうとするが、本来なら一撃で倒れるはずの角ドリルを受けた痛みが激しくて立てない。まるで体に穴が開いているようだ。その状況を分かりきったかのように、ボスゴドラはドサイドンに加勢の指示を出している。
「まだ生きている……。さすがは要抹殺リストに入るぐらい厄介な相手だということか。しかも、まだ立てるとは……」
エムがもう早く倒さなければと思いながら、立ち上がる。ドサイドンが向かった先に急がなければと思う。複数の敵を相手にした後にドサイドンがいるとなれば、チコとモココが危険だ。心配で、助けに入りたい気分なのだ。その為には目の前にいる敵を倒さなけれ

ばならない。
　でも、さっきのように、ボスゴドラ単体なら勝てるはず……。傷を負った体でも、倒すことは可能だと、エムは思っていた。
　しかし、大きな痛みが走り、体が揺らぐ。エムはまだ傷を負った部分を見ていなかったが、想像以上に損傷していたのだ。
――な……俺は何をしてるんだ……！　たった一撃で……。
　エムはフラフラとする自分を必死に戒めるが、一撃と言っても角ドリルだ。当たれば、普通なら一たまりもないのだ。
「これで終わりだ、早く楽にしてやるよ」　ボスゴドラはその隙にエムに接近し、手を使って彼の顔を掴み上げ、握力を利用して強く握り、締め上げる。技として説明するなら、アイアンクローと呼ばれるものだ。
　ボスゴドラはエムが苦痛の表情を浮かべるのを自分の手ごしに見て、勝利を確信して微笑んでいた。

27話　激闘

チコは周囲を見回していた。もう全ての敵を倒したはず。だが、まだ誰か残っているかもしれないので、警戒は解かない。ただ、出せる力は今全て使い切ったつもりなので、体力的にはもう厳しい。だから今も、荒い息遣いを隠せていない。

「ほ、本当に終わっちゃったの！？」

モココが、もうチコ以外誰もいない状況に驚く。

「……終わったよ」

「さ、さすがねぇ」

チコはモココに微笑む。チコとしてはとても苦労したが、モココから見れば容易く全員を倒してしまったように見えて、モココは幸運に恵まれたような気がした。

「にしても、あっちは大丈夫なのかな……？」

「きっと余裕でしょ♪」　チコが戦いに出かけたエムを心配する。モココは楽観視しているが、敵は手強いし、そもそも、モココを守る為に単独で行ったのは失敗だったのかもしれないと思っていた。結局こうして敵が来ているからである。

実際のところ、ボスゴドラがエム、チコの位置を把握可能な為に、分かれるメリットは皆無だったのだ。エムの判断ミスということになる。

……そしてチコが、階段の方を見ていたその時である。あのプロテクターに身を包んだドサイドンが降りてきた。

「……」

ドサイドンは無言だった。ただならないオーラを漂わせている上、仏頂面で感情がなく見えるのが不気味だ。

相性的にはチコが圧倒的有利だった。ドサイドンは地面タイプと岩タイプなのだが、両方共に草技に弱い。だが、チコが１１匹と戦った直後の為、大きく体力を消耗しており、その分厳しいことにな

っている。
「チコリータ、また誰か来た……」
モココが頼るようにチコに近寄り、ドサイドンに恐れるように囁いた。
「さっきのとはちょっと違うみたいね……」
重い足音を地面に響かせながら歩いてくるドサイドンに、チコも倒してやると歩み寄っていく。
「お前は誰だっ！」
チコが疲弊している体の不安定感を凌ぎ、ドサイドンに向かって何をしに来たのかを聞く。
「自分は……分からない。何者かなんて知らない。ただ、卿を殺しに来ただけだ……」
初めてドサイドンが口を開いた。
「まるで操り人形……話しても無駄みたいね」
連戦の疲れなんて関係ない。相性が圧倒的に有利なのだから必ず勝てる。殺すと宣言しているのだから待っても無駄だ。
そう思って、チコは一気に勝負をかける為に至近距離にまで走り、ドサイドンに反応される前に、ホーミングして必ず標的に命中するとされる魔法の葉、マジカルリーフを葉から一振りで放つ。体格差もある為に、半上方向に放ったが、命中したのはドサイドンの膝元だった。ドサイドンがその技でのけぞった直後、今度は魔法の葉よりも鋭い葉を出せる葉っぱカッター。これも当たり、ドサイドンはまた大きくのけぞる。
しかし、ドサイドンは実は攻撃で痛みを感じていなかった。勢いで押されてはいるが、そういう体になってしまっているのだ。更に、相手の状況を鋭く読み取っているのだ。最早今は戦闘のことしか頭に入っていないのだ。
このチコリータは聞いた情報によれば、連戦で疲れているだろう……。ならば動きに鈍りが出る……。
ドサイドンは瞬時に判断し、足踏みをして地震を起こした。地面

がマグニチュード１０以上の規模で揺れ、チコの足元のバランスを崩す。
「……っ！」
チコは揺れを乗り切ってドサイドンの横へと走り、再び葉っぱカッターを出そうとする。しかし、速度は揺れで鈍っていた。ドサイドンはアームハンマーをしようとした。右腕を上に振り上げて、動く先を見切って振り下ろす。それがチコの背中を直撃した。
「ぐあっ！」
チコは叩き付けられて、自然と喉から悲鳴が出る。そして攻撃を受けて、初めて気付いたことがあった。
「……モ、モココっ」
そう、地震でモココはバランスを崩して、体を何度も地面に叩き付けられたのだ。チコの目線には、すり傷を負って自分と同じようにうつ伏せで苦しそうにうなりながら倒れているモココが見えた。
「ううう……」
モココはチコに向かって助けを求めるように手を伸ばす。しかし、その行動や声がドサイドンの目に付いた。
「うるさい者だ……。先に一応殺しておこう……」
ドサイドンは標的をモココへと変えた。ドサイドンから見れば、隣で自分の目的を邪魔したがっているように見えたからだ。本来殺す必要はないのだが、ドサイドンの意志で殺すことを決意してしまった。
「はぁっ……はぁっ……。させないっ！」
チコはせめて標的が自分だけに絞られるようにと、立ち上がって葉っぱカッターをドサイドンに向かって飛ばす。すると、ちゃんとまたドサイドンは目線をチコの方へと逸らした。
「もう諦めて殺されてはくれないか……。卿の動きが鈍っているのは分かってるのだからな」
これまでのダメージと、技を出し過ぎたことで疲れの表情が目立つチコに向かって、ドサイドンは今度は岩の刃、ストーンエッジを

地面から引き上げて、チコへと向けて投げつけるように飛ばした。
為すべくなくチコはストーンエッジをモロに受け、倒れる。体への痛みが益々増すばかりだ。モココは涙目になりながら、チコが何とかしてくれることを祈っていた。しかし、体力的にもう限界が近付いている。
「……ぐっ……まだ終わってはないっ……」
だが、ここで負けては、その後にモココが殺されてしまう。現にドサイドンはモココも殺すつもりなのだ。命を背負っていることになる。チコは勝てないはずがないと、諦めずに立ち上がる。
だが、今度は右手の拳に火気のこもった炎の下段パンチで殴られて、更に冷気がこもった左手で空中で追撃を受け、また倒される。それでも……まだ立ち上がろうとしていた。
（チコリータ、もう嫌よ……！　逃げてよ……！）
モココは心の中で叫んでいた。目の前でやられ続けているのが痛々しくて見てられない。もうモココも限界だった。
「……しぶとい。だが、そろそろお別れだから関係ないだろう」
ドサイドンは角ドリルの準備を始め、体を貫いてトドメを差し、チコを完全に沈黙させようとしていた。だが、チコにはまだ残された、あの新緑という力が残っていた。あれはまさに、体力的に追い詰められた状況で自然に発動するのだ。
今は真夜中であり、太陽は昇っていない。だが今、バッグの中にはパワフルハーブという道具が入っていた。これがあれば、一撃で敵を吹き飛ばすほど強力であろう技である、ソーラービームを一瞬で繰り出すことができるのだ。
もう動かないと判断したドサイドンは、ずっと立ち止まっていた。そこに隙があった。今回はボスゴドラのような囮もいない。チコは力を振り絞って立ち上がり、体に湧く力を感じながら、葉に光を吸収する
「行けっ……！」
道具の力で通常の何倍も早く、薄緑版の光線を放った。ドサイド

ンの胴体にそれが直撃する。
「うがぁ！　がああぁっっ！！」
ドサイドンは叫び始めて、崩れる体のバランスに驚いたのか、そこら中をふらふらと走り回る。チコはぼんやりとした視界、倒れかけている体でそれを見ていた。
チコもモココも倒れることを祈っていた。……だが、ドサイドンは倒れず、しばらくすると、状況を確認するかのように立ち竦んでいた。
「そ、そんな……」
「ど…う……して？」
いくらハードロックという、相性の悪い技を受けても軽減するとは言え、ドサイドンが明らかな大技を受けて立ち続けているのを見て、モココもチコも、目を疑っていた。
だが、確かにドサイドンは今のダメージで我を完全に失っていた。だが、本来の意識と闇の意識が融合した物が、さっきまでのドサイドンの状態なのである。そして今、本来の意識は気絶し、まだ起きているのは、闇の意識のみであったのだ。
「……うがあああっ！」
ドサイドンは奇声を上げてチコに襲いかかってきた。もうチコに力は残っていなかった。間違いなく避けれない。チコは底知れない悔しさのを感じた。力不足だったが為に、負けてしまったのだと、申し訳ないという自責の念で一杯だった。
――エム、モココ、ごめん……。
再び敵への攻撃を始めたドサイドンの技、岩石砲を受けた直後に心中で言い、チコは薄れていく意識を感じた。
ドサイドンは誰かを殺す殺さないではなく、もはややみくもに目前の誰かを倒すという目的に変わっていた。命令の記憶が頭に入っていない為に、負かしたチコリータを殺す為のトドメを差していない。今、彼の標的はモココへと変わったのである……。
・

・　・

「気絶もしないとは……意外とタフな奴だ」　その少し前のことになる。ボスゴドラがエムにアイアンクローをしても、エムは意識を失うことはなかった。ボスゴドラは次なる技をと、実行に移す。両手で彼の体を掴んで逃げられないようにし、そしてアイアンヘッドで腹に二回頭突きをして、そのまま地面へ投げつける。

　エムは力ない声を出しながら地面に倒れ込んだ。だが、彼はまだ意識が残っており、ボスゴドラの方を向いた。そして立ち上がり、まだやれるとアピールするように、手をしゃくって挑発的な態度を取る。ボスゴドラはもう十分だろうと手放したが失敗だったのだ。

　追い込まれている立場のクセにと、ボスゴドラは挑発に乗り、エムにまた突進してくる。エムは今度は避けるつもりはなかった。無理矢理にでも受け止めて対処するように正面に立つ。

　エムは突っ込んでくるボスゴドラの懐に飛び込んで、電力をこめた左手を叩き込む。しかし、それはボスゴドラに受け止められた。

「それで勝てると思ったか？」

　ボスゴドラはにやけながら、エムを殴り飛ばす。だが、エムは地面にうつ伏せにされても、しめたという、まるで勝利したような表情をしていた。

　ボスゴドラがその表情を狂ったのかと疑うように見て、もっと痛めつけなければと、歩こうとする。……が、ボスゴドラは全身が痺れるのを感じ、思わず足を崩した。……そう、ピカチュウの特性である静電気が発動したのである。

「……かかったな。俺は他人に電気を移し……麻痺させることが……できる……。はぁ……はぁっ……俺はさっき左手を突き出したのはそれを狙っていたから……。お前は所詮この程度なんだよ……」

　エムは息を荒くしながら立ち上がって行き、説明する。お互い追い込まれているのは間違いないのだ。もう長い時間は戦えないと判断する。

「良くそんなボロボロの状態で偉そうに語れる……。お前ももう、倒れそうじゃないか……」

「なら安心しろ……次の一撃で…終わらせてやるからよ……！」

もうドサイドンもいない。エムは、残る体力を使い切って、ボルテッカーでボスゴドラにトドメを差すつもりだった。ボルテッカーを出す為に、手足を地面に付けて構え、全身から稲妻のような電気を出そうとする。……その時であった。

ボスゴドラの後ろに、バンギラスがいるのをエムは見つけた。そのバンギラスは、膝をつくボスゴドラの首を後ろから掴んだ。ボスゴドラは驚いて後ろを振り向く。その姿に覚えがあった。昔、彼がとある家で殺したはずのバンギラスだった。

「……俺に見覚えがあるようだな、ボスゴドラ。ならば、今から俺がお前を俺の母親と父親の元へ送ってやるから、あの世で俺の両親にずっと詫び続けな！」

そのバンギラスは、殺し屋当然の鋭い眼光で、後ろを振り向いているボスゴドラを睨めつけていた。

「あの時の……」

ボスゴドラは薄々と覚えており、小声で呟いた。エムは傷で状況が判断できないでいた。何故ここで突然バンギラスが現れたのか……。自らの戦いに集中しきって、忘れていたことがあった。依頼主は、モココが昔付き合っていた男であるということを。

そして、エムは構えを解くとフラフラとして、脇腹を押さえ込んで苦しみながらも、ようやく冷静になって物事の理解ができた。このバンギラスこそが、モココの探し求めていたギラノであるということを……。

28話　男の迷い（前書き）

ひっでぇのができた気がしますw

28話　男の迷い

麻痺をして体の動きを封じられているボスゴドラに、バンギラス、つまりはギラノに抵抗するすべはなかった。何の微笑みもなく、ギラノはマッドショットを撃ち、ボスゴドラをうつ伏せにする。

「どうした？　そんなに弱かったのか？　……いや、そうではない。本当に勇士が来てくれて、この男と戦ってくれたからか……。感謝しよう。だが悪いが……俺はコイツを殺すという義務がある」

ここでようやくギラノはエムの存在に気が付いた。あのピカチュウもボスゴドラもボロボロの体だったから、恐らく戦っていたのだろう――ギラノはそう悟り、エムに対して感謝する。

「……」

エムは何も言わなかった。しかし、ギラノに言いたいことは山ほどあった。だが、体が言うことを聞いてくれなかったのだ。

ギラノは殺意をむき出しにして手に力を込め、ボスゴドラにシャドークローで、闇のオーラに包まれた手を突き刺す。しかし彼にとって、決して快くはなかった。

「気分が悪い……。感触やら耳障りやら、やっている自分で恐くなる」

ギラノは手を元に戻し、ボスゴドラを蹴って言う。その時ふと、彼は不条理な理由で両親を惨殺された日からの行動を思い出す。精神的に混乱していたギラノはどこで何ができるかも分からずに、この島から出た。自分の邪魔になりうるだろう、メリープを置いて。

探検隊になる気でもないポケモンとの付き合いが自らの生涯を乱そうとしていたんだと彼は思ったのだ。ただ、強くなればいいんだ……そう彼は思ったのだ。

そして、彼は各地を渡り歩き、野生のポケモンと戦い続けるなどの修行を、孤独に続けた。突然訪れた悲運を、いつか晴らす為に。詳しいことは分からない。だが、世の中のふざけた者が、何の罪も

ない自分達へ災厄をもたらしたのだと思うと、憎しみが襲う。
普通、肉親が殺されるなどの目に遭えば、ショックで何もする気が起こらなくなるのだが、人一倍精神力のある彼だからこそ、復讐するという考えが起こったのだ。

……そして今、彼に迷う物はなかった。棘や針を直接突き刺したりするなどして、ボスゴドラに一方的に攻撃を続ける。
「ぐぐっ……ぐっ……」
エムとのバトルで体が負傷した上に麻痺していたボスゴドラに、ギラノに対抗するすべはなく、痛みでうめき続ける。どちらにしても、ギラノが来なかったとしても、エムにボルテッカーで負けていたのだ。
「何故平気でこれができた!?　この痛みが分からなかったからか？」
ギラノはボスゴドラの背中を踏んづける。こうして、過去にボスゴドラにやられたショックが和らいでいく気がした。……だが、いくらこのようにしても、殺された母親、どこかで処分されたであろう父親が戻ってくることはない。
「……ふんっ」
全く質問に答えようとしないボスゴドラにギラノは怒りを露わにして、リバースクローで倒れている彼を無理矢理引き上げて、木にまで背中を押し、叩き付ける。そして鍛えたうちに習得した破壊光線を、ボスゴドラに放ち、それは彼ごと木を貫き、一本の木を折り、完全に気を失って倒れるボスゴドラを下敷きにもした。
その刹那、ギラノは今まで溜め込んできた感情が、この瞬間に全て開放されていくことに気付いた。
「……ハハハハハハハ！　やった！　遂にやったぞ！」
ギラノは睨んだ表情を止め、高笑いをする。馬鹿にされて内心傷ついた強さへのプライド、両親を殺して平気な顔でのうのうと生きている奴がいるという怒り……様々な、今まで自分でも分からなか

った知らない気持ちがあったんだと彼は気付いた。一瞬、全てを忘れ去り、彼は喜びに浸っていた。

「なぁ……ギラノ、だな？」

エムに呼び止められ、ギラノは現実に帰った。

「あぁ、そうだ。今回、お前が依頼に協力してくれたポケモンだな？　名前は？」

「エムコルス」

「……なるほど、名が通っているポケモンじゃないか。どうりで仇討ちにまで協力してくれる訳だ。こんな所で強者に会えるとはな。だが、恐らく奴にやられたのであろう、その深い傷が心配だが……勇敢にやってくれた証だ。深く感謝しておく」

ギラノはここである程度の心の落ち着きを取り戻してエムに向かって話す。彼のことは、一流クラスの探検隊のメンバーとして認識していたのだ。ちなみに初対面の、それも味方に付いているポケモンに平気で「お前」呼ばわりできるのはエム以外にギラノしかいない。

「……虚しくないのか？」

エムはしゃがみ込んで、同情するような口調で聞いた。まだボスゴドラなどの敵から受けた攻撃の傷が回復せず、手で押さえて痛みをしのごうとする。

ボスゴドラは死んだとエムは見ていた。だが、自分の苦しみの元凶とはいえ、ただ殺したいが為に捨てるものを捨てたり……。第一、何故殺意が湧くのか、エムには分からなかった。

彼にだって、理不尽にも失った友がいる。だが、元凶を見つけ出して殺してやろうなんて思ったことはないのだ。

「虚しくてやらない。……そんなことは、心が脆い者が言う」

ギラノはハッキリとして答えた。

「心が……脆い？　それの何が間違っている？」

エムは少し不愉快に思って反論する。彼は自分の隠された、ふと出る心の弱さを、涙を流してからは自覚している。

「確かに変えようが無いことかもしれない。……おっと、まだ立ち話している場合じゃない。奴の仲間を何とかしなければ……。エムコルス、お前は怪我をしているようだし、お礼もしたいから、無理せずしばらくここで休んでいてくれ。探検隊ならお前には仲間がいるはずだな？　チコリータだったか……そいつはどうした？」

エムとの話にのめり込もうとしていることに気付いたギラノは、まだやるべきことがあると思い、周囲の探索へ回ろうとする。

「アイツならこの辺りでまだ戦っているはずなんだ……。心配で早く加勢に行きたい所だが、代わりに行ってくれるならありがたい。それに、そこにはお前の忘れ『もの』もあるはずだしな……」

「忘れもの？」

ギラノは一瞬振り返って聞くが、エムから答えが返ってくるのを待たずにここから去って下りて行った。

ギラノは、答えは自分で確かめるべきだと考え、彼はエムのパートナーが戦っていると言う場所へ急いだ。

……そして彼が見た、その光景の答えらしき物は、まさに彼にとって衝撃的だったのだ。

自分の父親であるに違いないドサイドン、アーサーが、見覚えのないようで、見覚えのあるモココに襲いかかろうとしていた。悪魔のような形相をしている。

――親父か……？　ああ、間違いない、あれはアーサー！　そして、襲われてる奴は……。いや、嘘だろ……？　なら何故今アイツがこんな所にいるんだ……？

状況としてはショッキングすぎて、ギラノは冷静になれなくなった。辺りには乱戦があった跡のように、多くのポケモンが倒れていた。

あのエムコルスが言っていたチコリータは、傷だらけの体で気を失って倒されていた。状況から把握するに、アーサーにやられたに間違いなかった。

「……誰か……誰か……！　エムコルス、チコリータ……、ギラノ！　助けてーっ！」

今はここにいない者、負けて意識を失ってしまった者、自分を見捨てた者……モココは普通に考えれば助けてくれるはずもないポケモンに助けを求めていた。だが……この三匹のうち一匹が、この状況で彼女を助けることができた。

ギラノという名……今の状況で呼ばれるはずもない自分の名前。だが、確かにあのモココは名前を言った。ギラノは確信した。あの自分の知っているメリープから進化したポケモンだ。確かに未だに自分は覚えていたのだ。自らの弱さになるの防ぐ為に、置いてきぼりにしたポケモンのことを。恋をしていた彼女のことを。

名指しで助けを求められたのだし、嫌いだったのでは無いのだから、助けて当然だろうとギラノは思った。だが、数秒経っても、意思とは違って彼は動こうとしない。

――なんで……体が……？

ギラノは、怪我しているわけでもないのにも関わらず、動いてくれない体に疑問に思った。ふと、彼は今までの自分と違う気持ちがまた現れていることに気付き、その理由はすぐに把握してしまった。今、瞬時に行動できなかったので、アーサーとモココの距離は近い。

もしここで助けたら、また付きまとってこようとするかもしれない。自分は道を外すかもしれない。だがここでモココが死んでくれれば、今度こそ、今少しだけ意識に蘇ってしまった「恋愛」などという邪道な道から捨て去ることができるだろう……。

――馬鹿な！　なんで親父に誰かを殺させようとしなけりゃならないんだ！　俺は俺だ！　また助けて何が悪いんだ！　死んだと思った親父も助けるチャンスじゃないか！　早くしろ！

今まで自分をひたすら支配してきた想い、眠り込んでしまっていたが、たった今徐々に復活してきた想い……様々な想いが、ギラノというポケモンの行動を邪魔していた。彼は目を閉じて迷い続け、動こうとして動けていない。

しかし、無常にも時は訪れる。ドサイドンのアーサーは腕を上に大きく振り上げた。アームハンマーで叩き潰す気なのだ。そして……

29話　ご対面

「うわあああああ！！！」

今にもモココがアーサーに潰されそうになった時、ギラノの体は動いた。ほぼ無意識的に。気付いたら、彼はモココを抱きかかえてアーサーからの攻撃を避けさせた。ギラノは、モココを助けたのだ。

モココにしてみれば信じられないことだった。今、自分を抱いているのは、紛れもなく、大きく成長したギラノなのだ。

「ギラ……ノ？」

目を潤わせた彼女の目線の先には、ずっと探し求めていた男がいた。やはり生きていたのだ。死んでいる訳はないと思っていたが、まさか、この場で助けてくれるとは思っていなかったのだ。

「ああ、間違いない。確かに俺だ。

「やっぱり……ギラノは……私の……」

ギラノはメリープから以前より成長した姿のモココをとりあえず急いで安全な陰となる場所にまで連れて行く。幾つか彼女も傷を負っているようだ。そして、モココは頬を赤く染めていた。

「か……勘違いをするな。別に……お前だから助けた訳ではないんだからな」

ギラノはそこを強調して、アーサーから一瞬の隙を見て隠れ場所へモココを避難させた。

「ギラノ……ツンデレ……」

モココはあっさりギラノへそう言いきってしまった。

「止まれ……来るな……待ってくれ……」

まだギラノは迷いの中にいる。アーサーのことだ。何とかして助けられないだろうか？　そういう気持ちがあった。具体的に何があったのかは分からない。だが、何らかの形で洗脳されたのは間違いない。

ギラノは噂には聞いていた。最近、不思議のダンジョンの奥地な

どに、闇の創世者を名乗る者達が、縄張りに入り込むだけならまだしも、そこにいるポケモン達を襲撃して追い出してしまうのだ。

また、自分達を潰そうと働いた者は、血縁者などの、それに関わるポケモン達を含めて全て抹殺するか、捕らえて洗脳してしまうと言う。まさにこれこそ、ギラノが遭ったことなのだ。あのボスゴドラは、闇の創世者を名乗る者達の一部だ。実質的に、アーサーも完全なる仲間。

――要は、もう倒すしか他ないのだ。しかし、ギラノはどうしてもアーサーを倒す為に体が動かなかった。二度目の決意が必要……それでも、どうしてたかが攻撃に迷うことがあるのか。それが自分でも今度は全く分からなかった。

「聞いてくれ！　俺だ！」

今度はギラノの方へゆっくりと歩いていくアーサーに向かって、なかなか決断を下せないギラノは叫んだ。

「……」

偶然にも耳の鼓膜が、覚えのある声を受信し、アーサーの脳内で記憶が螺旋状に渦巻き、再び呼び起こされ始めた。

その光景はあたたかい。隣でバンギラスとヨーギラスが微笑んでいる。床に座り込んでいた自分の背後から、ヨーギラスが不思議そうな表情をしながら自分の顔を覗き込んでくる。彼はムスッとした顔になっていて、可愛らしかった。

「……たお……」

ギラノが聞き取った言語は、言葉として成り立とうとしたものだった。それはアーサーが一瞬だけ取り戻した意識から発した言葉。しかし、すぐに彼は元の暴走した状態に戻った。

「親父、俺は……」

彼はそれでもまだためらった。倒してくれと言おうとしていたのだと分かってもためらっていた。

「……すまない！」

目を瞑り、雑念を消してアーサーの方に飛び込み、突進して彼を

止めた。打系への衝撃に強いとは言え、傷が深いアーサーはそれだけでもがき苦しみ始める。それも少しの間で止まり、アーサーは鋭い目つきを緩やかに変えた。ギラノの顔を彼は上げて覗く。最後にアーサーは、にこやかに微笑み、地面に力無く倒れ込んだ。

ギラノはその後、目を丸くしながら、無言で立ち尽くしていた。

「ギラノ……」

こっそりと彼を覗き、寂しそうな背中を、モココは見つめていた。もう敵はいないだろうと自己判断し、話したくて、緊張しながらギラノの方へと寄って行く。彼は崩れるように膝を付いた。

「お前は邪魔だ、近寄るな……！」

「ひぇっ……」

ギラノに脅しかけられ、モココは怯えて彼の方から退く。彼は結局は何も変わってなかったのかと、彼女は泣きたいぐらい悲しくなる。

そして、身の体力も戻って動けるようになり、急いで向かっている途中、時空の叫びで見た場面を遠目から目撃したエムが、ギラノ達のいる側と合流した。

「……ああっ…！」

まずはと、ドサイドンの奥を見ると、チコが痛々しい姿でぐったりと倒れているのを見つけた。やはり自分の提案が大失敗していたと後悔しながら、何より先に優先し、駆けて彼女の方に向かった。

「大丈夫か？」

エムは、チコを静かに抱え起こす。体の傷が深く、辺りで倒れている数多くの敵と戦ったことがうかがい知れた。

「ううっ……」

チコは目を覚まし、自分がまず何をしていたかを思い出そうとする。とりあえず無事なのを見て、エムは安心した。

「……モココは！？」

エムは無事……他に、自分がいなければ確実にモココが殺されて

いた状況だったことを思い出し、チコは辺りを見回す。
「えっと……無事みたいだ」
エムとチコが見た所、ギラノはさっき対峙したドサイドンの前で沈んでいるようだった。その少し離れた場所にモココがいた。
「良かった……。いや、負けてごめんね……」
「いいや、この場で一番頑張ったのはチコだろう……。別に謝ることじゃない。第一、ここにいてくれと言ったのは俺だしな」
チコは改めて、痛みに苦しみながらエムに謝る。エムは気にしていないと言うように、頭を横に振った。
――にしても、あれは話に出てきたあのドサイドンのことだったのか。だからあんな風に……。
思い出しが早い彼は、あの様子を見て、すぐに何故彼が悼むように座り込んでいるのかを理解した。そういう気持ちは、彼はかつて、嫌という程味わった。
「っ……ダメージが……」
チコは立とうとすると、体から痛みが走り、足が崩れ、立ち上がってから歩けない。
「……おい、手負いの状態で無理するな」
「いや……私は大丈夫だから」
心配するエムの命令には従わず、チコは何とか立ってから歩き始めた。変な所で意地を張るなよと思いながら、ギラノにエムは歩み寄った。
・
・
ギラノはずっとアーサーの前で座っていた。もう、いくら揺すっても動こうとしなかった。死んだようには思えなかったのだが、彼は諦めざるを得ないことにようやく気が付いた。
「……親父は、この島の役人だったんだ。だけど、奴らに逆らったばかりに、返り討ちに遭い、俺達は皆殺しにされることに……。気が小さかった癖に無茶しやがって。そんな中、俺だけが偶然生き残

れた、メリープだったこのモココのおかげでな……」
　ギラノはエムとチコは心情を吐露するかのように話していた。同情してほしいという意図なのか、ただ話したいだけなのかは分からないが、今の彼は虚ろだった。
「……なのに、どうして見捨てたの？」
　本題に入ろうと、チコがギラノに聞いた。
「……弱かった原因となったことを悟ったからだ」
　ギラノの主張することは変わらない。恋という雑念が成長を妨げていたと、彼は今までずっと信じてやまないのだ。

「ギラノ、モココはお前といたいと想い続けていた。人格的に似た奴にまで執着するぐらいにな」
　エムが言うと、ギラノは頷いて、面倒そうな表情をしながらモココの方へと向き直った。
「そうか、気分的にも落ち着いてきた今こそ、ハッキリと教えてやらなくてはな。モココ、愛などというものは己の弱さを生み出す。その証拠に、俺が弱かった」
「そ、そんな……！」
「別に嫌いと言っている訳じゃない。俺には奴らを叩き潰すだけの強さが必要だった。そんな余計な物は、捨てるべきなのだ」
　ギラノは迷いもなくモココに言い切った。モココは、やはりギラノは変わったのだと認めかけていた。ギラノにとっては、エムコルスもチコリータも退けて、モココを納得させなければ……という状況だった。更に今、捨てきれていないことを悟られてはならなかった。
「だからって、見捨てて行方不明にならなくてもいいだろうが……。取り残された奴の感じる喪失感を知れ」
　エムがギラノの様子を窺うようにして、また言ってきた。
「そんな物は深く味わっている。だが、確かに行方を知らせなかったのは失敗だったかもしれない。こうして今、ここにいることが、

俺の考えを理解してくれなかったことになるからな。理解してくれないこともまた、それもお互い通じ合えない理由にもなる……。それで……」

ギラノが今、こうしてずっとグチグチと話している時、モココはあることに気付いた。ギラノは変わったと思っていたが、とあることに気付く。もし自分に対する想いを捨て去ったなら、毛嫌いせず普通に赤の他人のように振る舞うだろうと。そうでないのだから、こうしてずっと説明しているのだと。だから、ギラノは全く変わってはいないと……。

「もう♪　エムコルスもチコリータも分かってないわねー。だから平気で男と女でチーム組めちゃうのよ？」

悟ったようにギラノの横から口出ししてくるモココ。明らかに彼女のモードは急変している。

「はあ……？」

もう、チコと仲を煽られることにも慣れてしまったエム。そして、モココが何をしたいのか分からず、首を傾げる。

「ギラノはツンデレだから、私達だけになったら、きっとデレデレになるに違いないのよ♪」

モココは、さっき近寄るなと言われたのにも関わらず、ギラノにすり寄ろうとする。だが、ギラノは何も文句を言わない。

「つんでれ……？」

「それなんなの？」

……と、良く分からない言葉しか出てこないエムとチコ。ギラノは、本来のモココのテンションを思い出して、たじろいでいる。

「……じょ、冗談じゃない。だから俺はお前とはいれないと……」

ギラノは明らかに態度が変わっているが、まだ言うことは変えようとしない。あのムードこそ、彼の知っているモココ、元メリープだったのだ。

「じゃあ、私もこれからダーリンのこと、何でも手伝うよ♪　それでもダメ？」

「……」

ギラノはどうしても認めることができず、震えて黙り込んでいた。やはり、エムやチコは、こういうことに関する説得は今一つだったのかもしれない。一番ギラノを知っているモココ本人が、何を考えているのかを悟れて、適していたのかもしれない。

30話　完全解決

――やったやったやった！　またあの頃のギラノが戻ってくるのよ！
モココはギラノが承諾する返事をする前から、彼の様子だけを見て喜んでいた。
「や、やっぱり昔から変わっていない。……だから、お、お前はふざけるな！　俺に執着しやがって。お前の存在が弱点になると……な、何度言えば分かる」
完全にギラノは戸惑っていた。周りのある重要なことに気付かないくらいに。
「あーっ、確かにそうよね、言葉が噛み噛みだからねぇ。私が好きすぎて♪」
「……っ」
モココに言われたことに、ここでギラノは完全に詰まってしまった。認めたら、今まで言ってきたことを全て否定することになってしまうし、否定したら、彼女は大泣きするかもしれないし、自分に嘘をついた気がしてしまう。
既に、そんな二匹だけの世界が戻ってめでたしな気分になっているエムとチコが再び辺りの状況を見回すと、ある重大なことに気が付いた。
「ドサイドンがいない……！」
エムが、その彼が倒れていたはずの場所を指差して、ギラノにも教える。
「……なんだと」
ギラノも、アーサーがいたはずの場所を見る。確かに、消え去っていた。死んではいなかったようだが、一時的に元の意識を取り戻させておきながら、救えなかったのだ。また誰かにこき使われる――彼にとっては、想像しただけで嫌になる。
「このことに関して大体想像はつくが、一体奴らは何なんだ？」

エムが、マグカルゴの時を思い出して首を傾げる。ボスゴドラを含めて、「闇の創世者」を名乗る奴らの仲間に違いなかったと確信する。

――マグカルゴを倒したあの時、奴は不自然な消え方をした。まるで吸い込まれるような……。不思議な生命力だ。まるで死んだように見せかけた後に忽然と……。ということはボスゴドラも消え去っているのか？

エムは階段の上を再び眺める。自分達にとって一番重要なことを解決していないことに気付く。

元は、中枢部にまで入り込んで一気に潰すつもりだったが、敵が名指しで殺しに来た為に戻って来ている。一方でモココは目的のギラノともまた会えた。彼女に関しては解決しているが、ギラノに関しては解決していない。

「どうやら、まだ呑気に話はできないらしい。今度は全員で中に乗り込むぞ」

「あれー？　私も？」

このエムの言い方だと、モココも連れて行くことになる。明らかな足手まとい扱いをされていたさっきとは違う様子だ。

「ギラノに護衛してもらえって意味じゃない？」

チコがそう言うと、

「なっ……そんなこと……」

ギラノは焦って後ろに退いた。守る……かつてやったことはあるが、今となってはとてもしづらいことだった。

「俺達もここまではやったんだからな。お前にできないワケがないだろう」

説教するかのようにエムはギラノに詰め寄る。仕事柄でいいからしてくれという気分だった。

「……わ、分かった」

長い沈黙の後、ギラノはようやく承諾した。

（やりぃ！）

さすがにこれ以上は喜びを表現したら嫌がられるということに、珍しくモココは気付いたのか、ガッツポーズをしたのはあくまでも心中だった。

・
・

「なんだ、負けたのか……。やはり私が傍観していても消える、そんな弱い存在ではないらしい。だが、まだ姿を曝すにはいかない。そろそろここからも離れてやろう……」

ダークライがそう言った頃には、エムはすぐ側にまで迫っていた。だが、建物の中にいるが為に、見えることはない。そして、ダークライは彼らを恐れて逃げ去った。仲間は全員、負けたのだ。

エムコルス、チコリータ、ギラノ、モココが階段を上って行くと、もうそこには誰もいなかった。そして、ギラノにとっては痛恨の事実があった。

ボスゴドラも消え去っていた。殺したはずのボスゴドラが、ポツンといなくなっていた。生きていたというのか……。

「くっ、奴め……！」

周辺を探し回っても見つからなかったボスゴドラ。ギラノは腹立たしさで思わず地面を殴りつけた。

「落ち着け、誰かが回収した可能性もある」

「誰かって誰だ!?」「奴らがリーダーなワケがない。命令に従ってるようだった。つまり、ここにはまだリーダーがいるってことだ……」　落ち着いた口調で言うエムに対して、ギラノの口調は今、荒々しい。

「ダーリン、落ち着きが重要だって私が言ってたよ～♪」

「……」

モココの言っていることにギラノは何も言わなかった。自分は、野生らしからぬこのムードの明るさが好みだったのだろうかと、自身に問う。……否、それどころではないと、今は自答した。だが確かに今、彼は彼女のおかげで落ち着いた。

エムが建物の中に乗り込もうと、開いた網戸の中を覗く。気配は何も感じない。だが油断はできない。

「どうお？　誰かいる？」

「さぁ……」

エムとチコが入り込み、その後ろからギラノとモココがついて来る。中は不思議のダンジョンの通路のように暗い場所だ。一歩先しか見通せない。誰もいないというのが不自然で、確かにこの辺りにいるはずだった。しかし、見当たりはしない。

「逃げられたのかな……？」

チコの言う通り、リーダーは何度か出会ったような、逃げるお尋ね者のようなのかもしれない。もしくは、最初から存在しなかった可能性もある。

真実は、リーダーは、ボスゴドラもドサイドンも、雇った下っ端も、全員が負けた為に、逃げたというのが正しかった。もうここは用済みだということなのだ。

「臆病な野郎共だ……」

「そうねぇ、本当にそうねぇ」

ギラノが言うことにモココも同意する。が、だが、いくらここに強者が集結したと分かったからと言って、逃げてしまうとは。

「だが……逆にこうも言えるからいいかな。俺達は故郷から、『闇の創世者』の奴らを追い出したんだ……」

ギラノは、溜まってきたストレスが吹き飛ぶような気がした。ここにもう、憎き者達がいないと思うと、守りきった気持ちが強くなる。ストレスを感じるのも、ボスゴドラのような者の存在があったからだ。消滅したかのように思うと、何の憤りも感じなくなる。結局、四匹の見つけたものは、アーサーが閉じ込められていたと思わしき場所だけだった。

そして、そこを離れて再び向かった先の街の者達の表情には、ギラノには見覚えのない、笑顔が見えた。とある者が消えたおかげで、

力の影響が失せたのだ。彼は目を丸くしてそれを見ていた。
　万事解決。最高の形で戦いを終えて、伝える必要も何もないと、全員がそう確信したその後、全員はとりあえず島を出ることを決意し、ギラノも別場所で利用した為に一匹増えているペリッパーに乗って、トレジャータウン周辺へと帰って行った。
・
・
「フッ、今頃奴らは私がいないと嘆いているだろう。まだ姿を見せる必要はない。次なる作戦で奴らを潰すのみ……。覚悟するがいい。エムコルス、チコリータは貴様らさえ消えれば、新たに世界が始まるのだからな……！」　既に島から去っているダークライが、そう呟いていた。太陽を嫌う彼は、夜空の浮かぶうちにどこか中に入り込まなければならず、クレセリアにも見つからないような、新たな拠点地を探している途中である。空間の神が存在する場所を崩し終えた今、もはやフォルド島は用済みだった。
・
・
――本当にそうしていいのだろうか……。
　どんな体重にも耐えきるペリッパーの上に乗りながら、ギラノは考えていた。モココは「何でも手伝う」と言ったが、これから一緒に過ごしていっていいのだろうか……と。
　必ず邪念が弱さを生み出すと彼は未だに思っている。エムコルスとチコリータのような、淡々としたような関係ではいられないような気がする。間違いなく、想う気持ちが高みを求める気持ちを妨害する。
　取り残された者の苦しみ……。モココもその時味わった。もちろん、それは彼も味わっていたに違いない。
　護衛……？　まもる……？　それで、強くなれるのだろうか。そんなことは考えたことがない。さっき、確かに自分はモココを護ろうと入れ込んでいた。もしかしたら、それもまた強さに繋がるのだ

ろうか――島からあの軍団を追い出して、やがて落ち着いてきた彼は、決断した。

「決めた。モココ、俺と来てもいい……」

「……え？　ダーリン、今なんて言った？」

不意にギラノがそう言った為に、モココは耳を疑っていた。

「な、何度も言わせるなよ」

「やったーー♪」

「……聞こえてたのかよ」

その光景をエムとチコは見て、この依頼は、大成功を収めたのだなと、つくづく思い、お互い顔を合わせて微笑みあった。タウンに着く頃になると、もうすぐ夜明けという時にまでなっていた。陽が落ちる前から陽が昇る時まで、戦い続けたのだ。

海岸に帰ったエム、チコ、モココと、初めてここに来たギラノ。後は別れるだけだった。ギラノとモココは、いつもの依頼主以上に、エレンシアに感謝していた。「本当に、ありがとう」と。報酬は高かった。だが、それでは払いきれないほどの物が、ギラノとモココにはあったのだ。全ては、エムコルス、チコリータ。この二匹によるチームがいたからこそだ。

「さすがは英雄だった。一緒にしばらく行動をできたことを光栄に思う」

「そりゃどうも」

モココの存在のおかげか、あっさりと落ち着いたギラノは、過去を忘れ去ることを決意した。もう、今を向けば、何も痛くはない。アーサーに関しても、元に戻ってくれる僅かな可能性を待ち望むのみだ。それは決してありえないことではなかった。

「チコリータ、じゃあね。色々楽しかったよ♪」

「はは、まあねぇ」

モココの言う楽しかったというのは、罵言吐きだとか、イタズラだとか、事故見せかけ攻撃だとか……。

背の高さが全くもって違うようになってしまったギラノとモココだが、二匹揃ってトレジャータウン付近からも去った。

エムとチコは、自宅であるサメハダ岩に戻ると、入ってすぐに眠りに入ってしまった。本来寝る時間帯に活動していたのだから、それもそのはずである。

・

・

「ダーリン、まずは何する～？」

「まずはデンリュウに進化できるように修行だな」

「デンリュウかぁ、凄くデカくなるんだよねー。了解♪」

ギラノは、モココといたら復讐なんて馬鹿馬鹿しくなってしまった。モココに魔性でもあったのか、彼女に意思をほぼ正反対に変えられてしまったとも言える。

――奴らは、あのエレンシアが潰してくれればいい、俺は奴らを追うのから止めよう。もう不幸はまっぴら。これからは、このモココと共に、探検隊でもやろうかな、昔のように、幸せに……。

31話　ハッサムの話

あれから陽は昇り、空は青く澄んでいた。昨日の今日の戦いが遠く離れた地であり、島を支配する闇が消え去った。一匹のあるポケモンの一生は変わり、もう一匹はまた幸せな日々を取り戻した。だが、これで何かが変わったかといえば、そうでもない。

世にはまだ、途方に暮れたポケモンが数多くいるのだ。時の破壊が防がれたからと言って、不思議のダンジョンが消えたりはしないし、犯罪が減ったりもしない。おかげで被害を被るポケモンは絶えない。そして、今は密かに活動を続けている組織もいる。

今、トレジャータウンの付近にあるカフェでは、アルコールと穀物が搾取できる木の実を持ち込んで、それをパッチールに渡しているポケモンがいた。種族はニョロボンであり、筋肉質で紺青が目立つ体、だが中心だけが白く、その中心には渦巻き模様が見える。気が短くは見えるが、大人しい。

しかし、自暴自棄になっているのか、席に着くと、机に顔を伏せてブツブツと何かを呟いている。

「あぁ……ワシゃもう何をしてもダメ……。どうしりゃいいんじゃ……」

カフェにいるポケモンが笑顔に包まれている中、この年老いた声をしているニョロボンだけが後ろ向きに生きているように感じられる。だからそれが誰の目にも入らないはずがない。一番気にした常連は、バリヤードであった。

「君、ちょっとどうしたんだい？」　ニョロボンの向こう側にバリヤードは座り、頬杖をついて話しかける。

「あぁ……。こんな落ちぶれた年寄りと話をして何がしたいんじゃ？」

「いやぁ、気になってねぇ」

「じゃあ知っておるか？　ハッサムという探検家を」

「もちろん知っているよ。あの伝説となった彼だね」
「その通りじゃ。忍者っぽい奴だったあの男と、探検家として、各地の宝を情報交換したり、競争したりしながら見つけていた頃は良かった……」
「ハッサムは探検隊連盟、ＰＥＬの一員だったよね。ということは、君もそうだったのかい？」
「そうじゃ。まぁ今では脱退したがの。で、知っての通り、ある日ハッサムは、氷雪地帯にある吹雪の島で行方不明になった。ワシもそりゃ救助に行ったよ。だが、ワシの仲間も含めて全員が失敗した……」
「お待たせですぅ～」
ニョロボンが話している途中、パッチールが飲み物入りのグラスを持って来た。ニョロボンはグラスを受け取り、その飲み物をじっと眺めた後に、ゆっくりと飲み始めた。
「……それから、ワシの探検に対するモチベーションは下がって行き、更には年齢的にも厳しくなり、衰え始めた……。敵に勝つこともままならなくなって、やがては無一文の貧困生活に……。で、探検はもう何一つ成功せず、この有様じゃ、もう助けてくれるようなポケモンもいないしの……。なんて情けないんじゃワシは……。せめて、若ければ……」
「なるほど……。でも、そんなハッサムを助けることができる可能性のある、とても強い探検隊なら、この近くにいるよ。ハッサムがいれば、君もまた楽しく過ごせるかもしれないし、僕達にとってもいいニュースになるさ」
「ん～？　でもそんなの、どうせ威張ってるだけの若造じゃないのかね？　あの時のワシすら全く進めなかったんだからのう……」
顔を上げたニョロボンの飲んだ物は酒だったのか、顔が赤くなっている。実はパッチールは、アルコールの強い「ウォッカ」と呼ばれる酒を造ってしまっていたのだ。
「……いいや、あの探検隊の二匹のポケモンは、破滅しかけた世界

から救った英雄なんだ。絶対に並ではない。そして、今まで突破できなかったダンジョンはないとも言われている。君も、そんな探検隊、エレンシアに賭けてみてはどうなんだい？」

「……うー、ギャンブルなんて嫌じゃのう……。麻雀なんてできんし……」

バリヤードが相変わらずの無表情で話している時に気付いた。ニョロボンが明らかに酔っている。試しにグラスの中の飲み物のニオイを嗅いでみると、なんの酒なのかが分かってしまった。

「……いや、賭けるってそういうことじゃないよ……。うん、君はウォッカを飲んだね。そんな強い酒飲んで大丈夫なのかい？　しばらくここで寝ていたらどうだい？　ここのみんなは優しいから面倒を見てくれるから、話もできてきっと楽しいと思うよ。エレンシアには、僕から言ってみるからさ」

「……こんなのに構うのかい。今時の若者はめでたいのう……」

・　・　・

数時間後、そのエレンシアがカフェに入ってきた。もう昼間なのにも関わらず、まだ寝起きのようで、エムの方はあくびをしている。

「やぁ……連日の探検でお疲れみたいだね」

早速席に座り込んだエムとチコに、バリヤードは近付いて話しかけてきた。

「連日というか……真夜中に依頼に出かけていただけなんだが、なんか用か？」

誇ることも自慢することもせずに、エムはバリヤードに聞いた。

「へぇ、僕達が寝てる時間帯にするとは、さすがだねぇ。で、用とは、探検スポットと救助の話さ」

「どんな話か、聞かせてよ」

チコが耳を傾ける。

「有名な探検家、ハッサムの話さ。まぁ、有名人に全く興味がないことで知られる君達のことだから、教えようか」
「……ああ」
エムは「それの何が悪いんだ」と言いたげだった。
「ハッサムは世界に名を馳せた有名な探検家。探検仲間はいたが単独だった。そして、そこでみんなと話しているニョロボンは、彼の仲間だった。
彼は、探検家なら誰もが憧れる存在だったよ。だから、彼のことを知ろうと、彼を知るニョロボンに多くのポケモンが集まっている」
ニョロボンの考えとは裏腹に、ぐうたらしているニョロボンの周りにはカフェの常連のたくさんのポケモンが集まっている。顔を見ない客ではあるし、ハッサムのことも聞いてみたい。もちろん、決して「自分には興味ないのか」と思われないよう、彼自身のことも皆は聞いていた。少しずつだが、彼は喜びを感じてきていたのだ。
「で、ハッサムは一体どうしたの？」
「うん、南西の果てににある吹雪の島を探検中に行方不明になってしまった。彼を助けに、ニョロボンを含めてたくさんの救助隊や探検隊が現地に向かったんだけど、
凍てつく寒さと吹雪、その中で襲ってくるポケモンの強さに阻まれ、救助は打ち切られてしまったんだ。ニョロボンも年を食っているように、もう昔の話だけどね」
「だから、助けに行けと？」
「その通りさ。ハッサムは珍しい宝を探していた噂だよ。エレンシアはかなりやり手の探検隊じゃないか。あれから吹雪の島に挑んだ探検家は誰もいないけど、ひょっとしてエレンシアなら行けるのではと思ったんだ」
「……」
バリヤードの話を聞いて、エムとチコはニョロボンの方を向いた。ニョロボンに興味津々で皆が集まっている。凄い探検家だったとし

ても、それに関して興味はないが、救助活動や宝の調査なら引き受けたいと思っている。

「吹雪の島は、この辺りの氷雪地帯の島にあるな……。だが、厳しいようなら、一日はかかる可能性がある。ちょっとつい半日前の夜中には敵とやり合ってな、だから明日に行かせてもらう」

「昔の話となるとハッサムが生きてるとは思えないけど、最深部まで行けるよう頑張るよ」

エムとチコは立ち上がり、間接的なニョロボンの頼みを引き受ける。だが、フォルド島であった戦いの疲れを完全に抜く為に、今日一日は町で休養することにした。

「おおっ、意欲的だね。頑張ってね。おーい、エレンシアが吹雪の島に挑戦するようだ！」

バリヤードがカフェの中で叫んで、難関ダンジョンらしい吹雪の島へ行くエレンシアについて、話を広めようとする。ニョロボンの周囲にいるポケモン達がその話で盛り上がった。

「……エレンシアって、あの体格の小さいポケモンのことかの。本当に、大丈夫なのかのう……」

ニョロボンには、エレンシアの二匹は今一つ頼りなさそうな姿に見えた。一人前らしい顔つきをしているが、やっぱりハッサムや自分が行けなかった所で成功するとは、考えにくかった。

それにしてもエレンシアは、危険な場所へ、何度も何度もよく行っている。これまでの経験と比べれば、という考えなのだ。

31話　ハッサムの話（後書き）

ハッサム、吹雪の島ではっ！　さむっ！
いやー、今日は暑かったですが、皆さんはこれで良く冷えましたかね？

32話　吹雪の島へ

翌日、早朝からペリッパー飛行隊のペリッパーに乗って、エレンシアの二匹は吹雪の島と呼ばれる孤島に向かった。フォルド島よりは到着まで時間はかからなかった。ただ、近付くにつれて気温が低くなっていく。島は無人島と言えるぐらい静まり返っていた。まだ海の近くにいて、ダンジョンの中ではないからだ。内部へ行けば、様々なポケモンが潜んでいる。

もちろん、ここで寒気を感じるのは当たり前だが、実は昨日のうちに対策していた。まず、防寒用に首に巻くマフラー。スカーフの上に被せる。そして、直接身に付ける防寒着だ。どうやって手に入れたかと言うと、トレジャータウンのカクレオンの店に聞き、そしてあったのをタダでもらったのである。誰も手に入れないから放置していたらしかった。種類とサイズもたまたまちょうどいいのがあり、まさに幸運だった。

「なんか違和感があるような、ないような……不思議な感じだ。そっちはどうだ?」

見るからに重装備なエムコルスとチコリータ。動きを抑制される感覚はないが、寒さを多少シャットアウトし、暖を取れている。エムは寒さは特に苦手でもないので、少しは「寒いな……」と感じたとしても、これで十分なのである。

「私は違和感しかないかな。これでも凄く寒いし……」

チコはぶるぶると寒さで震えながら体を縮め込んでいる。草タイプは寒さに弱い。ある程度の装備を施しても寒さがなくなる

「なんだよ、怖がってるように見えるぞ」

「そんなことはないよ……」

「まぁ、直に気温には慣れるってもんだ。さっさと行くぞ」

エムはバッグの位置を調整してから、ダンジョンの中に向かって歩き始める。それにチコもついて行った。吹雪の島の探索が始まっ

たのである。
「にしても思ったんたけどさ、人間って、常に着物を身に付けてる生き物だったって言うじゃない？　エムがそういうの着ても慣れた感じなのは、そうだったからじゃないかな」
「さぁ……全く覚えてないな。単に未だに思い出せないだけだが……」
　ダンジョンの中にいるポケモンを、エムとチコはこういう雑談ができるぐらい、簡単に蹴散らす。吹雪の島とは言うが、実際には水タイプが多く生息している。二匹にとっては得意なタイプなのだ。
　しかし、最大の敵となるのはやはり評判通り、気温と天候だった。気温は島に上陸した時よりも低くなって行き、空からは水蒸気が氷結して石のようになった霰が吹雪となって乱れ降る。霰はダイヤモンドのように固く、当たると体に痛みが走る。そして目に霰が入らないように、目を塞がなければならない。
（まだ抜けれないのかここは……。霰がチクチクしてくる上に、寒い……）
　目前の視界が塞がれて、厳しい状況だ。これでかつては救助が打ち切られたのだ。だが、不可能ではないことは分かっている。ハッサムがここまで見当たらないということは、彼がここを乗り切ったということなのだから。
「チコ、大丈夫か？」
「うん……何とか……」
　チコはエムの背中にいることで、前方から来る吹雪を塞いでいた。少々ズルいようにも思えるが、草タイプなのでこうでもしないと乗り切れないのだ。
　この吹雪を止めることができれば——吹雪さえ止まれば何とかなるとエムは思っていた。今の状況だと前を見ることができない。これは凍え死ぬという問題だけではなく、前方が確認敵ポケモンの不意打ちを受けることとなる。
　今だって前方が壁だと、針を正確に前方へ投げたり、手を前に出

したりして確認している。針を前方に投げることは、その針の刺さる音がすることで、敵ポケモンの存在を知ることにも有効であり、高難易度ダンジョンの探検のテクニックの一つともされている。

そうして銀の針をエムが投げた時であった。グサッと何かに刺さった音がした。

（誰かいる……！）

そうエムとチコは思って、身構えて、目を少しだけ出して、目を凝らして前方を確認する。

「痛いのだ……。いきなり酷いのだぁ～」

視界に現れたのはさほど大きなポケモンではなかった。ペンギンのような姿をしたポケモン、ポッチャマだった。背の高さはエムやチコとさほど変わりない。涙目になりながら、針を地面に投げ捨てる。

「……あ、分かったのだ！　犯人は君達……。こんな吹雪の中で……。しかも、僕とあまり変わらなさそうな……。なら覚悟なのだ！」

ポッチャマは、エムに向かって、見るからにレベルの低い体当たりを真正面からしてきた。エムとチコは左に二歩避けて、隣にきたポッチャマを手で頭を地面に向けて叩き付けた。

「……見た目は似ててもレベルは違うんだよ」

人間の時から、戦いを重ねに重ねているエムは、そうポッチャマに言った。

「うー……。こうなったら……覚えておくのだ！」　ポッチャマはあっという間に奥に消え去った。何か一つの不思議球を落として。何だろうとエムが確認すると、その不思議球は、雨球だった。すぐに使用した瞬間、吹雪は止まり、霰は雨粒へと変わっていった。

「すごいね、さっきのポケモン。私達を助けに来たんだね」

吹雪が止まり、厳しい天候でなくなって気が楽になったチコが、そう言った。気温は低いままで、まだ少し体が震えるが、直に少しは上がる。一気にダンジョンの難易度は下がった。

「それで、今は雨だけど……また吹雪になるかもしれない。エム、

急ごう」
「ああ」
こうして、この後に吹雪を味方に付けるポケモンと会っても苦戦することはなく、エムとチコは寒さ厳しい山中を抜けた。あのニョロボンを始めとする者達は、ここまでは来ることはできなかったが、エレンシアはたどり着いたのだ。しかし、抜けた後にありがちな出来事が待っていた。
「待つのだ！　ここは僕の縄張りなのだ！」
また目の前にさっきのポッチャマが現れた。口調からしてさっきと同じ個体である。エムとチコに勝手にライバル意識を持ち始めたようだ。
「誰かと思ったら……またお前か」
「縄張りに侵入した奴は許さないのだ。通りたければ僕を倒してから行くのだー！」
今度はポッチャマは気泡を放ってきた。しかし速度が遅いので目で見てから避けられる。纏わり付くと厄介なので、エムとチコで左右に分かれて避ける。
「なっ、囲まれたのだ？」
そうポッチャマが言った刹那、チコがポッチャマの頭の上に飛び、のしかかった。
「……で、君は何がしたいの？」
チコがポッチャマに聞いた。ポッチャマから見ると、チコはかなりひ弱そうだが、実際は全く歯が立たなかった。
野生である彼は吹雪の島で平和に暮らしていたが、さっきエムに銀の針をやられて腹が立ったから襲っただけである。そして、ここは誰の縄張りでもなく、彼が再戦する為についた真っ赤な嘘だ。
この二匹の強さの秘密を調べてやるのだ！――ポッチャマは決意した。
「ま、参ったのだ。勘弁してほしいのだ！　許してくれなのだぁ」
「う、うん……」

降伏宣言されたので、チコはポッチャマから降りようとする。
「待て！　これはコイツの罠だ！」
ポッチャマに騙されて反撃されると思ったエムは、二匹に近寄って、ポッチャマに再び攻撃しようとする。
「全然違うのだ！　僕は悪いポケモンじゃないのだ！」
ポッチャマが慌てた表情をして首を横に振るので、エムは攻撃を寸止めする。
「ほーう、じゃあ悪いポケモンってどんなポケモンだ？　言ってみろ」

まだ疑うエムは、誰かを見下してるかのような顔をして残っている銀の針をポッチャマの顔に近付ける。
（悪役に見えるよ……エム）
傍らで見ていたチコは、思わずそう感じた。
「と、とにかく、僕を連れてって欲しいのだ！」
「またか……。それじゃあ、例えお前が俺達に置いてきぼりにされても放置するが、いいな？　お前の棲む島なんだしな」
またしても、連れてってほしいと言うポケモンにエレンシアは出会う。今回は水タイプのポッチャマ。だが今回の場合はすなわち、仲間にしてほしいという意味になる。

32話　吹雪の島へ（後書き）

はい、元ネタは勿論アレです（しかも声優ネタｗ）
モココに続くバカキャラだと思ってくれればいいです。

33話　組織を抜ける者

めでたくポッチャマを仲間に入れた後、先に進むと、新たなダンジョンが見つかった。氷の壁に大きな亀裂が入っている、つまりクレバスの洞窟だ。

あのハッサムは、まだ奥へと進んでいたのだ。エムコルス、チコリータ、ポッチャマは足を進めていく。

「あ、お前は真ん中入っておけよ。どっか行かれたら困るからな」

基本的にエムを先頭にし、その後ろにチコがついて、更にその後ろには付き人か誰かが並ぶ。元人間であるから何かの威厳があるのかは分からないが、エレンシアについてくるポケモンは、エムの指示には皆従ってくれる。

「……分かったのだ」

ポッチャマは素直に返事した。前方から来るポケモンに関しても、背後から来るポケモンに関しても、ポッチャマが足を引っ張ることはない。

そして、ポッチャマが見たいと思っていたエレンシアは、やっぱり両方共に強かった。見た目は自分と似たようなもので、とても弱そうなのに、なぜか敵を圧倒している。

その敵とは、どれも彼が知っている種族だった。でも、決して仲良くできたことはない。殺伐としている中で、できるワケがなかった。

「二匹とも、このポケモンは危ないのだ。あのグレイシア君は雪隠れで惑わして攻撃を避けるのだ！」

「んなことは見りゃ分かる」

エムは、技が敵へと追従する、電撃波を放つ。必ず当たるので、回避される心配がない。電気を浴びて麻痺し、グレイシアは痺れ倒れた。

「あ……あんなにあっさりと……。やっぱり僕、着いてきて正解だ

ったのだ」
　何が違うのかは分からないけど、とにかく強いというのは良く分かったポッチャマであった。
　しかし、生半可な強さが通じる敵ばかりが現れるワケではなく、またしても、「奴ら」は立ち塞がるのだった。……とは言っても、誰もが従順なワケではない。
・
・
　クレバスの洞窟の最深部にまで辿り着くと、そこにはとあるポケモンが凍り漬けにされているのを見つけた。そう、その凍り漬けにされているポケモンこそが、ハッサムだ。
「あ、あれ、ハッサムじゃない？」
「ああ。何故行方不明になっていたか……。何者かに凍らされ、ずっと、ああいう状態にされてきたからだ。だが、恐らく長い年月が経った今、既に息を引き取った可能性も……」
「何がともあれ、助けなきゃ」
「待て。だとすると、犯人は近くにいる。油断すれば凍り漬けだ」
「こ、凍り漬けなんて嫌なのだ～」
　チコが凍ったハッサムに近寄ろうとするが、エムが止めた。ポッチャマが怖がってエムとチコの後ろに隠れる。エムは、洞窟の周りを見渡して、敵を探した。宝はないし、新たな入り口もない……。間違いなく、ここが奥地だった。
――誰だ！？
　気配を感じたのはその後すぐだった。現れたポケモンは一見して、伝説に出てくるような、雪女のような姿をしていた。
「ウフフフ……久々のお客様、いらっしゃいませ……。私はユキメノコと申します」
「あ、あのポケモンは誰なのだ？　逃げたいのだ……」
　ポッチャマが逃げ腰なのに対して、ユキメノコと名乗ったポケモンの話を、エムとチコは黙って聞いている。

「こんな辺境の地に来る、おかしなお客様が来たのもあなた達が久しぶりです……。私はそのおもてなし役で、そのおかしなお客様を潰していき、新たな世界を創世するのが一応、日課なのです……」
「……闇の軍団!?」
「だったら、お前はここで必ず潰す」

「フフ、闇の軍団……。そうなりますね」
チコとエムが思い当たった通り、ユキメノコも、『闇の創世者』の一員だった。だが、彼女に関しては、リーダーへの尊敬心は極めて薄かった。
彼女の役割は、来ることが困難な地に来ることができるような、非常な有能な探検家、探検隊を凍らせ、あのハッサムのように氷の中に監禁することにより、障害となりうる者を少しでも減らす。ただ、それだけでしかなかったのだ。
「闇の一員……。私がそうだったから、どうなんです？　一体何です？　まあ、吹雪の中来れるというのは、相当な実力の持ち主なんでしょうね……。　ここで凍らされている方は不意打ちできましたが、あなた方はそうは行きませんでしたね……。さぁ、私を潰したいなら、もっと凍えさせてあげるから、かかってきなさい」
「ああ、お望み通りにしてやるよ」
エムがユキメノコへ正面から突っ込んで行く。ユキメノコは氷タイプ、重い一撃を与えるなら、尻尾を使ったアイアンテールだった。
組織の一員だからという理由で潰しにかかられるのは少々ウンザリね。だが、これはただの馬鹿の一つ覚えの特攻――そう感じたユキメノコは、非常に速い速度で放たれる、氷の礫をエムに向けて撃った。エムがユキメノコに辿り着くまでに、礫をぶつけることができる……そういう計算だった。
だがしかし、氷の礫は見えない何かにはじかれてしまった。チコが張った、リフレクターである。
（読まれていた？　あのピカチュウがああしてきた時点で私がして

くる行動を、あのチコリータは、読んでいた？　フォーメーションでも組んでいる？）

そうユキメノコが思った時には、エムはすぐ頭上にいた。守りを受けた壁を抜けて、前回転してから、ユキメノコの頭部に尻尾を叩き付けた。

「っ……。なかなか……やりますね」

ユキメノコはこの時点で考えていた。もうこれ以上、あのダークライの為に、この三匹のポケモンと戦う必要はあるのだろうか？と。このままでは勝てないし、しかも、自分が闇の創世者だという理由で倒そうとしている。冷静に考えると、自分は何を期待していたのか？　否、全く期待はしていなかったし、ダークライというポケモンに組み込まれてみれば、行うことは、このハッサムにしたことのように、非合法に近いことであった。更に、彼自身は、既にある島のポケモン達を抹殺したという。テロ以外の何物でもない。また、目的を聞いてみれば、今の堕落した世界を終わらせ、新たなる世界を創世するという、まさに病的な反社会の組織であった。最近では、英雄の所為により、世界創世の計画が後一歩で失敗したらしく、新たに計画を立てているとも聞く。内心、その英雄には早く、自分のいる組織を潰してほしいとも思っていた。

もちろん、その英雄が、目の前にいるピカチュウとチコリータであるとは、思いもよらなかった。

あんな者達の為に、他人の生涯を潰す意味はあるのかしら――否、そうではなかった。彼女は社会に生きる人間ではない。種族、立場として、死人と同じだったのだ。

「フフ……私はもう、あの者達の仲間から抜けますわ……」

「……お、お前は何をする気だ？」

ユキメノコの言ったことをエムはとても警戒している。もちろん、ユキメノコは何もしない。

「言ったでしょう、もう抜けると。あんなの者達に逆らうという、度胸があるあなた達に、私は勝てません……」

最後に自分ができることは何か……。吹雪を乗り越えてこんな場所に来ている、ポケモン達を解放することだろう……。このまま凍らせていても、なんの意味もない。島から脱出させるのが最善の策だと思った。ユキメノコは去り際にハッサムの氷を溶こうと、風の念を送る。

「さらばです……」

場に粉雪を降らせ、ユキメノコは、テレポートをしてこの場から去って行った。ハッサムの氷を溶かせたその時、すっかり自由の身になれた、そんな気がした。これからのことは考えてはいないが、遠くへ身を馳せ、探検のようなことをしようとする考えはあった……。

氷は割れ、ハッサムはついに、氷の中から解放された。ユキメノコが消えたのを確認してから、エムとチコとポッチャマはハッサムに近付いた。

「う……うう……こ……ここは……」

「ここは吹雪の島よ」

死んだように冷たいハッサムの体に触れ、チコは耳元で囁く。

「吹雪の島……？　そうか、拙者は探検中にユキメノコに襲われたのでござる。もしやお主らが助けてくれたのか？」

「まぁ、な。奴は自主的に去ったと言った方がいいが……。ところで、ハッサムだな？」

「その通り、拙者こそハッサム。探検家でござるよ」

ハッサムは古き時代に語り継がれた、忍者のような口調で言った。声を忍ばせている辺り、そう感じ取れる。

今回は、ユキメノコを倒したというよりも、むしろユキメノコが自主的に助けたと言える短い間に、目を逸らして、様々なことを考えていたように見えた。思いつめていたのか、もしくは自分達に闇の創世者であるということに関して言われて、うんざりしたのかは分からない。

だが、中にはあの軍団の仲間でも、やっていることに疑問を持っ

ているポケモンもいるということを、少し驚きながらも、エムは理解した。

３４話　人気者は辛い？

ポッチャマとハッサムを連れ、ペリッパー二匹にそれぞれ二匹ずつ乗って、トレジャータウンにまで帰ってきた。ペリッパーの上でハッサムが休んだ後、ポッチャマは、ポケモン達が集団で文明を作って生活をしているトレジャータウンを見学することにして、ハッサムとはそこで少し話をすることにする。実はハッサムは、氷漬けにされている間は、体の年齢が進んでおらず、元のままである。

「いやぁ、本当に助かったでござる。お主達が来てくれなかったら、永遠に氷の中に閉じ込められているところであったよ」

「にしても、古臭い喋り方だな。いつから閉じ込められてた？」

エムが聞いてみた。忍のような奴だったとはニョロボンも言っていたが、忍とはまさにこういうことだったのだ。

「いつからかは知らないし、何も拙者は別に怪しくもなく普通でござるが……。なるほど。経過したのは数十年の月日。拙者は知らない世界にやって来たのでござるな」

「ところでさ、ニョロボンというポケモンがここにいるよ。知ってるよね？」

「本当か？　いやはや、命の恩人であり、更には拙者の友人にも会わせてくれるお主達に、まずは礼がしたい……。だが、残念ながら気付けば現在拙者は無一文……。

ニョロボンにも苦労していたかもしれない。どのようにニョロボンに謝り、お主らに礼をすれば良いのか分からないでござる」

「いや、お礼なんていいよ。それを求めてしたわけじゃないからね」

「しかし……。いや、それなら名誉称号を授けよう。これでも拙者はポケモン探検隊連盟の一員。そして、名誉隊員なのであーる！」

「は、はあ？」

特に名誉という言葉に興味がないエムは、ハッサムの自慢のような口振りに首を傾げる。
「それで、英雄級の勇敢さで拙者を助けてくれたお主達に『シークレットランク』を授けようではないか」
「ん？　シ……シークレットランク？
見たことも聞いたこともない名前の称号に、エムとチコは段々とハッサムが怪しく感じてきた。
「そんなワケの分からない称号はいらねぇよ」
「いや、大いに意味がある。この称号を持つ探検隊は、我々探検隊連盟、ＰＥＬから極秘任務、依頼の指令が来る時があーる。もちろん、依頼を受ける義務はないでござるよ。なぜならば、来る依頼は、ほとんど二流の探検隊ではとても危険なものであるからでござる。
しかし、お主達なら、十分にその依頼で実力を引き出せるであろう！」
「……まぁ、ありがとう……」
じゃあこの前ギルドに張り出された、危険な依頼は何だったんだとチコは思いつつ、ハッサムに頭を下げた。ハッサムも、同じく頭を下げる。
「何のこれしき。恩は一生忘れぬ！　拙者はニョロボンに会いに行く。会えるとは、とても幸運だったでござるよ。では、少しそちらに行ってくるでござる」
そう言って、ハッサムはカフェの中へと入っていった。何をしようとしているのか……。ハッサムの後ろをエムとチコはついて行ってみる。　カフェの中に突然現れたハッサムの姿に、ポケモン達は、とてもどよめいていた。もちろん、旧友も、とても驚いていた。
「な、なぜここにいるんじゃ！」
「ふふ、帰ってきたでござるよ」
・　・　・

ハッサムとニョロボンは、隣合って座っていた。新築だと分かる建物で、見渡しても、新しさを感じる場所。ハッサムは奇麗な場所だと感じていた。今の状況は、ハッサムはタイムスリップをしてきたようなものだ。

だが、時空ホールを使ったわけではないので、ハッサムはただ、年齢の進行が止まっていたというだけである。タイムパラドックスは起きたりしないのだ。元のままのハッサムと、年老いたニョロボンは、対照的になっている。

「ところで……それは、今の時代のトレジャーバッグなのでござるか？」

自分達の知っている、すぐボロボロになるような、麦わらを使ったバッグとは違い、ハッサムを助けたエレンシアのバッグは、彼から見るとやや高級感というものを感じた。

「……まぁ、確かにそうだが。壊れたり破れたり、バッグは幾つかあるし、何度も交換している」

エムが、数カ所繕った跡のあるバッグをハッサムに見せる。探検隊には、階級が上がるごとに大きなバッグを提供されるのだが、ハッサムがいた時代では、バッグはもう少し安っぽい形をしていたらしいのだ。

「ふむ……。どうやらハイテク化が進んでいるらしい……。驚きでござる」

過去からタイムスリップしてきたように、ハッサムは今の世に驚愕していた。ハッサムは忍び込んでいて、有名人がいるのに今まで気付かれなかったが、遂に誰かがハッサムの存在に気付き、その彼を歓迎するかのように、カフェに来た客は、突然目の色を変えた。ニョロボン以上に、ハッサムに質問攻めである。

「羨ましいのぅ、お前」

「ふふ、人気者という自覚はある。これからも、拙者は探検を続け

るでござるよ。ニョロボン」
「なんじゃ、自惚れてるのか？」
「なにをなにを。これからも満足せずに精進するのみであーる。あいにく、拙者は長い時間が経ってもまだ、体の衰えを感じないでござる」
「おう、なら頑張ってくれの」
「競争は……？」
「ワシは衰えたわい！」
大人数すぎて、ハッサムは質問が何を言っているのか分からないので、質問を受け流しながら、ニョロボンと雑談を続けていた。
「……ところで、何か言ってくれる時、拙者は一匹一匹言ってくれると嬉しいでござるよ」
ハッサムの一声で、一瞬声が止み、並ぶ形になって、一匹ずつハッサムに話しかけていった。

・
・
・

エム、チコは、吹雪の島の探検隊を終えた後は、自宅であるサメハダ岩で休むことにした。ポッチャマの姿が見当たらないが、消えても支障ないとエムが本気で思いつつ、階段を下りる。エムがちょっとつまづいたように見えたが、結局何事もなく下りた。
「ねぇエム、今転びそうになったよね？」
「なってない」
「足を踏み外す感じで。でも何とかこらえて」
「……なってない」
「そして、危ない危ないとか思ってたんじゃないの？」
「思ってない」
「以前にも既に、何回か転んだよね？」
「さあ？」

こういう、性格からして結論の出ない会話をしながら、中を見通すと、さっきまでトレジャータウンにいたはずのポッチャマが、ド真ん中で寝ていた。

「……って、なんでお前は俺達の所で呑気に寝てんだっ！」

「いたっ！　ご、ごめんなさいなのだ～。チームの家だなんて知らなかったのだ～」

無防備に寝ているポッチャマを、エムが足で踏んづける。

「まぁいい。カフェの近くにも、施設があるはずだから、そこ行ってこいよ。古い探検バッグやるから、これからはどこでも自由に行ってきな」

「そ、それは嬉しいのだ！　探検って面白そうなのだ。エムコルス君、チコリータちゃん。僕、頑張るのだ！」

「でも、あんまり無茶はしないようにね」

「わ、分かったのだ～」

チコの方がポッチャマに対する対応が優しいので、ポッチャマはちょっと照れていた。

「ニヤニヤしてないでとっとと行ってこいっつーの！」

「ぶはぁっ、りょ、了解なのだぁ～」

エムが軽めのアイアンテールでポッチャマを階段近くにまで吹き飛ばすと、ポッチャマはそのままサメハダ岩から出て行った。

「さて……この調子だと明日も何かあるな。寝ておくに限る」

「そうねぇ。でも、たまには何もしない日でも作ればいいのに。にしても寒かったなぁ、吹雪の島」

「あの防寒着、役に立ったのか？」

隅に放置した対寒さ用の防寒着を、エムはチラッと見る。

「どうなんだろうね。まぁ、ハッサムも助けれたし、良かったよ」

「助けたというか、あのユキメノコが……」

エムが、闇の創世者であることを、何の誇りも感じていない様子だったユキメノコを疑問に思った。あのユキメノコが、闇の創世者

から抜けたということは、少なからず、あの連中に嫌悪感を抱いていたということ。

つまり、あの者達は、客観的に見ても、異常な計画を立てている可能性が高い。本当はユキメノコから聞き出してきたかったが、その前に消えてしまった。

「あのユキメノコまでも奴らの仲間だったなんて、ね。少なくとも、さっきまでは」

「奴らは、恐らく俺達を殺そうと狙っている。できればユキメノコ、奴から聞き出せれば良かったが……。ならば、毎日の普段の探検を続けている中、情報をつかんでできるだけ早くボスを突き止め、潰さなければならない。だから、休む間はないんだ」

エムはそう言うが、その存在を知っている者は、調査から外れたギラノを除けばエレンシアの二匹のみ。まだまだ終わりはない。

35話　挑戦状

ハッサムが来て騒ぎになったカフェではあるが、翌日以降は、いつも通りの場所に戻っていた。ニョロボンも帰って行き、探検隊連盟は、闇から天才を、天才達によって取り戻したのである。

平穏な日々が続くある日のことだ。パッチールがいつものようにテーブルを拭いていると、外から見知らぬ声が聞こえてきた。新規の客なんだな、と耳を傾ける。

外にいるポケモンは二匹だった。一匹は先史時代に絶滅していたドラゴンのような外見、濃青色の体に、腕にサメ型の翼を持つ、ガブリアス。もう一匹は、巨大な翼に加えて、胸に逞しい筋肉を持つ鳥型のポケモン、ピジョット。外見からすると、カフェを荒らしに来たように見える。

それにしては、威厳は感じなかった。ポケモンの写真がある雑誌にガブリアスは目を通しているし、ピジョットは良く分からない嬉しそうな笑みを浮かべているし、とても襲いそうには見えない。

「ボンジュール！」

何かを期待したピジョットがそう言いながらカフェの中に入っていく。ガブリアスも続く。

「いらっしゃいませぇ～」

「なんだ……、メイド服じゃないじゃん……」

パッチールがその二匹を歓迎するが、なぜかガブリアスはがっかりしているようだ。

「何言ってんだよガブリアス、あの店員なかなかいいじゃねーか」

ピジョットがガブリアスの耳元で囁く。既にピジョットのおかしな挨拶で、カフェにいる他の客には、変人にしか見られていない。

二匹は席に座って適当にジュースを注文してからは、探検とは程遠い会話の内容をしていた。

「全く。アホか、ここでもチャームズには会えなかったじゃねぇか」

「プクリンのギルドのプクリンと大親友と聞いたんだけどなぁ……」
「おい！　理由それだけとか、来てるワケがないだろガブリアス！　そんなんだから変な奴変な奴言われるんだぜ！？」
ピジョットがガブリアスに対して怒る。どうやら、有名な探検隊に会いたくて来ただけらしい。無論ここにいるはずはない。　彼らはあるチームのポケモン達や、一定のポケモンを「萌え」と言ったり、雑誌を常に集めていたり、職人ポケモンの技術で作られたフィギュアを集めたり……あまりこの世界では見られないことを趣味とする、一応の探検隊である。
「なっ……お、お前こそ！　俺はチャームズに会いたくて会いたくてしょうがないんだ！　それなら少しでも可能性のある場所行くのは当たり前だろ。常識的に考えて……！　……んまぁ、無駄足だったのは事実だ。ならば、せめて、ここに住む、もう一つの、有名な探検隊と会っちゃって、サインは分からんが、自慢しようか」
「おいおい、世界の崩壊を防いだ奴らだぜ？　俺達みたいな奴に関わろうとは思わないだろ？」　ガブリアスとピジョットが指すのは明らかにエレンシアのこと。だが、それが誰なのか、どんな姿なのかなどなど、それらは全く知らない。
もしかしたら、かの伝説の遺伝子最強ポケモンだったり……と想像していたりもする。とにかく、彼らは強大な力を持ったポケモンを想像しているのだ。
「いや、噂によれば、チームの二匹は依頼とかはちゃんと受けてくれるらしい」
「ガブリアス、わざとダンジョンを迷う気か？」
「ふふっ、手段があるんだ。ちゃんと呼び寄せる方法があるから、任せとけ」
ガブリアスは用紙をバッグから取り出す。そして、あることを書き込む。
「……任せたぜ」
「ああ。これなら来てくれるぜ、きっと。なぁ、ピジョット？　よ

し、そこの君、これをチーム『エレンシア』に渡してくれないか？」
　ガブリアスが、常連であるパチリスに一枚の紙を渡した。
「……う、うん」
「よーし！　なかなか目的は達成できないが、今日は凄いことが起きそうだぜ！　ジュースごちそうさん。じゃあな、バイビー！」
　ピジョットはウキウキしてそう言いながら、カフェから出て行った。ガブリアスもついて行く。何やら、怪しいことが起こるようだ。
・
・
・
「渡してくれと言われた？」
　その数時間後、すっかり起床時間が遅くなったエレンシアがカフェにやってきた。パチリスに呼び止められ、一枚の紙を手渡す。
「何なのかな。極秘任務？」
「送り主はガブリアス&ピジョット……だとさ。というか……挑戦状？」
「ちょ、挑戦状だって！？」
　エムとチコは、これが一見して救助依頼か何かに見えた。だが実際は、海岸の洞窟の中途にまで来て、勝負しろという内容が書かれていたのである。お前らの伝説は既に終わっている、これからは俺達の時代だ、と。自信ありげな内容だ。
「海岸の所にあったあの場所か。にしても近いな、おい……」
　彼らは、面倒なのでここから一番近いダンジョンを選んだのだ。案外、自信過剰な内容には反応していない。
「凄い自信よね、この送り主。にしても、何故私たちを勝負相手に選んだのかな？」「さあな。まぁ……これだけは言える。俺達に勝てると思ったら大きな間違いだと。チコ、それをコイツらに教えてやろう。ここに来れるということは、奴らの仲間である可能性は低いしな」
　エムは自信満々な口ぶりで挑戦状の用紙を握った。

「うん。負ける気、しないよね。えーと、ポッチャマはお尋ね者倒すと意気込んでどこかに行ったから、今回は二匹だね」
　ポッチャマはあれからついて来たり単独で出かけたり、まちまち。Dランククラスの依頼を受けて、微量ながらもチームに貢献している。
「鬱陶しい奴はいらねぇよ」
「またそんなこと言ってる……」

　チコが困り顔になる。エムは未だに良く思っていないのか、ポッチャマがうるさいと、すぐ暴力を振るう。チコは、そんな彼を止めている。
　とにかくさっさと倒すに限ると、エレンシアは海岸の洞窟へ向かった。

・
・
・

「……おっ、来た……のか？」
「ま、まさか、あれがエレンシア……？」
　ピジョットとガブリアスは目を疑っていた。挑戦状の紙を持った探検隊は、確かにここに来た。だが、想像とは全く違う姿をしていた。あろうことか、ピカチュウとチコリータという、最強とは程遠い種族だったのだ。
「おい！　この挑戦状はお前らか？」
「私たちが探検隊エレンシア。勝負は受けて立つよ！」
　エムとチコが、その二匹に確認の為に呼びかける。明らかに子供であり、屈強なポケモンが持つ威圧感などは感じられない。
「……や、ヤバい。ま、まさかあんな可愛い探検隊とは……。なぁ、ピジョット……」
「おいお前、そんな趣味だったのか……。なんで挑戦状なんかにしたんだ、全くよぅ……。でも確かに、萌えれるぜあれは……」

ガブリアスとピジョットは、勝負をする以前に、エムコルス、チコリータの姿に、別の意味で圧倒されていた。

「他人のこと言えねぇじゃねぇか。でも、いいよな……。もし何も知らずに見たら、ありゃリア充にしか見えんだろありゃ……。あの若さで彼女だの彼氏だの作ってるとか……。実際は、絶望的状態からのし上がったって話なんだから、文句は言えないんだけどな……」

ガブリアスは、エムコルスの経歴は知っている。元々、暗黒世界で貧しい生活をしていたということを。

しかし、あんな姿だとは思っていなかったし、そこからガブリアスとピジョットも、ショタコンでありロリコンであるということが伺える。

ちなみにリア充とは、現実世界の生活が充実している者のことである。ガブリアスやピジョットはエレンシアのことをそう思っているが、現在、謎の組織に命を狙われている探検隊が、充実と言えるはずはない。……もっとも、それ以前、誰にも知られていない休暇を二匹で楽しんでいた時は、本当に充実していたと言えるかもしれない。

「彼女いない歴イコール年齢の俺達にとっちゃ羨ましいが、仕方ないよな……。普通なら憎むべきなのに、可愛い……。男なのによぅ……」

ピジョットは翼で顔の照れを隠す。

「しかも彼女も超可愛いときた……。ヤバい、もうこの時点で格が違うぜ。英雄というか、完全なリア充だ。ピジョット、もう降参した方がいいな、こりゃ」

敵となっているエレンシアが目の前にいるというのに、ガブリアスとピジョットはこうしてずっと話し続けていた。

これをエムは、作戦会議と見て取ってしまう。

「何をコソコソしてる。お前らの作戦なんかお見通しだ」

エムが手をしゃくって挑発する。作戦は、相性が良くなるよう、自分にはガブリアスを、チコにはピジョットをぶつけて戦おうとい

うことを考えている、と彼は読んでいた。そんなことはガブリアスやピジョットは考えてはいない。

「ヤバい……。ありゃ戦いしか頭にないぞ……」と、ガブリアス。

「可愛い顔して恐ろしいもんだぜ……」

ピジョットは空中に飛んで、戦闘意思があるように見せる。

既に勝ちを確信しているエムの表情。チコを頷きあっており、今にも跳びかかってきそう。その刹那に、エムとチコは同時に動いた。エムはガブリアス、チコはピジョットに体当たり……と思ったら、いきなり方向転換をし、それぞれ逆の敵へ向かって行った。

速っ！？――そう感じた時には、空中にいたのに、大きく飛躍され、ピジョットはエムのボルテッカーを受けて、体に電撃が走り、力が抜けて地面に落ちた。ガブリアスも、無数の葉っぱカッターを受けた後、遥かに体格で劣るはずのチコにのしかかられた。

「どうした？　偉そうなこと言ってた割には、大したことないな」

倒れているピジョットに近付いて、エムは煽る。

「え……偉そうなこと……？　ぐっ……ガブリアス。オマイ……またふざけたこと書きやがったなバカが……。降参」

「……だ、だって……そうでもしなきゃ来ないだろうがちくしょう……。降参」

ピジョットとガブリアスは、両方共に、あっさり負けを認めた。さすがは有名とだけあって、格が違った。姿が小さくて半信半疑だったが、実力は、立派にも一流だった。

「……そうか。じゃあな」

エムとチコは、彼らが降参したと聞くとすぐに離れ、ダンジョンから去ろうとする。

「あっ、ちょっと待……」

ガブリアスが静止しようとした時には、エムもチコも、探検隊バッジを使ってダンジョンから出てしまった。

「どうせなら記念に、もっとやられたかったぜ……」

ピジョットが、マゾヒスト的な発言をした。サインももらえなか

ったし、ロクな会話もできなかった。彼らの想像通りには全くいかなかった。やはり、一緒に探検しようだとか、そういうことにするべきだったのだ。でなければ、フレンドリーにはなってくれない。エムの場合は、それでも相当困難である。

アイツらは何だったのだろうか？――エムは、あまりにもあっけなすぎて、失望していた。

もちろん、彼らが思っていたことに、エムもチコも、何一つ気付いていない。そんな探検隊は、この近くには全くいないのだから。敢えて言うとすれば、ギルドのキマワリぐらいである。

36話　不思議な体験（前）

この数日、特に変わった出来事や、有益な情報もない。とりあえずはこういう時が続くことを願いつつ、エレンシアは探検を続けていた。

「エムコルス君、僕はとっても強くなったのだ。昨日だって、Eランクのお尋ね者を捕まえたのだ」

「あっそ」

サメハダ岩の中で、ポッチャマの自慢話を聞き流しているエム。

「今日は、あのカフェの活動に貢献すべく、開拓活動を行うのだ！　プロジェクトPの活動に！」

「……お前は他人の自宅でうるせーんだよ！」

「いたっ！」

エムがまたポッチャマに対して怒って、彼の頭に手で瓦割りをする。それを痛がって、ポッチャマが涙目になる。これがいつものことになりつつあるが、ちょっとした変化が起こる。　チコがムチを伸ばして、エムの頭をバチンと叩いた。

「ぶふっ！」

「エム、ちょっといい加減にしてよね」

明らかにやりすぎなので、止めさせるという理由でチコはやった。ポッチャマだけでなく、エムも痛がって頭を押さえ込んでいた。

（チコリータちゃんは優しいのだ～）

内心、ポッチャマはそう思っていた。

今日はエムは探検を休むことになっている。たまるにたまった、ガルーラ倉庫内の道具の整理整頓を彼が担当することになったからだ。一応、さっきのこととは関係がない。チコとポッチャマがそれぞれ単独で依頼をこなしに行き、エムはこのサメハダ岩で待つことになった。

チコもポッチャマも出かけていなくなった後、たまにはこういう

日もいいかな、と感じていた。
まずは大きな袋を抱えて、倉庫から大量に道具を取り出す。本来持てる量以上の道具の取り出しをガルーラに要求した。
「も、持てるのかい？　おばちゃんが協力しようかい？」
「気持ちだけ受け取っておくよ」
エムは意地を張ってか、ガルーラの手伝いを断り、重くなった袋を単独で背負って、サメハダ岩まで持っていった。それを何回も何回も繰り返す。
ようやく荷物を全て持ってくると、次は、必要な物と不必要な物の分類。必要な物はそれでまとめて再び倉庫に預け、不必要な物はカフェで行われているリサイクルに回す。
「装備品はこんなにいらないよなぁ。だが、これはぶっちゃけ売った方が金になるんだよな」
そうして、道具の必要と不必要な物の判断で悩んでいる時、ふと、エムは過去のことを思い出す。そういえば、ジュプトルはあの後、未来でどうしていたのだろうか？　まさか今、生きていたりはしないのだろうか？　ジュプトルのことを真剣に考えると、いつも表情が険しくなる。
そして、エムが左を向いた時である。時空ホールか時の回廊かは忘れたが、時代を超えそうな穴が、このサメハダ岩の中で開いていた。そして、次の瞬間、襲いかかってきた。まさに一瞬の出来事。
「な、なんだ？　何が起こって……！？」
気付いた時には、既に渦に取り込まれてしまっていた。

・　・　・

エムが意識を取り戻すと、そこは自然の中だった。木々が広がっており、彼の横には、彼にとって見ると、とても巨大な建物があった。何が起こったのか、さっぱり分からない。誰かにやられたのか、自然現象なのか……。何一つとして、正しい説が考えられない。海

岸の時のように、体調の悪さは感じないが、気分的にはあの時に似ている。

そんな時、誰かが近付いてきた。まるで、チコリータと会った時のように。しかし、エムのそばに寄ってきたのは、なんと人間だった。１０代前半の体つきと顔立ちをした少年で、赤をベースとした帽子に、黒いシャツの上から、上着にボタンをしめずに赤白のジャケットを着ている。そして、下には青いジーンズ。現在は背中にバッグを担いでいる。

『おい、大丈夫か？』

その少年は、地面に倒れ込んでいるエムを見下ろしてきた。エムはそれに答える。

「……まあ」

『何だよ、喋れるピカチュウか……。あんまり喋らないほうがいい。俺とならいいが、普通の奴には珍しがられて、絡まれるからな』

エムは少年の話からして、一つの推測がついた。ここは、古代の人間世界なのではないか……と。

「……」

ああ言われなくても、と、エムはあまり喋る気にはなれず、口を閉じていた。

「今帰ってきた所だ。家に来いよ」

少年はエムを抱えようとした。だが、それを嫌がって、少年の腕を思わず殴った。

（気安く触るな……ってか。人間みたいな奴だな、このピカチュウ……）

少年は殴られた腕を黙って押さえて、そう思っていた。しかも、少年の思ったことは事実であった。一応、エムは少年の家への案内には応じた。

その家の中へと帰ってきた時である。エムは不思議な感覚を感じた。来たことがあるという感覚なのだ。記憶を掘り起こして考えると、遠征の時に行ったベースキャンプの時、流砂の洞窟へ行った時

……。それ以来のことである。『食うか？　無駄な意地は張らなくていいからな』

少年にはちょうど良くリンゴを出された。いつも食べている物だけに、エムとしては助かった。

「……どうも、ありがとう」

エムは静かに少年にそう言った。そして食べている途中に、エムは頭の中で考える。　あの感覚を感じた場所には、時の歯車があった。というより、人間の時に来ていたのだ。なぜなら、時の歯車の場所の調査を、ジュプトルと共にしていたのだから。

来たことがある……ということは、やはり人間の時に来たことがあるということになる。だが、ここは現代から未来世界へ行ったとは考えられない。むしろ、人間の世界なのだから、ここは遥か古代の時代であると考えられる。

そうなると、一つの可能性が彼の頭をよぎった。自分は未来世界では生まれておらず、この時代で生まれた可能性。それだけではない。エムはこの家に来たことがあるというのだから、この少年を、自分は元々知っていたのではないかという可能性がかなりある。

少年は忙しそうだった。帽子を脱いで机に置いて、部屋の整頓などをしている。だが、疲れたともなんとも言わず、ただ黙々とやっている。だが、エムは特別感心もしなかった。

待つこと数十分後、彼は全ての作業を終えたのか、エムの向かい側に座った。

『とりあえず、一晩ここで寝ておきな』

少年はエムにそう告げた。エムは少々警戒しながら、コクリと頷く。タイムスリップしたことはあり、その際には身にすぐ危険が訪れた。もしかしたら、これは何者かの所為だったのかもしれない。自分の命を奪う為に。

『なんだよ、警戒深くなる気持ちはよく分かるが、俺はお前に何も

手出しはしない』

少年は、エムの気持ちが全て読み取れたような顔をしていた。

「……なぁ、今、世の中はどうなってる？」

『……？　ぶっきらぼうだな。まぁ、最初に、これだけは言える。権力において生命の頂点に立つはずの、俺達人間が、絶滅しかけているとな』

エムは思い切って聞いた。少年はエムの目を見て語り始めた。彼の語り方は、エムから見ると、誰かに通ずるものがあった。

「どういうことだ？」

『人間が減り続けている。行方不明になったりしてな。俺の親父もお袋も、ある日登山に行くだとか言ったきり、戻ってこなくなった』

少年は一人暮らしだった。孤児当然の彼で、しかも援助もされず、それから生活に困り続けていた彼だが、とある方法で資金を稼いでいるらしい。

『でも、俺達家の伝統でな、格闘技には長けている。毎月ある格闘トーナメントで勝利すれば、金を得ることができる。それで食っていけるんだ』

「か、格闘……？　人間の？」

『ああ。……例えば、こんな風にな』

少年は机の隣にあった瓦を持ち出しだが、手であっさり叩き割ってしまった。これが瓦割りである。そういえば、エムもこのことができる自信があった。

『ポケモンを使った勝負じゃ勝ちようがないけどな……。この通りだ』

少年はそう言うと、謎の球体の蓋を開けて、ポケモンを出してきた。見たからに弱々しそうな、コイキングだった。

コイキングはエムの隣で跳ね続けている。一応、陸上でも呼吸ができる魚である。邪魔臭くも感じられる。

『トレーナーズスクール入る前にポケモン一匹貰えるんだけどな、

正直どうでもいいから、随分後に貰ったら、このポケモンだったんだ』

少年はコイキングに餌をあげながら言った。どうやら、興味のないことでは、あまりに酷いことになっても文句一つないらしい。

『にしても、予言者がこう言ったんだ。いずれ何年も後になったら世界の時は止まり、星は停止する、だとさ。馬鹿馬鹿しい話だと思わないか？　でも、もし仮にそうなったとしたら……。って……何故お前はニヤついてるんだ？』

「いや……別に」

少年の言っている内容に明らかな覚えがあり、それに関わったのは自分であるが、それが古代から予言されていたとは、と、エムは、驚きを感じていた。

『人間を大量に暗殺しているポケモンがいるとか噂が立ってるが……。決してそいつだけの仕業ではない。

ここは違うが、飢餓に喘ぐ地域が増えたり、ペストという人間にだけかかる伝染病があちこちで発生するなどして、自然現象でも人口が減っている。食って生きてるだけで俺はいいのに。それすらできなくなるなんて、ありえない』

少年は話し終えるつもりで、頭をポリポリ掻きながら立った。

「ちょっと待て、名前だけ……聞かせてくれないか？」

エムはどうしても気になって、少年に尋ねた。まだお互い名前を明かしていないが、少年は、このピカチュウに名前があるとは知らない。

『ああ、名前はエムコルスだ。短い間になるかもしれないが、よろしく』

今、そう言ったのはポケモンの方ではない、人間の方なのだ。

37話　不思議な体験（後）

――お……俺の……聞き間違い……か？

ポケモンである方のエムコルスは、その少年の名前を聞いて目を丸くしていた。まさか、こんなことがあるとは。

考えてみればつじつまが合っている。自分の家であるなら、知っているという感覚があって当然だし、自分の名前を名乗った少年を知っている可能性がほぼ１００％だということも正しい。

『どうした？』

人間である方のエムコルスは、信じられいような顔をしている、ポケモンである方のエムコルスを疑問に感じた。

「いや、何も……」

『お前にニックネームはあるか？』

「……そんなの、ない」

今、ここで事実を話したら、まずいことに発展する可能性がある。更に、ポケモンになってしまうという、ショッキングな事実を過去の自分に伝えることになってしまう。だから、ピカチュウのエムコルスは、同一人物だと言う訳にはいかなかった。

『そうか。じゃ、明日はスクールだ。お前も着いて来い』

「……ああ」

人間のエムコルス、つまり少年は、ピカチュウのエムコルスをこの部屋に置いて、どこかへと登っていった。

一体、何が起こったのだろうか。こんな、とんでもないことがありえるのだろうか。奇跡で済ませられるのだろうか……。この時代での夜を、正直、かなり戸惑っているピカチュウの彼は、ずっと起きて過ごしていた。既に、人間世界、この世界の崩壊は、この時、始まりを告げていたことも知らず……。

・　・　・

翌朝、人間とピカチュウのエムコルスの両方が、外へ出た。今日は赤帽子と、赤いベストを着ていて、昨日とは服装が異なっている。人間の方はいつも通りで、何もないが、ピカチュウの方は、違和感たっぷりだった。建物の大きさも違えば、いるのは人間のみ。……しかし、町並みは、おかしくなっていた。

（人が少ない……。三日前は、結構いたのにな。それに人々が怯えてる……）

人間エムがそう思っている時、ある三文字が彼らの耳に入った。ペストという、町を崩壊させる深刻な病気が。

簡単に症状を言えば、体温は著しく上がり、皮膚は黒くなり、数日後に死に至る。そのようなものだ。（ペストに感染してるポケモンに移されたり、刺されたりしたら、人間のみが発するもの……。いや、それが発生したのは遥か遠くの地のはず……。なら何故？まさか、これは、何者かによるものなのか？　意図的に流行させられているのか？）

人間のエムは、まさか自分もそうなるのではないかと危機感を感じていた。腕元を見て、異変がないかを確認する。ポケモンの体内の仕組みと人間の体内の仕組みは違う。ほとんどのポケモンは、体内の血が菌を消し去ってくれるが、人間はそうはいかない。

そして、それもそのはず、ピカチュウのエムも、ほぼ同じことを考えていた。また、人間の絶滅が、このことにあるのではないか、とも気付いた。となると、神か誰かが、自分に真相を教える為に、自分にこのようなことをしたのではないかと、タイムパラドックスを主な理由に、人々の病の阻止を諦めつつ、推測していた。

『もしかしたら……。おい、最も伝染にメジャーなのはネズミポケモンだ。お前、誰かのスパイだったりしないよな？』

人間のエムも、とても疑い深かった。もちろん、その答えはノーであり、ピカチュウのエムは激しく首を横に振った。

『そうか、悪かったな』と、人間の彼は言った。

その時である。誰かの足音が聞こえてくる。背後からだ。それは

人間らしい。
「おい……エムコルス！」
名前を呼ばれると、人間の方もピカチュウの方も反応して振り向いた。
『ナイジェル……お前、どうしたんだ』
こういう状況が発覚した割には、とても落ちついている両方のエムは、このナイジェルと呼ばれた、発狂しかけている、人間のエムと同じくらいの年を少年により、また一層と目立つ。
「見つけた……。甘い匂いがするとか、最近機嫌が良かったはずの父さんと母さんが、突然高熱を出して倒れやがった……。絶対に……ペストだ、黒死病だ！
今日、ピチュー、ピカチュウ、ライチュウを連れている奴が犯人とか一斉に噂が広まってな……！　何故お前がピカチュウを持っているかは知らねぇけど！　いつも大人しくてポケモンバトル弱くて、誰も友達いねぇお前！　とにかくお前を潰す！　ゴローン！」
ナイジェルという少年は、ゴローンを丸い赤白のボールの中から出し、そしてやたら人間のエムを非難する。ナイジェルは、当時のエムのスクールの同級生。弱いと罵っているが、彼は一応、人間同士におけるバトルには強かった。
『仕方ない……。おいお前、やれるか？』
ゴローンが飛び出してくるのを見ると、ピカチュウのエムは、人間の自分に言われるまでもなく反射的に飛び出し、動きの鈍いゴローンを、すぐさま尻尾で叩き上げながら後ろに一回転する、テールサマーソルトで攻撃した。
『サ、サマーソルト……』
あまりにも鮮やかな攻撃に、人間のエムは驚いているが、ピカチュウと化した自分は、既にそれは朝飯前となっていた。
一応、自分でも勝てたかもと、人間のエムは感じていた。
「お、お前にポケモンで負けた……！？　ありえねーっ！　もう世は終わりだぁぁ！」

『……っ、おい待……』

ナイジェルは倒されたゴローンをボールに戻さず放置し、走り去ってしまった。人間のエムの制止呼びかけも全く聞かず。

そして、人間のエムは、甘い匂いがしてくるのを感じた。だが、知っている。これはもう手遅れなのだということを。これこそ、前兆なのだと。

『何故だ……何故、こんなことに……』

あまりに突然の出来事で、嘆きのように彼が言うその時、彼は思っていたのである。何とかして、あまりにも突然に訪れた、崩壊しかけた世界を、元通りにできないだろうか、と。その為には、自分が犠牲になってでもいいし、十分な覚悟もあるから……と。

ピカチュウのエムは、現代に繋がる出来事の一部始終を、見てしまったと思った。記憶はないが、その事実を再び知らせる為に、誰かがタイムスリップさせたのだという説を信じ込んでいた。なぜか恐ろしかった。世界を救ったことすらあるのに、恐ろしかった。崩壊した後はごく普通の世界。でも、こういう、崩壊する瞬間は見たことがない。

人間が滅び、ポケモンの時代となり、遂には時間流れそのものまでも滅ぼうとしていたのだ。

だが、ピカチュウのエムは、これを終わったこととして、むしろ、世界を守らなくてはならない理由の一つに加えようと、必死に前向きに考えようとした。皆を苦しませない為なのだ……と。

人間の自分の、拳を握りしめながら絶望しているような顔を見たその時、ピカチュウの彼は、再び時空ホールのような渦に吸い込まれた。

『!?』

何かできないかと思った人間のエムが気付いた時には、既にピカチュウの姿は消え去っていた。

この時代での、その後の結果。それは、ポケモンセンターと呼ばれる施設の医者による必死の努力で、なんとか少数の人間が生き残っただけだったという。その一握りに、エムコルスは含まれていない。もちろん、彼は戸籍登録はされていたのだが、生死不明となっていた。後の世界で、生存しているにも関わらずである。

ペストにかかりかけていたが、何者かに救われたと考えるのが適切であった。

真相。それは、知能が発達したポケモンによる所為だった。人間の手下という事実を激しく嫌悪し、世界をポケモンの理想郷にし、ポケモンによる時代を築く為に、人間の絶滅させることを企み、かねてから、人目のつかない場所で人間を暗殺し続けた。だが、それでは足りないと感じ、多くの人間が死に至った歴史上の事件を参考にした。そして、化学の知識を利用し、ペスト菌を作り出した。原子爆弾のような核兵器は、落とすことができないので断念になったのだ。その菌を持った、数え切れない幾多ものポケモンを世界各地へと送り込んだ。遥か遠くの地からいきなりこっちへ伝染した理由はそれにある。そして、さっき、時空を超えたことにより、二つの姿の違う同じ生命が共存した、あの状況へと至ったのである。

だが、大事件を引き起こしたポケモンは、今、ピカチュウと化したエムコルス達がいる世界では生存していない。よって、星の停止が起きかけたのは、そのポケモンの所為ではない。

・　・　・

エムが気付いた時には、元の世界のサメハダ岩の中にいた。道具の整理整頓の途中だったのだ。彼はさっきまで起きていたことを思い出し、道具よりも先に、記憶を整理する。

――そうか、俺は人間の時の自分に出会い、人間世界の崩壊に立ち会ったんだ……。せめて、ポケモンの世界は守ってくれという、メ

ッセージなんだろう。そして、俺の過去も、また一つ見れたんだ。まだ、何も俺の人間の時のことを思い出せはしないけどな。

エムはネガティブな思考を全て捨て去り、神からの忠告と受け取った。自分があの後どうなったかは、今の自分の存在があることで、楽観視している。

数時間後、彼は何事もなかったかのように道具の整理を終えた。何も知らないチコとポッチャマが帰ってきたが、エムは決して、この不思議な体験を誰かに言うことはなかった。

「エムコルスさん……私の感謝の時渡り、どう思っているのかしらね？　記憶、元に戻るといいわね」

37話　不思議な体験（後）（後書き）

次回は……うん、その時分かります。

38話　最強の遺伝子ポケモン（前書き）

今回はプラネットさんとのコラボになります。（しかも本人からの加筆あり）

38話　最強の遺伝子ポケモン

「お、できた。これが僕の傑作品なのだ！」
以前からまだ残っていた余り物を利用して、カフェにいるソーナノからたくさんの布をもらったエレンシア。ポッチャマはそれを使って何かを作ろうと意気込んでいた。
そして、一日かけて完成させた物が、身を包み隠すローブだった。
「でも、大きすぎて僕たちでは着れないのだ……。絶対、またエムコルス君に怒られるのだ……！」
とてもではないが、自分達が着れる大きさではない。他の巨大なポケモンなら着れるのであろうが。最近はチームリーダーであるエムコルスから殴られたりする日々。サメハダ岩の中にいると不法侵入だとか言われて、追い出されてしまうので、今は、その手前の崖近くでローブを作っていた。
今現在、エレンシアの二匹はいつも通り探検に出かけている。開拓された未開の地へと行っているのだ。ここ数日間はそうしている。
・
・
・
そのエムコルス、チコリータの二匹は、数個の宝箱を手に入れて帰ってきた。いつもなら、トレジャータウンの十字路の側で誰かがいるということは少ない。だが、今日は違った。
「あっ、誰か倒れてる！」
チコが、得体の知れない何者かが、うつ伏せになって倒れているのを発見した。白っぽい色をして、長い紫の尻尾を持つ。太腿が太いが、体格は人間のようである。倒れているのだけは確かだが、見かけたことは全くない……。だが、倒れているのはポケモンであることはほぼ確実だった。
エムが駆け寄って、脈を確かめる為に、首もとを持ち上げる。脈

が動いていてまた、息を吐いているのも確認する。
「まだ大丈夫だ。運ぶぞ」
「ど、どうやって？」
「ああ。チコ、お前がムチを伸ばして、このポケモンの体に巻きつけて、引き上げて、このちょっとサメハダ岩までの距離まで歩いてくれよ。それが手っ取り早い」
エムが手で表現しながら、チコに頼む。さすがに、ニューラのようには行かないのだ。
「……やってみるよ」
内心、チコは余計な無茶をさせられているように感じながら、エムの言う通りにそのポケモンをムチで持ち上げ、負荷がかかりながらも歩いてサメハダ岩まで向かった。
「こ、これは……誰なのだ？」
ポッチャマが、チコが今ムチで持っているポケモンを見て、奇妙そうな顔をしている。
「……」
正体を考えるあまり、エムもチコもポッチャマを無視して中へ入っていってしまった。
その後、最低限の応急処置を済ませてポケモンを寝かせ、チコがアロマセラピーであるかもしれない状態異常を抜かせた後、チコがペラップも呼んできた。しかし、ペラップですら姿を見たことがあらず、本当にこの倒れているポケモンが誰なのかが分からない。というか、知らないものがありすぎるペラップは、エムとしては本当に情報屋なのか疑わしく感じてきた。結局それは自称だったのか、と。
「ペラップ、何か『姿は分からないが名前だけなら聞いた』ってポケモンはないの？」
「うーむ……。それなら……」
チコに聞かれて、ペラップもそういうポケモンがいると考えて思い出そうとする。

「うぐっ……ここは？」
その時だった。応急処置かアロマセラピーのおかげで、遂に謎のポケモンが目覚めた。ポッチャマも気になってサメハダ岩に来て、彼を含めた四匹は、起きた謎のポケモンを見る。
「ここはサメハダ岩という場所よ。あなたはトレジャータウンもしくは、プクリンのギルドの近くで倒れていたのよ」
「それで、名前はなんと？」
チコが説明し、その次に、ペラップが名前を聞いた。
「私は、ミュウツー」
ミュウツーと名乗るポケモンは、そう静かに言った。
「あ、あのミ、ミュウツーですとぉーーー！？
「な、何か知ってるの？」
「ああ……歴史学者によって作り主の名前は変わったりするがとにかく、人間によって作られたという最強ポケモン……」
ペラップだけが、その名前を聞いてとても驚いていた。そして人間という言葉を言った瞬間、ミュウツーはペラップをギロリと睨んだ。
「へ……私なにかまずいことを？」
「まず聞きたい。第一、何故私などのような者を助けた？」
ミュウツーは、ペラップが言うような『最強』とは裏腹に、自虐的なことを言ってくる。
「そりゃ倒れていれば助けるだろ……」
一瞬、エム助けて貰っておいてその言い方はないだろということを思ったが、失言に注意することを学習した彼は、第二に思ったことを言った。
「くっ……何故私などを！」
「『何故私などを』って、何故そんな変わった事を言うのだ？」
緊張感を欠けさせる失言とも言えよう言葉を使ってしまうポッチャマ。ミュウツーは彼をギロリ、とまた睨んだ。そして、こう言う。
「私の力は……世界そのものを破壊できる。そんな『脅威』ともい

える存在を助けたのだぞ貴様らは。この場で貴様らを消し、世界そのものを破壊してやるのもまた面白い……」

ミュウツーはそう静かに微笑していた。傷で痛む腕を、ゆっくりと上げて、まるで今から殺そうとするかのように睨む。

「ひぇっ……」

ポッチャマは言葉も出ずに後ろへと下がる。だが、彼の傷は大して治っていない。無理をしているのはエム達にも一目瞭然だったが、瞬間的に感じたその圧倒的な威圧感は今までに感じた事もないほどに強大なものであった。それはかつて星の停止を食い止めるべく、闇のディアルガと対峙したエムとチコでさえ一瞬恐怖を感じてしまうほどだ。

だが、恐怖というよりは彼に――ミュウツーに対する畏れの表れ。体中の神経が逆立つ。生かしておくのは危険だ――と。だが、ミュウツーはそれを狙っていた。

だが――エムはこう口にした。

「やってみるがいい。今のその体でできるのならな。そして、お前が世界を滅ぼそうとした存在であっても、今のお前は明らかに大怪我を負った怪我人。それなら、放ってはおけない。それだけの話」

エムがそう言う。ペラップとポッチャマは、ミュウツーの破壊するという言葉に恐れて黙っている。何故世界を壊せるとかそんなこと言っている者にそういう感情を持てるのか、二匹は不思議でたまらなかった。

「貴様……何者だ?」

「エムコルス＝ロイテマン」

それを耳にした瞬間、ミュウツーの目つきが一変した。それに感じる事の出来るものは明らかな憎悪。怒り。憎しみ。全てがその瞳に込められていた。

「……そうか。貴様は紛れも無く……。貴様のような者達に命を救われるとはな!」

そう言い捨てると、ミュウツーは起き上がり、サメハダ岩を飛び

出してしまった。
「あっ！　待ってよ！」
チコが追いかけようとする。しかし、ミュウツーに怯えてるペラップが止めてくる。
「おいおいっ……待つのはそっちだよチコ！　何故あんな恐ろしい力を持つポケモンを……！　ワタシャ関わりたくないよ！　いくらお前達でも危険だ、止めておけ！」
ペラップが羽をバタつかせて言うその言葉も、エムとチコは聞く耳を持たない。
「分からないか。奴は恐らく迷いの中にいるということを……」
「うん、何か悪者とは違う気がしたの……」
そう言って、エムもチコもサメハダ岩から出て行った。
ミュウツーは、古代に一人の人間の研究員によって作られたと言われている。だが、この世界において、特にミュウツーが何かをした痕跡はない。そうなると、彼は過去でも未来でもない、異世界から来たと言えるのだ。

38話　最強の遺伝子ポケモン（後書き）

というわけで、プラネットさんの小説キャラクターから、ミュウツーです。
更に、今回はプラネットさんとの共同執筆も少々することになります。よろしくお願いしますw

39話　人間の信用

エムが、ミュウツーに自分自身が憎まれているという事に気付いたのはその後だった。

名前を名乗った時、ミュウツーは「やはり……」と言った。その後は恐らく、「人間なのか」という言葉が省略されている。あの言い方だと、間違いなく人間を嫌う者であるに違いなかった。

何故、憎まれているのか――歴史なんて知らない。昔話も何一つ知らない。ミュウツーに関する事実を聞いたことなど、エムはなかったのだ。

信用してもらう為にと、彼は単騎でミュウツーの所へと行く。

「なんだ、世界を壊すんじゃなかったのか？」

ミュウツーが、トレジャータウンから離れた海岸にいるのをエムは見つけた。

「……貴様、人間だっただろう」

やはり分かっていたか――エムはそう驚きもせずに頷いた。

「だからどうしたと言うんだ」

「……貴様もあの身勝手な生き物の仲間だということだ。人間は、ポケモンを利用し、簡単にポケモンを裏切り、見捨てることができる。そんな生き物が生きていること自体が憎い」

ミュウツーはエムの方を向いてきた。右腕を上げて、静かに瞑想する。そして、彼は目を開け、エムを睨んだ。

「様子から察するに、今から俺を殺すということか……」

「そういうことになるな」

中途半端ながらも、ミュウツーからは殺気が感じ取れた。だが、殺したいという意志だけではなく、僅かながら、自分への興味というものを、エムは感じた。

「だが、考えてもみろ。俺はもう人間ではない。人間でなくなったんだ。それに、俺は道具としてポケモンと共に暮らしていた覚えは

ない。
　ついでに、ここで騒ぎを起こせばすぐ大勢のポケモンが駆けつけてくるだろう……。やめておけ」
「人間だった奴の言うことを何故聞く必要がある」
　そう言いながら、ミュウツーは過去を思い出していた。ある日、生みの親から告げられた、不要だという言葉。今でもどうして「彼」がああしたのかが分からない。
　人間はそれ以降信じられなくなったが、中にはそうでもない人間もいた。もしかしたら、この男も、自分が信用しても大丈夫な、それも、元人間なのかもしれないと思っていた。
　「エムコルス」という男が、今はれっきとしたポケモンなのにも関わらず、かつては人間であったという事実には全く驚きはない。なぜなら、既に幾つかそういう者を見ているからだった。
「お前、一体何者なんだ？」
「何？」
「お前に関しては詳しくは知らない。だが、お前がここの世界のポケモンでないのは多分想像がつく。じゃあそうなったら、お前は一体何者なんだ？」
「……まぁいい。傷の事もある。教えてやる、簡単に言うならば、神と対峙して敗れた。ディアルガなどではなく、その上をいく……そう、創生神と言うべき存在にな」
　ミュウツーは天に向かって指を差した。遥か彼方の地にそれはいると言いたいのだ。
「上の存在……」
　エムはミュウツーの言葉に驚きを隠せなかった。ディアルガは時の神。だが、それを上回る、上位の神が存在している事など聞いた事も無い。受け入れがたいが、全て嘘だと呑み込む事すら出来なかった。
「フン、信じていないな。なら、ここはまだ邪魔者がいそうにない。少なからず今この傷は深いものの……。この傷さえ治ればこんな世

界、簡単に掌握できる。こればかりは冗談ではない。そして、それを現実にしてやる。貴様らがいかに生ぬるい存在であるのか、教えるという目的も含めてな……」

「……やはりお前はやるしかないか」

この世界に世を脅かす存在は限られていても、別世界となれば話は変わる。別世界にも、世界を我が物にせんと考える者はいるのだろう。ミュウツーはその例……。エムはそう感じ、顔を引き締めて、ミュウツーに対して、少々ばかりの敵意を持つ。

「……似ている」

「何？」

「似ている。かつて私の邪魔をした連中と。今も、昔も。そしてここにも。似た者同士の目は結果的に同じ、というわけか」

「どういう意味だ。俺のコピーがいるとでも？」

エムの言葉を聞かずして、ミュウツーはその重い体を動かす。傷はあまり癒えていないところからその面持ちは少しばかり苦痛染みている。そしてエムの背を通り過ぎる。

人間には、ポケモンと比べて、多少性格は違えど、正義感を持つ者が多いのだ。誰を信じる、いや、信じることができるのか……。少なくとも、エムコルスは裏切ったりはしないだろう。ミュウツーはそう心中で感じた。

――バカな……誰が人間なんか……！

そうミュウツーは自分に言い聞かせた後、こう言った。

「お前は変わっている。……変わってる上に人間な奴なんて信用するものか」

エムは何も言い返さなかった。そのまま、ミュウツーがいなくなるのをじっと眺めている。結局、ミュウツーは何もしてこなかった。

「……どう考えても、お前の方が変わってると思うがな……。頼むから、騒ぎは起こすなよな」

誰もいなくなった海岸で静かにエムはそう口ずさんだ。

・

・
・
「ねぇエム、どうだったの？」
その後、ひとまずミュウツーのことは置いておき、普通に物事を行うことにしたエレンシア。チコがまず、エムとミュウツーの会話の結果を聞く。
「これと言ったこともなかったな」
掌握だなんて、あの状況でならただのほら吹きに過ぎないとエムは思って、そう言った。悪人であるような発言が目立っていたが、救いようのなく、もはやどうしようもないわけではない。
何らかのきっかけで、ダークサイドに堕ちかけていて、迷っている者のように感じたのだ。
「ところで……今日また、怪しいお尋ね者のポスターがあるんだけど……」
「奴に関してか？」
「そうじゃないよ。なぜかとてつもないお尋ね者ランクが付いてるのよ。★９ってね」
チコの目線が差す先にあった、掲示板の一枚のポスター。格闘ポケモンカイリキーの写真に加えて、１５００００ポケという圧倒されるような報酬が記載されている。エムが説明文を読むと、ハブネークという探検家の潜入調査により、殺人を繰り返しているとされる凶悪犯の住処の情報を遂に手に入れたという。正確に言えば、爆発物の不正取引の調査中に、そのカイリキーが、取引人を殺していたのを発見したのだ。危険と言われていた者をあっさり殺害した時点で、凶悪という考えは成立している。
ハブネークが潜入調査に成功したはいいものの、彼にあるものは隠密力だけで、戦闘能力は足りなかった為、盗み聞きによるその後の行動の目星付けだけ。更にその後、カイリキーを逮捕しようと二名の腕ある探検隊が挑んだが、なんと、撲殺されてしまったという。それほど強いことが理由に、最高ランクが付けられているようだ。

「……こんなのが、最近ギルドでも堂々と貼られるもんだよな」
「エム、行こう。今日はなんかいつもより難しいらしいけど……」
「ああ」
この依頼を実行することに決めたエムとチコ。場所は暗夜の森。暗いが為に、隠れ家に役立っているのだろう。今や自分達にできないことはないと信じているこのチームに、怖いものなどない。ただ、悪をなくしたいという頼みに応え、そして自分達の望みを達成していくだけだ。
しかし、両者共に気付いていなかった。再びこれが、「あの者達」へと繋がる道になっているということに。

39話　人間の信用（後書き）

ていうか2週間ぶりの更新……。

未登録者の感想送信を全作品可能にしましたので、皆さんお願いします。

これからは、４日おき更新なんかできないと思われます。

40話　緻密な罠

――来たな……。今回は前回より強いらしい。だが、誰もあの罠は突破できまい。それが俺が絶対に負けない理由なのだからな。

★9ランクを誇るお尋ね者、カイリキーは、暗夜の森の奥地で、エレンシアの気配を感じていた。

一方で、エムコルス、チコリータはダンジョンを突破しようとしていた。ミュウツーのことは頭の片隅に置いて、暗闇の中も関係なく、中の探索を進める。ところが、出口の前に罠があった。

「っと」

罠を踏み、発動直前で足をどかして回避するエム。すぐさまチコが解除して、何事もなく終わる。

「……なんか、見たことない罠だったんだけど」

「解除したんだろ？　なら関係ない話だ」

だが、後一歩歩いた後に、粘つきスイッチがあった。それもチコが解除して事なきを得る。

更に進んで、次に見えてきたのは一個の宝箱。しかし、その宝箱の近くに敵はいた。四本の腕を揃えて、灰色の、屈強で逞しい、筋肉質な体をしているポケモンがいた。あれこそ、カイリキーである。

「なんだ。誰かと思ったらただのガキじゃねぇか。何しに来たんだ？　宝箱ならやるよ」

カイリキーは、エム、チコの姿を見てそう言った。

「その前に、お前を牢屋にぶち込まないとな」

エムがカイリキーを指差して言う。しかし、カイリキーには異様なオーラがあった。威圧感があるとも思わないのに、体中からオーラがあるように見える。だからと言って、引くことはない。

「ははっ、ますます驚いた。ガキのクセに俺を倒す気か。まさか、相手の力量も知らずに来たんじゃないだろうな？　お前ら、行きやがれ」

カイリキーの命令で、彼と同じようなオーラを持つ、ワンリキーが二匹出てきた。カイリキーはエレンシアをバカにしたような態度を取っているが、これは挑発で、ムキになって自分の懐へ飛び交ってくるのを狙う為だった。

二匹のワンリキーは、エムとチコに襲いかかってくる。その前に、エムは１０万ボルト、チコは葉っぱカッターで、迎え打つ。一方のワンリキーは電気に痺れて倒れ、もう一方は顔面に葉の先が直撃して、仰向けになった。

「これで倒せるとでも思ったのか？」

「いや、全く思ってないな」

カイリキーが、下僕であるらしいワンリキーを倒されても、全く焦りの素振りを見せないことに、エムとチコは疑問に思った。今のワンリキーに何の意味があったのか……。

「俺は組織の創始から計画に関わっていてな、組織に都合の悪い奴を消しているだけだ。何が悪い？」

カイリキーの言う組織とは、まさに『闇の創世者』のことだった。彼がそうであることに気付くと、エムはまた驚かされた。具体的な名を言わなくても、雰囲気で分かる。

「悪いに決まってるじゃない！」

チコは、カイリキーの質問には根拠は付けずに答えた。

「ふっ、自分から正体漏らすとは、とんだマヌケだな」

エムはそう言いながらも、とっ捕まえて、組織に関して吐かせてやる、心中で思っていた。しかし、既にエレンシアは罠にかかってしまっていたのだ。

「どちらにしろ、ここで殺してやるのだから何の問題もない」

カイリキーがそう言った刹那、エムが電撃を閃かしてやろうと、１０万ボルトを放とうとする。……しかし、その電撃が出ることはなかった。放出する電気が、何一つ体に回ってこないのだ。

――な！　技が出ない！？

彼は何故出ないのか考えてみて、また、他の技は出るのか、調べる。すると、電気の全てが出なくなってしまったことに気付いた。一体何が起きたのかが分からない。

「……あれ？」

「チコ、まさかお前も？」

「うん、葉っぱカッターが出ない……」

チコも草技を封じ込められてしまっているようだ。一体何故なのか……。

しかし目を離していた隙に、カイリキーが攻撃を仕掛けてきた。爆発しそうな拳が飛んでくる。つまり、これは爆裂パンチ。

チコがリフレクターを張って、カイリキーの四本の腕から繰り出されるそのパンチを防ごうとする。

――ガガガガッ

微妙な時間差で壁にぶつけられるカイリキーの腕。壁は割れずに何とか防ぎきった。

「う……！」

チコは壁のすぐ側にいる。カイリキーのパンチのパワーが壁を割らんとする勢い。壁で受けるチコにも多少の衝撃が伝わる。

「時間稼ぎか。……喰らえ」

カイリキーが、壁から離した一本の腕から渾身の力で放った気合球。

「うぐっ！」

チコは正面から正確に球を当てられた。なんと、カイリキーは特殊攻撃も用意していたのだ。慌てて避けようとするが、ノーガードと呼ばれるカイリキーが相手では、防御はされないが、攻撃の回避も不可能。つまり、お互い必中となるのである。

「チコ！　大丈夫か？」

エムは、気合球でダメージを受けたチコに近付き、安否を問う。

「うん」

まだまだといった表情でチコは立った。

「ふっ、そろそろ教えてやるか。お前らはさっき、一部技が出せないと思っていただろう……。そりゃそうだ。お前らは、使おうとした主力技、既に体内のＰＰが切れているのだからな」
「な？」
ＰＰとは、パワーポイントの略で、あるポケモンが一つの技が出せる限度のことである。エムとチコには、その限度が来たということなのだ。
しかし、無駄使いをした覚えはない。倒したとすれば、さっきのワンリキーぐらいだ。
「それと、床スイッチを見かけたな。あれは俺が直々に改造した罠でな、解除しても、効果が発動するスイッチだ。ほら……また回復しようとピーピーマックスを取り出そうとしているが、粘ついてるだろう？」「……くそっ、てめぇ……」
エムがちょうどバッグ内の、ＰＰ回復の道具を取り出そうとするが、ピンポイントにも、その道具が粘つき、使えなくなってしまっていた。
「そして、もう一つの罠は怨念！　俺達を含めて全員が怨念を持ち、その怨念を持ったポケモンが倒されると、倒した奴が最後に使った技類のＰＰを全てなくす」
「だからあんなワンリキーを突撃させたってワケか」
予測も付きようのない作戦にエムとチコは驚かされていた。まさか、捕まえられない理由が、主要技の封印にあろうとは。更には、罠の解除まで想定されていたとは……。
第一、解除されても発動するような、普通ではありえない罠の作成ができる技術がどこにあったのか、不思議でならない。
「鋭いな。そういうことでお前らはここで死ぬ、と」
カイリキーは、一本取られた、というような表情をしたエレンシアの二匹を見て冷笑してから、再び四本の腕を前に構える。
「そんなワケに行くかっ！」

技を封じられても、まだまだ策は残ってる……。そう思い、チコはカイリキーに向かってそう言う。
「チコ、ここは後ろに下がってろ……」
「で、でも……」
「こっちは大丈夫だ。そっちは壁張りを頼んだ」
エムは電気技が使えず、チコは草技が使えない。しかもご丁寧なことに、粘つく道具はピーピーマックスと洗濯球になっている。カイリキーは、相手に全力を出させずに殺していたのだ。
しかも、カイリキーから、逃げようとしても逃げきれないのだ。だがもちろん、彼は逃げるつもりなどない。
「ガキが。一致技を使わずに勝つつもりか。全く、なめられたもんだ」
頭を掻きながら、カイリキーは貶すように言う。だが、エムはそれに関して全く反応しない。
「……行くぞ」
カイリキーにはリーチのある腕が四本もある。しかも、特性ノーガードで、避けることが不可能。
安全に勝てないのは分かっている。だからこそ、気を高めなければならないのだ。

４０話　緻密な罠（後書き）

脱字・誤字指摘、お願いします。

41話　格闘エキスパート（前書き）

協力：プラネットさん

41話　格闘エキスパート

ギルドの中に警察が入ってきた。これは、お尋ね者に関してのことが理由である……。

「エエト、★9ランクノポスターヲ……アレ？」

ジバコイル自らが回収しようとしている依頼があるらしい。さらに、★9ランクの依頼となれば、エレンシアの受けたあの依頼しかない。

カイリキーの逮捕は、探検隊連盟が直々に行うことになったのだ。よって、カイリキー逮捕作戦が実行されてしまったのは想定外なのだ。

「おや保安官……どうなさいまして？」

ペラップが、なぜか掲示板前にいるジバコイルに気付き、尋ねた。

「イエ、ソコラノ探検隊ニ受ケサセルニハアマリニモ危険ナ依頼ガ手違イデ貼ラレテイマシテ……。ソレデ回収シヨウト思ッタノデスガ、誰カガ受ケテシマッタヨウデ……。コレハ、相当マズイコトニ……」

「ふむ、そのような依頼を積極的に受ける探検隊は卒業したあいつらしかいないな……。ま、エレンシアなら大丈夫かと思われますな♪」

「イヤイヤ、相手ノカイリキーハ、力押シダケデナイ戦法ガアルンダト発覚シタンデス。イクラ一流のアノチームト言エド、相手ノ術中にハマッテシマウ危険性ガ！　今スグ救助ニ行カナイトドウナッテイルカ分カリマセン！」

「そう言われましても、辺りであいつらに勝てるような奴もいないもんで……。うーむ、どうしよう」

ペラップは困り果てた表情をして、首を傾げた。――確証がなくては親方様は行けないし、かと言って、仮にエレンシアが負ける相手なら、弟子達じゃ無理だし……。

そして、その付近に、つい前まで、エムコルスと会話をしていたミュウツーがいた。壁際に立っていても、見かけない顔の彼には視線が降り注ぐ。ディグダは、ミュウツーの足型を見抜いてしまった。そして、一瞬ギルドがどよめき、弟子達が、彼に関する話題をしていた。

ミュウツーはエムコルスという男について考えていた。誰かが彼、そしてその相棒への加勢を望んでいる。確かに自分に人間を救った事例はあるが、それはそれ、これはこれ。今は助けようとは考えられない。

ギルドの中にいても正直つまらない――そう判断したのか、ミュウツーはその話を見て見ぬフリをするかのように無視して、ギルドの外へと出る。

あのエムコルス、という人間は変わってはいたものの信頼などする気にはならないし、助けに行く気などさらさら無い。暇を潰すにはどうすればいいのか、というのが今の率直な本音だった。だが、暇つぶしという面目でエムコルスを助けに行く？――そんなワケが無い。一瞬してしまった下らない考えにミュウツーは自分で自分をあざ笑うように軽く笑う。

「……」

結局は元いた場所。海岸へと姿を見せる。体の傷は未だに全快ではない。だが、暫くすれば全快する。全てを支配する気は無いわけではない。行動に移していいのだろうかと改めて考える。

そんな時だった。彼に投げられる1つの木の実。それは体力治癒能力を持つもので最高のものを誇るオボンの実だ。こんな場所でオボンの実はならない、という事は当然それは誰かが持参したという事になる。

「……お前は」

「やあっ♪」

それを投げ渡した者――ギルドの親方であるプクリンが、ミュウツーの側に来る。

「……何の用だ？」

刺々しい言葉をぶつけるミュウツー。だが、プクリンはそれに微笑むだけである。オボンの実はまだ手をつけてはいない。これは――そう、一種の駆け引きなのかもしれなかった。

「伝説のポケモンと会えるなんてなかなか無い機会だと思ってさ♪　そして、見てて痛々しかったからさ♪　君、あそこに何故いるのか分からないぐらい、強そうだね。さっきの保安官とペラップの話、君は聞いてんだよね？　その木の実の意味……分かるかな？」

・　・　・

カイリキーと対峙しているエレンシア。動き始めはエムコルスの方が速かった。格闘タイプの接近戦に対抗しようという彼を、カイリキーは内心あざ笑っていた。全ての攻撃を避けることができない彼だが、相手もまた攻撃を避けることはできない。よって、攻撃をかわしながら攻めることは不可能なのだ。

更には、今までにあのカイリキーと対峙した者は皆、あの怨念スイッチの罠によって、主要技を使えないというハンデを抱えさせられていた。それでも、特殊技があるならまだ勝ち目はある。だが、同じ格闘タイプでない限り、打撃戦では勝つことすら不可能に近い。

それなのに、エムはカイリキーに対抗しようとしている。だからカイリキーはあざ笑っていたのだ。　だが、カイリキーの予想とは裏腹に、エムの攻めは甘くなかった。スピードに乗り、腹部を右手の先で殴りつける。パンチに怯んだ所を更に、逆側の手で殴る。

「……っ！？」

意外な破壊力に驚いたカイリキー。だが、タイプの一致しない技では、格闘タイプには僅かに及んでいない。

カイリキーはエムの手が届かないような場所にまで飛び上がり、四本の腕をスタンバイ、反撃しようとする。しかし、エムもすぐさま飛び上がり、尻尾を鋼のようにしてから、カイリキーに尻尾サマ

ーソルト。そのアイアンテールを受けたカイリキーは宙からの攻撃は止めざるを得なくなり、地上へと再び戻った。

「さ、さすが……」

チコはピカチュウという種族的に考えると、動きや思い切りの良さが、いい意味で非常識な、エムコルスという男の戦いを傍らから見ざるを得なくなった今見て、感心していた。

もう一回――と、エムは再びカイリキーに接近する。二度も同じ攻めが通じるかと、カイリキーは受け止めようとするが、その相手の体は自身の真上を飛んでいった。抜群の運動神経を生かして飛躍し、エムはカイリキーの背後へと回った。

「後ろか……！」

カイリキーは反射的に、振り向きながら手の一本を自分の背中の前に出して、殴りかかろうとしていたエムの手をガシッと掴んだ。

「野郎っ……」

「ガキにしちゃまぁまぁなセンスだった。来世で頑張りな」　カイリキーの握力から抜け出せず、顔をしかめているエムを見ながら、カイリキーは三本の拳に力を入れる。

だが、させまいとチコがエムの目前にリフレクターを貼った。その壁がカイリキーの拳を封じているのだ。だが、カイリキーはニヤリと笑った。

――「弾」なんて突進して消してやる……！

エムが考える弾とは、先ほどカイリキーが見せた気合球のことである。カイリキーのその表情は、それがあるからだと踏んでいた。

しかし、カイリキーは手を伸ばして、壁に向かってチョップをしてきた。すると、爆裂パンチすら耐えたリフレクターが破れてしまった。これは瓦割りという技なのだが、実はこの技には、壁を割るという効果があった。

「……んっ！」

チョップは片手の方で何とか受け止めるが、すぐに別の手からパンチがきた。すぐに手を離すと、彼は体に力を入れて、カイリキー

の格闘技に耐えきろうと考えていた。いや、最初からその手段しかなかったのだ。

カイリキーは、アッパーの形で予想通り腹部を狙ってきた。小さめながら器用な手を体の前に置くと、カイリキーの拳の一本はちょうど手に当たった。そして、急所にまで届かない。

――よし、苦しみが少ない！

ガードといえるような効果が出て、エムはすぐさま反撃に移った。カイリキーの別の手を抜けて、今度は逆にカイリキーの腹部に目にも止まらぬ電光石火を叩き込んだ。

「ぐあっ……。くっ、イカレた奴。一体どういう神経の構造してるのか……」

これで確実に沈められると確信していたカイリキーにとって、これは予想外だった。パターンは把握できたか……エムはそう考え始めた。

一方でチコは、壁が通用しないと知るや、手出しが全くできなくなっていた。ピーピーマックスが使えれば……と、今は何度も思う。

「だが……俺がこんなのを使うとは予想もするまい」

そう言ってカイリキーは、地から卵のような岩を引きずり出して、エムに放った。多彩な技を持てるカイリキーの技の一つ、ストーンエッジだ。確かに、カイリキーがこういう技を使うとは予想だにもしなかった。ノーガードで決して避けさせない特性によりかわせず、尖った岩がエムの体を直撃した。

「つぅっ！」

そして、怯んだ所への爆裂パンチの追撃を、とうとうエムは受けてしまった。更には頭が変になってきた……。というのは、爆裂パンチの追加効果である。それで混乱状態を引き起こしてしまったのだ。

「残念だったな。イカレたこともそう何度もできまい。終わりだ……」

またカイリキーが右腕を振り上げ、同じ爆裂パンチの構えを不敵

な笑みを浮かべながらとってくる……。

42話　感謝？（前書き）

協力：プラネットさん

42話　感謝？

そして、ミュウツーは遠目にエムを見つけた。何故彼が暗夜の森にいるかなど、彼自身にもわからない。いや、正しくは頼まれたからだ。

断るなど簡単だったはず――それなのに彼はここにいる。それは彼がエムコルス、つまりはエムに興味を持っていたことも大きいだろう。そして、罠を踏んで、道中技が出なくなったりはしたが大した問題ではない。しかし、エキスパートタイプの技である念力を放てないのは手痛いものがあったもののそこまで深い問題ではない。

・　・　・

「こんのっ！」

チコが遂に思い切った行動に出た。カイリキーに向かって体当たりをしたのだ。その刹那、アロマセラピーを散らしてエムを正気に戻す。

「はっ……や、やめろ！　そんなやり方で勝てる相手じゃない！」

混乱が解けたその時、エムはもう一度カイリキーに突っ込んで行くチコが見えた。呼吸が荒くなりながら彼は叫んだ。カイリキーは余裕の素振りで構えている。

「うわあっ！」

しかし、無情にもカイリキーは右手に炎、左手に冷気を込め、その二つの力をこめた腕で、体当たりされる前に、殴り飛ばしてしまった。

エムがパンチで吹き飛ばされるチコを、のけぞりながらも体で受け止めて、無言で地面に寝かせる。

「うっ……ご、ごめんね……」

「気にするな、絶対に奴は倒すから……。それに、これ以上お前に

手出しはさせないから、安心しろ」
　チコは今の相性の悪い一撃で傷を負い、しかも、ああ言っているエムも疲れが目に見えてきている。厳しい状況だった。
「この状況で必死な奴だ。全く、自分の死も他人の死も受け入れたがらないそうだな。まぁ、そりゃそうだろう。死ぬという現実を受け止められずにあがいているのだからな」
　そう言っている間に、カイリキーはまたしても片腕での爆裂パンチ。これは何とか、自らも渾身のパンチで受け止めた。
「……ちっ、まだやるのか。やはりイカレた能力があるのは認めてやる。だが、結局はお前も、俺に殺された奴も、たったこの１０分で終わるような価値。平和ボケして、この世というぬるま湯に浸かってるから死ぬ。あの世で反省しな」
「何をふざけたこと抜かしてやがんだ……！　てめぇがその考えを反省しろ！」
　どういうことからこんな考えが浮かぶのかが全く分からない。誰かを失う悲しみを全く知らないのだろうか。ますます、捕まえて檻に送らなければという意志が芽生えた。
「もうお前は立ってるだけで精一杯なはず。そろそろお前らには消えてもら……」
　彼は――そう、異世界では神をも凌駕するほどの力を秘めていたから。そして辺り構わず、彼は得意技のシャドーボールを放つ。別にエキスパートタイプが使えなくとも彼は平気だった。その不意打ちとも言えよう一撃はカイリキーを吹き飛ばす。
　突然の攻撃にカイリキーだけでなく、エムやチコも驚きを隠せなかった。
「くっ、何者だ、姿を現せ！」
　カイリキーの言葉を待つまでもなく、ミュウツーは姿を現した。
　その登場には当然驚かされる。
「な、何故お前が……？」
　助けに来るなど予想だにしていなかったエムが、半信半疑でミュ

ウツーに聞く。
「勘違いをするな。ただ通りかかっただけだからな。間違っても、介抱されたことへの感謝ではないんだからな」
「というかな、助けに来いとは言っていない。第一、お前が今いなくとも、俺は勝てているんだからな」
「じゃあどうしてそんなにお前も相棒もボロボロなのだか……」
「そ、それは戦いでなら当然の結果だ」　エムとミュウツーが会話をしているその目の前に、ミュウツーの攻撃を受けてもなお、ゆっくりとカイリキーが近付いてきた。
「ハハハハ……生まれてはいけなかったとも言われるポケモンがこうも堂々と来るとは……」
「ふん、貴様のような弱者に私の存在意義を語る権利はない」
「なっ……！　はや……ぐはあっ！」
　黒い球体、シャドーボールを目にも止まらぬ速さでぶつけたと思うと、続けざまに４つ、追撃を加えた。
（……そんなバカな）
　あっさりとカイリキーを追い込んでしまったミュウツーを見て、エムは目を丸くしていた。
「初めてこの程度の実力か。正直言わせてもらうと弱すぎる」
「黙れ。お前は人間という下等生物から意図的な強さをもらっただけ。才ではなく、造り物。人間の手下など、ここで八つ裂きにしてやる！」
　段々と冷静さを欠いてきたカイリキー。人間を憎むのは、彼も同じらしい。だが、ミュウツーというポケモンを、「人間の手下」と見なしているようだ。
「弱い犬ほどよく吠える、とはこの事か。ならば来るが良い。貴様はあと一撃で沈む」
「舐めるな！」
　怒り狂ったカイリキーがミュウツーに迫る。だが、ミュウツーの攻撃ですでにカイリキーの体力は風前の灯。ミュウツーの宣言どお

りしとめる事は簡単なのかもしれない。
「死ねっ！」
「消えろ。弱者が」
素早さの差は歴然。ミュウツーは、とても素早かった。カイリキーは炎のともした拳を当てようとするも、その言葉と共にミュウツーの拳がカイリキーに炸裂していた。その拳は黒い。悪を感じさせるレベルだ。
「ガッ……」
その一撃でカイリキーは大きく吹き飛ばされる。木々はいくつもなぎ倒され、カイリキーは動かなくなる。
「……死んじゃったの？」
チコが不安に感じ、ミュウツーに聞いた。
「それはない」
それがミュウツーの答えだ。
「大方気絶したのだろう。まぁ、凶悪犯罪者は殺すのが法律となってるのなら、死んでいても問題ないだろう。とにかく、あの様子だと暫くは目を覚ます事は無い」
「そうか。……いつかお前を倒して、この借りを返してやるからな」
「ほう、プライドに傷が付いたとでも言うのか？」
エムは、自分より上の存在がいること自体が気に入らなくなっている。だから、自分が苦戦した相手をあっさり倒したミュウツーの強さが、内心感謝しながらも、少し妬ましいらしい。
その時、ミュウツーは一瞬だけ、何かが変わった気がした。しかし、辺りは何も変わっていない。その刹那、あのポケモンが現れた。
「オオッ、倒シタンデスネ。ゴ苦労デスヨ」
ジバコイルだった。どうやら、彼が直々に来た、と考えられる。
「……誰かに助けを求めてたんじゃないのか？」
そう言うのはミュウツー。少し不審に感じ取った。
「……。エエ、ハイ。デスガ、無理ダッタノデ、私ガ来マシタ。デハ、チョット通リマスヨ。カイリキーヲ……」

ジバコイルはカイリキーの方へと近付く。恐らく逮捕をするのだと、エムもチコも思った。が、彼は、鋼の技、ラスターカノンと電磁砲をカイリキーに向かって、何発も放った。

「なっ……！」

「ええっ！？　逮捕するんじゃ……」

ジバコイルの特殊攻撃は最強クラス、それが理由か、カイリキーは、たったの数発で、胴体から赤い血液を流している。

「ヨシ、死刑ハ完了シマシタ」

「死刑？　どういうことだ！」

「エエト、彼ハソノ場デ殺ス必要ガアルト判断サレマシタ。牢デモ暴レテ被害ガ出ル危険性ガアルノデ。ソレニ、大量殺人デ、死刑判決ハ確実トナリマシテネ」

「そ、そんな。死刑だなんて、聞いてないよ……」

「確かに理屈は分かるが、これじゃ治安の悪い町のやり方だな」

チコも、エムも、この結末に違和感を感じていた。ジバコイルが、何か違う気がする。

「……デハ、皆サン協力アリガトウゴザイマシタ」

そう言うと、ジバコイルは磁力でカイリキーの死体を引き寄せて、エムとチコ、ミュウツーから離れた位置から森を出た。

（奴が、ギルドで見た本物でないことは検討が付くが……。あんまりエムコルスに得になる行動はしたくない）

ミュウツーはジバコイルを少し追うことに決めた。だが、そのことは言わず……

「さて、これ以上何もすることもあるまい。私は散歩にでも行く」

「勝手にしてな」

そうエムが言って、エレンシアの二匹は、探検隊バッジを使って帰って行った。ジバコイルは確かに怪しく感じていた。彼が現れる前後には、不思議な感覚も感じている。だが、この傷と、技ではもう戦えない。そう判断してでのことである。

ミュウツーは、言った通りに歩きに出かけた。そして、ジバコイルの行方を素早く追って行く。

・
・
・

「私に手間をかけさせるとは……」

先程現れたジバコイルの正体は、ダークライだった。彼は、組織のメンバーが警察にバレたことで、組織のことが警察に漏らされることを危惧していた。

それで殺すかどうか迷っていたのだが、今回、彼がほぼ逃げ切れないと判断した彼が、行動に及んだのだ。三匹を現実と区別の付かない悪夢に包み込んで、姿を変えて……。

ミュウツーが接近してくることに気付くと、ダークライは逃げる体勢に入った。その後、ミュウツーとダークライの間にあったことは、誰も知らない。

43話　予言?

「ソ、ソレハナンテコト！　トイウカ、カイリキーハ、オ亡クナリニナッタト！?」
「そうか……。やっぱりアレは偽者だったということか」
「……デ、エレンシアサンハ、今マデニソノヨウナ組織ヲ見テキタト?」
「……いや、ない」
　カイリキーが捕まえられなくなり、ギルドに戻ってきたエレンシア。そして、ジバコイルに確認をとってみた所、意味が分からないとのことだった。
　組織が、エレンシアを狙っていることは明白であり……下手に警察に情報を漏らせば、周囲も危ない。少なくとも、リーダーがカイリキーが逮捕されそうなことを知って、行動に移った、と考えられる。つまり、リーダーは表の状況を知ることができるのだ。「トニカク、生キテ帰ッテコレタダケデモヨカッタデス。メタモン辺リがリーダーダッタノダト思ワレマスネ。殺人犯トハイエ、仲間ヲ平気デ殺ス、トテモ非道ナ集団デスカ……。ドコニ潜ンデイルノカハ分カリマセンガ、今後モ捜査ヲ続ケマス。本来ナラフリーノ探検隊ガ受ケルベキモノデハナカッタノデスガ……。助ケガ必要ト思ッテイマシタガ、ソノヨウナモノハ不必要デシタネ。大変、アリガトウゴザイマシタ」
　ジバコイルがそう言った後、エムはふぅとため息をつき、目線を上にそらした。
「実は、今回……」
「確かに、私が助けに行った頃には、この者達が奴を倒していた」
　ギルド内にまた現れたのはミュウツー。ギルドに用があると言うより、説明しに来たのだ。
「アナタハ、アノミュウツーサン?」

「そうだ」
「マサカ、プクリンサンハ助ケヲ送ッタト言ッテマシタガ……」
「ああ、確かに助けに行った」
「トナルト、アナタガカイリキーヲ追イ込ンダト？」
「いや、あのカイリキーを倒したのは、間違いなくエムコルスだ」
ジバコイルの問いに対してミュウツーが言った。実際倒したのは、彼なのにも関わらず、手柄を他人の物にさせようとしている。
「おい、どういうつもり……」
「私はお前を雑魚と思っていたが、そうでもないらしいな」
「だから何のつもりだと……」
「まぁ、私には絶対勝てないだろうがな」
「……俺の話を聞けよ」
エムがミュウツーに話そうとしても、ミュウツーが喋るのを止めない為、エムがミュウツーの言っていることを違うと言えなかった。
「事実ハトニカク、エムコルスサン、チコリータサン、ミュウツーサン、アリガトウゴザイマシタ。今回ハ依頼ヲ実行シタ礼ノ報酬ヲ、コノ三匹二サシアゲマショウ」
「そんな物は必要ない。全てこの二匹に渡せ。私はもう去るのだからな」
ミュウツーはまたギルドから出ようとした。
「ちょっと待てっ」
結局奴は何がしたいんだ!?——エムは疑問に思って、去って行くミュウツーを追う。梯子をジャンプで掴んで、一瞬で上へとのぼる。しかし、それでもミュウツーは悠々と逃げて行く。エムより、彼の方が速かったのだ。その後、ミュウツーは十字路の過ぎた場所で止まった。
「はぁはぁ……だからお前は何がしたいんだ？　感謝のつもりなのか？」
全力で走ったので少し疲れたエムが、今度こそとミュウツーに聞いた。

「別に……そんなつもりはない。ただ単に、お前達の名誉や立場というか、損得の話だ。初めてやって来た私が、全てやったと言ったら、お前達どころか、あのギルドその物のメンツが保てなくなるだろう？　いや、正しく言えば、いつ何をするか分からない私が報酬など貰ってもただの宝の持ち腐れだ。そんなものならばお前達にやった方がいい。双判断しただけだ」

「あのなぁ、俺達のメンツは安くないんだよ。分からないのか？」

「……ああそうか。私は邪魔者みたいだな。この世界から去るとしよう」

ミュウツーはエムの横を通り過ぎて行く。自身に対して決心が付いたかのように、清々しい顔をしている。

今や、人間であったエムコルスにも、憎悪を抱くことなく、こうしてお互い話している。ただ、彼は素直なことを言っていないので、外部から見て、それが分かるのかは疑問である。

「おーい、一体何してるの？」

チコも、金袋を持って、ここに来た。どうやら結局、報酬は受け取ったようだ。ミュウツーは声に気付いて、一瞬立ち止まって後ろを向くが、また前を向いて歩もうと。

「……世話になったな」

「あっ、どこへ行っちゃうの？」

「お前達に答えても意味はない。もう、二度と姿を現さないのは間違いないがな」

ミュウツーは、時や空間の力を利用できるので、いつでも異世界から帰ることができる。だが、今までは弱っていた為に、その力を使えなかったのだ。だから力が戻った今、帰還するつもりなのだ。自分自身に関する戦いの決着を付ける為に。

と、ミュウツーが再び一歩踏んだその時、どこかへ行っていたポッチャマがここに帰ってきた。

「だーい好きなのは～、しーあわせの種～♪……ってうわぁぁぁ！

あ、あの最強さんなのだ！」
　ポッチャマは目の前にいるミュウツーの姿に驚いて、腰を抜かした。自作のボロボロなローブを誰かに売ろうとして全く売れず、……その割にはテンションが高いが、戻ってきたのだ。
「さ、さっきはご無礼をおつかまつりお致しましたのだぁ！　こ、これをあげるので許してほしいのだ！」
　ポッチャマは、間違えている言葉を発して、持っているローブをミュウツーに差し出した。ローブのサイズが自分と、合っていることに気付くミュウツーは、ポッチャマからそれを受け取った。
「何のことかは知らんが、もらっておくとしよう」
　ミュウツーはそう言うと、ローブを羽織る。見事に全身が埋もれていた。正直、大きいんじゃないかとポッチャマは思ったが、へたな事を口にしてはいけない、と思っていたのであえて口には出さなかった。
「ふむ、丁度良いサイズだ。礼を言うぞ。今回、目の前に見えることだけが真実ではないと、お前達も私のおかげで分かっただろう。さらばだ。どうもありがとう……」
「あ……だから待てよっておい！　逃げるの何度目だ！」
　エムの静止は聞かず、ミュウツーはそう言って、歩こうとした時、ミュウツーは動きを止めた。何かを思い出したように。
「……そうだ。少し忘れ物をしていた」
「忘れ物？」
「そうだ。……ポッチャマ、すまないが少し席を外してくれ。お前達2人は私について来い。話がある」
「話？　何なの？」
　チコがミュウツーに聞くが、ミュウツーは答えず、海岸へと歩を進めていく。エムとチコは黙ってその後を追った。
　海岸。さざ波の佇む音がする中、ミュウツーはローブを羽織ったまま、2人の正面を今一度向いた。
「で、何だよ話って」

「お前達が追っている連中の事……とでも言っておこう」
「「――!!?」」
ミュウツーの言葉にエムとチコは動揺を隠せなかった。ミュウツーは話し出す。
「さて、これからするのは予言にも等しい話だ。予言能力のおかげとでも思ってほしいが……ただ、少しばかりラグが起こるから確実に１００％ではないだろう。とりあえず、お前たちにとっては吉と凶、表裏一体を司る予言になる。それでも聞くか？」
「言いたければ好きに言え」
「良かろう。これはこちらの世界でも起こった事だ。その前に問いたい。この世界で『時の破壊』は無くなったのか？」
ミュウツーの言葉はまるでその先全てを見据えているも同然の言葉だった。だが、詳しい事はエムでも分からない。いや、その前にまるで知っているような口ぶりだった事にその全てが集中した。
「なくなった。だが何でそれをお前が知っている？」
「いや、時が新生されたような雰囲気だからな。……ならば、そう遠くも無さそうだな」
「はぁ？」「これは私の知り合いから聞いた話。私達の世界でも同様の事が起こっている。そしてそれを食い止めた探検隊もまた、存在している」
「どういう事？」
チコがミュウツーに聞いた。
「つまり、枝分かれした世界がこの近くにはいくつも転がっている。どの世界でも、時の破壊のような危機は一度はいつかは迫るのだ。隕石が落ちて惑星が破壊される……などな」
さらにミュウツーは続けた。
「さて、ココからが本題だ。近い未来、そんなに遠くも無い将来に連中は表舞台に出てくる。今までは――いや、今もなお、その存在は影に埋もれていると考えるべきだ。そしてその時、世界は大いなる危機に立たされるだろう。その時こそが全てに決着を着ける時だ。

そしてその時が来たら今から私が言う言葉を思い出せ。それこそが全てのキーワードにしてパスワードだ」

「一応、聞いておいてやる」

エムはそう言った。そしてミュウツーが頷き、こう口にした。その鍵を。

「……『目に見えるもの全てが真実とは限らない』だ。よく脳裏にその言葉を刻み込め。さて、これで全ての質問に対する借金や借りは返した。これ以上は何も応じない。そしてするな」

ミュウツーが静かに歩き出す。2人の間を通ろうとした時、こう静かにエムに語りかけた。小声で静かに。

「死ぬなよ、エムコルス＝ロイテマン」

「当然だ」

エムは頷き、そう返してやる。そしてミュウツーの微笑が一瞬彼には垣間見えた。エムが振り向くと、既にミュウツーはいなかった。姿を消したのだろうか。よくは分からない。だが言える事はあった。

（質問するなと言っておいて最後に死ぬなよ、って。やっぱり奴は変わり者だったな……）

そんな風に、エムは思うのであった。

43話　予言？（後書き）

今回で、プラネットさんとのコラボは終わりです。
今話までのご協力、ありがとうございました♪

ミュウツー様のその後は、プラネットさん作の「光と闇の交錯」にて……。

４４話　海の中、海の宝（前書き）

えーと、あれから随分と遅れてすいません。

４４話　海の中、海の宝

世の中は温暖化が進んでいる。だから、厚い氷も、薄くなりつつある。昔まで中を拝見できなかった、海流の流れ込む場所でも氷が溶け、中に様々な物が流れ込むらしい。宝箱、道具……そして、ポケモンの卵。

「ドータクンさん、今日は本当にありがとうですわー！」

「いえいえ、こちらこそ。キマワリさんは、さすがはプクリンのギルドの弟子でしたよ」

氷で覆われている海の上を、飛んでいるペリッパーに乗りながら、キマワリは見る。今日は、ドータクンという依頼人との探検に付き合っていた。これが凄かった。晴れさせてくれて彼女の本領が発揮され、トリックルームを使って、キマワリの課題になっている素早さの問題も解決。ドータクンはサポートに特化していたのだ。

「ドータクンさんは、ギルドに入る気はないのでしょうか？」

「いや、私は普段は祭りのマスコットをやっているんで……」

「よ、よく分からない仕事ですわね……」

そんな会話をしている時、キマワリは氷が割れているのを見つけた。

「ペリッパーさん、ちょっと降りてくださいません？」

「了解でーす」

滑る氷の上にキマワリが降りる。ドータクンは浮遊で浮いていて、地面に着く必要はない。

「きゃー！　凄い物見つけちゃいましたわー！」

キマワリが見ての通り、氷が辺り一面にあるにも関わらず、この一部分だけがこうして融解してる。海流が流れ込むこの場所の、海底にダンジョンがあるって噂は、何百年もの前から周知。しかし、今なら入れると思われる。貴重なものをキマワリは偶然見てしまったということだ。

「氷に閉ざされた海の中……なんかロマンを感じますわー！　きゃー！　早速ギルドに帰って噂を広めますわー！」

・　・　・　・　・

そうしてそのままギルドに戻ったキマワリは、高いテンションのまま、今日見つけたダンジョンらしき割れた氷から入り込める裂け目に関して噂を広めた。

ペラップ曰わく、氷に閉ざされ続けていた、通称閉ざされた海、と呼ばれるらしい。

「あら、あなた達はやはり私が広めた噂に興味を持ったのですね」

「はは……聞けることは何でも聞いちゃうのよねぇ」

翌日のこと。キマワリの予想通り、これに食いついてきたのはエレンシアの二匹だった。

「じゃあ、話をしますわ。私が見たのは閉ざされた海ですわ。確かに見た通りで氷で辺りは閉ざされていて、どこにも入り込む余地はなく……。しかし、それを偶然私が見つけたってことですわ！」

「ど、どうしてそんな遠くへ行ってたの？」

「遠出ですわ、たまには遠くへ探検に行きたかったんですもの。にしても何万年もの間、誰も見たことのない世界！　海の中なんか探検したチームなんてほとんどいなかったんですし、すごーくロマンを感じちゃいますわー！

世界中の海流が流れ込んで珍しい物がたくさん流れついてるらしいですわ！

きゃー！　考えるだけで気絶しそうですわー！」

キマワリの言うように、山の中や島は探検しても、海の中へと行ったことはなかった。誰かが大陸を端から端まで歩いてこの大陸の

地図を作り、誰かが周辺の海を泳いで、大陸周辺の海と島の地図を作った。
だが、その底の深い海の中は、まだ調べ尽くされていなかった。
「ほぉ……、で、それはどこにある？」
エムが聞いた。
「閉ざされた海の入り口はあなた達が言った吹雪の島の東の海域ですわ。ゆっくり頑張って行ってらっしゃいですわ！」
キマワリは、ギルドの仕事で忙しく、すぐには行けなかった。少なくとも突破には数日かかると計算して、その数日の間には自分も行こうと思っていた。
「そりゃどうも。今日中にはなんか持ち帰ってくるとするさ」
「情報ありがとねキマワリ！」
平然と1日で成功の宣言をしてみせたエムことエムコルス。この男は時々無茶だとキマワリも知っている。
「今日！？　いや、さすがにエムとチコでも誰も行ったことのないダンジョンを抜けるのは無理なのでは……」
そうキマワリは言いつつ、さっさと探検へと出かけるエレンシアを見送った。
「……早く仕事を済ませないといけないですわ」
・　・　・
その日の夕方。今日も夕日はほどよく混ざった黄赤の朱色に染まっている。キマワリは、先日から引き続き、ドータクンと共に依頼に出かけていた。そして、ちょうど今帰ってきた所である。
「きゃー！　今日も順調でしたわ！　隣にいるうるさいオッサンと行くよりよっぽど快適ですわー！」
「やかましいキマワリ！」
「あら？　私はドゴームとは言ってませんが？」

「ワシしかいないだろうが！」
たまに一緒に探検に行ってるのに、なぜかこんな会話をしているキマワリとドゴームだったが、それに釘をさすように、エレンシアが帰ってきた。
宝箱を背負い、そしてポケモンの卵らしき物を一個持っている。
「……」
さすがの連中だと言いたげな表情でキマワリとドゴームは黙っていた。
「あ、キマワリとドゴームだ。閉ざされた海、行ってきたよ」
「う、うぅむ……。さすがですわね……。言われてみれば、あなた達両方、水タイプ相手に有利でしたわ！　そりゃ当然ですわ……！」
行く前に突破されてしまうとは予想外で、いくらエレンシアといえど、正直キマワリはガックリ来ていて、肩を落とす。
「そうだな。じゃ、失礼」
そうエムが軽く言いながら、エレンシアの二匹は去る。
「むむぅ……偉くなったもんだな」
「そうです？　むしろ堂々としてると言った方がいいのでは？　でも……やっぱりフリーの身分とそうでない身分は違いすぎますわー！」
心の奥底で、態度まで変わってきてないかと思えてきたドゴーム。それよりもキマワリは、結局先に見つけた未知の探検スポットに一番乗りできなかったことがやはり残念だった。

一方、エレンシアの二匹は、見つけた宝箱を開けることよりも、ポケモンの卵のことを気にしていた。あんな場所にポツンと落ちていた卵。
このまま誰もいない状態にするのもと思い、持ち帰ってきた卵。海で見つけた卵とだけあり、水玉模様が目立っており、恐らく水タイプのポケモンが産まれるに違いなかった。
「おい、その卵を持って、ここから十字路まで往復して走ってこい」

エムは、ポッチャマを指差してそう命令する。
「僕が!?　孵化の手伝いかぁ……」
ポケモンの卵は、それを所持した状態で歩行を重ねると、孵りやすくなる。それをしろとポッチャマは言われたのだ。
「嫌なのか？　嫌なら、お前をそこから突き落としてもいいんだけどな」
「わわわ、分かったのだ」
内心、自分が走れよと、エムに対して思ったポッチャマだが、渋々卵を持って、走りに行こうとする。
「なるほど、俺が走れってか？　それがお前の本音か。俺はダンジョン行った身だが、お前は何もしてないだろうが」
「!!!!??」
「……動揺したな」
エムはカマをかけただけで、ポッチャマの内心を見抜いたわけではなかった。ある日突然嘘をつくことがあるのが彼だった……。
「ご、ごめんなさいなのだぁー!」
「あ、逃げるな野郎、覚悟しろ」
エムを心中で批判していたことが本人にバレたポッチャマが卵を持って逃げ去り、エムはそれを追いかけて行った。
「まーた始まったよ……」
呆れて、チコがため息をついた。

45話　王子様

翌朝、ポケモンの卵の隣ではたんこぶ作ったポッチャマが寝ていた。孵化の為の走り込みをしたのだが、ポッチャマは水タイプである為、体温は低くて、卵を逆に冷やしてしまったようだ。……それでどうなったのかと言うと、ポッチャマが殴られただけである。ただの逆ギレである。

「ったく、昨日はコイツがコールド野郎だったせいで……。誰が卵を監視するんだ？」

卵を放置して出かけるわけにも行かず、どちらかが留守番を担当することになるようだ。

エムは腰に手を当てて、なんとなく、崖の手前に立って下の海を眺めた。

「んー、でもこの不思議な色をした卵、なんかもう動いてるよ？」

「あ、確かに揺れてる」

さすがに外に出して一晩経ったからか、そろそろ卵が孵るらしい。卵に視線を移して、エムとチコは、見つめていた。

「へ？　一体何が……わあっ！」

ポッチャマが起きると、産まれる寸前の卵が目に入って、彼は後ろへ下がった。そして……出てきたのは、青色の、見たことのないポケモンだった……。

手は伸びており、胸に赤い石があり、目の上には黄色く二本の毛のようなものが伸び、頭には触覚がある、小さなポケモン。そのポケモンが、エムとチコが産まれた直後にしたことは、ニコリと微笑むことだった。

「キャッキャ♪　キャッキャ♪」

「うわー、可愛いなぁ。ねえ君。君はなんていう名前のポケモンなの？」

「マーエ？　ポーケ……？」

チコはその青いポケモンが気に入ったのか、近づいて、微笑みながら聞いた。しかし、青いポケモンは、まるで言葉を理解していない。

「こ、このポケモンは……」

ポッチャマは、何かを知っているかのように青いポケモンを見つめていた。それを見て、エムとチコが少しだけ期待する。

「誰なのだ……？」

べしんっ！

聞いてすぐ、エムが尻尾でポッチャマを叩き付けた。

「ぼふぅうぅっ。さ、さすがはエムコルステール括弧仮なのだ……」

「まぎわらしいっ！　そんな古いギャグで笑いを取れると思うなっ」

「む、むほん、名前っていうのは、例えば僕はポッチャマ。彼はエムコルス。今君が喋っていた彼女はチコリータなのだ、ポケモンというのは、この世界で今、唯一存在する生物なのだ」

「ノダー？」

すぐさま立ち直って、ポッチャマが説明したが、まだポケモンは理解していない。それどころか、ポケモンはポッチャマの顔に、口から泡を出して吹きかけた……。

「ぶはぁっ、み、見事なのだぁ……」

泡が目に入ったポッチャマは仰向けに倒れた。

「キャハ♪　キャハ♪」　そして、それを見て青いポケモンは喜んでいた。

「私達の言ってること分かってないよね……」

「まぁ、学んでもない物が分かるわけがない」

「ガナイー？」

「コイツ、俺達の言ってることの最後だけ真似するなっ」

会話の通じないポケモンに、エムとチコは悪戦苦闘をしていた。話しかけると、単なる言葉の復唱しか返ってこない。これでは、このポケモンの世話もままならない。

「う〜ん、私はこのようなポケモンに会うの初めてなんだよね……。

困ったなぁ……」
「しょうがない、ギルドで聞くか」
　このまま無駄な会話をしていても仕方がないので、エムとチコはペラップにでも、このポケモンの正体について尋ねてみることにした。
・
・
・
「ふむふむ……お前達の話を総合すると、最近は平和で暇そうなペラップに、エムとチコは、マナフィを連れてきて聞いてみた。この青いポケモンの正体は、「マナフィ」と言われるらしい。
「えぇ？　なんでそんな珍しいポケモンの卵があんな所に？」
「うむ、お前達が誰も行かないような場所に行ったからこそだろう。時は昔、冷たい海の底でマナフィは生まれ、そこでマナフィは王子様として育てられたらしい。他人との体をお互いに入れ替えることができる力あったようだ。時が経った後は、数千ｋｍも経て、生まれ故郷へ帰る為の旅をしていた……らしい。
　それは単なるおとぎ話だろうし、他に目撃情報もないので、どんなポケモンなのか、詳しいことはよく知られていないのだ」
「へぇー、どうやら、相当珍しいポケモンに会ったみたいね」
「タイネー♪」
　マナフィは相変わらずこの調子だ。このまだ言葉すらまともに理解できないマナフィの神話に関して、どこまでが事実なのかは分からない。
「で　お前達。これからこの子をどうするつもりなんだ？」
　自分だけで動いて、エムとチコに素直について来たマナフィではあるが、自立して暮らすには幼すぎる。そして、ペラップとしては、

管理能力のなさそうな二匹ではマナフィの世話は不安だった。
「あっ、そうよねぇ。うーん……どうしよう……。深く考えてなかったよ。エム、どうする？」
「す……」
捨てるしかないだろう。エムがそう言おうとした途端、マナフィは急に目を潤わせた。
「ふぇ……ふぇ……ふわあぁ～ん！」
「！！？？」
「わわっ！　泣いちゃったよ。泣き所が分からないんだけど……」
チコは急に泣き始めたマナフィに驚いていたが、エムはそれ以上に、とても驚いていた。
――まさか、今の意味は分かったのか？　いや、頭の中で思ってただけで、俺は言い切ってない。心中を読み取ったのか？　そんな馬鹿なことがありえるか……！　いや、奴はあのポッチャマとかいうバカタレに攻撃した。同じ色したポケモンが嫌いとか、そういう本能かもしれない。理解力のない奴だと思ってはいけない。奴は他人の心を見抜いている……。これが現実ッ……！
マナフィに見抜かれたと、らしくなくオドオドするエムだが、本当のところは、ただの偶然である。
「多分、お腹が減ったんだろう」
「そっか。何をあげればいいの？」
深く考えている顔のエムの横で、ペラップとチコは、至って深くも考えずに、平凡な会話をしている。
「うーん……。私も分からないが、この子は水タイプのポケモンだから……青いグミでもあげたらどうだ？」
「青いグミかぁ。なるほど、ありがとうペラップ。よし、とりあえずどうするかはともかく、グミを探してこよう、エム。……って、あれ？」
チコは、エムがマナフィを、ジロジロと見つめているのを見た。まるで、マナフィが何かを隠しているかのように。反応がないので、

ムチで頭上を叩いた。
「いたっ！」
エムは頭を抱えて、ゆっくりチコの方を向いた。
「ボーっとしてないで、早く行くよ」
チコが言う。
「……どこに？」
「青いグミを探すのよ」
「……なんで？」
「マナフィがお腹すかせたからよ」
「……何故そうだと思う？」
「突然泣いてるからだよ」
「いや、コイツが泣いてる理由は……」
エムは、このような間抜けなことを言い続けた後結局、彼は、チコにツルのムチで引きずられていったそうな……。

46話　子育て（？）

「うん、やっぱり青いグミはおいしいのだ～」
その日の暮れに、ポッチャマはサメハダ岩付近で、宝箱が並んでいた場所のそばで拾った青いグミをもぐもぐと食べていた。しかし彼は考えることはなかった。おかしいと思うことはなかった。そんな場所に無造作にグミという、この世界では物価の高い、貴重な食べ物があるわけがないということを。
「おい、そこの青色のバカ」
「ぎくっ！？」
ポッチャマの背後に立っていたのはエムコルスだった。今にもぶたれそうな雰囲気で、ポッチャマは愛想笑いでごまかそうとした。
「お前……やるな。油断も隙もない奴だ。ちょっと目を離したらこうだ」
「は、はい～ごめんなさいなのだぁ～」
ポッチャマは手を地べたに付けて謝る。土下座して、許してもらおうと思った。
「ったく、俺達に害を及ぼすようなら、消えてもらうからな」
エムは全く時間が経過してない間に食べたという、まるで怪盗のような「盗み食い」っぷりは評価し、そしてダラダラしてる時間も今はないので、さっさと青いグミの入った袋を持ってギルドへと向かった。
・
・
・
「ふええ……」
時間が経っても未だ泣き続けているマナフィ。
「ほら、これ食ってみなよ」
エムが、青いグミをマナフィに差し出す。

「……？」
「青いグミだ。何がうまいのかは知らんが……」
「グーミ？」
「そう、グーミ。お前の欲求はこれによって満たされるんだろ？」
「モグモグ……。……！！　グーミグーミ！」
マナフィは差し出されたグミを食べると、思わず笑顔になった。
「ああ、よかった。グミを食べてくれたよ」
「グ～ミ♪　グ～ミ♪」
もっとグミが欲しいのか、エムの方に駆け寄ってきた。
「あっ、こら。お前、あんまり欲しがるな」
エムは青いグミが入った袋をマナフィから遠ざける。
「あはは、エムに懐いてるよ！　うん、かわいいなー。というわけでさ、この子まだ小さいし、しばらく私たちで面倒を見てあげない？」
「はぁ？　そんなのお断りだ。まともに生活できない奴なんざ、食料でも与えて海で自由に生活させてやれ」
「ええ？　なんか楽しそうなのに？」
「ど、どこがだ？」
「がだ？」
毎回毎回、何かの頼みには見事なぐらい首を縦に振らないエムコルスだった。そしてマナフィが語尾の言葉を合わせてくる。
「ほら、くっ付いてくるからしょうがないなぁ的な感じを顔をしてるけど本当は嬉しくてしょうがないっていう……」
「何の憶測だっ！　えーいもう分かったよ。コイツを監視してりゃいいんだろ？」
チコが問い詰めてくると、エムはちょっと恥ずかしがりながらもやっと了承した。あくまでも監視という名目で。
「よーし。じゃあ、そうしよう！」
「しよー♪」
マナフィの世話をするということに、チコは乗り気だが、エムは

そうでもない。といった具合である。
「……心配だな。もしかしたらエムの言う通りかもしれない。この子は本来なら
海で育つはずのポケモンだ。ここは海の中とは環境が違いすぎる。何が起きるか分からんぞ？」
「うーん、でもこのまま海に帰しても危ないし、私達が絶対面倒見るからさ！」
「そこまで言うのなら……」
ペラップが懸念すると、チコはその意見を振り切った。
「……さっきの時に先に言えよ」
こんなことを、後ろを向きながら、エムが小さく呟いた。こうして、マナフィとエレンシアの共同生活が始まるのであった。
「じゃあマナフィ、君のおうちって所まで行こう！」
意気揚々とマナフィと共にその場から去っていくチコ。それに遅れて続くエムだった。

「きゃー！　エムはとうとうパパになって戸惑い気味ですわー！」
「全然ちっがーう！」
何をさせる気なのやらと先が思いやられて浮かない表情をしていたエムである。遂に子供ができたのだと思って喜んでいる、キマワリの言うことはもちろん否定した……。

・
・
・

「さあ、マナフィ。しばらくはここが君のお家だよ」
「おうちー？」
チコが案内した場所はチームの住処、サメハダ岩だった。マナフィは辺りを見回すなり、そう言った。自分の住む場所をお家と言うことは分からない。
「そーなのだ。お家なのだ。ユアーズハウスなのだ！」と、ポッチ

ヤマが変な異国の語句を喋る。
「せいぜい大人しくしてるんだな」　エムだけはそっけないが、こうしてサメハダ岩には四匹が集まって少し賑わうようになった。
「私達が君の面倒を見てあげるからね」
「おうちー♪　おうちー♪」
「オー・ユー・シー・エイチ・アイ、オ・ウ・チ～♪　って痛い痛いっ！」
　マナフィが喜んでいる横でつられて踊って歌っているポッチャマをエムが背中を押して倒して手をグリグリと背中の上で無言で押し付ける。
「……で、何をしたらいいのかな？」
「俺は俺だけで依頼受けてくる」
　エムが早速さっさと出かけようとしてしまう。が、すると……。
「ふぇ、ふえぇぇーん！」
　またマナフィが泣き始めた。エムはビクリとしてマナフィの方を振り向いた。
「こ、こいつ……やっぱりやりやがる。最大限自分の『武器』を活用しやがって」
　鬱陶しそうな表情をしているエムの言う武器とは、赤子がワガママ通す為に泣くこと、を指している。マナフィは自分がいてほしくて泣いたのだとエムは予測していた。
「グーミグーミグーミ！」
「なるほど、青いグミがほしかったんだね！　食いしん坊だねぇマナフィは。よーし、もう一個食べてみてよ」
　チコが青いグミをムチで取り出すと、それをマナフィにあげた。マナフィはグミをゆっくりと噛んで飲み込む。
「どうお？　グミ、おいしい？」
「おいしー？」
「そう、おいしい？」
「おいしー♪　グーミ、おいしー♪」

「あはは！　主語が作れたよ。この調子だとすぐに成長しそうね」
チコとマナフィはお互い笑っていた。
「意味分かってんのかよおい……」
「言葉の意味なんて辞書見て全部覚えるものじゃないから大丈夫だって♪　ねぇ？」
「だいじょうぶ♪　んー、むにゃむにゃ……」
マナフィは突然あくびをして眠り始めた。
「あ、寝ちゃった。お腹いっぱいになったのかな。とにかくしばらく見守ってるしかないね。とりあえず探検はお休みね」
「……仕方ない。じゃあ、そこのペンギン野郎。お前が行ってこい」
マナフィから何か逃れられない呪縛を感じたエムは、チコと共にマナフィを見守る決断をした。そして、ポッチャマに仕事をやらせることにした。
「ええっ、僕が？」
「ああ。ちゃんと稼いでこい。ここ数日まともな依頼受けてない、だからどんな奴が湧き出てるか分からないからな」
「……極悪なお尋ね者を捕まえてこいって意味なのだ！？」
「もう何でもいいから行ってこい！」
エムが階段付近でポッチャマを蹴り上げてサメハダ岩から追い出した。唐突に始まった子育て生活だが、順調に進んでいるらしい。

47話　破綻

マナフィの育成を続けていたある日。
「おはよー！　エムコルスー。チコリーター」
「あっ、私達の名前を呼んだ……すごいね、マナフィ！」
「ちゃんと正確に覚えてる辺り、上出来か」
順調にマナフィは成長しているようだ。チコとエムが頷いていると、ポッチャマが入ってきた。
「おはようなのだ！　マナフィ君は元気？」
「おはよー、バカー」
「ええっ！？　な、何故なのだ？」
マナフィがポッチャマに対してバカとハッキリ言った。
エムはこのことに対する笑いをこらえる為に、しばらく顔を逸らしていた。
「うーん、誰かさんがポッチャマをバカとかしか言わないからね」
「こ、困ったものなのだ……」
「悪かったなぁ、はっはっは」
気味悪い笑い方をしながら、エムは手を叩いた。
とりあえず、マナフィを散歩に連れて行くことになったのだが、相変わらずポッチャマもついて来る。産まれたてのポケモンに悲惨なことを言われながらも、よほど気になってしょうがないらしい。
「キャッキャ♪　キャッキャ♪」
海岸まで来て、マナフィは目の前の揺らぐ波に興奮を隠せない。太陽が、海を地平線までじんじんと照らす。
「マナフィ。これは海だよ。うみ」
「うーみー？」
「そうよ、海」
チコがマナフィに説明する。
「うーみーは大きいのだー！　うーみーは！」

ポッチャマがまた変なことをハイテンションで言うと、
「うみ！　うみー♪」
マナフィがそう言いながら、ポッチャマに強い泡を吹きかけた。
「ぼへぇ！　何故なのだー！」
「キャハハハッ！　バカーバカーキャハハハハハッ♪」
マナフィはポッチャマの反応を見て喜んでいた。
「プッ……グフ」
なぜかポッチャマにだけ攻撃してくるマナフィを見て、エムはやはり面白おかしくて、こみあげてくる笑いを必死に止めていた。
「ははは、楽しい？　マナフィ」
「たのしー！　チコリーター♪　エムコルスー♪」
チコがマナフィに優しい笑顔で問いかけると、マナフィはにこやかにエムとチコの周囲を走り始めた。
「……ふん、大体いつまでこんなことやってんだ？」
辺りにいるマナフィを見るなり、エムはこう言った。
「えー、さっき笑ってなかった？」
「あそぼーあそぼー♪」

結局、日が暮れるまで、マナフィと共にエムもチコもポッチャマも、海岸にずっといたという。

・
・
・

そんな順風満帆な生活を送っているように見えたマナフィにも、危機が訪れる。敵は他の誰かではなく、生活する場所そのものだった。
何かに呼ばれたかのように、点滅するように輝く星空の広がる夜に目を開けるマナフィ。
「……？」

自分のなにかの理性が、帰ってこいと言っている気がする。しかし、帰るにしたって、どう帰るかなんて、マナフィには理解できない。

今は、エムコルスもチコリータも寝ているのだが、起こそうと考えることもなかった。まだ幼いマナフィは、自身の体が弱っていることに、全く気付いていなかった。無意識に誘発されて、体が海岸へと向かっていく――

・
・
・

「おはようマナ……あれ!?　いない、いないよマナフィ！」

チコが目を覚ましてマナフィの寝ていたはずの方へ目を向けると、マナフィがポッカリといなくなっていることに気付き、思わず慌てふためいて辺りを見渡した。

「おいおい、朝っぱらから何を騒いでるんだ?」

「エム、寝ぼけ眼してる場合じゃないよ！　マナフィがいないのよ。早く探しに行こう」

エムがまだ眠気を感じながら起きた時のその顔は、とても情けなそうな、だらけたものだった。

「だ、だーれが寝ぼけ眼だっ」

チコがさっさとマナフィを探しに行こうとするのを見るなり、寝ぼけ眼とか言われてムッとしながら、エムもマナフィを探すことにした。

トレジャータウンにはいなかった。途中でポッチャマにも会って、チコと一緒に海岸へと探しに行った。果たしてどこに行ったのかと思っていると、ペラップもやって来た。

「おうエムコルス♪　相変わらず顔が冴えてないが、私は今からマナフィの様子を見るつもりだったのだよ♪　調子はどうかね?」

こう言われて、また面倒な奴に会ってしまったと内心思いながら、

「ああ、それが、どっか消えた。今チコが探している」

「な、なんだって!?　そんなことを落ち着いて言うんじゃないよ！　全く、相変わらずドタバタの絶えないチームだ！　私も一緒に探す。私はギルドの中を探すからそっちは外を頼んだぞ」
そう言って、ペラップはギルドの中へとまた入っていった。
（ギルドにいるわけないだろ……。お前はさっきまでそこにいたんだから）
エムはそんなことをペラップに突っ込んだ。
「大変なのだー！　レスキューレスキュー！　メディックメディック！」
マナフィを背中に抱えたポッチャマと、チコが戻ってきた。
「エムコルス君、サメハダ岩に戻るのだ！」
「指図してる間があったらさっさと戻れ」「あっ……わ、分かったのだ！」
ポッチャマは急いで帰っていった。
「エム、マナフィが酷い高熱よ！　なぜかわざわざ海岸にまで行って、ああなってるなんて、どうしてかな!?」
「夜のうちに体調不良を感じて、海岸の水を浴びれば元気になると、思ったのか……」
突然起きた出来事に対して、チコはマナフィが心配でしょうがないが、エムは比較的冷めている。
ひとまずマナフィを寝かせて、表情をうかがう。熱にうなされて、ぐっすりと眠ることもできない。

「ここは僕がさっき緊急で作った、大きな落ち葉をひんやりとした水で冷やした、熱冷ましリーフを額に当てておくのだ！」
「あっ、珍しくいい仕事をしたねポッチャマ」
「野生で常頃やっていたのだ。えっへん」
ポッチャマが誇らしげに腰に手を当てて体を後ろにのけぞらせる。
ポッチャマが初めて適切なことをやり遂げた……と、エムもチコも思った。

「普段バカだから調子に乗ってやがる……」
と、エムが言うと、ポッチャマは思わず心理的にガクッときて、体がズルッと転げた。
ペラップが隅々まで探し終えたのか、ペラップもサメハダ岩まで来た。熱にうなされるマナフィを見て目を丸くした。
「マ、マナフィが……すごい熱じゃないか！」
「そうなの。海岸で見つけたんだけど倒れてしまって……。一体何がいけなかったのかな？」
「恐らく環境の違いが原因だろう。コイキングが陸上では全く動けないのと同じで、やはりマナフィは海で育たなければならないポケモンなんだよ。マナフィにとって、ここは劣悪な環境だったのだ。どんなに面倒を見ようが、避けられない病だったのだ」
ペラップは、マナフィの病気の原因について、そう統括した。
「だから俺は最初に言ったはずだ。世話をするべきではないと」
エムは自分が元からマナフィを世話をする気などなかったことを思い出した。ポッチャマに攻撃してくるのが最も面白くて、少し忘れていた。そういえば、マナフィが来てから、通常の生活ができていない。
「ちょっと、なにが『言ったはずだ』なのよ。エムだって結局楽しんでたじゃないか！」
エムがああ言うとチコが強い口調でこう返してくる。マナフィが病気になって、責任を感じて半泣き状態なチコにとって、何だかんだでマナフィに付き合っていたエムのこのそっけない態度が気に入らない。
「結局は俺の意見が正しかったということだ。それと、マナフィ育成のリーダーはお前だっただろう？」
責任の押し付けかと思ったエムはそう言った。
「エム……君は君にとってどうでもいいことに関しての責任から逃れたいんでしょ？」

「だからと言って、俺が一体何か病にかかるような悪いことをしたか？　チコ、無理矢理連帯責任にするのはどうかと思うがな」
　愛想のない態度を変えず、エムは言う。
「だから私が言いたいことはそうじゃなくて……」
　チコは声のトーンが上がり始めた。まるで敵対者にかけているようだ。結局、チコはマナフィが危機に陥っているというのに、心配の素振りも見せずに、結果論を語るエムが気に入らなかったのだ。元々、彼は関心のないことに関しての行動力は、全くと言っていいほどない。
「ケンカはよせっ！　責任どうこうの問題ではない。こうなった以上は、後悔していても始まらないのだ」
「……うん」
　長い沈黙の後、チコはうなずいた。
「まぁ、確かにその通りだな」
　エムからふっかけたことではなかったので、逆に彼の方があっさり納得した。結局ペラップの一声で口論は止まる。やるべきことは、口論ではなく、マナフィの病を治癒させること。方法を探らなければならない。
「…こほん。海の妖精フィオネの持つ、フィオネの雫と呼ばれる万能薬。どんな病でも治るらしい。それはとても海底の奇跡の海というダンジョンに隠されていて、入手するのは難しい……。が、しかし、幸いにも、私の目の前にはダンジョン探検のプロフェッショナルがいる！」
　ペラップがエレンシアの二匹を見つめながら説明する、フィオネの雫という万能薬を入手する為には、探検に行かなければならないようだ。ダンジョンへ行くとなれば、エレンシアにとって拒絶する理由はどこにもなかった。

48話　子育て生活、終焉

大陸から向かって西側の海の中に隠れるダンジョン、奇跡の海。最近、行き先が奇想天外な場所ばかりだが、今回はあくまでマナフィを助けることが目的なので仕方がない。エムコルス、チコリータ。そして、なぜかポッチャマが来ている。

「ともかく、海に帰さないといけないということは分かっただろう？　その為にここまで来ている」

「それは……」

チコは一息おいた。

「だけど、エムコルスとあろう者が無責任よ。とにかく帰ったら君もマナフィに素直に謝ってよね」

「しつこいなお前……キリがない。じゃあ、俺に勝ったら俺の負けということにしてチコに言う通りにしてやる」

「じゃあ、しりとりで決めよう！　最初は……。よし、『と』から行こう」

エムから勝負を仕掛けたので、チコがしりとりを提案。もしかしてと思い、少し考えてから最初の文字を決めた。エムが先行となる。

「と……トレジャータウン。……あ！」

エムは語尾に付いてはいけない文字を喋ってしまった。いきなりアウトになってしまった。

「はいアウト、エムの負け、私の勝ち！」

あまりの間抜けな負け方にチコはクスクスと笑う。そして、なぜかずっとついてきた、ポッチャマも、いくら何でも一発目アウトとは、と面白くて、こっそりと笑っていた。

「……おい、大体何故バカが来てんだ？」

劇的な敗北に頭を抱えていたエムはポッチャマの笑い声が聞こえてくると起き上がり、後ろにいるポッチャマを指差す。なぜか、今回はダンジョンに付いてきている。野生のポケモンが襲ってきても、

後ろに隠れていて特に何かするわけでもないが、エムにとっては相当目障りになった。
（さっきまでケンカしてたように見えたのに、すぐに元通りに戻ったみたいで、仲いいものなのだ……）
そう思った後、エムに殴られる可能性を考慮し、少し距離を取る。
「……もう行くぞ」
「ははは、全くドジなんだから」
「誰がドジだ、誰がっ！」
チコにそう言われてなぜかやや照れるエムは、振り返って先に進んでいった。
あんまりこういう関係には介入しない方がいいかも、とポッチャマは思った。
・
・
・
マナフィと酷似した姿を持つフィオネ達がいる、最奥部にまでやって来た。このフィオネこそが、万能薬を作り出すのだ。
しかし、そこには既に先客がいた。竜のように青く細長い、ギャラドスだ。
「やっと見つけたぞ、万能薬の雫を作り出すというフィオネ達よ！」
無理矢理フィオネ達の間に入り込み、フィオネを突き飛ばすギャラドス。その光景を見て、エムはため息をついた。
「無力だな。俺様が億万長者になるのも遠い話ではなかったようだな。今から俺様の下部になれ！　フィオネの雫は俺様が独占するのだ」
「独占ねぇ、夢だけ見れて良かったな」
エムが単身でギャラドスへ接近してくる。表情にも言動にも、明らかに余裕が見える。
チコとポッチャマはやや遠くにいる。１０秒で終わらせると宣言していたので、それを信じている。

「ああーん？　なんだクソガキ。んん？　ガキのクセにこの俺様に文句があるってか？」
「ふっ、ザコは今のウチに何でも吠えておけ。そうしないと虚勢も張れなかったと嘆くことになる」
「笑わせる！　俺様はフィオネの雫を売りさばき、世界の病で悩む奴らを救う、そして俺様は一生遊んで暮らせる大金を手に入れる！　どうだ、俺様いい奴だろ？」
「結局は金の亡者、金なけりゃ渡さないんだろ？　お前のようなザコ以下のチンピラと、飢饉の起きている地域に寄付金を贈るような、善良な探検家とでは、全く比べ物にならんな」
　エムはギャラドスに挑発を続ける。こういう乱暴な性格のポケモンとはお尋ね者の依頼の際に何度も対峙しており、すっかり慣れきっている、というより、むしろ気が楽になっている。
「あー、全く典型的な生意気なクソガキのだな！　俺様に刃向かうなんざ１００億光年早いわっ！　逃げながったことを後悔するんだな！　ガキだろうが容赦せん！」
・
・
・
――４秒後
「……で、それで本気なのか？」
　ポッチャマが怖くなって目をそらして、チラッと見た時には、大きな全身が麻痺しているギャラドスがもがき苦しんでいた。
「ぎぎぎ……おのれっ……」
　相性が相性なので当然とも言える結果かもしれない。エムは傷一つない体でギャラドスを見下ろす。
「やっぱ凄いや……、さすがって感じね」
「エムコルス君、やっぱり僕は逆らえない……」
　結局は強い、強いからああしていられる。昔からの才能なのか、戦ってきた経験なのか。チコもポッチャマも頷いて感心していた。

エムは、痺れる体で逃げていくギャラドスをチラリと見てから、フィオネの方へ目を向けた。
「すごーい！　お礼デス♪」
フィオネから、エムに雫を渡してきた。感銘を受けたようで、頬み込むまでもなかった。何の苦もなく、フィオネの雫を手に入れ、エレンシアは奇跡の海から帰還した。
・
・
・
「おっ、おかえりなさい。留守番はマナフィの様子を見てたら暇じゃなかったさ！　フィオネの雫を取ってきたのか？」
「ああ、これだ」
サメハダ岩に戻り、マナフィの看病をしていたペラップはエレンシアを迎えた。エムがマナフィに近付き、万能薬の雫を飲ませる。口に入ったので、効いたはず。瞬時の効果に期待はしていないが、徐々に体調は上向きになるはず。
チコは不安そうな表情でマナフィを見つめていた。
「あっ……起きた」
マナフィの意識が戻った。とりあえず、最悪の事態にはならないということである。
「ありがとー。エムコルスー、チコリーターー、ポッチャマー」
静かに、マナフィがそう言った。
「ふぅ……よかった～」
チコが安堵した息を吐く。
「どうやら効いてるようだな。後数日待っておけ。親方様との交渉をする」
ペラップがギルドへと戻っていく。
そんな中なお、エムは良く分からないでいた。どうしてそんなに甘やかしたがるのだろう……。何故やたらチコは熱心だったのだろう……。そんな経験を知らない彼には、やたら難しい疑問だった。

ただ一つ、自分は何かを育てるには向いていない、やる気がないということは、ハッキリと分かった。

「やったのだ……ちゃんと僕を名前で読んでくれたのだ！　アイアムチャンピォーン！」

「分かったから叫ぶなバカ野郎が」

ポッチャマは、ちゃんとした名前で自分の名前を言ってくれたことが、何となく嬉しかった。しかし相変わらず、エムは呼んでくれない。

「マナフィ、つらい思いさせてごめんね。」

「ごめんー？」

天井を見上げてるマナフィの顔の近くに寄って、チコが話しかけた。マナフィはまた、言葉の一つ一つに反応する。

「そう、誰かに悪いことしたな、と思ったらごめんなさい。ってね。さぁエム、約束よ」

チコがエムを呼ぶ。謝罪は、世において重要なことである。そのことの意味をチコはマナフィに教えた。

しかし、謝ることが嫌いな者もいる。自覚がないが、エムがそうである。しかし、今回はしりとり一発アウトの罰ゲームがある。エムは渋々マナフィに近付いた。

彼はやたらプライドが高く、チコ以外にほとんどちゃんと謝った試しがない。

「ご、ごめん……なさい」

チコの方をちらちら見ながら、やはり渋々とした表情をしながら、そう言って頭をちょこっと下げた。そして、チコは物凄く勝ち誇ったような、満足げな表情をした。

また数日は、どちらかが単独で探検に行くことになる。しかし、マナフィがいる日々はそう長くはない。謝った後のエムがそう思った時、マナフィはこう言った。

「びっくり」

マナフィは初めて、誰かが言った言葉の復唱以外のことを行った。

「おい！　やっぱりコイツは全部理解していた！　何の罠だ！？　何のつもりなんだ？――」

しばらく数十分、騒ぐなと言っていた張本人のエムが騒いでいたそうな。

・
・
・

数日後、マナフィは元気になった。しかし、理解しなければならない事実がある。マナフィは成長するまで海で暮らすべきであると分かった。

身体的に成長するまでは、体が第一に適応できる場所にいるべきなのだ。マナフィにとって、こういう陸上にいるのは適切ではなかった。

海岸にまで来て、マナフィは何も知らずにはしゃいでいた。そのはしゃぎようが、かえって哀愁を帯びる。

「チコ、分かってるな？」

「……うん」

チコも、とうとうマナフィを手放すことを受け入れた。結果的には失敗だったとなるが、経験的に悪いとも言えない。

「よし、親方様に相談して北の海からはるばるトドゼルガさんに来てもらった。

親方様の友人の数は正直多すぎて分からないが、彼なら安心してマナフィをお任せできるだろう。

「うむ。話は全てプクリンから聞いている。私が責任を持ってマナフィの面倒を見よう」

プクリンの友人という大きな牙を生やした氷ポケモントドゼルガは、やや年老いた感もあるが、威厳のあるポケモンだった。

「よろしくお願いします……」

チコはトドゼルガに頭を下げた。ペラップは、チコが丁寧語使うなんて珍しいなぁと、思っていた。チコはマナフィの方へ顔を向け

て、マナフィ以外の誰にも表情を見せずに言葉を続けた。
「マナフィ。これからはトドゼルガさんの言うことを良く聞くこと。こんな所じゃダメ。海の中で元気に暮らすこと。海の中の生活は知らないから、後はトドゼルガさんに聞いてね」
「!?」
チコの言葉にマナフィは戸惑っていた。
「お前は水タイプ。お前にとって、水中は陸上より快適。気の合う奴は、ここより多い。これがどういう意味か分かるな？　現時点でその理解力は認めてやる。それを失うな」
「マナフィ君、もしかしたら君にとって僕は同じようなタイプで嫌だったかもしれないのだ。でも、これからは恐らく、エムコルス君やチコリータちゃんのような、活動的なポケモンには会えないかもしれないのだ。僕の末期の野生生活がそれを証明しているのだ。あくまで僕の話だから、多分的外れな予測だけど、頑張ってほしいのだ！　短い間で、君にやられっぱなしだったけど、楽しかったのだぁ！　う、うわあぁぁぁぁん！」
あのエムコルスがマナフィにアドバイスを送り、ポッチャマに至っては既に泣き叫んで地面の砂をドンドン叩き始めてしまった。
しかしこの長い言葉が、マナフィの頭の中を混乱させていた。自分が何をされるのか分からないという心理状態だった。あながち間違いではなく、これからトドゼルガに連れて行かれる。
「お別れの言葉は済んだようだな。だが、これ以上は辛くなるだけだ。トドゼルガさん」
ペラップがトドゼルガに行ってください、と合図を出す。トドゼルガはマナフィを乗せて海岸から離れ始めた。
「うむ。さあ、行くぞマナフィ」
「エムコルス？　チコリータ？　ポッチャマ……？」
別れる瞬間、マナフィの脳裏にはこの三匹のことが強く焼き付いた。こうさせることが大事なのであった。エムは非協力的だったかもしれないが、マナフィにとってはただそこにいるだけで、親近感

は湧くのである。世話に関しては、リーダーとしてほぼチコが様々なことをしていたのだ。

マナフィの三匹を呼ぶ叫び声は、数分に渡って聞こえたという。

ポッチャマは思いっきりおいおいと泣いていて、チコは「さよなら」と静かに呟きながら、涙を流していた。ペラップはそれらを同情的に見ている。

一方のエムは、それらを見て別の思い出にふけっていた。この海岸で誰かが泣いていると、どうしても、蘇るのだ。時が止まりかけたあの日、そして、無から生へと、神の情けで変えてもらった日。

――命をかけて共に生きてた訳じゃないだろう。たかだか普通の別れじゃないか。死んだ訳じゃない。

「おい、泣きじゃくるのは止めたらどうだ？　生きてるんだから、幸せを祈るだけでいいだろう？　生きて世に存在するんだからな……。なぁ？　少し以前は、もっと身近な奴が、死の扱いを受けていたはずだ。それとどちらがいい？」

エムは、ジュプトルや自分との対比を始めてしまった。すねたような態度で、海岸から独りで歩いて去ってしまった。こういうことになると、彼に何かの亡霊が取り憑いてくるのは避けられないようだ。生きていれば、まだ幸運じゃないか、と。

「やっぱり、エムは引きずってるんだ……。ジュプトルのこと」

チコには当然、彼の言葉が何を差しているか、理解ができた。

――でも、マナフィがいなくなったのも悲しいし、というか、ジュプトルとエムが、消えることのは、どんなことをも比較できないんじゃないのかな……？

『こんなことぐらいで、もっと残酷なことがあっただろう』とか思ってるであろうエムのことを分かりつつも、チコはそう思っていた。

「マナフィと別れたことから連想させるなんて……。エムとジュプトルの関係の話を聞く限り、分からんでもないが……まぁ、何かし

ら葛藤があるのだろう。私らには分からん世界なのだろうよ」
ペラップはそう言った。

――追い込まれても決意を固めて行動し、俺達は行動していたんだよな。たるんだもんだな、俺も。なぁ、ジュプトル？　……いや、人間の時の記憶はないから、それはデジャヴか。
俺だけこんな風にのうのうと生きていて、お前を思い出す度に罪悪感を感じる。だからあんまり思い出したくはない。だが、連想させるような出来事が起きると、またこうして……。

その日、結局就寝時に暗い顔になっていたのは、また様々な思いをめぐらせていたエムの方だった。彼の精神的な弱点がかなり露頭した。
とにかく、奇妙なこのマナフィの育成生活には、幕を閉じることとなった。

４９話　変態現る！？（前書き）

ザ・パロディ回。

49話　変態現る！？

朝だ。静かだ。ここ数日と違って騒がしくない。今日からはまた、シビアに探検をこなすつもりだ。

「おはよう。……行っちゃったね、マナフィ」

チコはついついクセでマナフィが寝ていた場所を見てしまう。

「時には死すら結果的に良いことをもたらしていることがある。行っちゃった、じゃなくてこれで良かったんだってことは分かるだろ？」

昨晩とは打って変わって、エムは落ち着いている。

「そうだね。でもやっぱり、そこに動いて喋って笑って生きていた誰かが突然いなくなると、寂しいなぁ……」

「ああ、結果が良くなると分かっていても、そう思ってしまう。だから弱いんだ。

しかし今回のマナフィは、また会えるんだぞ？　何も落ち込む要素はない。結局誰にも責任はなかった」

チコは、マナフィへの世話はあまり意味がなかったとか、こんな風に思うぐらいならエムの言う通りにしていれば良かったかもしれないと今更思ったり、やや落ち込み気味な表情で話す。

このエムとチコのやり取りが、誰かとの永遠の別れ、もしくは普通の別れ。全ての事をまとめていた。結局自身の過失で、誰かを失ったわけではない。後悔することが何もない。

「うん、本当にその通りだね。だから、今日も頑張っていこう！ね？」

チコの呼びかけで、またチームとしての活動が始まる。

・
・
・

『ボクを追いかけてくるストーカーを退治してください。お礼にお

饅頭あげます。エネコロロ』

一目掲示板を見て目に入ってきたのがこのまた変わった依頼である。逮捕してくれとかそういうことは特に書いてない。単純に倒してくれと書いてあるだけ。しかも、お礼は探検道具ではなく食べ物ときた。書き方からすると、この依頼主のエネコロロは♂のようだ。

ここらに出没する、と場所が書いてある。ここからはやたら近い。ストーカーとはタチが悪いなと思いつつ、この依頼を受けることにした。特にランクの高い依頼というわけでもないのだが。

依頼で言われた付近の場所に来たが、そのストーカーらしきポケモンは見つからない。仕方がないので、エムとチコは手分けして探すことにした。

しかし手分けして単独行動で数十分後に、事態は急変する。急に不審な気配をエムが感じたのだ。闇の創世者ではなさそうだが、奇怪で別の意味で危険そうな気配が接近するのを感じる。

・

・

「あっ、もしかして君はボクの依頼を受けてくれたのかな？　ちょっと後ろついて行っていい？」

チコが歩いていると、猫型のポケモンが話しかけてきた。ストーカーではなく、依頼主本人らしい。

「えっ？　うん、そうだけど。いいよ、一緒に行こう。エネコロロかな？」

「うん」

そううなずく。どうやら、彼女がエネコロロのようだ。

「へぇ、狙われてるってのに来てたんだ……。今はパートナーと手分けして探してるから、安心してよね」

「その件なんだけど実は……」

・

・
・
「全く、アイツはどこ行った？　ああいう奴を逃しては他のチャンスも手に入れることができないというのに」
　こんな独り言をエムはハッキリと聞いた。周囲には草陰がある。声が聞こえた方面からは見られない場所に身を隠しておく。
　誰かの歩く足音が近くなる。そしてついに依頼主の言うストーカーらしき人物の姿を捉えた。白い体毛に被われて、頭に鎌風の角を生やした四本足ポケモン、アブソルだ。
「む？　分かる、分かるぞ。近くに巨大な力を秘めた奴がいる！　その力、絶対にこの俺が手に入れる！」
　気配で気付かれた。仕方がないのでアブソルの前に現れることにした。いたか、とアブソルはエムの方を振り向く。
「フフフ……力を持った奴が、俺の前に現れるとは殊勝な奴」
　なぜかエムも狙われているようだ。ストーカーしているのはエネコロロ単独だったはず。しかし獲物を見つけたような顔をしている。
　そして次の瞬間、アブソルは衝撃の走る言葉を放った。
「お前が欲しいっ！」
「な、なんだと！？　てめぇストーカーとだけあってとんでもない変態だな！」
　告白めいた発言に驚かざるを得ない。何故男に言うか分からなかった。俗に言う同性愛……
「ああしまった！　力、が抜けた！」
　……ではないらしい。言葉が抜けただけのようだ。
「で、変態のお前からも用があったのか？」
「俺は変態ではないっ！　許さんぞ、こうなったら、お前を倒して力をいただいてやる！　喰らえ、古代からの伝承技だ」
　アブソルは怒ってシャドーボールを放ってきた。エムはかがみ込み、球体の下から挨拶代わりにと、正面から電光石火を叩き込んだ。
「ううっ…やるな。だが次は……」

「ああっ！　あの変態アブソル、ボク以外のポケモンもストーカーしてる！」

戦いはほんの序章とお互い思った矢先、乱入者が現れた。女の声が響くが、もちろんエムには聞き覚えはない。しかし、アブソルは大きく反応していた。

「き、貴様、エネコロロ！　今度こそお前の全てを……ぶほぉっ」

声の主は、依頼主のエネコロロだったのだ。チコもいる所からして、エネコロロはチコと会ったようだ。エネコロロはアブソルに向けて冷凍ビームを放ち、それをヒットさせた。

それに加えて、エネコロロは女だった。自分をボクと呼んでいただけだったのだ。

「ふぅー、どーにかこーにか。まぁ、とってーも変態なアブソルは、ボクだけを追いかけるわけじゃない、って分かっただけ良かったよ」

「おい、ちょっと待て。お前が掲示板に依頼した奴だな？」

「うん、こんにちは。ボクはエネコロロ。よろしくね」

冷凍ビームを受けて凍えて倒れたアブソルの横を通過して、好意的な笑みを浮かべてエネコロロはエムに近寄ってきた。

「エム、エネコロロは単純に試したかったんだって。本当にド変態アブソルは『自分だけ』の経験値の力目的で誰かを追いかけてるのかってさ」

チコがそう説明する。確かに、言動はともかく、アブソルは力という言葉にこだわっていた。

「何……俺達を実験材料にしたのか？」

依頼主に利用されたんだとムッとした表情でエネコロロに問う。その横で変態ではないとささやくような小声で反論するアブソルがいた。

「ごめんなさい！　いつも返り討ちにしてるんだけどね。でも結果は得られたんだしさ、ほら。だからボクの大好きなお饅頭をあげるよ」

エネコロロが少し申し訳なさそうに頭を下げて、エムに二つ、も

みじ饅頭を渡した。
「……どうも」
エムは低いトーンでお礼を返す。この饅頭は何の変哲もない、ただの饅頭だ。中に何か入ってるようで、ぷよっとしている。
「ま、待てエネコロロ……お前の全ては俺の物だからなっ！」
「あはは！　そんなのお断りだよーっ！」　冷凍ビームから立ち直ったアブソルは、またしても怪しさ満点の発言をしながらいきり立った表情で、クラウチングスタートのように立って走り始め、逃げるエネコロロを追いかけて行った……。
「……成功した、んだよな？　これ」　残ったのはエネコロロのくれた饅頭のみ。しかも、報酬はこれだけなのだ。
「全く意味のない依頼だった……。あ、食うか？」
「まぁ、依頼人の目的が達成されたんだし、これでいいんじゃないかな？」
「そーゆーもんかよ……」
エムがチコに饅頭を手渡し、二匹はとりあえずゆっくりと饅頭を食べた。
とりあえず、中のクリームがおいしい。この何の深みもない依頼報酬の食べ物の感想だけを残して、帰ることとなった。

探検の詳細を聞きたいと言うキマワリに今日のことを言うと、彼女なりの推理を導き出した。
実はそのエネコロロは変態なアブソルが、ストーカー行為をしてくること以外でも気になっている。なぜなら、果たしてストーカーするのは自分だけなのか？　と、そんなことを気にしているからだ、と。

それが正しいのかどうかは、エネコロロとアブソル本人にしか分からない。

50話 Memories of future and past

目前に何かの過去が映し出されていた。今はもう二度とは会えない、ジュプトルがいた。背景には結晶の塊の数々。恐らく、かつての戦いの舞台となった一つ、水晶の洞窟だ。後ろを見て何かから逃げているように見える。

「逃がさんぞジュプトル！」

遠くから、かつてジュプトルが時代を去る際に道連れにした、ヨノワールの声が遠くから聞こえる。

「ヨノワールめ、俺よりスピードが無い割にはしつこい奴だ。だが、もしここで傷を深く負っていたら危なかった……。

こんな所でアイツに助けられるとはな。ピカチュウよ、お前は強いが、あの戦い方は、残念ながら俺の親友のパターンだった。練習で何度もやられたもんだったが、それはもはや俺には通じない。ありがとう、エムコルス……」

・

・

・

「！？」

これはエムが見ていた夢だった。時空の叫びの現象だが、寝ている時に見たことはない。早朝過ぎて日が昇り始めた頃、彼は目覚めた。

「夢か……」

彼は前頭部を片手で押さえ、独り言を呟く。夢の内容を整理する。場所は水晶の洞窟で、ジュプトルは逃げていた。

確か、真っ先にダンジョン奥地に辿り着いて、お互いに何も知らないジュプトルに戦いを挑み、勝てなかった時だ。その理由がずっと彼は分からなかった。しかし今、ジュプトルは説明していた。

彼には、お見通しだったのだ。ここでこうしてくる。ああしてく

る。そういうことが、頭の中に残り、彼は全くの同一人物であるエムコルスの行動が読めてきて、勝利したのだ。何がどうなろうが、宿る魂が同じである以上、全てを変えることはできない。

（そういや、勝ったことなかったな、ジュプトルに。いや、でも夢の中ではやられ続けていたとか言ってたな。人間の時なら勝っていたのか。

だが、それは俺が強くなっていかなかったという意味にもなる。頑張らないと）

エムはジュプトルとの件ことを、肯定的に持つことができた。もし、かつてジュプトルに超えられたというのなら、その分怠けていたという意味になる。そしてポケモンになってからは、一度もジュプトルには勝てなかった。だが、勝ってはならない戦いではあったが。

「あ、おはよう」

時間的にいつものタイミングでチコも起きてきた。エムが先に起きているのが物珍しいのか、首を傾げている。

彼は壁を狙って針を投げていた。彼が銀の針を実戦で使うことはあまりないが、コントロールや速度は申し分ない。それで、何故突然練習しているのかチコは分からなかった。

「なんで練習してるの？」

「まぁな。起きたならもう行くぞ」

そうして日が昇ってしばらく経ち、ギルドへ行くことにした。

しかし、トレジャータウンに向かう手前に、見知らぬ誰かが現れた。この辺りでは見覚えのないポケモンだ。ヤシの木のような形のポケモン、ナッシーだ。その時点で、エムは警戒していた。何か仕掛けてくるかもしれないと。

「あ、見つかったぞ……ピカチュウとチコリータ。ここにいるという情報は本当だったのか。そしてチコリータ、あなたは自分の過去を全てご存知か？」

「私？　いや、全く。気付けば住処もなく渡り歩いていて……」
　ナッシーが用があるのはエレンシアらしい。そしてチコには特に何か気にすることようだ。ナッシーのいくつかある顔がチコの方へと全て向く。
「ま、間違いない……。うん、ええと、話は変わるが、圧倒的な力で住処を支配している者が我々にこう言ったのだ。この場所に住むピカチュウとチコリータを殺せば、自分達は去る、と……。いや、違う……ぐわっ」　ナッシーの言葉に反応してすぐさまエムが敵対する者と見なし、ひとまずその場から十万ボルトを浴びせた。
「うう……話を聞いてくれっ！　だからと言ってそれを実行するつもりではないっ」
　ナッシーが近寄ろうとすると、今度は銀の針を横投げで飛ばした。去れ、という意思表示だ。何か言うまでもない。ナッシーはギリギリでそれをよけた。
「だ、だから待ってくれと言っているだろう……。まず一言言えるとすれば、チコリータ、幸せ岬と呼ばれる場所、私とあなたの故郷が、今言ったように襲われ、支配され、幸せではなく不幸の岬となっている」――故郷！？
　チコは言われていることが理解できなかった。命を狙われていることは前々から承知であり、あまり驚きはしないのだが、自分は過去を知らないので、そのことに驚きだった。ただ、独りぼっちだったとだけ、覚えている。そんな割には臆病だったりした。しかし、助けてくれたりと、様々なポケモンに貢献する探検隊のようになりたいと、その時の生活から脱却したいと、探検隊になる道を選んだのだ。何かの気まぐれで、ギルドに入ることができた。　そして、結果的にそれが、偶然エムコルスと出会うこととなったのだ。
　しかし、それ以外の自分の過去は知らない。覚えていないのだ。
「チコ、こんな奴の話を聞くことはない。お前もやれ。さっさと片付けるぞ」
　エムは気を散らす為に言っているだけと判断。騙されるなとチコ

に言う。
「……いや、教えてよ。一体どういうことなのか」
チコが結局そう言うと、ナッシーは語り始める。エムは仕方なく、話をすることを認めた。
「仕方ないな……」
「よし、なら言おう。事の発端はかなり遡ることとなる……。ある日、岬の中でリーダー格であった者の数名が遺体となって発見された。
その時、そこは大抵の者が訪れない場所だった。しかも、傷跡から誰の仕業か判断できない。犯人は不明だった。
しかしすぐに、今現在岬を支配している炎タイプの連中達がやってきた。それですぐに分かった。連中の中の誰かがやったのだと。リーダー格を殺し、そして乗っ取ろうという計画だったのだ」
ここまでで既に、エムもチコも、まるで聞いたことのあるかのような話に感じた。血も涙もない連中とは、あの組織しかいない、と。
「もっと話せ」
そうなると今、命を狙われる理由はハッキリとした。組織は、自分達の命を奪うことを目的の一つに定めており、ナッシーの話と一致している。そう思ったエムはナッシーに催促する。
「うむ……。そして我々は力づくである連中の思うがままにされることとなった。こき使われるように働かされ、まるで奴隷。あえてそうすることにより喜んでいるとしか思いようがない。ますます苦しむこととなった。
ポケモンに例外はなかったが、将来がかなり先まであるまま、このチコリータずっとこの不幸の場所にいるのも可哀相だと我々は思った。遺伝子的に見て優秀だと思われるあなたを、あえて岬から出すことにした。連中に見つからないようにな。優秀ならば、生き残るだろう、と。将来、何かできるかも分からない、と」
「ね、ねぇそれって本当に私なの？」
今ひとつ確信を持てないチコは聞いた。記憶がなくて釈然としな

いのだ。

「間違いないだろう。チコリータなど、そうそう見るポケモンではない。それに、殺されたリーダー格のポケモンである、メガニウムのヴェイルとウツボットのルナンドは、あなたの両親なのだ。特にヴェイル、彼女の持っていた特有な甘い香りと同じような物を今、あなた自身から感じるのだ。　それに加えて、あなたが岬を出たのは生まれてほんのすぐ。そんな時期の記憶が、普通の種族のポケモンにあるはずがないのだ。タマゴを残してすぐの事件だった。だからあなたは名付けられることもなかったのだ」

「な、なんだって！　私に両親なんて、いたんだ……！」

そして、チコには一つ分かったことがある。この話が本当なら、自分は、闇の創世者こと、あの組織と大きな因縁を持っていたことになる。

でも、何も分からない。ない記憶が呼び起こされるはずがない。そういう意味で、エムの気持ちが少し分かる気がした。

「そして最近になり、連中のトップの男が、所在地まで教えて岬のポケモン達に命令をした。ピカチュウ、チコリータ。この二匹を殺害せよと。だから、まさかと思って来たのだが……。住処もなくうろついていたという話も、同一人物であるということを決める要素となっている」

ナッシーのこの話を聞いて、チコは少し思い悩んでいた。目線をそらして、未だに信じられなさそうな顔をしている。自分にそんな過去があったなんて思いもよらなかった。できれば、知らない方が良かったのかもしれない。知らぬが仏とも世の中では言う。何とも言えない気持ちになった。

普通でない過去があったというのなら、エムコルスも、同じなのだ。だが、お互いそういう過去だったからこそ、案外気が合い、こうしてお互い長くいられたのかもと、チコは思った。

結果的には、その不運が良かった。野生族のリーダーとなるポケモンの子ということなら、遺伝子的に優秀だったのか、ギルドに入

って、卒業できた。その中で、一つの世界を揺るがす出来事を沈めたことすらある。

そんなことをできた理由が、将来の為、目を盗んで岬から外に出してくれた岬のポケモンにあるというのなら、その判断に自分は応えなければならないのだろうかと、考える。

「大体、お前の話す『連中』の正体に察しはついてるんだ。お前に俺達を殺す意思があるかどうか」

エムはナッシーを指差した。今更彼もチコも、命を狙われてると聞いても恐れも感じず、絶対に倒してやるとしか思わない。

「何度でも言えるが、ない。独自で調査して聞くに、あなた方のやったことは到底想像にも及ばない。チコリータ、あなたの実績はとっくにヴェイルもルナンドも超えている！　だから……」「助けてくれと？」

「その通りだ。恩返ししろと言ってはいない。探検隊として、自己満足しか求めていない連中に一泡吹かせてほしいのだ」

ナッシーの顔が全て、強く頼み込むような表情になった。

ナッシーの言う『連中』は想像に難くない。ポケモンの場所を奪う集団は、闇の創世者という、謎の組織しかいない。恐らく組織の一部が入り込んでいたのだろう。

「うん、いいよ。いきなりの話で色々混乱するけど、アイツらのやっていることを絶対に許しはしないよ！」

話を聞いて少し黙っていたチコが真っ先にそう言い通した。両親を殺したポケモン相手に戦う、故郷の未来を救う。この二つが、チコには重要なのである。

「よし、行こう！」

何か考えていたようなチコが決断を下したように行動を始める。

エムにとって、チコの話は少し驚いた。過去を語ることが一切なかったが、まさか、この世界に来てからずっと共にしてきたパートナーの過去に、あの組織がほぼ直接的に絡んでいたとは思いもしなかった。つくづく誰かの両親を殺すのが好きな連中だと感じる。

でも、分からない。こういう時は、なんと言ってあげればいいのか。ただ何も言わず、生きる道を開かせてくれた故郷の為に戦おうとするチコと共に、奴らと戦うだけでいいのだろうか――。

なんだか今日はチームリーダーが逆転したように、チコが率先しているような気がして、エムはそう思った。

51話　幸せ岬

チコは父親の顔も母親の顔も知らない。その事はエムコルスもそうだ。しかし前者の方は、その実態を知らされた。確かにその通りだという証拠を指摘されると、あの話を信用した。

親に会いたいという感情を抱いたことはない。ただただ、エムコルスと一緒にいられれば、良かった。

しかしながら今、何とかして恩を返さなければならないと感じている。いくつか力をそのまま受け継いでくれたまま生み出した親に。そして、自分を良い生活をさせられない場所から出して、血族的な才能を考えた上で自由にさせたポケモン達に。幸せ岬のポケモンは命の恩人とも言える。

ただただ感謝するだけでなく、自分がその場所の支配者を追い払えば、その行為の意味が、大きくあったことになるのだ。

――やらなくちゃ！

改めて、チコはそう思って気を引き締めた。

「あら、しかめた顔してどうしましたの？」

トレジャータウンにキマワリがいた。いつもと違った空気がエレンシアに漂っているので、誰かと決闘でもするのかと思ってキマワリは話しかける。

「あ、おはようキマワリ。うん、ちょっとね」

チコはキマワリに気付くなりコロッと表情を変えた。

「果たしてどんな相手ですの？」

「相手？　確か、炎タイプだとか」

誰かと戦うということに気付いてしまったらしい。仕方がないのでそう答えた。

「炎タイプ！？　用心して戦わなくてはなりませんわね。……いや、今日はフリーの身。炎タイプが苦手なチコの為に、私がついて行きますわー！」

「ええっ！　キマワリが！？　気持ちは嬉しいけど、でも……」
キマワリがエレンシアについて行くと言う。チコは今までキマワリと探検したことはないので、驚きだった。しかし今回は、以前自分勝てなかった相手と同じようなレベルを持つ敵と出くわすことになるだろう。キマワリを連れて行っても大丈夫であるのだろうかと考える。
それにチコは今回ばかりは、仲間にできるだけ頼ろうとせずにしていきたいと思っている。なにしろ、自分が大きく関わってくることなのだから。
「チコ、足を引っ張ると考えてますわね」
「いや、そういうことじゃなくて……」
「これでも私、ギルドではトップクラスと言える実力ですわ。あなた達がいなくなってから！　きゃー！」
まぁそんなことはさておき、安心してほしい理由はこの道具の存在ですわ。これがあれば大丈夫！」
キマワリが出してきたのはスカーフだった。金色の太陽のように明るく派手な物だ。
「そ、それ凄いの？」
「これは私専用の、お日様スカーフですわ。炎タイプの技を全て無効化する道具ですわ！」
お日様スカーフ。キマワリが、結構以前に、逮捕が難しいお尋ね者の依頼を受けた際、お礼として受け取った物である。しかも成功は、対立していたドゴームとの協力によって収めたのだ。そして、その時に苦戦した要素は火だった。思い出のある、貴重な道具だ。
「そ、そんないい道具があっただなんて！　すごいよキマワリ。でも、今回ばかりはやっぱり……」
「む、それはもしかして、何やら大事な対決ですわね？　どうしてかと言うと、チコがこういう頼みを断るなんて考えらないからですわ」
「うっ……なんか鋭いねキマワリ」

キマワリが今日はやたら勘がいい。勘がいいというより、このチームを大切な後輩と見ていて、なおかつ性格を把握しているから、大体が分かるのである。

「まぁ詳しいことは聞きませんわ。でも、1対1で戦うわけではありませんわね？」

チコは沈黙しながらうなずく。キマワリは言葉を続ける。

「気持ちは分かるけど、そういう時に仲間がいることは大切ですわ。自分のことだからと言って、自分中心にやらなくてもいいじゃないですの。例えば、ビッパはギルドのみんなにおんぶにだっこだったのに手柄を全て自分の物にしましたわ！」

サラッとした口調でキマワリは言った。こういうことをキマワリは言っているけれども、気持ち的なほとんどの理由は、世界を救ったすごい後輩、エレンシアに対してなにかいい所を見せてみたいと、ふと思ったからである。

「よし。分かったよ、今回は頼んだよ。キマワリ」

少し顔を逸らして考えた後で、チコは承諾した。そういう面でキマワリは、ほとんど理解してくれるだろうと、チコは思った。

「きゃー！　ビッパに頼まれるより何倍も嬉しいですわー！」

こうして、キマワリはチコに共に行くことを認めてもらえた。

「チコ、準備が整った。無駄口叩いてないで、そろそろ行くぞ」

話しているうちに、エムが準備を終えたようで二匹の所へやって来た。彼は集団戦を予想し、対策を立てていた。相手がどのようなものかある程度分かっているなら、いざという時に対応できるようにしなければと考えた。

「うん。頑張っていこう」

「っと、その前に、ちょっと立っててくれ」

彼は、チコの頭に、自分で持ってきたキトサンバンダナを巻かせた。頭からキトサンの成分が入り込んでくる、特殊攻撃を防御する装備品だ。

エムにバンダナを巻かれることを、チコは少し気恥ずかしく思っ

ていた。それをキマワリはまじまじと見つめていた。
「うん、似合ってはないが……これである程度は炎にも体が耐えられるはず。しかし後は、実力次第になるな」
――いや、似合ってるとかそういう問題じゃない！
エム自分で言ったことに対して自身で突っ込んでいた。誂えている目的は、あくまで防御。炎タイプが苦手な草タイプが技を受けても良いように、と。これまで組織の幹部クラスと思われるポケモンと戦ってきた経験上で、無傷では済むまいと覚悟した上で挑むつもりだった。
「ほ、本当にきゃーですわー！　顔に出てますわ顔に！　やっぱり素晴らしい関係ですわー！　エムはチコがあまりに心配で、わざわざ守るための道具を用意するなんて！」
「え……いや、と、特に、俺は心配してるワケじゃない。あくまで勝つ為だからな。だから早く行くとしよう、うん」
なんだか興奮気味キマワリに指摘されると、エムは無意味に腰に手を当てて、照れ隠しに表情を隠す。そしてさっさと出発しようと十字路方面へと進む。実際、彼は後方にいがちな最近と違い、苦手なタイプを相手に前線に立って真っ向勝負を挑む気でいるように見えるチコが心配だから、そんな準備をしてくるのだが。
「あ、エム、今日はよろしくですわ」
チコだけと行くつもりのエムを、キマワリが呼び止めた。
「は？」
エムは後ろを向いて、首を傾げる。
「私は今日、エレンシアの探検について行きますわー、きゃー！　楽しみですわー！」
「……何故に？」
三匹で出発しても、エムはどうしてキマワリがついて来るのかという会話を繰り返していた。
・　・

・

行くまでに距離のあるダンジョンの幸せ岬にまで到達するのには時間がかかった。とはいえ障害となるダンジョンがない分、距離からすれば比較的早く着いた方だ。

幸せ岬は大陸の北東部分に位置していた。しかし、そこへ辿り着いた途端異様な雰囲気を感じる。入り口付近を見ると、そこには監視員か誰かと思われるペルシアンがいる。

何も言わず入ろうとするとどう言うかと思い、エムコルス、チコリータ、キマワリは無視して中へ入ろうとする。

「どうぞ」

ペルシアンはそう言ったのみで止めてこなかった。目をチラリと見ると、どうやら、ピカチュウ、チコリータが同時に来たからのようだ。殺せと命令を下していたのだから、当然知っているということ。

「止められるかと思ったけど、そうでもありませんでしたわね」

「いや、俺達だからだ」

キマワリにそう言い、エムは一つの説を思い浮かべた。自分達から出向くことを想定していたのではないか、と。　岬は浮かない表情をしているポケモンばかりだった。物陰に隠れてこそこそとしているハピナスがいる。じろじろと草タイプやノーマルタイプのポケモン達がこちらの姿を見てくる。そして噂話と分かる耳打ちをして話をするマネネとニャースがいる。

そして決定的にチコのことを知る者がここにいるということを知らせるような一言が聞こえてきた。

「帰ってきた……？」

聞こえた方向をチコが振り向き、ゴクリンと目が合うと、ゴクリンは気まずそうに目を逸らしてきた。

そんな中でも浮いた存在のポケモンがエムの横目で見えた。炎タイプのポケモンのブーバーがいる。岬の監視をしているように見える。しかし、この三匹の存在を確認するなり、逃げて隠れていく。

「エム、キマワリ。今の見た？　さっきから普通のポケモンとは見られてないらしいね……」
「あの話の通りなら、お前は特別に見られているからだ。ただ、それを抜いても、ここの連中が狙っている対象は俺達だからな」
と、チコとエムが会話を交わした直後、何かの集団が近づいてくるのを感じた。さっきのブーバーを見てからわずかしか時間は経っていない。早い仕事だ。
「ほら、お出ましだ！」
ちょうど広々とした場所に出たその時、辺りの花の咲いた木が並ぶ陰の中から、それも全ての方角から、ブーバーとバグーダの二種類の集団が姿を現した。計何匹かは分からないが、大きな足音を立てて一瞬でエム、チコ、キマワリを取り囲んだ。
「わ、私の好きな空気だとずっと思って堪能してたら囲まれてましたわー！　きゃー！」
軽く短い火を吹いて威嚇してくるブーバー達。火は大丈夫と分かっていても、やっぱり囲まれた挙げ句、辺りが熱い炎だらけだと、少し落ち着けないキマワリだった。

52話　灼熱

ブーバーとバグーダの集団に囲まれた。これだとここを占領し続けてきた黒幕と垣間見ることもできない。

ここで全員で戦い、体力を消費していたら、敵の思うツボ。絶対にこの中の集団にリーダーはいない。だからエムはどうにかして、ここの敵と因縁のあるチコ、そして炎タイプ相手に強力な道具を持つキマワリを、ここから出して、この集団は自分だけで相手にしようと考えた。

「おい、今から俺が合図したらどちらも先に行け」

「えっ。だ、大丈夫ですの？」

小声での指示に、チコはエムを信用しているので、無謀にも聞こえることにも頷くが、キマワリは元ギルドの後輩が不安でならない。

「キマワリ、エムなら絶対大丈夫だって」

チコはキマワリにそう諭した。

「時間がない……。行けっ！」

ブーバーとバグーダが体勢を整えてきた時、エムが声を張り上げる。チコとキマワリは進行方向にいる敵に向かって走り始めた。同時に、そこにいるブーバーに向かって二匹一緒に葉っぱカッターを放ち、立ちふさがる敵をどかせた。

自分達を囲んでいた敵の円からは抜け出したが、まだ追っ手のブーバーが一体だけ来る。倒す為に足を止めざるを得ない。

しかしそのブーバーを狙って、エムは一本の銀の針を持ち出す。敵が障壁になって見えない上、距離が遠いので上に飛び上がり、チコとキマワリを追いかけるブーバーへ向けて、針を遠くまで届くよう全力で腕を振って投げる。ブレのないコントロール、十分なスピードで、投げた針はブーバーの背中を捉え、ブーバーは背中の巨大な衝撃で前に転げた。

「よしっ、ありがとっ！」

チコが遠目で見えるエムに向けてウィンクしながら言った。奥へ向かうだけだ。

だがエムは、それに答える間もない。ブーバー達が空中にいる彼に向けて火炎放射を放ってきた。それを地面に下降することで回避した後も、四方八方から襲ってくるポケモン達の攻撃を避け続けることで精一杯だ。しかしそれでも彼には策がある。

今度は地面が隆起してきて襲いかかってきた。バグーダの大地の力だ。

「ぐっ……」

腕で防御しようとして、苦手な地面タイプの攻撃にも耐える。そして敵が取り囲んできて、取り押さえたがるように密集してきた。しかし、その今がチャンスだ。

エムは取り計らったように反撃となる電撃を体から放った。体から電気を八方に発する技、放電だ。電流の強い閃光が周囲に流れ、エムを取り囲んでいたブーバーとバグーダ全員にまとめて命中した。

あえなく彼の激しい電撃の前に倒れ込むブーバー達。しかし、電気タイプに対して強い抵抗力を有する地面タイプを持つバグーダはまだ倒れずに残っていた。

「よし、後はコイツらだけだな……」

・　・　・

チコとキマワリは幸せ岬の奥にまで足を進めていた。そこまで誰も会っていない。しかしとうとう、不思議のダンジョンを抜けた空間である奥地にまで辿り着いた。そしてそこには予定通りに、権力者であるかのように炎タイプの誰かがいた。

手に何かを発射する大砲のように穴があり、ブーバーより貫禄の増したポケモン、ブーバーンだ。

「おっ、やっぱりそう来たのか。どうせこうなると思ったものだ」

優雅に地面に座り込んでいたブーバーンが立ち上がってきた。
「こ、こんな堂々と姿を現すのは……自分に自信がある証拠ですわ」
経験上そう感じたキマワリは言った。
――全部コイツが犯人……。
チコはブーバーンの目を見た。自分の親を殺し、ここを強引に支配したのは間違いなくこのブーバーン。平気でどのようなこともしてきたような冷たい目線がこちらを睨む。まるで自分が一番偉いとでも言いたげな態度だ。それを目の前に直面して、絶対倒さなければならないと、改めて感じた。
「そんなに睨んでも無駄だ。ここの愚民から話は聞いたが、お前、元々ここに住んでたらしいじゃないか」
「ねぇ、自分が殺したここのリーダーのことは覚えてるの？」
「さぁ？　殺した奴なんぞ一々覚えない」
「……どちらにしろ、後で色々聞かせてもらうからね」
お互い目が合って口を開くブーバーン。チコの質問に対して、知らないと流した。本当に、覚えてはいなかった。チコは、これが非道なポケモンであることを確信した。
「どういうことなのでしょう……。い、いや、チコ、これは挑発に決まってますわ！　乗ってはなりませんわ」
そんなポケモンには会ったことのないキマワリにとっては驚きで仕方がなかった。思わず疑問に感じるが、すぐそれをただの挑発と見て取り、チコに呼びかける。
「うん、分かってるよ」
チコが一瞬だけキマワリの方を見て頷き、すぐ視線をブーバーンの方に戻す。すると、ブーバーンは手をこちらに向けていた。「邪魔な奴だ、そっちに用はないからまずは消えな」
キマワリの方へと、灼熱の火炎放射を放った。しかし当然、お日様スカーフを身に付けたキマワリには効果がない。火炎放射を浴びているのに平然としているキマワリがいた。
「なっ……？」

「今度はこちらの番ですわー！」
　自分の攻撃が、それも草タイプに効いてないということにブーバーンが驚いているうちに、チコが葉を振って、キマワリが手を振って葉っぱカッターを放つ。葉の形は違うが速度はほぼ一緒だ。
　しかしブーバーンは軽々と回避する。だがこれでは終わらない。チコの放った方の葉っぱカッターは放った方面から戻ってきて、ブーバーンの背中に直撃した。
「っ！」　前にのけぞって怯んだブーバーン、チャンスと見てキマワリは一気にたたみかける。高威力の技である花びらの舞をひたすらぶつけて、一方的に追いつめていく。
　キマワリの攻撃が終わった所で、チコは芳香を漂わせるアロマセラピーを、疲れて混乱しかけるであろうキマワリにかけた。
「この程度で……邪魔をできると思ったか！」
　ブーバーンが対抗技として持っていたのは気合弾だった。ひざまずきながら手から炎タイプでない技を出して、キマワリはまともに受けてしまう。
「きゃーー！」
「キマワリ！　大丈夫？」
　衝撃と吹き飛ばされるキマワリに近付くチコ。当然ながらタフな相手で、まだ倒せてはいなかった。そんなことはあまりキマワリは知らない。
「大丈夫ですわ、しかし何故でしょう……。あんなに持ちこたえるとは」
「答えは簡単、強いからだよ。だけど、こちらは対策していても相手は草タイプはノーマーク。だから実際、相性はそこまで重要じゃないと思うよ。だから勝てる！」
「や、やっぱり強くなってますわね……何が違うのでしょう？」
　ここまで何とかしてこれたのは、相手が草タイプは簡単に倒せると踏んでいたからだ。水タイプに対抗する技は、草タイプには通用しない。だから、炎タイプの技が効かなければ、状況は変わるので

ある。そして気合弾も結局、岩タイプへの対抗策でしかない。
「殺されるのが嫌で机上の空論か？」
「……行くよ」
チコはもう一度葉っぱカッターをブーバーンに放つ。さっきと同じようにブーバーンは避ける。そして今度は後ろの方も向く。しかし刹那に、前から突撃されると思い、すぐに前へと振り直った。
「いない……上か！？」
上を見上げると、頭上を超えようとしているチコがいた。チコはブーバーンの体を足で力一杯押し、怯ませた。しかし刹那にブーバーンは煙幕をかけてきた。
（……！　見えない！）
辺りが黒の煙にまみれて攻撃が当たらなくなったと悟ると、とっさに敵の攻撃を読んでかがみこんだ。
案の定、炎技が効かないのはあのキマワリだけと分かっているブーバーンが、火炎放射を放ってきた。
「当たってない……上にいないなら地面だな、潰してやる」
ブーバーンは煙幕の中に入り込んで、チコに炎パンチを叩きつけようとする。しかしそうはいかなかった。
「きゃー！　くらえですわー！」
チコとブーバーンの戦いのやり取りの間に移動し、そしてさっきの火炎放射を浴びることによって体力を取り戻したキマワリ。広い煙幕の中に消えてなくなる前に葉をブーバーンの背中に飛ばした。
「チコ、今晴れ状態ですわ！」
「晴れ？　ということは！」
「うん、その通りですわ」
燦々と陽光が降り注ぐ、素晴らしい天気になった時にやることはただ一つ。実力ある草タイプならば、言わなくてもお互い分かった。
ブーバーンのいる位置が分かり、なおかつしばらく動けないと悟ったチコは、消えていく煙幕の中を進み、ブーバーンの正面に立った。

「行けっ！」
「トドメですわ！」
チコとキマワリはブーバーンの前後から、太陽の力で放たれる光線、ソーラービームを放つ。
「ぐわあああぁぁっ……」
さすがに抵抗力を持ってしても、高威力の光線を前後から浴びては耐えられない。ブーバーン貫かれたかのように腹部を抱え、うつ伏せに倒れ込んだ。

53話　究極奥義

「ふぅ、もう終わったか」
エムがバグーダも全員倒し、手をはらう動作をする。この調子なら、チコも大丈夫だろうと推測する。本当に効果のある御守りとして、バンダナもあげたのだから。
と、その時である。岬のポケモン達が一斉に押し寄せてきた。近くに土砂でも落ちてくるような音に思わず驚いて、巻き込まれるのを避ける為に端へとよけた。
誰が知らせたのかは分からないが、大体察しは付く。チコもキマワリも勝ったのだ。ここ最近、組織相手には苦戦続き。他者の介入で助かった戦いがある。だから、「圧勝」したのは良いことだ。

一方で、チコは多数の岬のポケモンに近寄られていた。崇拝するかのように全員が頭を下げてくる。あまりの数にキマワリは下がって傍観しているしかない。
「まさしくヴェイルさんが蘇ったとしか！」
「なんとこの香り、あなた様は生まれ変わったのだな！」
「生まれ変わりのお姿を拝見できるだけで光栄の至り！　救世主です！」
「ありがたや、ありがたや。まさかこんなに立派になったなんて、ああヴェイル様、神の子を残してくれて、本当に、ありがたや……」
「私の頭を踏みつけなされー！」
神でも見たかのようなことや、支離滅裂で意味の分からぬことを、一斉に集まって言っている。
「あ、あのぉ……頭上げていいからさ」
チコは撫でるような口調で言う。一部のポケモンは特に過剰だと

思った。確かに、ずっと苦しめさせられた連中を、こんなにもすぐに倒せたのだから、すごいと思われるのは分かる。それにしては異常ではないか、と。

いや、ここから救い出された存在だからこそなのかもしれない。すぐにそう思った。

「とんでもございません。わたくし共々は、元々ヴェイルさんとルナンドさんの管理のもと、過ごしておりました。しかし、奴らに暗殺され、草タイプだらけのこの岬では炎タイプの連中に歯が立たない。

しかし今、あなた様とそのお供は、それを素晴らしい才能で跳ね返しなさった！　それもヴェイルさん達の残したポケモンが！　これをどうして褒め称えないでしょうか、いや、しなければなりません！」

と、ノクタスが古典的な言葉で詰め寄ってくるポケモン達にチコは本気で戸惑っていた。神ではないから、そんな目で一斉で見られても困ってしまう。

「チコリータさんですね？　この岬に残ってくれないでしょうか？」

どっかから聞こえてきた提案。周りのポケモン達がそれに賛同し始める。

「いや、気持ちは分かるけど、それはちょっと困るってばぁ……」

チコはたじろぐしかない。だが本来なら、ここの岬を治める権利を継承するべきなのかもしれない。でも、今はもっと大切なものがあるのだから。

「頼みますよーっ！」

「お願いします！」

「神は言っている！　あなたはここで過ごす定めだと！」

「頼む……！　ここで帰る……それだけはしないでくれ！　頼む……！」

岬のポケモン達が、もはやおかしなことまで言い始めてくる。

「ちょ、ちょっとこれどうすればいいのさ」

チコは後ずさりになる。
「きゃー！　みんな何だか気が狂い始めましたわー！」
キマワリが言う通り、それにしても、岬のポケモン達が感動しきりというふうに願ってくるのを見ると、ここまでくるともはや宗教的で、滑稽という言葉だけでは言い表せない、熱意が見えてくるのだった。
はっきり言うと、気味が悪い。チコはありがとうと言いたいけど言える状況じゃない。
その時だ、遠くの茂みの中から、誰かが少しだけ音を立てて、つるのムチの鞭で、手招きするのがチコには見えた。こちらへ来いという合図だ。
「と、とにかくみんなありがとっ、ごめんっ！」
チコは岬のポケモンを避けて、その呼んでいるポケモンがいる方へと逃げていった。キマワリもそれについて行く。
エムが分かるよう、足跡として葉っぱカッターの葉を一枚地面残した後、わらわらと押し寄せてくるポケモン達から逃げ切って、茂みの中へと入っていった。
「こっちじゃ」
少し遠くから聞こえるのは老人の声だった。その老人の声主らしきポケモンの足音は下へと下っていく。地下なのかもしれない。草むらの中で、チコとキマワリがそこ辺りの足元を見ていくと、確かに階段があった。
「ここ？」
「みたいですわね」
なんだか古臭いというか、無理矢理作られた感のある階段だ。注意深く見なければ、階段の存在なんて分からないぐらい、分かり辛い。うまく隠されていて、恐らく支配する組織の連中の監視を避ける為だったのだろう。
階段を下っていくと、火が焚かれた部屋があった。そこに誰かいるようだ。

「あの、こんにちは」
「おっ、よくぞ来た。まぁまずは言おう、ワシはフシギバナじゃ」
チコとキマワリを見るなり、フシギバナと名乗る老人はそう言った。四本足で、その背中には立派な大きな花が咲いたポケモン。
「えっと、私はチコリータ」
「キマワリですわ」
真っ先にお互いに自己紹介。二匹が名前を名乗ると、フシギバナはこう言った。
「うむ。では単刀直入に言おう。まさにワシはこの日を待っていたのだ。草タイプの究極奥義を伝承する日をな」
「き、究極奥義だって!?」
「なんですのそれ?」
チコとキマワリは目を丸くしていた。聞いたことがない。今まで、草タイプで最も強力な技をソーラービームだと思っていた。それを超越する技があったことに驚いていた。
「しかし、それが覚えられるのはチコリータ、お主のみじゃ。しかもお主のことは聞いておる。言うまでもなく、探検隊のポケモンの中で継承するに最も相応しい」
フシギバナは野生のポケモンの中に究極奥義を覚えたポケモンがわんさかいるダンジョンが存在すると聞いていたので、あくまで探検隊の中で、と説明する。
「一体どんな技なの?」
「ハードプラントと呼ばれる技じゃ。炎タイプにはブラストバーン、水タイプにはハイドロカノンという技がある。草タイプは、ハードプラントじゃ」
「へぇ……」
「ところで、何故こんな所で暮らしてましたの?」
キマワリが聞いた。
「見ての通り、監視から逃れる為じゃ。かつてはまぁ探検隊組んでやっとんたんじゃが、引退してからはどこか隠居する場所を探して

いてな。ジャングルとか神秘の森とかあったんじゃが、その他大勢としているのは嫌でな。ここを選んだんじゃ。

結果的にはこうなってしまったから失敗だったんじゃろうが、お主らの活躍によりもう大丈夫。しかしまぁあの間、誰もが神にすがるようになって、いつしか神様でもない、死んだここの主を称えて助けを願っていたりしてな。だからあんな風な扱いをお主は受けたのじゃ」

「うーん、何も言えずに逃げちゃったなぁ……」

チコはやはり、恩人達相手に逃げてしまったことに罪悪感を感じた。

「後でなんか手紙にでもしておけばよいじゃろう」

「そうするしかないね」

「うむ。ならば、奥義習得の為にも、この日の為に用意した地下広場へ行こう」

と、フシギバナが言ったその時、また新たに誰かがここに来た。

「……なんだ、ここにいたのか」

エムもここに合流してきた。葉を見つけてここまで来たのだが、階段を見つけたのは偶然。何かないか探っているうちに発見できたのだ。

「で、どういうことなんだ、あの狂った奴ら」

彼に非はないので責めるわけには行かないが、また全て説明するのは面倒だった。

・　・　・

そして数十分後、チコとフシギバナはハードプラントを習得する為に修行中、　キマワリはその近くの部屋で遠目で、我が子を見てるかのように見守り、エムは、岬の中で調査をしている。

エムはあることに気付いた。少しばかり冷静になった岬のポケモン達は、集まって笑顔で談笑しているが、それはつまりボスをここ

で倒したということになる。それなのに、それらしきポケモンが消滅している。闇の創世者の一員だと確定した。

が、しかし、自分が戦っていた場所へ戻ると、衝撃の光景を目にすることになった。自分は気絶させただけのブーバーとバグーダが、無惨な姿で、殺されていた。身を震わせて組織の残忍性を感じながら、周囲を見渡してから、遺体を確かめる。しかし、誰がやったのか、全く分かりやしない。犯人種族特定のプロですら、分からないだろう。

（この件を警察に関与させようとすれば、やはり危害が及ぶ……。今回はこれで終わりだ）

これは、もはやいるだけ無駄で不要と判断した上に、解放した後の暴露の可能性を考慮した上で、また誰かが、口封じの為に殺したに違いない、と彼は考えた。

絶対許してはならないと思い、また隠れ家に戻ることにした。

そしてそこへ戻ると、チコがまさに技を出す為の様々なアドバイスを受けて、必死に努力をしている所だった。

パートナーが頑張っている横で、見ているしかない。

探検隊ならば、強くなる為の修行を怠ってはならないということに気付く。ダンジョンの中で鍛えられるとはいえ、その外でも何かする必要があるのかもしれない、とふと思う。

「可愛くて可愛くて、やっぱり私母親になった気分ですわー！」

そんな中で、キマワリが変なことをずっとブツブツ言っていて鬱陶しいので、エムはもうちょっと側で見ることにした。

壁には既にいくつか凹んだ痕跡が残っているのが見えた。これでも足りないなら、一体どんな技なんだろう……と彼は考えた。

そして数分後、時は早かった。大量の木が前方へと繰り出され、轟音を立ててそれが激しく壁に叩きつけられた。壁には、隕石でも落ちたかのような、大きな穴が空いた。その威力を目の当たりにしたエムは、思わず舌を巻いた。

「……な、なんということじゃ。こんな短時間で技を出したじゃと

！」

驚いていたのはエムだけでなく、フシギバナもであった。フシギバナの場合は、本来技を手に入れるのには時間がかかると知っていたので、その技を出せるようになる早さに驚いていたのである。

「チコ、お前凄いな……」

久々にチコに驚かされたと感じたエムは、歩み寄って声をかける。が、技を出して疲弊したチコは、息を絶え絶えに吐いた後、フラっと倒れ込もうとしてしまう。しかしエムが反射的にチコが手で倒れるのを押さえた。

「お、おい、大丈夫か？」

「うん……ありがとう。ちょっと疲れただけ」

チコの意識はあった。疲れたというのは、技の反動で体力を消耗したということだ。

「うむ……やはり体が小さい分、体力がなくてそうなるのう。そこは仕方ないが、この技を使うなら、使い時を考えるべきじゃの」

「はい……分かりました」

フシギバナの言うことに、チコはそううなずいた。

「きゃー！　ですわー！」

キマワリがどれの意味でそう騒いだのかは定かではない。

その後、チコはフシギバナにお礼をした後、幸せ岬のポケモン宛てのお礼の手紙を残した。この岬には残れないということ、自分の為に岬から解放してくれたことに対するお礼、今までの出来事など。言いたいことは全て書き残した。もうなんだか怖くて、直接会うのは少し気が引けたのだ。

エムコルス、チコリータ、キマワリはこっそりと岬を抜け、一部のポケモンには会い、お別れの言葉を述べたが、手紙だけを残して去ることになった。

帰って、今回のことをナッシーに報告すると、ナッシーは顔を明るくして岬に帰っていった。

キマワリは、今日は何をしたかと聞かれ、エレンシアの戦いを助けたと報告すると、皆が驚いた。ギルドの弟子達は、どうしてあの天才肌な探検に付いて行けたのか不思議でならなかったのだ。やはり、あの二匹の関係を誰より見守っているポケモンだからだ。

今回チコは、ハードプラントという、新たなる強力な技を手に入れた。しかし、使った後は激しく疲れてしまったというように、使い時が限られている。

実質的に、あのフシギバナもあの岬の住民だ。今回は厳密には依頼ではないので、報酬はないのだが、あのハードプラント、そして、チコの過去の出来事、そして恩人達へ最高の恩返しをしたという、気分の高揚感。それが報酬だった。

それらの報酬を含めて、今回はほとんどチコがやってくれた。やっぱり、チームは、探検隊をしようと言い出したチコリータがいてこそ、機能してくれるのだと、エムコルスは思わされた日だった。

53話　究極奥義（後書き）

というわけで、ハードプラント。
作者の残念な頭のせいでなんだか哲学的な話になりそうでならなかったこの薄い話の先に待っていたのはこんなオチでした。
対戦とかじゃ絶対に使わない技をわざわざ覚えて何がしたいんだとかいうツッコミはしてはいけないんだと思います。

54話　お宝メモ

いつも通り平和に日常が過ぎていた。特に変哲もなく、変わったことは起きていない。しかし、エレンシアのチコリータだけ、あることがおかしいと感じた。

他にチームにいるのは本来エムコルスしかおらず、二匹だけで探検する日々を過ごしていたのだから、気付かないのかもしれない。幸せ岬に行ったあの日辺りから何か違和感を感じると思った。そして、それは今日もだ。

「ねぇ、最近ポッチャマを見ないんだけど、どうしたんだと思う？」

チコにとっての違和感の正体は、まさしくポッチャマだった。毎日毎日うるさかったはずの彼が、いつの間にか姿を見せなくなっている。一体何故なのか。どこかで助けを求めてはしないだろうか、心配だった。

「はぁ？　あんな奴は知らん。またどうせ忘れた頃にここで寝てたりするんだろ？」

エムは特別心配する様子もない。どうせまた帰ってるだろう、と楽観視する。というより、邪魔くさいのがいない方が楽だと思っている。オニスズメの涙ほどの資金を稼いでくれるのはいいが、それ以上にいちいち妨害してくる気がする。

「そうなのかなぁ。うーん」

チームの一員として、何だかんだで貢献しているのだが、エムにそう言われても、顔を見せてないのはやはりおかしいと思った。

「私、一応近所にいないか探してくるよ」

チコは先にどこかへと行った。海岸やら、そこらを探すつもりだった。

「どうせいないって……」

と、エムは独り言で呟く。しかし実際は、行方不明だと思ったら近くにいたなんてことはよくあるらしい。

だがチコが探したところ、海岸にポッチャマはいなかった。あったのは、いつもは落ちてないはずの、小瓶一個。

なんだろうと見てみると、中に紙きれが一枚入っているムチで器用に蓋を外し、その紙きれを取り出す。そこに書かれていたのはメモ書きだった。『誰も訪れない場所に、探している宝が隠されているようだ』と。

・
・
・

「誰も訪れない場所……どこだ？」

もうポッチャマのことはひとまず置いておくことにして、このことをエムに話す。不思議な地図を広げて見てみても、多くの場所に訪れたとは言え、どこが未開拓なのかは分かっていない。

そもそもこんなメモが海に流されるのはおかしい。誰かが悪戯でやった可能性もある。必ずしも信用はできない。しかし、いくら宝があるとは限らないとはいえ、未開拓の場所なら行く価値がないとは思えない。

いくつかダンジョンの存在を把握したにも関わらず、まだ行っていない場所がある。その中で、ダンジョンを開拓しているチームがまだ誰も探検していないと言う場所に行くことに決めた。何故あんな場所に流されたのか分からないメモの真意を確かめる為に、今日もまた活動を始めることにした。もうエムとチコの頭の中から、ポッチャマのことは消え去っていた。

話が分かるのはチーム『かまいたち』だけだった。彼らが探検スポットの開拓をしている。

「ねぇ、ちょっといいかな？」

「おっ、高ランクの探検隊がなんか用か？」

パッチールのカフェの中に、ザングースとストライクとサンドパンがいた。暇そうにジュースを飲んでいたので、問題ないだろうと

話しかける。少し謙遜するようにザングースは言った。
「まだダンジョンがあると分かってても誰も行こうとしてない場所ってある？」
「そうだな。この山を超えた先の荒野は、まさに未開だぜ。あるのは分かってても、まだ誰も行ってないんだ」
ザングースが指差したのは、大陸東南にある、荒野の広がる場所だった。ダンジョンの名前にすると、未開の荒野になるらしい。
「よし、情報ありがとう」
話を聞くなり、一言だけ言ってチコとエムは撤収して、早速ダンジョンへと向かうことにした。
「変な奴らだぜ。ちょっと話聞いたらすぐどっかに行っちまうんだからな。たまには、俺達とゆっくり話すればいいのにな！　人生余裕がないと楽しくないぜ」
すぐに行ってしまったエレンシアに対してザングースはそう思って言った。
「休みすぎて気力失った俺達が言うことじゃないだろ……」
ストライクがすぐさま突っ込んだ。最初に空の頂に行った時、山頂に登ろうとして、途中で休みすぎてやる気がなくなって、諦めてしまったらしい。

・　・　・

「本当にここに宝があるのかな？」
「行ってみるしかないだろ」
エムとチコは入り組んだ山を抜け、荒野付近にまで来た。やはり誰も手入れをしたことがない様子で、足場が悪い野原だ。ぽっかり足下に穴が空いていて、そこからダンジョンに入られるようだ。地面が見えるので、大丈夫そうだ。危険そうだが、それこそ探検のしようがあると、お互い思っていた。
中に入ると、文字通り荒れ果てた場所だった。しかし野生のポケ

モンもいて、ポケモンの住処にはなっている。しばらく足を進めてダンジョンの奥に入り込む。

そして問題の宝の在処が見つかった。ポケの山があるではないか。しかも、どう考えても本物だ。決して幻惑ではない。

「す、すごい、メモは本当だったんだ！」

こんな所に大量のお金がある。ざっと５０００ポケはあるかもしれない。目でそこまで見えたことのないチコは、少し感動を覚えていた。チコは早速拾おうとそっちへ向かおうとする。

「いや、待て、足元を見てみろ。罠がある」

「あ……突風スイッチ。危ないねぇ」

エムが指差す先には、ポケモンを軽く吹き飛ばす風を引き起こす罠のスイッチがあった。宝があるエリアなのに、こんなものがあるというのが、少し変わっていた。

「まぁいい。俺達の周りには誰もいない。だからどちらにせよあのポケの山は持って帰れる。あっちのなんか鍵が閉まった場所もだ。既にダンジョン内の鍵穴に合う鍵は持ち込んである。だからあれも俺達の物だ

要するに、ここの宝の存在を知った奴は、まだここに辿り着いていないってことだ」

エムはいない誰かに勝利したと感じながら、足元の罠に気を付けてポケの方へと向かう。

「よーし、じゃあ早速拾い集めよう！」

チコは微笑みながら、エムより先にお金となるポケを集め始めた。値段を数えながら、しかも細かい物も見逃さず拾っているという辺り、さりげにチコはこういう物が好きなのだ。知性が上がることにより手に入れることができる能力の一つであり、目配り、という。

「うん、５２８４ポケだね」

エムとチコが、あるだけ拾い集めて数えた結果、これだけ集まった。宝のメモのおかげだ。チコは、誰かも分からない宝のメモを海に流したポケモンに対して感謝したい気持ちになった。だが同時に、

少し申し訳なくも思った。
「でもいいのかなぁ、本当に」
「手に入れるまでは誰の物でもない。先に手に入れた俺達の勝ちだ」
エムはポケを入れた少し重い袋を持ち上げて言った。あまり他人に同情しない彼は、チコのように「横取りされたら嫌だろう」だなんて考えたりすることはなかった。むしろ彼はチコはお人好しすぎると思っているのだ。
「ははっ、まぁそうだよね」
チコは少し苦笑いして言った。
まだここにある宝を全て手に入れたわけではない。次の鍵穴のある扉の方へと向かう。しかし、次は何かが変だった。よく見ると、扉にあるのは鍵穴とは言えない形だ。物をはめ込むような、五角形の形をしているくぼみがある。鍵ではダメなようだ。
エムは鍵穴に鍵を差し込んで錠を開けろという物以外を見たことがない。両手で鍵を取り出して、五角形のくぼみに入れてみるが、当然だが何も起こらない。
「……なんでこれは鍵じゃいけないんだ?」
くぼみにはめ込むという、時の歯車を時限の塔にはめるという方法を思い出させるような初めて見る鍵の解除方法。この五角形に合う物など持っていない。エムは指を顔にあてて、首をかしげた。分からない。
「何をはめるんだろう? ここのどこかにあるのかな?」
同じくチコも、鍵では開かない、物をはめ込むことで開くと思われる扉にお手上げだった。
「それはない。中は全て回ったはずだ……」
何か開ける方法はないのか。思わぬ壁にエムは戸惑った。
「よし、こうなったら……」
しばらく考えて、エムはくぼみに体当たりしたり電撃をぶつけたりした。しかし開くことはなかった。
「くっ……これは無策か」

「エム、壁が通れるとかは？」
「その手があったか」
チコは壁を調べて、通り抜けることが可能な場所はないか探していた。しかし、エムが一緒に探しても、結局そんな道はなかった。
「あった？」
「いや……。誤算だったな、あんな仕掛けのパターンがあるとは」
エムは開かない扉を見つめて、思わず舌打ちした。鍵穴に鍵を差し込む以外の、不思議のダンジョンの中の閉まった扉の開け方というのを見たことがなく、プクリンのように無理矢理壁を壊すような力もない。少し失敗したと感じる。
「開かないのならもうしょうがない、帰ろうよ」
一応、お金という収穫はあったので、エムとチコはやむを得ず扉を諦めて、未開の荒野から帰ることにした。

55話　受難（前書き）

今日は作者の誕生日です。
それがどうしたのかと言われれば、めでたく誕生日に投稿できたということですｗ

55話　受難

あの扉の中にある宝だけがどうしても取れなかった翌日。カクレオンの店で見覚えのある物が売っていた。

探検隊バッジが彫刻された、石版のような物だ。しかも、五角形。いつもは見かけない商品だ。

「おい、なんだよこれは？」

五角形の物に対して、エムはカクレオンに聞いた。

「えー、これはですね、エンブレムと言うそうです。なんだか用途があるらしく、限定商品として入荷されました」

「値段は？」

「限定なので７０００ポケです」

「は、はぁっ！？　それはふざけているのか？」

エムは、そのエンブレムの飛び抜けて高い金額に目を丸くした。鍵や技マシンですらそんな値段はしない。チームの全財産なら払えるが、そんなに払ったら資金のやりくりがしにくくなってしまう。

「まぁ～そりゃそう思いますよね。だから値段が下がる時をお待ちいただいた方がいいかと。エムコルスさんのチームより先に、このエンブレムを手に入れることになるチームなんてそういないでしょうから」

「待ってられるかよ……」

カクレオンも高いというのには同意した。エムは商品棚に置いた手をのけて、ギルドで依頼を探しているチコの所へと向かった。

あの宝の部屋を開けるには相当な難易度だと気付く。お金がなければ手に入らない。本末転倒のような気もしない。だが、何としてでも部屋の中は見たい。部屋に入る為の鍵ならダンジョンに落ちていた時もあったが、エンブレムなんて一度も見たことがない。あのエンブレムをすぐにでも買ってみせる――その為に、もっとお金を集めるということを考えた。

ギルドに行くと、チコが一枚の依頼用紙をじっと見つめていた。変わってる依頼がまたあるらしい。

「チコ、何を見てるんだ？」

「あ、ちょっと見てよ！　すごいよこれ」

エムもその依頼の内容を見ると、一見変哲もない救助依頼だった。依頼主はムクバード。「おぼっちゃま」のカモネギがダンジョンで迷ってしまったので助けてほしいという内容である。散歩ではぐれたらしい。驚くべきはその報酬である。１１０００００ポケ、とある。これだと１１０００ポケ貰えてしまう。

「この依頼、本物と思うか？」

「本物以外張り出されるはずがないと思うんだけど」

「なら……受けてみるしかないよな」

エムは少し動揺している。ちょうどこんなタイミングで、過大な報奨金のある依頼が出てくるなんて、と思っていたのだ。

「……急にどうしたの？」

高く支払われる報酬目当てにあっさり依頼を選ぶエムに違和感を感じたチコが聞いた。

「だってな、あの昨日の五角形のくぼみに合う形のエンブレムが売っていて、それが高いんだよ。やるしかない」

急いで、カモネギが迷っていると言われるダンジョンに向かい始めるエレンシアの二匹。

「ええっ？　エンブレム？　それが鍵代わりってこと？」

「ああ。大きさも厚さもピッタリだ」

昨日見て脳の記憶に焼き付いたあの形。記憶が正しければ、あれで正しい。エムは目的地の地図を確認しながら思い出していた。地図を見ると、目的地のダンジョンは風の霊峰だ。霊峰と呼ばれるのは、宗教で奉られている伝説のポケモンが住んでいると言い伝えられているからだ。真相は定かではない。

山とはあるが、飛行タイプのポケモンが多く生息してくる。よそ者と見て当然襲いかかってくる。霊峰は不思議のダンジョンとなっ

ていた。エムは、飛行タイプに弱い、草タイプのチコを守るように、飛行タイプが苦手な電撃で一蹴する。宝を取り逃したくないという意志が、こういった依頼を受けさせようとしているのだった。

ダンジョンとなる山中の途中で、ハッキリと声が聞こえてきた。少年の声がして、更には助けを求めている声だ。恐らくあの声がカモネギだろう。「お……い」といった具合に聞こえる。

「あっちだな、行くぞ」

「うん」

エムとチコは声がする方へと向かう。駆けつけると、そこには確かに、口にネギをくわえた茶色の体をした鴨のポケモン、カモネギがいた。

「あ、助けが来たっ！」

半泣きになりながらカモネギはそう叫んだ。

「よし、救助に来たからもう大丈夫だよ」　チコが探検隊バッジを差し出し、助け出そうとする。と、その時、何かがバッジを右へと大きく弾いて地面へ落とさせた。左から木の枝が飛ばされたのだ。

「きゃっ……！」

チコは驚いて不意に伸ばしたムチからバッジを放してしまう。左を向いてもいなかったので逆側の右を見ると、そこにはテッカニンと呼ばれる、蝉型の虫ポケモンがいた。

「そのカモネギは預からせてもらう。アンタら富豪が用意した金より多くの身代金を要求させてもらうからな！」

このテッカニンは誘拐を目的としているようだ。今の行動はカモネギが救助されるのを防ぐのが狙いだ。テッカニンは加速して秒ごとに素早さを増していく。

「そんなことまでして金が欲しいって言うのか。そりゃ哀れだな」

お金となるポケを入手する為の誘惑に負けて、犯罪に手を染めるポケモン。今、金を求めているエムにとっても、滑稽に見えた。

「フフフ、目にも止まらぬうちにいただくから覚悟しな！」

テッカニンは影分身で分裂し、まるで複数いるかのように広がっていく。どれも本物のようで区別が付かない。

瞬時に理解し、カモネギが連れ去られないよう、チコは彼を背中に乗せておいた。テッカニンのそばに探検隊バッジがあって、とても拾いには行けない。

「都市伝説じゃなかったのかぁ……」

「ん、どういうこと？」

カモネギの独り言にチコは背中越しに聞いた。

「僕達、大金持ちだからって、誰かが僕を狙ってくるという話だよ。こんなこと初めてさぁ……」

カモネギの話でチコは今、ようやく何故報酬が高いのか理解した。このようなことがあるからだ。

エムは、テッカニンの本体が、速すぎて見極められない。まともに見ていたら目を回すだろう。しかし数秒間のうちに本体を倒す方法は見つけた。

「巻き込まれるぞ、ちょっと下がってろ！」

彼はチコにそう指示する。言われた通りにチコは離れた。

すると、彼は周囲に電気を放出する技、放電を放った。辺りにいるポケモンを一掃する技だ。影分身のテッカニンの集団に、放たれた雷撃の雷鳴が轟く。そして、電撃で本体のテッカニンが崩れ落ちるのを確認していた。

だが、確かに影分身のテッカニンは消えたが、本物は一匹もいなかった。そのことにエムが気付いた直後、テッカニンがチコの斜め後ろから、シザークロス。十字に手を交差させて打ちつけた。

「うっ！」

チコがテッカニンに突き飛ばされる。そして、背中にいたカモネギが落ちかけた。「なんだなんだ」と慌てるカモネギをテッカニンは素早く拾い上げて、さっさと撤収していった。

「バカめ！　見えないと行っただろ？　影分身で惑わせている間に素早く後ろに回り込んでいたのさ」

そう言いながらテッカニンは助けてと暴れるカモネギを押さえつけながら、悠々と逃げていく。影分身に気を取らせて、背後への注意を散漫にさせていたのだ。その作戦にまんまと引っかかった。影分身の集団を一掃させる技があったのが尚更だ。

「そういうことかよ……逃がすか！」

テッカニンの使った木の枝を拾い、エムはテッカニン目掛けて投げた。しかしテッカニンは既に遙か彼方。投げた木の枝は、遠くまで飛びはしたものの、届かなかった。カモネギを連れ去られたまま、テッカニンを逃がしてしまった。完全に依頼の失敗だった。

「クソッ……覚えてろよあの野郎」

逃げられた時点で完全なる負けだった。しかし、あのようなことをする時点で、お尋ね者にはなっているはず。行き先は分かるだろう。すぐにでもカモネギを取り返すつもりだ。もちろん、力づくでだ。執事であろう依頼主に身代金を払わせるなんてことは絶対あってはならない。

「チコ、大丈夫か？　立てるか？」

「う、うん……。ごめんね」

エムは弱点となる虫タイプの技が直撃して、倒れたチコに声をかける。チコは自力で立ち上がって、救助対象のカモネギを連れ去られたのは自分のせいだと思って、素直に詫びた。

「あ、いや、全くチコの責任じゃないからさ」

エムは、なぜか謝られただけで、少し照れながら両手と首を横に振ってそれは違うという風に否定した。さっきのテッカニンは、素早さが加速していたが、エムは以前より、また何か違うものが加速したらしい。

なんでそんなに焦るんだろうと、チコは内心思っていた。いつもの受け答えと違って少しドキドキとしてくる。

「で、で、でも、依頼が……。あの依頼書書いたムクバードがお金をアイツに払っちゃったらおしまいだよ？　お金があるからと思ってあっさり諦めるんじゃ……」

そうチコが言う。もっともな推測だ。

「そうなる前に、奴の行き先、そして依頼主の居場所を探し出すか」

エムは少し咳き込んだふりをして、帰りのルートへと体を向けた。今回は、様々な苦難が立ちはだかってくる。やることは複雑ではないはずなのに、上手く物事が運べない。まるで何かに踊らされているようだ。実際そんなことはないのに、そのようにすら思えてくる。

しかし、頭の中は、カモネギをテッカニンから救出することに切り替えていた。エンブレムの扉は、頭の片隅に置くしかなかった。

56話　救出大作戦

どうにかして連れ去られたカモネギを取り返すため、休む間もなく調べ始めた。幸運なことに、あのテッカニンは数々の窃盗などで、お尋ね者として既に掲示板に突き出されていた。どうやら、住処としている場所があるようだ。ならば、そこに行くしかない。

「よし、今すぐ出発するぞ」

「今すぐ？　もう夕方だよ？」

「捕まえに行くなら不意打ちで今だ！」

その日のうちに追いかければ、相手も想定しないうちに攻撃できるだろう、エムはそう考えた。というより、してやられたので、今すぐにでも一泡ふかせてやらないと気が済まなかったのだ。住処は北西の地帯に隠れてる。日が暮れ始めたがお構いなしに、エムとチコは目的地へと向かった。

歩いているうちに日は暮れていく。こんな時間帯にまでもなって活動する探検隊はそうそういない。どちらにせよ、ギルドにいる内は、門限があったせいでこんなことはできなかった。目的地のある場所へとやってくると一つ、林があった。何もない場所に林があることがおかしいのだ。

「入るぞ」

エム、チコは木の集団の中へ入っていく。できるだけ物音を立てないようにしなければならない。周囲への警戒は怠らない。どんな速さであのテッカニンが襲ってくるかが分からないからだ。

しばらく進むと、『普通のカギ』を入れる鍵穴があった。エンブレムを入れるくぼみを見たエムとチコにとっては大したことのないことだ。この中にカモネギが閉じ込められている可能性が高い。

「ここか。仲間が確実にいるだろう。チコはカモネギを連れて奴（テッカニン）を引き寄せてくれ。俺は周囲に出てきた奴を倒す。俺は無事でいる、だからチコも無事でいてくれよ」

「うん…分かった」
エムの言うことに対して、チコはまた彼自身が一番危険になることをするのか、と少し思うが、今までのことを考えると、絶対に大丈夫と思って素直にうなずいて、指示に従う。
「にしても、いつもかもよね。「無事でいる」とか」
エムの頼りにできる言葉。信用してほしいと言わんばかりの態度。だから自分も常に信じたいと、チコは思っている。そんなことから出た言葉だった。
「な、なんだよ？　それは何が言いたいんだ？」
そう照れ隠しにエムがカギを差し込んで回すと、扉が開いた。それにしても自作でこのような物を作るのは大したものだった。
中には予想通りカモネギがいた。カモネギは驚いて思わず立ち上がった。
「あのさっ、ちょっといい策かもしれないけどいいかな？」
「時間がない。チコと一緒早く行け！」
さっきの助けてくれる探検隊だといち早く察したカモネギは、自分が使える技に関してなにか喋ろうとする。しかしエムにとって、呑気に立ち話をしている時間はなかった。
「だからさ……」
カモネギが必死に説明してる間に、敵が来てしまった。やはり予想通り、テッカニンだけではなかった。体の所々に炎を宿す猿型のポケモン、ゴウカザルもいた。
「来たか……。チコ、今だ！」
エムはそう言った瞬間、銀の針をテッカニンとゴウカザルに向けて投げつける。それで二匹が避けた間に、カモネギを連れたチコは間をくぐり抜けて行った。
「ちっ。ガキが、逃げれると思うなよ！　そっちの黄色いガキは頼んだぞ。くそっ、要求書も書いてないのに、もう取り返しに来たか」
テッカニンはチコを追おうと追いかけていく。やはり思ったより早く止められない。相性的に大きく不利で危険だ。しかし、この前

はそんな状況の中で強敵相手にパーフェクトにやってくれた。エムは必ずあのテッカニンに勝ってくれると信じている。勝てない相手ではないとも感じたからだ。

一方ゴウカザルは追う様子がない。というより、何かに感づいて止まったように見える。どうやらゴウカザルはテッカニンと組んでいるようだ。テッカニンとはチームメイト同士だったのだ。共に悪事を繰り返してきた。

「さて、俺の相手はお前、ということか」

エムは早くも身構える。

「ガキが。くだらん小細工をしやがって」

ゴウカザルが初めて口を開いてきた。エムを威圧してくる。エムはしかし余裕綽々に返すこともない。気付いていた、この相手は手強いということに。

その一方で、チコはある程度逃げたらすぐに足を止めた。テッカニンはすぐに追いついてきて、逃げられそうにもない。

「来たね」

後ろを振り向いてチコはそう言う。少しばかり余裕が見られる。これには理由があった。

「ようお嬢ちゃん。手加減はしないぜぇ。さぁそのおぼっちゃんは返してもらおうか」

「それはできないよ」

テッカニンの発言を聞いて、チコは少し笑って言った。テッカニンがその表情を見て少し首をかしげた。次の瞬間、カモネギが消え去った。そう、カモネギは身代わりを使っていたのだ。チコが連れていたカモネギは偽物。

「こういうことだから。残念だったね」

「ハ、ハメやがったなぁ……！　しかしお前はボコボコにしてやる！　覚悟しろ！」

テッカニンは影分身で惑わせる戦法を使ってきた。まさかと思い、チコは横を向いた。しかしテッカニンはどこにもいない。まさしく正面だった。

「っ！　違った……」

「バカめ！　同じようなことする奴がいるか？」

チコは同じようなシザークロスを正面から受けてしまう。しかし踏み止まり、すぐに葉を振ってブーメラン式の葉っぱカッターを放つ。それが絶大に働き、背後に回った影分身までも倒していく。

そしてブーメラン式で、戻ってくるのがテッカニンには予測できなかったのか、偶然にも、本体にも当たった。

「っ、しまっ……」

動きの止まる本体のテッカニンがチコには見えた。たったの一撃、それも抵抗力のあるタイプで。これは耐久性が全くないからだとチコは悟った。そして、柔いであろうテッカニンには早期で決着を付けれる、と決断し、チコはここであの技を使うことを決心した。

「覚悟っ！」

最強の草タイプの技であるハードプラント。大量の木々を横一杯に生み出して、テッカニンに向けて叩きつける。テッカニンは木の波に巻き込まれ、断末魔の叫び声だけが聞こえてきた。

木の波が途切れると、害虫のように、テッカニンは地面へと崩れ落ちた。一方で、チコも激しく体力を消耗してしまった。

「勝った……。でもやっぱりこの技は、体が……」

前回ほどより少し慣れたか、倒れるほどではなかったが、この大技の反動ではやはり息苦しくなる。しかし何にせよ、チコは不利な戦いにも勝った。

・

・

「近くに隠れている奴を素直に引き渡せ。そうしたらいくらか金を分けてやる」

「そんな見え見えの嘘には乗らない」

「嘘じゃない。だったら今のうちに払ってもいいんだ」
「金の問題じゃない。仮に本当だったとしてもお断りだ」
本物のカモネギが近くに隠れていることを、ゴウカザルは見抜いていた。エムはこのゴウカザルを信用しようとは絶対しない。
それに、お金の為に悪事に加担するなど言語同断だった。チームとしても自分としても、築いた物が台無しだ。ポケモンとして、または人間として、やってはいけないことがある。
彼はゴウカザルと交えるつもりだ。生半可な攻撃は通じそうにない。慎重に戦うしかない。
「……お前は何か勘違いをしている。正義感があるのはいいが、残念ながらお前は俺には絶対に勝てない」
ゴウカザルはそう宣言してから格闘体勢に入り、真っ直ぐ突っ込んできた。インファイトと呼ばれる技のようだ。素早いスピードで強いパンチ。間一髪で避けた後、すぐにもう片方の拳が飛んでくる。しばらく避け続けたはいいが、とうとう九発目で胴体を捉えられる。力強いインファイトを受けて声を出す間もなくエムは壁にまで叩きつけられた。
「こういうことだ。まだまだ行くぞ。お前が降参を認めるまでな」
間髪なく次のインファイトを繰り出してくるゴウカザル。短期決戦のつもりだ。痛みに耐えてすぐに立ち上がりゴウカザルを見るエム。さっきの攻撃を見て何か隙はないか考えていた。
一発目は正面からくる。二発目はよけた方から来る。三発目から動きを読まれるのだ。反射的な行動が分かっている。ならば、意識してよけなければならない。
ゴウカザルはほぼ同じように拳を前に突き出してきた。三発目は動きを見てくる。なので二発目を出してきた時が勝負。
エムが思った通り、ゴウカザルは二発目をかわしたのを見るや、次の行動を予測した。刹那、エムは手に電気を込めてゴウカザルの懐へ突っ込んだ。雷パンチ。ゴウカザルの腕をすり抜け、逆にエムの方がゴウカザルを殴った。

ゴウカザルは驚いて少し身を引くことにより、技の威力を軽減した。たったの一回で読まれたことが彼には驚きだった。

（奴のペースを崩した……行ける）

一撃を浴びさせたことにより流れに乗れる、エムは今の一手を終えてそう思った。

「ほう。思ったよりやるな」

ガキは得意気になってるがそれもそこまでだ。ゴウカザルはそう思ってもう一度突っ込んできた。今度はインファイトの速度を速めてきた。何発も同じようなパンチをしてきて、エムは攻撃する余地が見えない。しかし、ゴウカザルの動きが少し鈍ったように見えた。そこを突こうとする。しかしゴウカザルは見えないほど素早いパンチを反撃を狙うエムに直撃させた。右手を一瞬にして正面に突き出す。インファイトからマッハパンチに切り替えたのだ。

「ぐっ……」

「どうした？　ただのマッハパンチだ。こんなのでくたばるのか？」

意外な攻撃にひるんだエムをゴウカザルは見下すように言う。彼は言葉を続ける。

「だから勝てないと言っただろう。お前は、大抵の奴が沈むこの方法を見切ってきた。しかし、そこで反撃されようが、反撃されるかもしれないと察した時に、マッハパンチといった最速技を出して、反撃される前にやる。つまり、所詮お前が俺の戦法を読もうが、常にその上を行く戦法が用意され、勝つことは不可能ということだ。分かったよな？　降参しろ」

「くっ……お断りだ！」

エムは疲れが見える表情とは裏腹に、強気な態度を変えない。彼が降参要求に屈しないと、ゴウカザルはまた襲ってきた。二発の攻撃で、動きが鈍ってきたエムにもはやかわす余地はなく、一発目で喰らった。

（こっちも疲れが出てきた……。回避する体力がなくなっている……。そして、コイツは追いつかれたら次の手を。また追いつかれた

らまた次の手を。そんな手段を取っている。奴は無防備だが、やられる前にやるという方法だから大丈夫だと思っているのか……。何か一撃でも喰らわせてやる方法は……）

壁をも突き破りそうな拳の攻撃を受け続けているエム。何とか立ち上がるが、立っているのがやっとだ。

そんな中でも最善手を見つけようと考えを巡らせていく。しかしそれを妨害するかのようにゴウカザルは説得を続けてくる。

「この通り、実力差は歴然だ。確かにお前は弱くない。しかし俺を下回っている。だがお前はこんなに若い。今後ともチャンスはいくらでもあるだろう。ここでたかだがポケモン一匹渡した所で、何の問題もない。無意味な諦めないというプライド、誘拐は許さないという正義感は無駄だと思わないか？」

「お断りと言ったらお断りだ……！　理由は簡単……。どんな手を使ってでも平気で金儲けするような、金の亡者のお前らが腹立つからだ！」

ゴウカザルの説得にもまだ屈せず、エムはそう言い切って今度は、荒くなる息をおさえて彼からゴウカザルに突っ込んでいった。今回はあまりに理由が直球だった。彼も正直、金銭を求めているのだから。そして、無事でいる、つまり何があろうと負けないとチコと約束した。だから負けられないのもある。

後少し。そう考えて、手、尻尾、使いこなしてゴウカザルに攻撃を仕掛ける。しかしゴウカザルは完全に読んでいて、雷パンチで捉えようとした所で手をはたき落とされ、ストレート一本で突き飛ばされた。

「後悔するんだな。お前は獲得資金ゼロ。意地張った結果がこうだったのだからな」　すぐにその後に十万ボルトで仕掛けても簡単に避けられて全く当たらず、出している隙にまたインファイトの鋭いストレートを喰らってしまう。もう体力も限界だった。エムは脇腹を抱えながら立ち上がり、じっとゴウカザルを見る。自分から攻め

ていく手段もゴウカザルには通じていなかった。
　テッカニンとこのゴウカザルでは実力の差が歴然としているのは、小さな雑用はテッカニンがやって、戦闘などはゴウカザルがやっているからだ。

57話　秘密

その時だった。ゴウカザルは体に違和感を感じていた。痺れて動きか取れなくなってきたのだ。

「なんだっ、体が……」

「静電気だ。無謀に突進してきた時、無我夢中になっただけかと思った？」

エムは戦闘を進めるうちにこの戦法を考えていた。体が持つ静電気を利用し、相手が触れた時に電気を移して麻痺させる。

「面倒なガキだ……しかし、それも想定済みでなっ！」

ゴウカザルはいやしの種を小さなサイドパックから取り出して食べ始める。体の痺れを抜くつもりだ。だがこの間無防備。その間にエムは銀の針を握って静電気を移し、電荷を高め、ゴウカザルに向けて投げつけた。

間一髪でゴウカザルはかわしたが、ゴウカザルは抜けていくはずの痺れがまた来るのを感じた。

「んなっ……何が起こった！？」

体に残りかけの麻痺させた電気と、針に移された電気が触れ合い、再びゴウカザルの体を麻痺させた。状態異常を治す道具は今使ってしまった。麻痺を時間経過で治るのを待つしかなかった。

「はっ……？」

ゴウカザルがふとエムの方を見ると、全身に目に見えるような激しい電気を帯びた状態になっていた。

「お前はインファイトの連発で、打たれ弱くなっている。今から身を堅められるもんならやってみな！」

そう言ってエムは麻痺したゴウカザルに向かって全速力で走り出す。電気系の技でも最強クラスのボルテッカー。大きな電流が流れている。巨大な電気の球のようなものに包まれた状態だ。

「分かった分かった！　降参する！　降参っ！　降参ーっ！」

その様子に恐怖を覚えたゴウカザルは、見苦しくも降参しようとする。しかし、今ら遅く、正面からボルテッカーを受けた。

「ぐはあっ……！」

インファイトの連発により防御力が弱っていたゴウカザルは、威力に耐えきれずに木にまで吹き飛ばされ、叩きつけられた。更にはその木が折れて、ゴウカザルが木の下敷きになってしまった。

「さすがにやったか……。おい、もう大丈夫だから出てきていいぞ」

エムはカモネギに呼びかける。カモネギは恐る恐る出てきた。カモネギは戦いなんて怖くて見てもいられず、ただただどうなるかを待っていただけだった。

ゴウカザルを捕まえる為に木から出さないといけないことは少し面倒だった。わざわざあんなのの為に、と思うと。

木に潰されて寝込んでいるゴウカザルを引っ張り出そうと木を起こそうとするが木が重くて起きない。ため息をついて、もうこのまま放置しようかと思うぐらいだった。

「うぐ……お前は俺より格下なはず……。なのに何故？」

木の下敷きになっている中でゴウカザルは聞いてきた。

「負けた理由が分からないか？　お前は単なる作戦負けだ」

「それで不可能を可能にする……と？」

エムが答えると、ゴウカザルはまた聞いた。

「不可能なんてものは存在しない。それと同時に、絶対に勝てない相手というものも存在しない」

と、エムが言うと、木を、電光石火で強引に力押しでどかした。技の威力でなら何とかなってくれたようだ。

ゴウカザルのような、誰にも負けていない強さを持つ敵と対峙しても、エムコルスは勝った。純粋な強さよりも、彼の機転の利く戦い方が一枚上手だったということだ。

エムはカモネギと、縛ったゴウカザルを連れてチコの所へと向かうが、決着がついてから随分と時間が経っていたようだ。

結局カモネギを連れ戻すことに成功したエレンシア。保安官のジバコイルに突き出して、ギルドへと戻った。

・
・
・

「ありがとうございます。色々あったようですが無事で良かったです」

「強くて頼りになったものさ！　やっぱり強いって大事なんだね」

依頼人のムクバード、そして保護されたカモネギは言った。

「そうだな。……って、強くなれる暇のある身分なのか？」

「世の中にはお嬢様の身分でとても強いポケモンがいなさるそうです。世は広いのです」

エムは疑問に思うとムクバードはそう答えた。なんとなくながらも納得して頷いた。

約束通りの、依頼の報酬金をもらうが、やはり9割は取られてしまう。実に、ある意味もったいない。しかし問題はなかった。高額のお尋ね者の賞金も同時にもらえることとなったからだ。

あのテッカニンとゴウカザルは★9ランクに位置付けされていたのだ。チコがあっさり倒したように、テッカニンはそこまででもないが、ゴウカザルが手強く、今まで全て挑んだ実力ある探検隊も含めて全て返り討ちにあったという。

「イツモゴ・メ・ン・ナ・サ・イ・ネ。マタシテモ、大活躍デスネ。助カリマス」

ジバコイルは謝る部分をなぜか強調して言った。

「たまたま出くわしただけだからな」

「そうだね。助ける相手が相手だったからかな」

今回はお尋ね者を捕まえるという目的は特になかった。棚からぼた餅のような物かもしれない。棚の上から落ちてきた瓦をよけて叩き割ったら中からぼた餅が出てきた、と言った方が正確だった。

今日だけで１２５００ポケを手に入れたエレンシア。買うだけ十分な資金は集まった。カクレオンの店は閉店間際だったが、まだ間

に合った。夜になり、誰もいなくなった頃である。買っておかないと気が済まないと思ったからである。

「これ、買えるか！？」

「えっ…はい、買えますよ！　買うんですか？」

「ああ」

エムはエンブレムを指差した。カクレオンは本当にに７００００ポケの商品を取引することに驚いた。７００００ポケ。これだけでも価値は高いと言える。しかし、それを超える価値のある宝があるかもしれない。だから、惜しくはないのだ。

「値段ちょうど、よし。ありがとうございましたー！」

カクレオンが見送る先には高額商品を持ったエムがいた。とうとう、チームはエンブレムを手に入れたのだ。残りは、あのくぼみにはめ込むだけである。

「ワクワクするね。どんな宝があるのかな？」

チコは純粋に楽しみにしていた。遺跡の欠片を見ていたかのようにエンブレムを見つめる。いつも以上の苦労を乗り越えたからこそ、価値が出ると思っていた。

「鍵じゃダメって所がミソだな……相当大事な物なのだろうか？じゃあ何故隠した奴はわざわざ手放したのか？　誰かの遺産だったからだろうか？」

エムはまだ疑問に思っていた。やはり価値がある物が眠るとは考えるが、少しだけ引っかかる物があった。世を去った誰かの宝物、もしくは道具を、触れられない遺産として古き時代の誰かが封印したのだとすれば、価値は相当な物になるだろう。しかし、果たしてそれはエンブレムをはめて簡単に見つかるのかも疑問だった。

そして、遺産とは、このエレンシアというチーム名の意味でもある。世を去る時には何かを残す。特にエムコルスに関して、体現化されたチーム名となった。まさにその時は。

「ま、全ては明日分かるよな。だから明日も一緒に頑張ろう、な？

……って、寝てる！？」

どう考えてもチコに対して、らしからぬ甘い言葉をかけたエムだが、既にチコは疲れ果てたのか眠っていた。それも、すぐ隣で。

ずっと夜まで活動をしていた上に、まだ使い慣れないハードプラントも使用していて、さすがに疲れるのも必然だった。それより彼にとって問題なのは、チコが隣で寝始めてしまったことだ。

「つ、疲れてたのか……。うっ、……な、なんかダメだ！」

エムは、おだやかな寝顔を見るなり、頬を赤く染めて、著しい動揺をしながらチコから後ろ歩きで離れた。エムは、チコが自分のすぐそばで寝られると緊張してしまうことは以前からあった。このことと、一般的に言われることを照らし合わせると……

「いや、違う！」

……彼が口から言うことによれば、これはそうではないらしい。寝たのはそれから数十分後だった。

そして翌日。海のように澄んだ青空が空一杯に広がる、完璧な晴天に恵まれてくれた。しかし満喫している暇はなかった。早起きして、エンブレムを持って再びあの荒野へと行った。あれから誰も来た形跡はない。結局エムとチコ以外は来ていないようだ。ならば、宝は取られてもいないということだ。

そしてまたやって来た。不思議のダンジョンで地形は変わっても、場所はあまり変わらない。また、あのエンブレムをはめるくぼみがあった。今度こそ、と近付いた。

「よし、一致だ」

「早速やってみて！」

「ああ、やるぞ」

エンブレムとくぼみは大きさも厚さも合っていた。エムはゆっくりとエンブレムをはめ込む。ちょうどよく収まったエンブレムははまった瞬間にカチリと音を立てた。そして、ゆっくり扉が開いていく。

エンブレムをはめ込む。それで正解だった。そして遂に扉が開く。
数日間の間だけれども長く感じた。何ヶ月も待ち望んでいたかのようだ。だから、扉が上へと開いていくのを見る時も、普段より時間の流れが遅く感じた。やがて、中が開けた。そして次の瞬間、エムもチコも目を丸くした。
「なにっ……！？」
「こ、これは一体！？」
そこには、ある思いもよらぬものが眠っていたのだった。

58話　真相

そこには二つのものがあった。一つは金色に輝く仮面。古代において、皇帝が被っていたとされる。その仮面姿にポケモン達は魅了させられ、多くの支持を集めたという。

それより気になる物があった。そのもう一つは、物というよりむしろ者。鍵のかかった部屋の中で、ポッチャマが眠っていた。少し以前より行方不明になり、姿を見せていなかった。ずっとこの中で眠らされていたからだ。

「おい、お前一体何してんだ？」

エムはポッチャマの体を揺さぶって、起こそうとする。しかし、反応がない。ポッチャマは静かで、呑気に寝ているようには寝ていない。

エムが喋った直後に不協和音が鳴り始めた。気味の悪い誰かの歌声まで聞こえてくる。天井までが狭いために共鳴し、聞いてられないほどゾッとする。取り憑かれたかのような歌が止んだのは数十秒後だった。

「今のはなんだ……？」

「歌……？」

この寝ているポッチャマ、謎の歌。ただの宝が入った場所ではないと、エムは確信した。そして思い浮かんでくるのはひとつの考えだった。これらのことが自然に組み込まれたとは思えない。

そして、ポッチャマはその後うなされながら目を開けた。しかし、彼は突然形相を変えた。姿を見るや襲いかかってきた。至近距離での体当たりを間一髪で避けると、隙だらけに背中を見せている所に雷パンチを叩き込み、直撃したら直後に尻尾でアイアンテールをぶつけて突き飛ばした。

「一体どういうつもりだ？　もっとやられたいのか。抵抗しようってのか……」

エムはこれで終わらせようとしない。上に乗っかかって耳元で言い、まるで普段のようにボコボコとポッチャマ殴りつけ続けた。
「痛い痛い痛い痛いっ！　なんなのだなんなのだ、やめてほしいのだー！」
ポッチャマは殴られている途中で正気を取り戻して、いつものように叫び始めた。やれやれ、と感じつつエムはポッチャマから離れた。
「はっ……エムコルス君!?　や、やったのだ……。怖かったのだ！　助かったのだ！」
ポッチャマが見上げてみると、そこには見覚えのある表情をしたピカチュウがいた。エムコルスに違いないと思って、そして助けてくれたのだと歓喜し、胸に飛び込んできた。
「やめろ、気持ち悪い」
「いたっ！　はは……もうお約束だけど懐かしいのだ……。しかもこれだとフィールド・オブ・ストーンとかいう古代の人間にもバカにされるのだ……」
エムは瓦を割るように頭上に手を振り下ろしてポッチャマを叩き付けた。
「やっぱり、このチームの甘いにおいはいいのだ、いつにも増して……」
「ポッチャマ！　ちょっと黙ってて！」
チコが発する甘い香りに関してポッチャマが喋ると、チコは強い口調で言って止めさせた。
それにしても、一体何が起きていたのか。ポッチャマにこれといった傷跡はないが、間違いなく同一人物。何故こんな所で閉じ込められていたのか。エムはウロウロとポッチャマの周りを歩いて、観察する。
「で、お前は何があったか覚えてるのか？」
「覚えてるのだ！　普通に探検していたら、突然誰かに……」
「ふっ、やはりそういうことか。お前にしては珍しく役に立ったな」

「や、やはりってどういうことなのだ？」

エムは壁際に寄り、引き締めた顔で壁に手で触れていく。誰かが来た、それが確かなものとなったような感覚だ。自分達以外、誰もいなかったはずの場所に、神経に障るような捻れた気配。

しかし姿を見せようとはしてこない。出てこい、と念じるように思った時、久しぶりに頭痛が襲ってきた。彼の持つ特別な能力、時空の叫び――

能力により彼が見た過去、もしくは未来の中には、空中に浮かぶ、シルエット状になったポケモンが、仕掛けを施していく姿が見えていた。そして、今、彼が触れた壁の中に入っていくのも。

仕掛けは外した。つまり過去を見た。その後壁に入っていった。立てた仮説が、頭の中で真実へと変化をしていくのを感じた。

目を見開いた直後、エムは壁の中へ電気を放電させて、伝わらせていく。しかし気配は背後へと移った。当たってないようだ。視線を後ろへとやる。

そこにいたのは、ゴーストタイプのポケモン、ムウマージ。魔法を使うという話も聞き、その通りに頭には帽子のようなものがある。エムとチコに囲まれる格好になっているにも関わらず、余裕の笑みを浮かべている。

「こ、こいつなのだ！　僕はこいつにやられたのだ！」

「あのポケモンに？」

「そう、そうなのだ！」

ポッチャマは叫んでなおかつ指差しつつも、恐れたのかチコの後ろに隠れていた。

「フフ、何の用かしら？」

「分かったんだよ。向こうの奴も言っている通り、お前が犯人だということが」

ムウマージは何も答えなかったが、しかし「それで？」と言いたげな視線を注ぎ続けていた。考えを読みたかったが無駄とすぐに気

付き、エムは、部屋の中に入っていた黄金の仮面をムウマージへと投げつけた。

仮面はひゅんと飛んで行くが、ぶつけて攻撃するためではなかったので、速度もなく、ムウマージは軽く避ける。からんと音を立てて仮面は地面に落ちた。

「まぁよくも手の込んだことをしてくれたもんだ、無駄にな」

エムに「自分所有」の道具を粗末に投げられても、ムウマージはまだ薄ら笑いを浮かべている。要するに、エムはこれらはほとんどがムウマージの仕業だと決めたということ。

具体的にはこうなる。ポッチャマはずいぶんと前から姿を見せなくなった。その間に、このような仕込みを行うことは可能とだった。さっきの歌も、中で喋った途端に流れてきた。天井が狭く共鳴しやすいがために、共鳴すると流れるような仕組みにしたのだろう。あのような歌を歌うには、あのムウマージにとっては容易いことだろう。その仕組みを作った彼女は、ポッチャマを眠らせてここまで持ってきた。更には、あの小瓶も、ムウマージの仕業だろう。そもそも、あのように宝のメモの入った小瓶が海で流れてくること自体が奇妙だったのだ。あの海岸によく訪れる探検隊など、エレンシアしかいない。

鍵をエンブレムにしたのは、開けれるような状況を作り出せる探検隊を絞るためだろう。そうなると、あのエンブレムを店に流通させたのも、ムウマージ。しかしさすがに資金稼ぎにまで、絡んではいないだろう。

「で、目的は俺達を抹殺すること、そうだな？」

エムがそう言った後およそ１０秒間、沈黙が続いた。

「参ったわねえ、正解よ、坊や。……いや、エムコルス」

ムウマージは名前を知っていた。それはすなわち、やはりこの女はあの組織（闇の創世者）の者だということを意味していた。

（コイツ、組織の奴だったのか。しかし、それにしては違和感が……）

エムが考える通り、少し変だった。さっきから目線がエムの方にしか向いていない。まるでチコやポッチャマのことに気づいていない。

（後ろが丸見え……これは罠？　誘われてる？　下手に手を出したら……）

チコは、この状況で攻撃するかしないかで悩んでいた。もしかしたら隙を見せているつもりなのかもしれない。一方で、もう勝つと思っているのかもしれない。相手はあの組織だ。背後からといっても、余裕ある状況で迂闊に手は出せない。

「エムコルス、あなたはもう忘れてるでしょう？　この場所のこと……」

「は？　なんのことだ」

「そりゃそうだわよね、都合悪いことの記憶をなくしてのうのうと生きてるんだもの」

ムウマージの表情が恨ましそうに変わってきた。エムは最初はどういうことか理解ができなかった。しかし、記憶のことを言われてすぐに、分かってきた。

まさかムウマージは、組織の者ではなくて、未来世界の者だったというのか。しかし、そんなはずはなかった。だとしたら今頃消えていなくなっているはずだからだ。あくまで、未来にいた自分が今生きているのは、特別な褒美のようなものでしかないからだ。

そうなると、ムウマージの言っていることは動揺させる為でしかないという結論になる。

「……騙されねえぞ。動揺させようと思ったって無駄だ」

「じゃあこの場所を選ぶ理由がないじゃないの。私は新しい神様の力により以前よりこの時代で生き続けた。あの時代で私の最愛の彼を奪ったあなたとそのお供……。それも、この地で。忘れてればなんでも許されるとでも思ってんの！？」

「……」

ムウマージは発狂したように叫んだ。彼女が浮かべる記憶。泣き

叫び、絶望した記憶。彼女が認識するエムコルスとは、まさに悪魔のような存在だった。現場は見ていないが、彼女と付き合っていたポケモンの死体から去って行く人間の姿が見えたのを覚えている。まさにこの荒野での出来事だった。そして、その死んだ彼が残したメモ帳から、エムコルスという人間と、ジュプトルというポケモンがやったと確信したのだ。

抜け殻のように生きてから年月が経ち、結局歴史は変えられた。しかし、自分はなぜか生きていた。その時現れたのかダークライ。そして自分自身の過去の出来事を知っていた。その時ダークライは、自分だけは消えないようにしたと言った。

そして分かったことがあった。恋人を殺した男が、ポケモンと化し、記憶を失いながら生きていると。その時、ムウマージには復讐心が芽生えた。クズで最低の生き物だとダークライが言い続け、なおかつ自分もそう思ってきた人間を、絶対に許しはしない、と。

組織に入ってから、手に入れた黄金の仮面で組織に部下を勧誘しつつ、計画の準備を進めていた。今日が実行の時だった。

いざ見てみると、ついにこの時が来たと思って最初は興奮が止まらなかった。しかし、徐々に憎しみが湧き、獣のような発狂をしたくなってしまう。

「今はもう消えてしまったであろう世界……。もう全員消えてしまった。そう、どちらにしろ、あなた達に殺されたのよ。同時に、歴史を変えて大量の命を消し去った原因の連中も消えていった……。なのに……なのに、何故あなただけ生きてるというの!?」

目の前で親か誰かを殺された者のような目をして、気が狂ったような声で問いかけてきた。

「あいにく、歴史を変えたことで多くの命が消えたことはちゃんと理解している……。だが、勝ったのは俺達なんだよ、諦めろ。そして、倒されろ!」

エムは、知らないことは何も言い返せない。そしてムウマージか自分を殺すつもりならそれを防衛しなければならない。今死ぬつも

りはない。
　コイツはただズレた思考を正当化したいだけだ。騙されちゃいけない。同情の余地などどこにもない――そう言い聞かせて、今にも緩められそうな戦いへの集中にかける気を締め続けた。

　ムウマージにとって、頭の中の憎しみを語るのは、こうして本人に言い聞かせることの目的以外にも、時間稼ぎの目的でもあった。
　しかし、こうして話すと、ますますあのエムコルスの、反省する態度のなさが気に障ってくる。そんな偽善者が、どこかで平和をもたらした探検隊のリーダーだとか言われていることがおかしいと思った。
　金だとかくだらないもので翻弄させるのは楽しかったし、仲間を行方不明にして、戸惑わせたのは正解だった。その数十倍は苦しい思いをしたのだが。この計画の真意はその２つだった。
　しかしまだ全く許せない……。だがどちらにせよ、残り４０秒で滅びて死んでいくのだから関係ないと、ムウマージは思っていた。あの部屋に仕込んだ歌、あれは滅びの歌。自分の歌を聞いた者は全て滅び、やがて死んでいく。

58話　真相（後書き）

説明不足の分は、いずれ外伝で語られます。
そして、ムウマージの恋人というのは実は既に外伝の作中に出ています。

59話　関わり

「さぁエムコルス、かかってきなさいよ」
　ムウマージはエムを殺す気でありながら、自分から攻撃してくる気配がない。エムは近寄った所を攻撃してくる意図と見て取った。
　そんなことができないぐらい素早く行動してやると意気込んで、エムはムウマージの側面に回り込んだ。体の重心を前に置いてから、尻尾でのサマーソルト。出の早い一撃は、ムウマージに避ける間も与えなかった。しかし、ムウマージは目の前に見えない壁を貼って、身を守った。サマーソルトは壁に弾かれた。
　同時にその背後から至近距離に近づいて、正確な草の攻撃ができるマジカルリーフでムウマージに攻撃したチコも、その壁に阻まれた。
「まもる……か。そんなことはしても意味はないってことぐらいは理解しろよ」
　メリットがないように見える、ムウマージの守るに疑問を持つエム。ムウマージは、無意味な行動で精神的に優位に立つつもりなのだろうと考えた。
　その一方で、ムウマージは
「……出足を見ただけよ」
　と言ったが、
（さすが元人間。バカなのねぇ。後４０秒で滅びると言うのに。３５秒…３５秒で勝ちを宣言しよう……かしら）
　内心ではそう考えていた。そして、相も変わらずチコとポッチャマには無関心だった。
「じゃあどんどん行かせてもらう」
　エムの方は、滅びの歌に気付きもせずに攻め続ける。ムウマージは攻めてこずに守りに徹している。エムはさすがにこの押し気味な状況には違和感を感じた。エムとチコの波状攻撃でも当たらない。

ムウマージは、自身の力にはあまり自信がなかった。力押しでは勝てるとは思っていない。だから、こういった戦略で勝つ。――残り１０秒、じゃあ一度遠ざけたら後はおしまいだと思い、双方向へと向けてシャドーボールを放つ。エムもチコも上へと飛び上がって避ける。それを利用し、たたみかけるようにエムは勝負を決めてやろうと、体を電気で囲むようにして、上方向からムウマージにボルテッカーを仕掛けた。

しまった、とムウマージは感じた。しかし、手遅れなのは逆にあっちの方、もう滅びる時間だからだ。

しかし、勝った時間だとムウマージが思ったその時、体には激しい電気が回っていた。気付けば、自分は地面に倒れ込み、目前には何事もなかったように立つ、エムコルスがいた。

（どういうことよ……。滅びの歌は効いたはずなのに……）

ムウマージは動揺した目でエムの方を見ていた。

「くっ……何故立っているのよ……！」

「ああ、何故倒れないかって？　まさか気付いてなかったのか？　なぁ、チコ？」

まるで拍子抜けしたよう。ムウマージの敗因は、「エムコルス」という者だけにしかこだわらなかったことだった。

「うん。種明かしはアロマセラピー。この技だけの特殊な香りは、あらゆる状態異常だけでなく、様々なゴースト系の呪いも打ち消すのよ」

「こっ、この、ガキが……」

どうせただの部下に過ぎないだろうと思っていたのが仇となった、と感じた。

エムは最初から、どんな体にかかる異常も、全てチコが解除してくれると分かっていた。

しかしながら、ムウマージは気付かなかったものの、ヒントはあった。

ポッチャマがいいにおいがすると言っていた。これだけだと、単にチコからは芳香が漂うのだと思うだけにしかならないが、更にその後、発言をチコ自身が止めさせた。このことから、あの仕込んだ滅びの歌を使った後に、チコがアロマセラピーを使っていたと伺えたのだ。

「お前達は結局は俺達と激しく相反する存在だ。お前の価値観を受け入れることはできない」

ムウマージに向けてエムが改めて言った。

「……この世界で犯罪を犯したポケモンと、警察や探検隊も相反するでしょ？　それと同じなのよ……。歴史を変えるなんて、重罪だったじゃない。でも、なぜかあなたは裁かれていない。だから裁かれなきゃならない……！　大きな過ちを犯した生き物は死ななければならないのよ。

ふふ……次会った時は覚えてなさい……！」

ムウマージは意味深長な言葉を涙ぐみながら呟き続け、その場から消え去っていった。今この場でエムを殺すことは諦めたということになる。

「な、何が言いたかったんだコイツは……」

良く考えれば、少し震えるような話だ。未来世界にいた全てのポケモンから怨まれている、ということになる。話には真実味があるし、エムは自分がやってきたことに罪悪感がないわけではない。ただ今は、動揺しない為に心情的に取り繕ったに過ぎない。ヨノワールを始めとする連中からすれば、自分達でやってきたことは、ある意味、大量殺人よりも悪質だったに違いない。

しかし、未来の時が平和になるということで、正義として正当化してきたのだ。いや、正当化ではなく、それが正しかったはずなのだ。世の中の時の流れを継続させることが、立派な悪だと言えるのか？

そうなると、何故今更主張してくるのかが分からない。もっと早

く復讐に来れば良いのに、とエムは感じた。
その時、少しはっとした。要するにこういうことだ。ムウマージは心理戦を仕掛けていたに過ぎない。善悪がどうこうと主張するためのはずはない。それならば、もっと前から姿を見せているはずなのだ。結局は、自分のことしか考えていなかったのだ。殺せさえすれば満足だったのだ。
話は真実なのだろうが、結局は、死刑にされたポケモンの恋人が、死刑執行人を憎むのと同じなのだったのだろう。（しかし、この世界の今の時代に死刑制度は存在しない）未来世界の消えたポケモン達に償えだとか、思ってはいないのだろう。
「エム、気にしちゃダメだよ？」
チコが、心配そうに声をかける。彼が深く考え込む表情の時は、誰にも理解できないようなことを考えている。
「分かってるさ、結局雑魚だったろ？　あの程度の奴に諭されちゃやってられないな」
明るめな表情に変えて、彼は言った。
もう別に気にすることじゃないだろう――自分が誰かを殺したという、記憶にない事実。その他にも感じる何かのおかしさ。エムはそれらの引っかかりを心から振り払い、とにかく今は、精一杯生きていこうと考える。
「やったのだ！　これが黄金の仮面なのだー！」
そんな中、空気も読まずに、財宝にはしゃぐポッチャマがいた。それもそのはず、あの有名な、古代から伝わる本物の黄金の仮面を手に取っているのだから。
仮面を持って上に持ち上げたと思えば、今度は顔に被った。やたら怖そうな雰囲気になったが、はしゃいでいるので台無しだ。
「おい、ポッチャマ。誰のせいでこんな所にいるのかは、分かるよな？」
「へ、へっ？　な、名前で呼ばれた……エムコルス君に……！　は、ははは……」

まともに名前で呼ばれたことがないポッチャマは、とても驚いていた。ちょっとした感動を感じた。認められた!?　と考えた。

「し、心配かけてごめんなさいなのだ……」

しかし、エムと目が合って、やっぱり何だかいつも通りにヤバいと思ったポッチャマは、仮面を外しながら愛想笑いでごまかそうとする。

「俺は一つも心配なんかしなかったが、心配してたのはチコだ」

「えっ、ああ、そりゃそうなのだ！　エムコルス君が他人の心配なんかするはずが……。あ」

ポッチャマが口を滑らせてしまった。早速と、逃げる姿勢に入った。

「こんなんだからだよ……。まぁいい。その口を聞けないようにすればいいんだからな！　逃げずに待ちやがれっ！」

「わーっ！　本当にごめんなさいなのだー！」

逃げていくポッチャマをエムは追って行った。良くみた光景である。

「……ま、こんなことやってる内は大丈夫かな」

取り残されたチコは呟いた。あまり持って帰りたくはなかったが、ポッチャマが持ったので、黄金の仮面を手に入れたこととなる。

エムに恨みを持つポケモンの存在。それは、未来との関わり、事件との関わりが未だに断ち切られていないことを示した。

60話　チャームズ・エンジェル

ギルドの前に立つ、三匹組の探検隊がいた。
一匹は茶色の体で、耳も長い、ウサギのような姿をしたポケモン。一匹は黄緑と白の、胸背にピンク色の部分を持つポケモン。一匹は上半身が白で下半身がピンク、そして、第六感の発達したポケモンだ。いずれも、人型だ。
「何年か前、名を広めるためにわざわざ宝の在処の遺跡で、誰か来るまで石像になりすまして待ち伏せ、来たらぬか喜びしてる所を華麗に奪い取る♪　あれは傑作だったね。フフ！　懐かしくてよ♪」
「で、ここの親方に会ったのはすぐ後だったねぇ。あの時死んでるかと思ったからアタイはビックリしたのを覚えてるよ」
「意外と親方になって変わってたらどうしようかしら……プクリン」
「でも私たちは何も変わってなくてよ♪　フフ！　だから思い切って入ってみなくて？」
魅力的な姿のポケモンの集まった、この女性の集団の探検隊達。まるで演劇の俳優のような風格だ。そして、彼女達はギルドへと向かった……。

エレンシアの、ポッチャマが戻ってきてから数日が経つ。最近は、焼き尽くされるような気温となって、蒸し暑い日が続く。太陽が強く当たり、夏と呼ばれる季節になる。また、一部では盆と呼ばれる行事もある。
エレンシアは、いつものように依頼を実行しようと思うと、ギルドの中に誰もいないことに気付く。ちゃんと掲示板に依頼は張り出されているし、特に遠征をするという予定もなかったはずだ。
「どうなってんだ……？」

エムは首を傾げた。
「ねぇエム、下から声が聞こえるよ！」
チコがそう言うので耳を傾けると、確かにガヤガヤと騒いでいるのが聞こえる。どうやら、ギルドにいるポケモンは皆そこにいるようだ。様子をうかがってみようと、久しぶりにもう一階降りてみる。すると、ギルドの弟子達が誰かを囲んでいた。
三匹の見知らぬポケモンがいた。探検隊に違いない。どうやら、そのポケモン達はギルドのポケモン達にかなり歓迎されているようで、サインをねだる者すらいるぐらいだ。ファンのいる探検隊なのだろう。
姿がハッキリと見える位置にまで近付くと、派手なポーズをとってみせたりして、ファンへのサービス精神があるらしい。
「……で、アイツら誰だ？」
「はっ、相変わらずお前は失礼なことを！　あの方々は超有名なトレジャーハンター、チャームズの皆さんだ！　皆さん！」
エムが聞くと、ペラップが躍起になって説明する。
「知らん。興味ない」
「だーっ！」
エムの反応にペラップは思わずずっこけた。
「そんなに凄いんだ……」
「おお、そうだそうだ。特別なチームにしか与えられないというマスターランクの探検隊！　今まで数えきれないほどのお宝を発見しておられるのだ！　しかもただお宝を発見するだけではない！　強く、賢く、美しく！　この三拍子揃った上で華麗にお宝をゲットするその姿は、憧れの的なのだ♪」
ペラップが体で表現して説明する様は奇妙だった。
「ふーん……」
「へぇ、それはまたとても強い探検隊が来たんだね」
エムは相変わらず無関心、に見える。一方でチコは、素直に感心

していた。
「ほら見てみろ。真ん中にいるあの耳の長いゴージャスな方がミミロップ様。その隣のお淑やかな方がサーナイト様。ああ、美しい……。そして最後にチャーレム様。踊るような身のこなしが超かっこいいのだ！　そう、まさに皆、探検隊であると同時に、天使でもあるのだ！」
「ああそう……」
この中で唯一、全く面白くなさそうな顔をしているのがエムだった。
「やあっ！」
部屋から出てきたのはプクリン。チャームズを親しげな目で見ている。
「あっ！　プクリ～ン！　久しぶりねー。全然変わってないわね！　元気だった？」
「ギルドの親方になるなんて凄いじゃん！　アタイびっくり！」
「お久しぶりね、プクリン」
ミミロップ、チャーレム、サーナイトがそれぞれ懐かしの再会をしたように言う。周囲としてはあれっと言いたくなるような会話だ。
「うん。ほんと、久しぶりだね♪　みんな元気だった？」
「三匹とも元気いっぱいよ」
プクリンがチャームズに聞き、サーナイトが答えた。プクリンは、昔から親しいポケモンと会えたことを心から喜んでいた。心なしか、お惚けた感じがない。
「プクリンってさあー、昔は随分とブイブイ言わせてたよねー。今はどうなのさ？」
「あの頃のプクリンは向かう所敵なし！　って感じで、ほんっとカッコよかった～」
「ハハハハハッ♪　それももう昔の話だよ♪　今ではもうみんなには敵わないと思ってるよ」
「いやいや、アタイはアンタの足元にも及ばないかもしれないんだ

よー全く」

チャーレムとプクリンが、お互い楽しそうに過去を振り返ってそれを笑いながら、謙遜しあった。チャーレムがブイブイ言わせてたという、プクリンの過去。

番人に食料を奪われ、腹をすかせて倒れていたプクリンを助けたことがチャームズとプクリンの出会いだ。そのすぐ後の探検で、プクリンはほぼ確信犯にしか見えない演技で、隠し通路の中へと入って行った時から、プクリンをただ者ではないと、チャームズの三匹は認めたのだ。

「あのー親方様。親方様とチャームズのみなさんは、その……どういうご関係で？」

「うん？　えーとね、友達だよ。昔の友達♪」

「そう。私たちとプクリンは一緒に探検してた仲なのよ」

プクリンとミミロップが説明する。ペラップが目を丸くしていた。何せ、自分に会う以前の探検の経歴で教えてくれた中に、チャームズとの関わりはなかったからだ。それよりかなり前の話を、ペラップは聞いたことがある。

探検を終えた後、プクリンが好物とするセカイイチで勧誘し、プクリンはチャームズの仲間となったのだ。

しかししばらくすると、プクリンは「どうしてもやりたいことがある」と言って、チャームズから去っていってしまった。そのやりたいことという物こそが、ギルドの設立だった。

「君達のおかげで友達を作るということがいかにいいか、更に分かったものだよ♪」「で、それで多くの探検隊仲間を作る為の、ギルドかい？」

「うん、おかげで今はみんなが友達さ♪」　チャーレムが目的を聞き、プクリンはそう頷いた。

「ししょーのきっかけもあるけどね」

プクリンのギルド設立の目的のもう一つに、「ししょー」にあたるアーマルドが、ギルドの名を上げてるうちに、その情報を聞き

つけて来てくれないかと期待したのもあった。
「プクリン、そろそろ私たちの今日来た目的を言ってもよくて？」
「うん、言って言って♪」
「じゃあ昔、謎の鍵を見つけたのを覚えてない？」
「うーん、あったかな」
ミミロップは鍵穴を思い出しつつ、手で鍵穴の形を表現する。
「あの鍵が、あたい達が見つけた『番人の洞窟』ってとこの入口の鍵穴にピッタリなんだよ。特徴的だったから忘れもしないよ！」
と、チャーレムが言った。
なんでも、様々な噂が流れるダンジョンとのことだ。財宝が眠るという噂はもちろんのこと、元々防空壕だっただとかいう説もある。また、潜むポケモン達が、古代の戦争から生まれたという学者の主張もあるが、それは憶測にすぎない。
「ごめーん、僕は覚えてないや。あははー」
「ちょっと！　みんなであんなに苦労して見つけた鍵なのに忘れたって言うのかい！？」
プクリンはとぼけた言いぶりだった。チャーレムが昔を思い出しつつ、ツッコむように怒った。
「……さすがプクリン。まるで変わってないわね……。じゃあミミロップ。例の物を」
「分かってるわサーナイト。はい、プクリンの大好物、セカイイチ！」
サーナイトに言われて、ミミロップはバッグからセカイイチを取り出し、プクリンに差し出した。
「わぁー、僕にくれるんだー。最近セカイイチがないもんだから、ありがとうともだちー♪」
プクリンが頭にセカイイチを乗せて踊り出す。ペラップが少し気まずくなった。エレンシアが大金積んだ依頼を成功させてくれたおかげでギルドは黒字だが、だからと言ってセカイイチは増えないのだ。

やがて、チャームズからもらったセカイイチの思い出を振り返っているうちに、プクリンは鍵のことを思い出してきた。
「ああ！　あの鍵だよね。アンノーンの形した。ちょっと待っててね！」
プクリンは部屋の中へと入っていく。
「たあーーーーーーーっ！！」
プクリンがおよそ5秒の間に何をしたのかは分からないが、その鍵がかなり奥にあったのは違いない。
そして、エレンシアならば何度か文字で見たことのある、アンノーン。それが刻まれた鍵をすぐに持って出てきた。
「はい、これ♪」
プクリンがミミロップに鍵を手渡した。
「そう。まさしくこの鍵よ。これで番人の洞窟の入口が開くわ。ありがとう！　どうプクリン？　ひさしぶりに来てみなくて？」
と、ミミロップが言うが、プクリンは鍵を手渡した後は、セカイイチに喜ぶだけで、番人の洞窟には無関心だった。
「相変わらずなこと♪　じゃあ私たちそろそろ行くわね。じゃあね、プクリン」
「またねーともだちー♪」
言葉を残してチャームズが去ろうとする。
（……このイライラはなんだ。目の上になんかつけられたような、この……）
マスターランク――エムはこれが気にかかってしょうがなかった。今は周囲のの探検隊も負けてはいない。それなのに、いきなりこれだ。無意識に、チャームズを睨むように見ていた。
「あ、あのっ！」
エレンシアの目の前を横切った時、チコが引き留めた。
「ん、なぁに？」
「私達も探検に加わっていいですか？」

「……ワ、ワシも！」
「僕もっ！」
「きゃー！　行きたいですわー！」
チコが、行き先に財宝があるというダンジョンの情報を知ったからには、と、ミミロップにあまり抑揚はなく言った。それにつられて、チャームズを尊敬するギルドの弟子も言った。
（そうか……チコ、良く言った。倒せばいいんじゃないか、コイツらを）
エムはそう思うと、このチャームズと戦って打ち負かすことが楽しみになってきた。その時だ。
「ちょっとちょっと、アタイ達が先に見つけたダンジョンなのよ？」
「へぇ、マスターランクとか言う割には、他に探検する奴がいると真っ先に突破することができないんだな」
一緒に探検させてくれという頼みに反対の言葉を主張するチャーレムに、エムが反論した。その時、ギルドの弟子達の誰もが戦慄を感じた。
「あ、あのチャームズにケンカを売った……」
ペラップが言った。ギルドに来た時から、何だか他の者と一歩違った性格であることは理解していたが、ここまでとは思っていなかった。もちろん、エムコルス本人は何とも思っていない。
「な、何よ！　実に生意気な子ね！」
「チャーレム、別に構わないんじゃない？」
まさかこんなこと言われるとは、と怒るチャーレム。それをサーナイトが諭す。
「うふふ、私はもちろん、みんなの番人の洞窟の探検は、よろしくてよ！」
ミミロップが、役者のような決めポーズを取って、リーダーとして許可した。
「じゃあ、やっぱりいいわよ。好きにしなよ」
チャーレムはそう言い残して、気分を悪くしたような表情をして

去っていく。
「それと坊や、なかなか素敵よ♪」
チャーレムがエムに顔を近付けて、指をさし、ウィンクした。サーナイトはため息をついていた。
「……！」
これを見て、チコは瞬間的に激しい緊張に襲われた。ミミロップは今までのどのポケモンよりも、魅力が抜群。そんなミミロップに誘惑まがいのことをされて言われて……。
「ふん、バカにしてられるのも今のうちだ」
……が、しかし、なぜかエムは全く動揺する様子もなく、それを誘惑でなく挑発と見て取ったのか逆に睨んだ。
「あら？　別にそういう意味じゃなくてよ？　その自信満々な所が昔の私達にそっくりってことよ、うふふ♪　楽しみだわ。南東の洞窟で待ってるわよ」
「……もういい？　ミミロップ。行くわよ」
自由人らしく楽しげなミミロップと、呆れ気味なサーナイト。ミミロップはサーナイトに言われて頷いた後、エレンシアとプクリンに向けて手を振ってサーナイトと共に去って行った。
「よし、絶対に一泡吹かせてやる……」
エムは意気込んで独り言を呟いた後、南東の洞窟と聞き、地図で場所を確認する。
その一方で、チコはまるで呆然としたかのように突っ立っていた。
「チコ、何を緊張してましたの？」
キマワリがチコの後ろからひょこりと顔を出した。
「えっ！　い、いや、別に……」
チコはハッとして答えた。図星だったような表情だ。
「分かりましたわ。もうわたくしも、とっても探検が楽しみですわー！」
「だ、だからその……」
チコはまたキマワリに何か考えられたと感じた。エムも、なんだ

か一瞬ゾクッとした気を感じ、周囲を見渡した。
（きゃー！　な探検隊のチャームズのミミロップにエムのハートを取られるかもしれないと考えてたんですわね、チコは！　しかしエムはあの反応！　……一筋。フフ、謎の核心にまた近付きましたわー！）
キマワリは、天使のような探検隊のチャームズと同じダンジョンに行くことに胸を踊らせながらも、こんなことを考えるのは欠かさなかった……。
何がともあれ、チャームズが来てお祭り騒ぎ。そして、チャームズはエレンシアにとって新たなる難敵であった。
ここで越えなければ、この先もなくなるという、負けず嫌いなエムコルスの考えだった。

61話　バカは何すりゃ治る？

あの優秀なマスターランクの探検隊のチャームズに挑戦的な言葉を吹っ掛けて、探検隊エレンシアとして探検勝負を挑むことにしたエムコルス。

そんな勝負はあまりしたことはないが、ダンジョンを抜けたり、探検を進めることに関して、少なくともギルドの弟子達の中で、エレンシアの右に出た者はいなかった。

トレジャータウンで準備をして、そして今回、エムはいつもは連れて行かないポケモンを連れて行くことにした。

「な、なんで僕を呼んだのだ？」

「数合わせだ」

「は、はあ」

ポッチャマはのらりくらり歩いてる所をエムに引っ張られて、そのまま連れて行かれた。

チャームズは三匹で構成された探検隊。それなら、平等に三匹で対抗しようとエムは思っていた。

だが正直、エムはポッチャマがまともに頼りになる存在とは思っていない。努力しようという意識はあまり見られないし、第一、いると邪魔だ。

やる気がないなら何もせずじっとしてろと言いたい存在だった。だから、一時的にいなかった時は、スムーズに感じていた。

「だけどいいな、邪魔だけはするなよ」

「わ、分かったのだ。足を引っ張らないようにするのだ」

あらかじめ、エムはポッチャマに釘を刺した。ポッチャマはもし何か迷惑をかけた時を想像し、危機感を考えていた。失態を犯せば何をされるか分からない。

「本気で勝つ気？」

やる気満々のエムを、不思議に思うチコが尋ねた。

「当たり前だ。あんなチャラチャラした奴らに負けてられるかよ」
「……なんか違うよーな」
チャームズと勝負するという意識には、あまりならないチコ。しかしとりあえず、自分より上と思われる存在が嫌なだけだろうとは思った。
番人の洞窟へ向けて出発し、探検は始まった。
・
・
・
「集まったわね。どうやらここがスタート地点になりそうで。番人の待つ、未知の世界へね」
番人の洞窟に入ってまずあったのは、石碑一つのみ。アンノーン文字が刻まれており、何か隠されているようだ。
チャームズ、エレンシアのそれぞれ三匹に加え、ビッパ、ドゴーム、ヘイガニが来ている。
「ヘイ！　ヘーイ！　怪しいくぼみがあるな！」
「きっとなにかあるに違いないでゲスね」
「ワシも何があるのか考えておかないとな」
ギルドの弟子の三匹は、お互いにチームになって喋っている。結局、他の弟子は来なかった。
行きたくてもギルドの仕事が忙しいからだ。例えばペラップは、不審なぐらいチャームズに興奮していたが、行ってらっしゃいと見送っていた。
「そういえば、まだあなた達には聞いてなかったわね。それぞれの名前、チーム名」
「エムコルス。そして、チームの名はエレンシア。今からこの名前の連中にお前らは先を越されるから、覚えておいた方がいいかもな」
と、ミミロップに尋ねられてやる自己紹介ですら、エムは挑発的になる。
「私はチコリータ」

「ぼ、僕ポッチャマ」
敵対心むき出しなのはエムだけで、その態度には、チコもついて行けなかった。
「ふーん、なかなかいい名前ね。でも、心配はいらなくてよ♪　先にお宝を手に入れるのは、当然私達よ」
ミミロップの方も引かない。またエムに顔を近付けてきて、本当に誘惑でもしたいかのよう。
実際、エムのそんな態度に感心している。
「そうか、そいつは楽しみだ。ならそろそろ始めるとするか」
「そうね。じゃあ、お先に！」
「ワ、ワシが一番！」
「あっしらも行くでゲス！」
「ヘイヘーイ！」
ミミロップが先陣を切ってダンジョンの内部へ、サーナイトとチャーレムと共に入って行き、それにつられてドゴームとビッパ、ヘイガニも入っていった。
「わ、私達も行かないと！」
「いや、待て。ここに刻まれてる文字が単語になっていて、訳すことができる。何かヒントかもしれない」
取り残されたエレンシアだが、まだ行く前に、エムが石碑をなで回すように調べる。近頃アンノーン文字が読めるようになっており、これは大きな利点となる。
結局刻まれているのは、正面のＩＣＥという三文字の言葉のみだった。
「氷。何か関連するものを見つけろということかもしれない」
エムは頭を傾げる。と、ここで何かに気付く。指示を聞かずに出かけていこうとするポッチャマがいた。
「待てっつってんだろーが」
ルンルン気分で歩いてるポッチャマの背後から、頭にげんこつのような一発を喰らわせた。

「あいたた……ごめんなさいなのだ……」
「お前はいつもそう言って全く反省しないじゃないか」
ポッチャマの目の前に指差しする。ポッチャマは言葉を詰まらせた。
「……は、反省してるのだ」
「本当にか？　じゃあ、言われた通りにしろよな」
「エ、エムコルス君は厳しすぎるのだ……」
「いや、お前がバカすぎるだけだろ」
まさにポッチャマにグサリと刺すようなエムの言葉だった。
言われてみれば、今もあの時もこんな時も、ほとんどがポッチャマの過失だった。
そんなことはさておき、この文字の刻まれた石碑の調査を再開する。見た所、何かを嵌め込む場所はない。押したり引っ張ったりしてもビクともしない。
「……ダメだ。文字以外何もない。行くしかない」
結局この石碑のアンノーン文字の意味が分かったということ以外に手がかりは得られなかった。
手を腕で押さえて頬杖をついて考えながら、エムはダンジョンの中へと向かって行った。チコとポッチャマもついて行く。そして、ポッチャマは思った。
「ぶ、ぶたれ損したのだ……」

中へ入るとますます衝撃的だった。アンノーン文字どころか、アンノーンそのものがいる。古代のアルファベットの棒状の形をして、中央に目玉があるポケモンだ。
実物を見るのはエムもチコも、ポッチャマも初めてだった。
だがもちろん臆することなく攻撃。真っ先に襲ってきそうだった円のような形をしたアンノーンを、横っ飛び状態で放って、湾曲していく電撃を直撃させた。

すると、アンノーンから何か物が落ちた。何だろうと見てみると、さっき倒したアンノーンの形の石だった。これをアルファベットとすると、O。あの刻まれた文字とは関係がない。

次に倒したアンノーンが持っていた石はT。また関係がない。

「どういうことかが分かった。あの石碑の文字に対応したアンノーンの持つ石を持っていけばいい」

「この石を？　でも、嵌め込む場所はなかったよね？」

「確かにそうだが、現時点ではそれ以外に方法は思い付かない……」

エムは、チコにそう答える。

そして石碑に刻まれていた「氷」の意味の文字の石。それを見つける為にまたしばらく、アンノーン達を倒し続けていた。

だが未だに、Ｉのアンノーンも、Ｃのアンノーンも、Ｅのアンノーンも見つからない。

「このままじゃ、チャームズに先を越されるよ？　まだその石を一個も持ってもいないわけだし……」

チャームズの実力が自分達以上と思うチコは、進まない謎解きに不安を感じる。

対してエムは、チャームズより実力が上だと思っている。いつにも増した自信過剰かそうでないか、意識の差ななだ。

「そう決めつけるな。ふざけた奴らが解けるかな。どうなるか見てみな……」

「なるほど、分かったのだ！　チャームズはもう既に僕達が探すアンノーンの石を探し出したってこともありうるのだ！」

ポッチャマはまるで鋭く閃いたように、エムの言葉を遮って言い出した。素晴らしい発想をしたと思ったポッチャマは満足気だった。

だかその背後には、腕に力を込めて、ポッチャマの後頭部に目を合わせているエムがいた……。

数十秒後、またしてもエムに殴られ蹴られ散々な姿のポッチャマの姿があった。

「とにかく手分けして、Ｉ、Ｃ、Ｅの文字の石を探すぞ」

もうポッチャマは相手にもしたくないと思い、エムは無視して探索を進めることにした。

「うん、そうだね」

チコは首を縦に振り、エムと正反対の方向へと進んでいった。まずは、見つかる確率を上げるのみ、と思った。

そして、さすがにポッチャマは擁護しようがなかった。

「うわぁ、見捨てられていくのだ……エムコルス君だけじゃなく、チコリータちゃんまでにも……。僕とはなんなのだ……ははは……」

62話　たまにはやる

「よし、こうなったらアレを使うしかないのだ！」
ポッチャマが取り出してきたのは黄金の仮面。以前、ムウマージが残した道具を拾ったものだ。
効果は分からないけどきっと凄い力が出るかもしれないと思い、高貴そうに光るその仮面を顔に被り、歩き始めた。
特に体に湧く力に変化はなかった。が、周囲には変化があった。
「ソ、ソレハッ！　ナ、仲間ニシテクダサイ！」
その仮面姿に驚いたのか、突然ポッチャマに話しかけてくる一匹のアンノーン。更に、棒状の姿をしている。
「か、構わないのだ……？　で、でも僕はいいとしても、エムコルス君がどう言うかが分からないのだ」
下手に連れて行ったら、また怒られるかも……。そう考えると、勝手なことはできない。
だが、しかしダメなら、その時別れさせればいい。
「まぁ、ついて来てもいいのだ。でもちょっと頼みがあるのだ」
「ナンデショウッ？」
「アイの石、シーの石、イーの石が欲しいのだ」
エムが言っていた石の種類をそのままアンノーンに言う。アンノーン間に関係があるかは分からないが、石を持つアンノーンが仲間になった以上、そのようなことができてもおかしくはない。
「Ｉノ石ナラアリマスッ！　ドウゾ。シカシ他ノ石ハ分カラナイ」
「うーん、とりあえずありがとうなのだ」
とりあえず一個だけでもいいかと、ポッチャマはＩの石を受け取る。
――重いっ！？　重いのだっ！
意外と重かったアンノーンの石に、ポッチャマは驚いた。
「ヨシ、オマエ達、ＣトＥノ石ヲ持ッテコイ！」

他のアンノーンを見て、仲間になったIのアンノーンはそう命令する。
黄金の仮面姿のポッチャマを見て、やはり他のアンノーンも魅了されたのか、指示に従って石を集めに出かけていった。
「な、なんなのだ一体……？」
自分に対する他のポケモンの扱いが、人生で一番良いような気がしてならないポッチャマ。
その原因が、黄金の仮面にあるとは、気付いてなかった。

「不思議ね、たくさん石を集めたけど反応しないわ。なかなか難しくって♪」
「こんな重いの持ったのに、何が足りないって言うんだい、この石碑」
「探偵の素質もあるとか言われたことあるけど、それは果たして本当だったのかしらね。この調子だと」
チャームズも、エレンシアと同じく、この謎に苦労していた。この刻まれた文字を覚えずにダンジョンに入ってしまったため、落ちた石はあるだけ全て拾っていっていた。
そして辿り着いたのは、来た時と全く同じ場所。不思議のダンジョンにおいては良くあることだ。
この石碑の指示通りに目を閉じても、石碑は反応しなかった。
それはすなわち、刻まれてる文字と同じ石が足りないということ。
そして、エムとチコもまた同じ場所に同じタイミングでやって来た。
「あ、エレンシア。同じ所に来たわね。ものの見事に、周回するように造られたダンジョン。謎を解かないと無理みたいよ。そっちは謎は解けて？」
ミミロップの質問で、まだチャームズが仕掛けを解いていないこ

とに、エムは気付く。
「さぁ？　どうだろうね」
エムはクスリと笑う。
「まぁ、ここに来たということはまだ解けてないのかもね。じゃあ私達は謎を解きに行くから、楽しみにしてほしくてよ♪」
エムのハッタリの可能性を考えて、ミミロップはデタラメに言う。再びチャームズの三匹は番人の洞窟の中へと入っていった。
もちろん、大体の秘密が分かってるエレンシアは騙されない。
「まさかエム、三つのこの刻まれた文字と同じ形の石を見つけたと言うの？」
今再会したばかりなので、結果を聞いていない。だから、まるで仕掛けが解けたかのような様子のエムに対して、チコが尋ねる。
「いや、何も見つけてない」
エムは誇らしげの表情のまま、キッパリと言う。
「あ、ああ、そう……」
チコは目が点になる。
「おいっ！　なんで呆れてんだよ。こりゃ心理戦だろうが。見れば分かるだろ、奴らは言葉の毒を吐いて相手を挑発する連中だ！」
エムはガッカリしてるチコにそう叱咤する。
「そんなこと、やらなくていいと思うんだけどなぁ……」
ぶつくさと話し合ってるうちに、時間が過ぎる。
と、その時、忘れかけていた存在であるポッチャマが仮面を被って来た。それも、背後にⅠ、Ｃ、Ｅの順で並んだアンノーンを引き連れて。
「エムコルス君、僕はやったのだ！」
「……突破したことがか？」
「ふふふ、違うのだ、僕を見るといいのだ」
ポッチャマはガッツポーズした後、石碑に書かれている、触れながら目を閉じろという文字の指示に従った。
石碑がそれに反応し、光に包まれる。

「ま、まさか？」
「いや、そんな訳が……」
チコは半信半疑、エムは全く信用していない。
だが、ポッチャマの持つバッグの中からは何かがまぶしく光り始めた。ＩＣＥのアンノーンの石が引き出され、石碑の中に吸い込まれていく。そして、石碑は消え去り、その場に現れたのは降りるための階段だった。
「僕のお手柄なのだ！」
ポッチャマはそう両手をあげて叫んだ。いつもなら殴られる行動だが、今回は何もされない。
というのも、エムがまだ疑っているからだ。どう見ても下に繋がっている階段。ポッチャマが出現させたものなので、何かオチがあるかもしれないと、エムは注意深く調べた。
「やるじゃんポッチャマ！　石を見つけるなんて」
「正確には僕じゃなくてこのアンノーン達が持ってきてくれたのだ！」
エムは未だに認めていないが、チコは素直にポッチャマを称賛する。このポッチャマの持つ仮面は、ポケモンを引き付ける魅力があるらしく、そのおかげでこのアンノーン達はポッチャマについて来てくれたようだ。
「まぁ、今回は認めてやるよ。これで出し抜くことができたわけだからな。だが、邪魔になるからそのアンノーンとは別れろ。そしたらさっさと行くぞ」
ポッチャマも敵ではない。こっちのために何かしようとするのだろうから、たまには成功するのだろう。そう考えて、エムはポッチャマの仕事を認め、大きな反応もなしに背を向けた。
「ド、ドライなのだエムコルス君……。もっと驚かれると思ったのに」
てっきり熱でもあるのかと聞かれることを考えていたポッチャマにとっては、それだけの言葉なのは寂しく、少し落胆した。

「やればできるんだろうって、思ってたからじゃない？」
過去に、エムの外面の態度と内面の心情が一致していなかった例から、なんとなくチコはそう推察する。
「そ、それなら構わないのだ！」
勝手にポッチャマはそれで納得して、機嫌よく歌を口ずさむ。階段を降りるエムとチコの後ろについて行く。喜ぶことをあまりにやりすぎるクセは直らない。
「黙れ、調子に乗るな」
「あ……、りょ、了解したのだ」
いつもの態度で注意されるとポッチャマは一気に黙りこんだ。
そして、辿り着いたのは、また同じような場所だ。石碑がまた設置されていて、まるでまた戻ってきたようだ。しかし、石碑にはまた違う文字が書かれていて、これが二つ目の仕掛けらしい。
今度はアンノーン文字で「ＲＯＣＫ」と書かれていて、先ほどより１つ多い。
「なかなかやるみたいね！」
チャームズがすぐ後に続いて来た。何故、さっき再び１つ目のダンジョンの中に入っていったチャームズが一瞬でここまで来たのかと言えば、試しにどうなるか確かめるために、速攻でダンジョンを進んでみたからだ。すると、階段があった。そして、閉まる前に降りて進んできた。
「アンノーンの石が埋まってたわ。どうやら解いたに違いないわね」
サーナイトが説明する。謎を先に解かれたことで、火が付いたのか、マスターランクらしく、覇気の感じられる雰囲気に変わってきた。
「ガキんちょ軍団、案外やるってことだね。アタイ達もうかうかしてられないね」
チャーレムは腕組みした。彼女にも、ようやくこのチームに実力があることが実感できたようだ。
「いや～、それほどでもないのだ～」

「アンタみたいな装備だけ豪華なオーラないポケモンには言ってないよ！」

実質的にポッチャマが解いたので、ポッチャマが照れながら謙遜して言う。しかし、チャーレムは、この中で圧倒的に弱そうなポッチャマに対しては、厳しい言葉を浴びせる。ただいるだけで何もしてないに決まってると思っていた。

「あ、あの、さっきの仕掛けを解いたのは僕な……！」

「そういうの分かるんだね、チャームズは」

大ショックを受けるポッチャマが、必死に自分の手柄を説明しようとするが、ポケモンの強さをある程度見極められるチャームズに感心したチコに被せられ、台詞がかき消される。

「まぁ、チームを認めないわけじゃないよ」と、チャーレムは言う。

「だけど、次の謎はすぐに解いてみせるわよ。ずっと1勝の感慨に浸っていればよくて？」

と、石碑を少し見ただけで、すぐにチャームズはダンジョンの中に入っていった。

「……まずいな」

チャームズの言葉をずっと無視していたエムは、危機感を抱いた言葉を漏らす。

「どうして？」

「さっき、石を少しは持ってくるべきだったかもしれない。一致しない石は全て捨てたからな」

チャームズは石を持っているのかもしれないと考え、次は出し抜かれる可能性を感じた。

「でも、ポッチャマがいるんだよ？」

チコは、ウジウジと独り言をつぶやくポッチャマの方を指した。

「……あんなバカのやることが何回も成功するか？」

やっぱりエムはポッチャマについてかなり懐疑的。絶対に何か失敗すると思ってやまない。下手な針も投げ続ければいつか当たるようなもので、成功したことは驚きだが、本質的には変わってはいな

いように感じていた。
「じゃあ、エムがあの仮面でやればいいんじゃない？」
「無理だ。あの女（ムウマージ）の使っていた道具だぞ！？」
エムは、チコの提案にピクリとした反応で、無意識にやや大きな声で否定する。
「そ、そうだったね……ごめん」
彼の性格を考えれば、そんな反応が来るのは分かっていたこと。
ちょっと口が滑ったと思って謝った。
「まぁ、いいけどさ……。とりあえずあのバカを何とかしないと」
エムは後ろ向きで座り込むポッチャマの背中を叩く。
「いたっ！　ど、どうしたと言うのだ？」
「ちょっと貢献したからって調子に乗るな。とっとと行くぞ」
どうやら自分だけの世界に入り込んでいたらしいポッチャマの手を引っ張って、立たせる。石集めなのだから、２つ目の謎を解くには、ポッチャマの働きも必要になるのには違いないわけだ。
「ぼ、僕は多分調子に乗ってはいないのだ……。むしろエムコルス君はいつも絶好調って意味で……」

63話　突き進め！（前書き）

文字通り、超高速展開な話です。

63話　突き進め！

ロックの間の探検を進めて、石が集めて石碑のある場所に戻ってきた。探索に入る前にまたしてもボコボコに殴られたポッチャマが、仮面を被って、アンノーンを利用して石を集めようとして、四個の石が集まった。

しかし、石碑の前には、ハートマークの目立つ、置き手紙が残されていた。チャームズが残した物だ。

『エレンシアへ

宣言通り、今回の謎は私たちが先に解かせてもらったわ。やっぱりさっき一本取ったことで浮かれてたんじゃなくて？　それじゃ、本気で競争ね

―　チャームズ　―』

こういう内容だった。エムはそんな予感はしていたが、わざわざこんなものを残す余裕があることに苛立った。

紙を握り締めた後、縦に紙を破り、地面に放り捨てる。

「さぁ、さっさと行くぞ」

「まぁ仕方ないね、早く追いかけないと」

「普通にやってれば何もされないはず……うむ、難しいのだ」

チャームズがリードし始めたこの探検勝負。エレンシアはチャームズを追いかける為に石集めのペースを上げて挽回する必要があった。

「それにしても、なんでエムコルス君はそんなに負けたくないのだ？」

ポッチャマの疑問は正しかった。エムコルスにとって、勝つことは何より重要だった。

もちろん元々の、最初はよく内に秘めていた負けず嫌いな性格もあった。だが他にも理由があった。

自分より強い者がいては、存在意義を感じることができなくなる。この体は、特別に与えられているものであり、ただ平凡に暮らす為にあるのではないからだ。

その理由を加えれば、いつにも増した執念も不思議でなく、ポッチャマの違和感も正しい。

二つ目の石碑を抜けると今度は三つ目の石碑があった。「ＳＴＥＬ」という文字が刻まれており、五文字だ。

妙なのは、ここまで不自然にも敵らしい敵がいないということである。

（このまま上手くやれば、みんなにも褒められるのだ！）

相変わらずアンノーン達と交渉して石を集め続けるポッチャマ。働けている自分に感動し、なんだか気味の悪い笑顔を浮かべながらエムとチコを上から下へと舐めるように見つめた。

「気持ち悪いからこっち見んな」

「は、はいっ、お分かりに致してましたのだ」

エムにその表情のことで言われると、意味の分からない文法になっている返事をした。

やがて全て集め、石碑の仕掛けを解除すると、地下奥深くへの階段が見つかった。

「ふ、深そうなのだ……」

「ということは、もうすぐ最奥部ってことかな」

ポッチャマが妙に怖がっているが、エムとチコはそろそろ到達できそうだと思い、せっせと先に足を進める。

だからしょうがないと、それに頼もしい仲間だから何とかなるだろうと、最後尾で目を泳がせながらついて行った。

「んっ！？」

現れたのはエレンシアの先を越したはずのチャームズ。階段から降りた先でバッタリと出会った。

チャームズは一服の途中だった。最初のうちにチャージしたアンノーンの石で、中盤にエレンシアを出し抜いたチャームズだったが、後半の長い文字のせいで、それも通用しなくなり、こうしてまた、ポッチャマの黄金の仮面というアドバンテージを持つエレンシアが追いついてきたのだ。

「あら？　随分と急いできてるみたいね？　なんかああいうのが待ち構えているから、別に急いでももう一緒よ♪」

ミミロップが指差す方向を見ると、レジアイス、レジロック、レジスチルが揃って並んでいた。いずれも体のどこかが不自由そうで、そして、顔には点字と呼ばれる物が付いている。だが、今はもう使われない点字を解読できる者はいない。

「三体同時だって？　豪快ね」

「大丈夫よ、こっちはその倍いるわ」

伝説のポケモンの数が揃っているが、サーナイトは今のメンバーの数の多さを指摘する。

「倍……こっちは六体なのだ。つまり、一緒に戦えるということなのだ！」

「こうなったらそうするしかないでしょ！？」

あの三体の伝説のポケモンは、番人であるに違いない。今いる探検隊の二チームは番人から見れば同じ扱いに見られている。

チャーレムでも、今からの協力を拒まない姿勢だ。

「「コレヨリ先ニ進ミタケレバソノチカラヲ我ニ示セ」」

息を揃えて無機質な言葉を放つレジアイス、レジロック、レジスチルの三体。

「やれやれ、仕方がないな」

エムは、チャームズと偶然会ったことによる協力を不本意に感じながらも、この伝説のポケモンを倒せることを楽しみにしていた。

一気に波状攻撃をと、全員で合図を送り合い、一体につき二匹で物理攻撃や特殊攻撃を放つ。

まずサーナイトが、レジロックを選んでサイコキネシスの力をか

けて動きを止める。しかしさすがにレジロックの力も強く、簡単には動かせられない。

力を加えてもバランスを崩させるまでしか行かなかったが、チコがそれに続いて、ツルのムチでレジロックの足を遠距離からつかみ、そのまま引っ張って地面に転ばせた。

「意外と力持ちなのね。まさか色々と困ってるボーイフレンドでもいるの？」

「あ、いや、別に……」

サーナイトは、とあるボーイフレンドの性格が困ったものであることを思い出して、チコに聞いた。

今度はボーイフレンドとか言われたチコは、やはり返答に困っていた。

続いて、ポッチャマが、いつの間にか覚えた、強い水流で放たれるハイドロポンプを、レジアイスに直撃させる。だがレジアイスは特殊防御が高く、なかなか効かない。

そこにミミロップが、軽い身のこなしでレジアイスに接近し、バランスの悪い足に蹴りを入れて、レジアイスをうつ伏せにした後、間髪入れずに手に炎を灯してパンチを叩き込んだ。

「いやぁ、かっこいいのだ……」

ポッチャマは、見とれていて援護するということを忘れていた……。

エムは、レジスチルの鋼の攻撃に対して、鋼のように固めた尻尾で対抗していた。格闘技を叩き込もうにも、隙がない。と、そこにチャーレムが、大きく飛躍した後、レジスチルの顔面目掛けて膝蹴りを入れた。

エムがレジスチルの動きを止めていた隙を狙ってのことだった。

「アタイに借りができたんじゃない？」

「ふん、俺がやり合ってたおかげで動きが止まってただけだろうが。そうじゃなきゃあんな技、どうなってたか分からないだろう」

エムはチャーレムは劇みたいに派手な動きで、それで無駄にはなってないが、失敗したらただでは済まないと見た。
それでも強いとは思ったが、それを表には出さない。
「あ、相変わらずの態度ね」
チャーレムは動きに感心してくれない者を久しぶりに見て、少し納得がいかなかった。
しかし、今の一斉攻撃で、合格には十分な打撃を与えた。レジアイス、レジロック、レジスチルの三体から放たれた光が、それぞれのチームのリーダーであるエムコルス、ミミロップを包み込む。
前方は行き止まりになっていたが、壁が開いて進めるようになった。
「開いた……。もしかしたら、この奥に、何かあるのかも」
「まだ分からん、早く……」
一時的に協力はしたが、まだ勝負はついていないと、エムとチコは先に進もうとする。
「ちょっと待ってくれる!?」
ミミロップが先に進もうとするエレンシアを引き止める。
「なんだ、ここで決着つける気にでもなったのか」
声で歩みを止めてゆっくりと後ろに振り返る。
「違うわ。うふふっ、ここからは一緒に協力しなくて？」
「……は？」
ミミロップの提案に一瞬驚くエム。だが、瞬時にその意味を感じ、勝ち誇った表情になる。
「なるほど、負けを認めたか」
「それ以前に、わたし達チャームズの敵になる存在じゃないわよね？」
「……なにおっ！　それどういう意味だっ！」
ミミロップの言葉を邪推してとらえるエムは、ムッとした表情に変えて聞き返した。
「いや、多分そう意味じゃなくて、探検隊の仲間になるべき存在だ

からだと思います」
　サーナイトがそうフォローする。
「確かに、今やってて気が合いそうな気がしたかも……。難しいかもしれないし、協力するのもいいね」
「僕は最初からみんな一緒にいたかったのだー」
　チコとポッチャマは、協力するという案に賛成していた。エムだけは、どうもそれに納得がいっていない表情だ。
「うふふ。素直じゃないわね。実はわたし達を認めてるからこそ倒したい気で一杯なんじゃなくてよ？
　ねぇ？　サーナイト。ゲンガーさんも素直じゃないんじゃなくて？」
「ちょっ、何を聞くのよミミロップ」
　ミミロップに具体的に名前を出されて少し照れるサーナイト。
「認めるも何も、俺はただお前らを倒したいだけだ。格上なんかいらないんだよ」
　エムはミミロップの顔を指差しして、闘志満々の目で意志を伝える。
　それがミミロップにはとても面白いらしく、嬉しそうに顔を縦にふった。
「うふふ。じゃあ、仕方ないわね。わたしと１０秒だけ、戦わなくて？」

64話　奥底

ミミロップが、エムコルスに対して、10秒という制限時間を設けたバトルを提案してきた。

ミミロップとしても、勝負したがっているのを断るわけにもいかない。しかし、今後のことも考えると、短時間で決めるバトルにせざるを得ない。これは相手を倒すのではなく、どちらか優勢だったかという判定での決着になる。

「よし、やってやる」

エムは体の中が気合いであふれていくのを感じた。ようやく望みが叶う。

「うふふ」と笑った後、ミミロップはエムから離れて誘惑するような構えを取る。

「やれやれ」

「今やらなくてもいいのにねぇ」

「あわわ……今日のエムコルス君はやっぱりなんか変なのだ……。しかも今日僕がやられた数は過去最高記録を誇るのだ……」

わざわざこんなことをするとは、とサーナイトとチャーレムは少し呆れ気味。

それに対して、チコは黙って見つめていて、そしてポッチャマは恐れていた。

「じゃあ今から一手だけ、行くわね」

「ああ、そうだ……なっ！」

エムは言葉の途中で地面を駆け、僅かな時間でミミロップに対して体当たりを仕掛ける。

ミミロップはこの不意打ちにも反応し、得意の飛躍力で飛び上がり、エムの頭上に向け、炎をともした拳を向ける。

「その無駄なジャンプの高さがムカつくんだよ……」

エムはミミロップがいる上を見上げて一言ボソッと呟いた。パフ

ォーマンスを狙ったような、飛び上がる高さを批判する。
おかげで判断しやすいが、戦うのには時間がないのだから、これをただ単純に避けるだけではダメ。攻撃を打ち返すことで勝ちを取れる。
僅かな猶予の間に深呼吸して精神を整え、彼の身長の倍の地点にまでミミロップが来たところで、右足で地面を蹴り、サマーソルトで、アイアンテールを当てようとする。
ミミロップはその尻尾に目掛けて拳をぶつけた。鋼に強い炎が、そのアイアンテールの威力を打ち消す。エムは姿勢を崩されるが、素早く立て直して着地する。ミミロップも、やや勢いに押され気味のまま、エムとほぼ同時で着地した。
「うふふ、やっぱり強いみたいね♪」
決着をつける要素はなかった。ミミロップが満足げに微笑んだ。だか当然ながら、エムは満足していない。少しだけ焦げた跡の残った尻尾を見て、悔しそうに舌打ちした。
「そう睨まないでよろしくてよ♪　今のはもう私の負けだと認めるわ」
と、ミミロップは今のでヒリヒリと傷んだ手を見せた。
「な、なんだいその手は……！」
「一体どんな威力だったの？」
チャーレムとサーナイトがミミロップの手を見て目を丸くした。
「さすがサマーソルト。対空性能は完璧ってわけね」　ミミロップは、サマーソルトが空中にいる相手に対して威力を発揮することに気付いた。エムの場合は尻尾を使った攻撃になるが、その鋼の尻尾は足よりも強烈だった。
炎の力で打ち消したつもりが、それが完全という程にはできていなかったようだ。
「それだけで済んだんだと思うことだな」
正直エムもこの結果驚いていた。たまった敗北感が瞬時に消えていく。

だがその心情が悟られないよう、エムは顔をそらして、奥へと消えて行く。チコとポッチャマは、チャームズの顔を伺いながら彼について行った。

彼はいつもの至って普通な態度に戻っていた。もっと時間があれば勝っていたと、彼自身は確信していた。もっとも、圧倒するには程遠かった。しかし、モヤモヤが半分ぐらいは消え去ったのは確かだった。

「さぁ、ラストスパートよ。協力したらあのチーム、きっと頼もしくてよ♪」

ミミロップがサーナイトとチャーレムの肩を叩いた。

エレンシアとチャームズが最奥部まで駆けると、多くのポケモンの石像が立っている広間に来た。

だがその石像以外には、何もない。普通ならどこかに宝箱があってもいいはずなのだが、ここには何もない。何も入ってない宝箱や、動く宝箱も、もちろんない。

「大地ニ眠リシ財宝ヲ我ガ物ニセントスルモノヨ。全テノチカラヲ我ニ示セ！」

境界線のようなラインが敷かれた地点を通過すると、石像から声が聞こえてきた。それと同時に、石像が本物のポケモンとなって動き始めた。

動き始めたポケモンは合計9体。4体目の番人の伝説ポケモンとなるレジギガス、それだけでなく、サワムラーが四匹、ドータクンが四匹いる。つまり六対九になるということだ。

「メ、メチャクチャなのだっ！」

ポッチャマは一斉に動き始めたポケモン達に驚いていた。敵数が少なければ、後ろから攻撃することもできるが、

これだけ多ければ、自分では全くもって無理で勝てないので、チャームズなどに任せて逃げ回る予定だった。

「ここはチームプレイで行くわよ！」
ミミロップは真っ先に敵側に駆け出していく。
「奴はまだ鈍いはずだ。動かないうちに１００秒以内に倒す」
レジギガスにもっとも近い位置にいたエムは、サワムラーとドータクンを無視してレジギガスに挑んでいく。
ミミロップがレジギガスの辺りを高速で動き回り、錯乱させると、エムは棒立ち状態の所に、パンチを一撃叩き込んだ。それに続いて、チャーレムが更に上方に膝蹴りを入れる。
その後ろで、チコとサーナイトが、サワムラーとドータクンを、それぞれ強引な力押しで倒す。
ポッチャマはと言うと、少し離れて逃げようとした所を、二体のサワムラーに追われていた。
「な、何故僕ばかり狙われるのだー！？」
飛び上がる音が聞こえた時、ポッチャマは万事休すと感じ、地面に小さく伏せた。
すると、サワムラー達はポッチャマの真上を通過し、サワムラーは地面に足を打ち付けて、その衝撃でうつ伏せに転げていた。
「チャ、チャンスなのだっ！」
ポッチャマはサワムラーの背中を順番にクチバシでドリル状に鋭くさせてつついていった。恐らくこれで大丈夫と、ポッチャマは二匹のサワムラーからは離れた。
しかしその頃には、ほぼ他のポケモンは倒れていた。
だがレジギガスが堅くてなかなか倒れない。最後の番人とだけあり、体が鍛えられているらしい。
スロースタートの時間がなくなり、動きを取り戻してくるレジギガス。暴れて付近にいるエム、ミミロップ、チャーレムをまとめて弾き飛ばし、一斉攻撃を止める。
「ただの番人のくせに……厄介ね」
格闘タイプの攻撃に耐え続けることを予想外に感じるチャーレム。
柔な攻撃ではないはずなのに、疑問だった。

「チョロチョロしてもらっちゃ困るってか。だったら一気に決めてやる」

もう、出し惜しみして体力を温存してる場合じゃない。

そう判断したエムは、落ちてきたた雷のような激しい電気で体を囲み、レジギガスに正面から突進していった。

正面に叩きこんだ一撃は、おびただしい雷が近くに落ちたような音を撒き散らした。エムはその後正面で様子を見るが、前に倒れていくのを確認すると、すぐさま離れた。

そうしてエムが必殺的な一撃でレジギガスを倒すと、目の前に再び石碑が現れる。

「『目を閉じて汝の波導を大地に伝えよ』……か。最後だからな。これは罠かもしれない。あえてまだ指示には従わずに閉じないって手も……」

エムは石碑の文字を訳して読み上げる。そろそろ仕掛けにも不審さを感じたエムは、目を閉じるのを躊躇した。

「ちょっとアンタ！　ここまで来てそれはないでしょ！」

「……分かったよ」

じれったいことが嫌なチャーレムはそれに文句を付ける。エムは仕方なく受け入れて、目を閉じた。

波導が、今度は大地へと導かれていく。それに共鳴したかのように、倒したはずのレジギガスが起き上がってきた。地面を巨大な手で殴り、地面を揺らす。

「おいっ、崩れるぞ！」

「あわわ……やっぱりエムコルス君の予感が正しかったのだ！」

「ちょっと、アンタ覚えてなさいよ！」

「あっ……！」

宝も何も手に入らないうちに崩れようとする番人の洞窟。

遠回しにチャーレムを否定したことになってしまったポッチャマは、逃げる途中に何か恐ろしい言葉を聞いた気がした。

ダンジョンから脱出して、外にまでたどり着き、ミミロップが数えると無事ダンジョンをくぐり抜けた六匹全てがいることが確認された。

「うん、全員いるわ。でも、これで二回目ぐらいかしら、お宝が手に入らなかったのは」

「いや、そうでもないよミミロップ！　あれを見て！」

チャーレムが指差した先では、本来ただの地面だったはずの場所大地がせり上がり、断層に入口ができていた。

「おいおい、水晶の仕掛けがあった場所みたいだな」

「まだ財宝の場所にまでたどり着くには早いってことかな」

エムとチコが口を揃えて語る。

「つまり、あそこに財宝がたくさんあるのね。探検は成功だってことよ、うふふ♪」

「それより……」

ミミロップが言った後、チャーレムが何かを思い出したかのように、ポッチャマの方を振り向いた。

「あ、ハハハ……いやぁ、チャームズは素晴らしいのだぁ……ハハハ……」

「よくもアタイを悪く言ってくれたもんだねぇっ！」

「ち、ちょっとチャーレム落ち着いてよっ！」

ポッチャマに手を出そうとするチャーレム。ポッチャマはこれまでのパターンから言って助からないと思った。

しかし、チャームズの場合、サーナイトがチャーレムを止めてくれてるので、ポッチャマは難を逃れた。しかし、しばらくの時間、こんなことが続いていた……。

「エムコルス、レジギガスを倒したのは紛れもなくあなたね♪　そういう訳でどうする？　この隠された遺跡の財宝、全て譲ってあげ

てもよくてよ？」
「……敗北宣言か」
どうやら、これでチャームズはここ付近の探検を終えるらしい。
ミミロップは、出てきた遺跡の方には目を向けず、帰る準備をする。
エムはさっきより少し冷めてきた表情だが、勝ち誇ったような言葉だ。
「あら、せっかくだからと思ったから、あげるだけよ。次は絶対負けなくてよ♪」
結局ミミロップは今回、エムにどう言われても好意的な態度は変わらなかった。
「エレンシア、アンタ達は凄かったよ。まるで昔のプクリンみたいだったよ。こんな感じでイケイケな感じが！」
「いや、ちょっとプクリンの勢いにはまだ勝てないかな」
両方の拳を交互に突き出すパンチの表現でチャーレムにそう誉められるが、チコは、さすがに本気を出したプクリンには勝てないと感じていた。
しかし、正直プクリンの本気を見たことはないので、何とも言うことはできない。
「じゃあ、私達は次の冒険へ向かうわね。」
サーナイトとチャーレムはバッグを担ぎ、出発する準備をした。
「うふふ、エレンシアとの探検、とても楽しかったわ♪　これから冒険を続けていれば、またどこかで会うかもしれないわね。でも今度会った時に先にお宝をいただいてみせるわよ」
「それはどうかな……」
エムはあくまで挑戦的な態度を変えない。彼にはチャームズと互角以上に戦ったという実感がある。負の感情を全て包み隠す、自信がまたついてきていた。
「うふふ、また楽しみが増えてよ♪　それじゃあ、プクリンによろしく頼むわね！」
ミミロップはそう言い残し、サーナイト、チャーレムと共に風の

ように華麗に駆け抜けて去っていった。
「す、すごかったねぇ、チャームズ。なんだか、私から見たら次元が違うように見えて、あまり話す気が起こらなかったよ。よくエムは戦う気になったものよ」
チコは今回、結局チャームズには、例え探検で互角に渡り合っても、様々な面で勝てないと感じた。
見た目や動きの美しさだとか、やっぱりペラップなどから聞いた通り、魅力的だ。
「んー？　チコ、見ただろ？　あのままやってりゃ勝ったのは俺だ」
「う、うん。そうかもしれないね」
エムの答えに内心「そうじゃなくて」と思うチコ。だが、あの向こうにある遺跡の宝の優先権を、チャームズから取れたのはエレンシアとしては良かったので、まぁいいかと思うことにした。
「にしてもチャームズはいいのだ……。僕にも手を出さなくて……」
ポッチャマはボソっとそう呟いていた。聞こえてないつもりだったが、しっかりエムには聞こえていた。
「おい、それはどういう意味だ？　ちょっとまともに何かやったと思って……。それもあれも全部お前が悪いんだと気付けっ！」
「わ、わ、わーっ！　結局最後までこういうオチなのだーっ！」
エムはいつものごとく、逃げていくポッチャマを追いかけていった……。

６４話　奥底（後書き）

チャームズのキャラを空ダンっぽくしたり、色々改変をした今回。
なんかこの話も書き終えたのかと思う一方、２年半も経っていつまでやってんだって気もｗ

65話　夢の中

――夢の……中？

ある日エムコルスという男は夢の中に入り込んでいた。辺りは景色も何もないし、視界がはっきりとしていない。

そんな彼の前方には、見覚えのあるポケモンが立っていた。今はもういないはずの、かつて対峙したポケモンが。

「ヨノワール……？」

「久しぶりだなエムコルス」

エムには何の思いが迷い込んでこんな男と会ったのかが分からない。だが、確かにこれはあのヨノワールで、なおかつ自分を記憶に保っていた。

一言言った後、ヨノワールは無言でエムに迫っていった。

「な、何をする気だ」

「決まっている。私を、いや、我々を消したお前を許さないということだ……」

ヨノワールは静かな声で言った後、手をエムの方へと伸ばした。

――そこで夢は途切れて、エムが目を覚ました瞬間だった。

「っ……！」

声にならない叫び声を上げて、体を起こすエム。やはり夢は夢と安堵するが、同時に身震いを起こした。

消えた怨念のようなものが残っていたのか。たかだか夢とはいえない。疑問に思っていたことがいきなり夢に現れてきたのだから。

（し、所詮これは夢にすぎない……夢だ……）

手で目をこすり、そう自分に言い聞かせて、体からわき上がる不安を、エムは押さえ込んだ。

まだ時間帯は早い。陽が落ちたまま。ひとまず忘れようと、エムは再び眠りに入った。

翌朝から、エレンシアは番人の洞窟で解いた仕掛けにより現れた、隠された遺跡を探索していた。

そして、長い道のりを辿った末に見つけたのは、大量の宝箱だった。

「随分と置いてあるよ。何があるのかな？」

「帰ってからのお楽しみってことだな」

エレンシアは宝箱を全て拾って帰り、全て鑑定すると、様々な貴重な道具が多く出てきた。

しかし、見たことがないような特別な道具があるわけではなかったようだ。だが、なかなか見つからない道具であることは違いなかった。

その晩、異様な光景が広がる。ここずっと、トレジャータウン周辺は、太陽が差し込む暖かい気候だった。だから毎日のように朝陽が昇る様子が見れて、夕陽が落ちる様子も同じく見れた。

それなのに、今日は夕方から、湿り気を感じさせる薄暗い雲が、朱色に染まる夕陽を被せてしまっていた。

それに加え、嵐が訪れた。強い風が吹き付け、バケツの水をひっくり返したような雨が地面を激しく打ち付け、誰かが電撃を起こしたような雷鳴が轟く。

その光景は、平和な日常に似合わず、何か災害でも起きているようだ。

「久しぶりの嵐みたいね。最近ずっと、私達は誰とも変わらない日々を過ごしている。だから新鮮な気がするよ」

「ああ、ここまで流れてくるぐらい酷い」

サメハダ岩の階段から、上から流れ込んでくる雨水を見たエムが、入り口を塞ぐ藁を持って、階段を塞ぎにかかった。流れていく水を蹴って、ほぼ無駄だが流れを止めようともする。
「もういいよ。どうせすぐ乾くんだから」
「まぁ、ただの雨だ。毎日が晴れるわけじゃないからな」
斜面に沿って、斜めに流れていく雨水。寝ている位置には来ない。
「もうどれぐらいになるんだろう？　まるで、遠い昔のような気がするの。時限の塔とか行ったのが。だって、あんな天辺にあったわけだし……」
この嵐から、チコは以前のことを思い返していた。未来にも行ったことがあるが、それを含めて関わっていた者はもうほとんどいなくなった。だから遠い昔に感じられるのだ。
「確かにそうだ。もう昔だ。だがその前から、少なくとも俺はずっと戦っていたに違いない。
だからこそだろうが、なんかこう、その後から乗っかってるんだよ。俺の背中に、何かが……」
エムはチコの話から、昨日見た消えたはずのヨノワールに襲われる夢を見たことを思い出してしまっていた。
あの夢はなんだったのか。疲れていたからか、どこかの空間に思念があるのか。
夢とは本来何故見たのか分からないものが多いのだから、気にすることはないのかもしれなかった。
と、エムが話している途中で外で眩しい閃光が走り、直後に時間差で激しい雷鳴が轟いた。
「……わっ！　エム、なんかやった？」
「やってねぇよ」
チコが明らかな冗談を言うが、エムは普通に反応した。
とにかく嵐の音を聞きながら起きていても仕方がないので、話を

しながらの思考を止めて、二匹は眠りについた。

――だがその時、既に創世者達の活動は始まっていた。この嵐は、それを予言するかのような、もしくは、その影響によるものだった。

「いい感じだ。空間の歪みが増幅されている。これなら私も……。むっ、クレセリア！」

しばらく姿をどこにも見せていなかったダークライがまた現れた。彼にとって、追ってくるクレセリアは、昔からお互い知り合いだった。

「一体何しにまた現れたというの！？」

「厄介者の排除。……いや、排除というより、力の入手だ」

久しぶりにダークライに接近したクレセリア。出現を見逃さず、すかさずダークライを追ったのだ。

ダークライは、自分と別の存在が企みを持って行動を起こすことを知っていた。裏切り者はどうでもいいが、邪魔者はいては困るのだ。

「邪魔者？　また何を……」

クレセリアはダークライのことを良く知っている。だが、良く知ってはいるが、何故彼がこうなったのかは理解できていない。

このダークライは、不治の病で世を去った少女の思念が生み出したと言われる。

しかし本来、ダークライは悪意持っていない。それなのにこのダークライには悪意しかないと言える。

「ふっ。さらばだ」

クレセリアがオーロラの光線をダークライに向けて放つが、ダークライはテレポートでその場から去ってしまう。

「くっ……。接近できても、どうしても最後は逃げられてしまう……」

クレセリアはダークライをまたしても捕まえきれなかったことを悔やんだ。あの男は空間の歪みを利用しようとしている。

しかし決して諦めることはない。必ず止めなければならないと、彼女は決意していた。

――エムはまた、夢を見ていた。

ダークライがクレセリアから逃げた後の時間帯。嵐が吹き荒れていた中で眠りに入った彼は、嵐の音など入り込まない夢の世界に入っていた。

どこにいるのかは分からないが、夢の中にいることは何となく分かっていた。

エムからはまた、誰かが見えていた。一体誰なのか。

しかし、彼にはあの姿に鮮明な記憶があった。頭に生える長い葉と、刃のように鋭い腕の葉。そんな特徴を持つポケモンを、彼は間違いなく知っていた。

それもそのはず、彼が負い目を感じている理由の大きな理由の一つは、このポケモンの存在だったのだから。

その姿がはっきりと見えた時、エムは静かにその名前を呼んだ。

「ジュプトル……？」

66話　不運

再び夢の中に入り込んだエムコルスが見たものは、かつて共に戦い、そしてこの時代からいなくなったジュプトルだった。

（どうして、どうしてお前が――？）

エムの頭の中は混乱状態だった。今いる場所が夢の中だと考える暇もない。

「エム、お前は、お前は……！」

ジュプトルの雰囲気が何か違う。憎しみを感じる表情で、エムの方を睨む。その形相にエムは大きく怯んでいた。

睨まれるのが恐ろしかった。今の記憶では一時期だが、生死を共にしたかつての友に睨まれるというのが……。

「……！？」

「お前と約束したはずだ。時を変えてお互い消滅したら、パラドックスに巻き込まれて迷い込む時限の狭間で永遠を過ごすと……！

俺は今、そこから夢を通じてお前と会っている！　さぁ、もう十分楽しんだだろう。こっちへ来い……」

「ジュ、ジュプトル……。お前何を言い出す気だ……」

このジュプトルは自分が知っているジュプトルではないようにエムは思った。でももしかして、自分が悪いのかもという考えが、頭をよぎり始めている。

「お前だけのうのうと生き延びる気か……。見損なったぞ。まさかお前に裏切られるとは思わなかった。なら、仕方がない……」

ジュプトルが近づいてくる。腕を振り上げている。ダメだ、どうしようもない――

――エムの体が震え上がったその時には、既に目を覚ましていた。端から見たらおかしな行動をしているようにしか見えない格好だ。

エムは両手で目を覆い、息を荒げた状態で、必死に今の悪夢を忘

れようとする。夢の内容を鵜呑みにするなどとんでもないものだと、現実から切り離そうとした。

でも、奇妙すぎる。夢の中にヨノワールが出てきて、ジュプトルが出てくる。頭の中にあの時の出来事が残っているせいかもしれない。

今日は既に日が明けている。嵐は収まった。しかし、エムの頭の中の負い目の嵐は収まっていないままだ。気付けばチコが既に今日の探検の準備を黙々と進めている。随分と早起きだったらしい。天を見上げて、雨雲がもう消え去ったことを確認している。

「おはよう、もう嵐は過ぎ去ったみたいね」

「あ、ああ……」

エムが起きたことに気付いたチコが、エムに話しかける。チコはやる気のなさそうなエムを、妙に引っ張っていこうとする勢いだ。

「エムコルス君！　チコリータちゃん！　昨日は僕も頑張ったのだ！」

ポッチャマが、頑張って依頼をこなしたとエムにまとわりつきながら元気に報告してきた。いつもならエムが何か殴るなりするはずだが、今日はエムは何もしなかった。ただ「良かったな」と言うのみだった。

ポッチャマは何も思わず、ただエムが優しくなったか認めたかと思って、とても気分を良くしていた。

ギルドでチコが依頼掲示板で依頼を決めている。日替わりで依頼決定の優先権を回すことになり、この日はチコが担当だった。

エムは少し離れた場所で、バッグの中の整理をしながら、チコが早く依頼を決めないか見ていた。

すると、編成所の仕事をしているチリーンがエムに話しかけてきた。

「あの、エムさん」

「ん……なんだ？」
エムは、珍しく話しかけられて少し興味深く振り向く。
「キマワリから聞いたんですが……。チコさんのこと、好き、ですよね？」
悪びれる様子もなく、チリーンがエムにそう聞いてきた。
「んなっ！　な、な、んなわけないだろうっ！？」
エムは今日のところの低いテンションを吹き飛ばすぐらい大きな声を出しながら、手を横に振って否定するが、顔が赤らんでいた。
「わ、分かりやすいものですね……。本当にこういうのって」
「あ？　ああ、そうだな。それは違うということが分かりやすいよな、ああ」
エムは激しく焦りつつ喋る。チリーンに言われるのが予想外で、全く誤魔化せていなかった。
「いやぁ、エムさんまさしく典型的な……。告白しないんですか？」
チリーンが驚きの表情でエムに更にストレートに尋ねた。
「すっ、す、するわけが……！　いや、それ以前に……」
エムはチリーンの言葉を少し考えるうちに何かにハッと気付くと、動揺が止まった。
「それ以前に？」
「俺は、普通に生きてるポケモンじゃないんだ。……できないんだ」
エムはそう言い残し、チコが依頼を取ったのを確認して、チコと共にギルドの梯子を登っていった。
チリーンには、エムが今言ったことが理解できないでいた。しかし、よく遠回しに考えると、エムは認めたことになる……。
だがエムにそんなことを気にする余地はなかった。今、彼の頭には夢の中の出来事が瞬時にまとわりついてきていたのである。そんなことは、本人以外には誰も知る由がなかった。
むしろ本人すらも、よく理解できないでいた。本当に、あの夢は真なのか。忘れようとしても、ふとしたことで思い出してしまっていた。

昨日の嵐から、何かがおかしくなったのはエムだけではなかった。
なんとプクリンが、探検隊連盟の誰かと珍しく言い合いをしている。こんなことは滅多にないので、誰もが驚いていた。
だからペラップすらも口出しはしない。何の話をしているかすらも、誰も聞こうとはしない。
プクリンは、怒っているというより説得している。「たぁーっ！」とは力にモノを言わせずに話している。そうなると、よっぽど何か特別なことであることには違いなかった。

エレンシアの今回の依頼で、湿った岩場の向こう側の海にある島、あの噂の「ゼロの島」という場所に行こうとしている。
あの「ＭＡＤ」が地図に場所を示した為に、数字の０の形をした島がそこであると分かった。
依頼の内容は、「あるものから逃げていて、近くの海を泳いで逃亡して、ゼロの島という場所に辿りついたと思ったら、あるもの程ではないが強いポケモンばかりが出てきて、しかも迷い込んでしまった」というものだった。
そもそも、「あるもの」何から逃げていたと言うのか。それがまず考えどころだった。
ともかくここ最近の探検の成果と、チャームズという最高ランクの探検隊と比較しても結果は悪くなかったことから、
一部だけが噂にして、「圧倒的に最難関」と噂のゼロの島にも行けると、自信持ってチコは考えて選んでいた。
エムも、とりあえず何事も行けると思っている。しかし、今日は何だか様子がおかしい。まるで少し昔に戻ったような表情だ。
「なぁ、何だかここちょっとおかしくないか？」
エムは島の辺りの海を渡らせてくれるペリッパーがいる場所へと向かう途中のある地点で、不穏な空気を体で感じていた。

ここにいる者は精神を壊しているような空間にいるような気がしてくる。誰もいないが、そのようにしか感じない。

これは気のせいなのか、それとも本当におかしいのか。

「え？　まぁそりゃ、そんな場所はどこにでもあるんじゃないのかな」

チコもそのような雰囲気は少し感じているようだった。

上空の空で大量な鳥の翼を羽ばたかせる音が聞こえてくる。空を見上げると、見当たったのはたくさんのペリッパー。何か袋を背負っていた。

「それより、あのペリッパー達の背中にある大きな袋は、一体何を運んで……」

と、チコが言葉を続けたその時だった。白赤の、丸いポケモンのマルマインが、ペリッパーから大量にこちらへ投げ込まれてきた。

「！？」

――押し潰される！　まず、直感でそう感じたエムとチコは、近くの大きな木に隠れようとする。

しかし、不運にもマルマイン達の集団の中心部にいた。重々しい音が周囲で響きわたると、マルマインが爆発をしようと力わ溜め込み始めた。

不穏な音を聞く暇もなく、身を守ろうとするが、その刹那、耳の鼓膜を潰すほどの爆発音が響き、その爆発の威力の全てがエムとチコを直撃した。

二匹は爆風で木っ端微塵になるほどの衝撃を感じながら大きく吹き飛ばされ、崩れた木や、地面叩きつけられる。

「な……なにが……」

例えエムであろうが、何匹ものマルマインの爆発に耐えきれるわけもなく、全身が傷だらけの体で、まさにその外見にふさわしいような、その通りなぐらいに全身がちぎれたような痛みと、薄れていく意識の中で何かを考えようとしたが、チコの居場所の位置すらもまともに分からないうちに、気を失った。

チコも、近くで爆発に巻き込まれて、エムの少し離れた場所で、同じく体がボロボロに傷つきながら倒れ込んでいた……。

「ふぅ、探検隊連盟ＰＥＬとして苦渋の決断でしたが、何とかなりましたね」

「これでアジトが崩壊したとは思います。この世のポケモンでは対抗できないから仕方ありません。後は時間の問題でしょう」

「ギルドの親方といった認定されたポケモン達の許可も９割以上集まりました。

確かにあそこ命令で調査に入って行方不明のポケモンが多いという事実ならやむを得ないですからね」

マルマインを落としてエレンシアに致命的な肉体的な打撃を与えた張本人達のペリッパーが語り合っていた。彼らは会話の内容からして、探検隊連盟の命令でそれを実行したようだ。

ここ最近、潜入調査専門担当のハブネークの発見により発覚した衝撃的な悪事を止めようとしたポケモン達が全員行方不明という事件があった。

それも、かなり強いと言われるポケモンですら、だ。

もはや被害を防ぐ為に、と強引なテロまがいの作戦に乗り出したのである。

もちろん、あんな場所にポケモンがいるなど予想しておらず、エレンシアが巻き込まれたなど誰も気付いていない。

このことは守秘義務で、全く外部には漏らさない約束。だからこの件はどの依頼掲示板にも反映がされないのだ。

エムやチコに目もくれず、ペリッパー達は帰っていった。

「やれやれ、呆れるよ。これで僕達を潰した気になったなんて。たかだか地上の実験材料のポケモンを失っただけじゃないか」

黒い身体に黄色い模様を持つ四本足の、イーブイ系のポケモン、ブラッキーが、物音の様子を見にきたように、大爆発の跡にやってきた。その彼の背後にもブラッキーが二匹いる。

黒焦げの大量のマルマインを見て、笑いをこらえているブラッキー。そうしながら辺りを見回すうち、他とは違うポケモンが倒れていることに気付いた。

「おっと……、しかもオマケ付きだね。やれやれ、失った分も取り戻せるじゃないか、二体分も」

爆発で大きく傷ついて意識を失って倒れている、ピカチュウとチコリータに、ブラッキー達は近づいていった。

そして、リーダー格らしきブラッキーは、後ろのブラッキー達に、その二匹まで動作で命令して近付かせた。

67話　衝撃、衝動

全く状況が掴めないままに、エムは目を覚ました。冷静になって、起きたことを振り返ろうとする。

確か、ペリッパー達がマルマインという名のポケモンの爆弾を落としてきた。それに巻き込まれて意識を失ったのだ。

体が痛む。あんな大量なマルマインの大爆発をまともに受けたから当然かもしれない。むしろ、生きていただけもうけものと言うべきだ。

「……くそっ」

「しっ……！　聞こえちゃうよ」

エムが虚ろな表情で呟くと、チコの声が聞こえた。振り向くと、爆風のダメージで体に傷を負っているチコがいた。

「おい、大丈夫なのか？」

「お互い様だよ……。これくらい、何とでもなるよ」

痛々しそうな傷があるのは、彼も同じだった。しかも、良くみたらここは牢屋の中。目を覚ませば違う場所にいる時点でそう察することができる。

「俺達に何があったんだ……何が……。分かるか？」

「私にも全く分からないよ……」

何故、ペリッパー達が自分達に向けてマルマインを投下したのか。何も罪を犯した記憶はない。全くエムにもチコにも理由が思いつかなかった。

ここでエムは、つい昨日に見た夢を思い出していた。ジュプトルに言われた言葉を。早く来いと。

つまり、あれは「死ね」とでも言ってるようなものだ。

……その件と今回全く関連はないに違いなかった。だが、この巡り合わせの悪さは何があったのか。

そして今、何故こうして閉じ込められているのか。まさか、闇の創世者の誰かにやられたのか……。ならば、尚更出なければならない。

しかし、攻撃してきたのはペリッパーで――

「何かしたのかな、俺達」

ペリッパーがどこか指名手配されているという例は見た記憶がない。だからあのペリッパー達が悪人ということはありえない。

エムは考えが悲観的になっていく。もしや自分達が何かしたのではないか、と。

「そんな覚えはないけど……」

チコはそう言い切った。

「そ、そうだよな」

と、エムは言いつつも、あらぬ疑いをかけられているのではないかと思い始めた。今はいないヨノワールやジュプトルに呪われてでもいるのかもしれない、とも。

何かの呪いで、たまたまなぜか、自分達のいた場所に爆弾が落とされることが決まっただとか、到底考えられないことまで……。

「とにかく、今はここから出る方法を考えらるのが先だよ。周りには今は誰もいないみたいだしね」

チコは静かに言って、鉄格子を調べているのに対して、エムは後ろめたそうな表情で下を向きながらしゃがみこんでいた。

チコは少し心配そうにエムの様子をチラチラと伺っていた。なんだか近日は元々様子がおかしかったのだから、ますます心配だった。

チコにとっては、彼がいるというだけで、何とも言えない安心感があった。だから、この状況でも必ず何とかなると確信できる。それでも、あの表情だけが不安となるファクターだった。

――まさか、閉じ込められて落ち込んでいるなんてことはないよね……？

「……何も分からないけれども、この格子は壊せそうだよ、どう思

う？」
「ああ、それはどちらにしろやろうとしていたことだ。俺がやってみる」
そう思った矢先にエムは立ち上がる。まずはここから出た方がいい。未だかつて、困難からはほぼ全て乗り切れなかったことはない。
今は状況が掴めていないが、きっと今回も、絶対に――
エムは無意識に体に電気を帯びさせて、鉄格子にタックルをぶつけ、それを突き破った。
「脆いな……」
「よし、行こう」
エムがあっさり壊せたことに疑問を感じているのに対して、チコは今の格子を破る一撃で内心良かったと安心していた。
「……なぁ、普通は閉じ込める以外にも、縄を使うはずだよな？」
エムは格子から出た時にまずそう思った。目を覚ましたら閉じ込められている割には、妙に監視されているという雰囲気がない。
そもそも今、大きな音を発した時点で誰か来てもおかしくないはず。
しかしここはおかしすぎる。地下なのか、妙に湿っているし、辺りが暗い。それに、何か妙な感覚がある。ここにいると全てが滅んでしまいそうな感覚だ。
記憶にはないのに、トラウマのように体に蘇ってくる。体が自然に振動している。

「た、確かにそうだけど……」
チコはこんなにあっさりと脱出できたことには驚いたが、それがエムの実力によるものとしか考えない。
「だが、こんな物音を出してまだ誰も来ないというのも不自然だ。俺達がここにいるってことは、誰かがここにまでさらってきたということなんだから。気を失っている間にな……」
エムはやはり疑い深く考える。

「見離してるってだけかもしれないよ？」
チコは、どこにいるのかも分からない敵を疑うエムの不安を消そうと説得する。
だがエムは決してそこに前向きにはならなかった。
「いや、違う。具体的には覚えていないが、どこかで感じたような、狂気じみた感覚が襲ってくるんだ」
エムは格子を破ってから感じていることを口に出して認めた。手が震えているのを感じる、自分の右手を前に出して見ていた。
「き、狂気？」
「ああ、不思議だよな。全く、臆病者らしいことだ……」
心の奥底にまで潜っても恐怖心が見つからない。それなのに、エムは体が震えている。
過去の恐ろしい経験で体が覚えているのかもしれない。その時に近いことが起こっているのかもしれない。
エムは未だ全ての記憶は戻らない。だから、そういうことなのかもしれないと思った。
とにかく、彼にとってはここは何か尋常でないものがあるような気がしてならない。だから、爆発に巻き込まれる前におかしな雰囲気を感じたのかもしれなかった。
「それでも大丈夫よ、きっと」
だけれども、チコはエムの不安を消そうと、そう言い続ける。エムはその言葉に反応してチコの方にゆっくりと振り向いた。
突如訪れた出来事。そして、何とも言えない空気。心は記憶していなくとも、体が記憶してしまっている。
別にチコはエムの過去を良く知っているわけではない。だから、エムの人間の時の出来事が分からない。
だから、エムの経験による雰囲気の感じ方も分からない。もしかしたら、エムがまた過去と何か関わった出来事なのかもしれないと思った。
だから、彼の精神的に支えようとしていた。

落ち込んでるように見えたり、今のように体が震えていたり、いつものエムコルスらしくないように感じる。
しかし、元々ああ見えて心に脆さがあることは良く理解している。
「じゃあ、今までのように本当に大丈夫なだけのことをしてくれるのか？」
少し体を落ち着けたエムが、深呼吸して言う。
「もちろん！　いつだって、助けるよ」
チコは自信ありげに受け答えた。
「じゃあ、一緒に頼むよ。もう、俺にはチコしかいないんだからな……」
エムは背を向けてそう言った。いつもと変わらないことを言われただけなのに、なんだか感情が揺さぶられる。
たとえどんな理由があれ、チコのこの強くなった精神力に負けないで行こうと、この地下牢らしき場所の脱出口を探しにに向かった。あわよくば、犯人を倒すつもりで……。

しかし、ここの異様な空気が漂っている牢は、不安をかき消したエムとチコの想定を超えていた。
「なんだよ、これ……」
エムとチコが見たものは、無残な姿で倒れているコダックだった。別に、こういうものを見るのは初めてではない。それでも、耐性が付いたわけではない。
「もしかして、何かとんでもないことが起きてるんじゃ……」
路地のように狭い通路に倒れていたこの死体。何かに使われたような痕跡もあるし、ここが普通の場所ではないということが、チコにも本格的に分かってきた。
と、そのポケモンから目を離して何もできることはない、犯人を倒すしかない。
ふと、怒りがわき上がってきたエムは疑問に感じた。何故、平和にしたはずの世界でこんなことが起きているのか……と。

そうすると、やがて錆びついた扉が見つかった。
それが目に入ると、急ぎ足でエムとチコは扉をくぐった。その瞬間、エムは強く唇を噛みしめた。
「んだよ、そういうことかよ……！」
目の前に堂々と、まるで待ってあげたかのように立っている一匹のブラッキー、そしてエーフィがいた。
「はじめまして、私はエルザと申します。そしてこちら、双子の弟、シュバルツとなります。今後ともよろしく」　この静かな女性の声、一見丁寧な口調で喋っているようには聞こえる。しかし、その氷タイプのように冷たい目と声と相まって、とても礼儀いいようには見えはしなかった。
「おい、一体何のつもり……」
「今から話してあげますよ。まぁ、結末は変わりませんが……」
口を挟んだその言葉と共に、エルザと名乗るエーフィはこれまでのどの相手よりも猛々しい、威圧を放った。威圧感があるポケモンでもないのに、これである。
エムもチコも、威圧に慣れきっていて怯みはしないが、只者ではないとは確信した。
逆に、彼方へ蹴飛ばしてやりたい衝動をエムは感じた。どこかで感じた不安となるような感覚は、この女のせいに違いない。
それに、マルマイン爆弾が落とされた理由。どれもこれも、この連中を潰す為の策だったのだと、ようやく気が付いた。
そして、もちろんあの死体もこの女の仕業に違いない。
「では僕が説明するよ。牢を脱出する力がある君達には、僕達の実験台になってもらうんだ」
死の宣告と同じような言葉を吐いた、ブラッキーの男。名前はさっきエルザがシュバルツと言っていた。
「っ……！　ふざけやが…」
じわじわと湧き上がってきた怒りが一気に上がり、エムはブラッ

キーのシュバルツ目掛けて一発叩き込んでやろうと駆け出す。しかし信じられないことが身に起こる。

エーフィのエルザが軽く体を動かすと同時に、まだ攻撃を仕掛けてコンマ5秒もないエムをサイコキネシスで捕まえ、操ろうという感じもないわずかな動きだけで、後方へとまるで軽石を投げたかのように勢いよく吹き飛ばす。

「ぐぉっ……」

エムが少し遠めにあったはずの壁に叩き付けられていたのはまさに一瞬の後だった。刺々しい壁にぶつけられた衝撃と、サイコキネシスの強い威力。まだ癒えていなかった傷に更に追い討ちをかける。

痛みにあえぎ、脇腹を抱え込みながら、ひざまずいた状態になる。

「エムっ!?」

チコが、今の大打撃を受けたエムのが心配ですぐに駆け寄る。

しかし今、何が起きたのか、全く理解ができていなかった。

「だ、大丈夫!?」

「あ、ああ……」

エムは無事だと答えるが、正直体にだけでなく、心にも衝撃を受けていた。今の動き出しは全く悪くなかった。それなのに、全ての勢いをいとも簡単にかき消された。全く信じられなかった。

今までこんなことはなかったというのに、全く意味が分からなかった。

「どうして、私達を閉じ込めるのに選んだの?」

エムが無事だと確認すると、チコはエルザとシュバルツの方を睨んだ。

「それは手違いですよ。爆弾落とされたものですから。ちょっと気まぐれで」

それをエルザから聞いた途端、チコはエルザの方へと、光の壁を体の目前に作りながら突っ込んでいった。

エルザは棒立ちで何もしようとしなかったが、チコが葉を振った時に僅かに体を動かして、予め葉っぱカッターの射程範囲外へと逃

げた。
「こんのーっ！」
声を張り上げながら、エルザとシュバルツに接近し、ムチを伸ばす。
気まぐれで閉じ込められただけでなく、恐らくポケモンを実験と、明らかにおかしなことをしている。それに加えてエムがさっきやられて、黙っていられなかった。
だから、話を聞いてる場合じゃなかった。やるなら今だと、チコは判断したのだ。
そんなチコの攻撃に対して、エルザは少ししか動かずに、不定に動くムチをいとも簡単に避け続けた。
そして瞬時にシュバルツが背後に回り込み、背中を討った。

「っ……！？」
背後にいるシュバルツに気付かなかったチコは、素早く今の騙し討ちを受けてもそこから立ち直って、背後を振り向いた。
そっちもかと、シュバルツの方へ体当たりを仕掛ける。
まさに、その時だった。
（え……？）
突然チコの足元がぐしゃりと崩れる。穴がぽっかりとでき、チコがその中へと落ちていこうとする。
チコはとっさにムチを伸ばして、穴の底へ落ちまいと、留まる。
「……んなっ！？　やめろ！」
チコを制止する力も出なかったエムだったが、その場面が目に入った途端、助けに入ろうと立ち上がった。落ちかけているチコが角度的に見える。
そして、落とそうとするエルザとシュバルツがそこにいた。しかし、無情にもエルザが、ムチをサイコキネシスで操り、留まらせていたムチを離させてしまう。
そして、声が聞こえる間もなく、チコが底へと落ちていってしま

った。
「全く、残念だよ。あんなに落ち着きがないなんて。まぁここら辺りは所々床が不安定で、穴ができていたんだけど。
残念ながら、穴の下は奈落の底になっているんだ。まず助からないだろうね」
――な、何があった……？　奈落の底……？　チコが……？
冷淡に説明するシュバルツに対して、エムは何が起きたか理解しがたい表情をしていた。
チコがいなくなってしまった。鵜呑みにしたくはないが、どこかに消えてしまった……。嘘だろとしか、思えない。
「そんな顔しなくていいですよ。単なる序章としてオープニングを見せたまでです。
私は空気の流れだけで、世の全てが読めるのですから」
エルザは表情を伺いながら、不敵な笑みを浮かべていた。
「さぁどうするかな。実力も見極められない愚か者は」
明らかにエムもチコも上回ったパワーを見せつけたこのエーフィのエルザとブラッキーのシュバルツ。
だが、エムの心の中では、つい前に感じたような不安を全て消し去るぐらいの、怒りが爆発しかけていた。
殴りたいでは済まなくなってきた。できるなら体を引きちぎりたい気分だ。彼の心からなくなりかけていた猛獣が、体から突き破って飛び出してくる勢いである。
こんな、命を何とも思っていないクズ野郎が、まだ世の中にいた。何の為に一度、命を投げ捨ててまで戦ったというのか。自暴自棄にもなりそうだ。
こんなのがいるから、ダメだった。世を大きく乱してきたに違いない。崩壊へと繋がらせていく。
そして今、奴らは目の前で、大切な相棒のチコリータを――
エムは激しく湧き起こる衝動と共に、拳をさっき叩き付けられた壁に叩き付けた。その跡は自身の体が作った跡を遥かに超えていた。

彼は、完全に我を失いかけそうな所を寸前で保っている。そんな状態だった。

「……ぶっ殺してやる」

いつ以来にそんなエムコルスを見るのか。ジュプトルやチコ以外、誰も知らないような言動。

ただただひたすら湧いてきた殺意。体が、今度は止まらない怒りで震え上がっていた。無意識に、体から稲妻の力を発して、右手の拳を強く握り締めた。

まるで彼自身が平気で命を奪える殺人鬼になったような、ギラギラした鋭い眼光へと変化していた。

68話　作られたもの（前書き）

今回の話は回想オンリーとなります。
ですので、前話の展開からは繋がっていることは全くありません。
エムコルスの珍しいブチギレに期待してた方は申し訳ございませぬ
↑

68話　作られたもの

遥か昔のこと。「シュリット」と呼ばれる人間は、人間が存在していた時代から、大富豪として知られていた。多大な成功を収めた苗字を持つ人間の名前が、受け継がれていき、そのままこの世界有数の貴族の名前となったとされる。

さまざまな研究も成功させ、古代では尊敬を集めていた「博士」と呼ばれる人間が代々育っていた。

そして、4代目で最大の転機が起こる。その頃から、ポケモンを嫌う人間が増えてきたとされる。ポケモンが知能を持ち、逆らうことが多くなったからだ。

さらにその昔に、「ポケモンを人間から解放する」という計画が実行されたが、阻止されてしまった、とも言われる。その計画を実行するのは時期早々だったのかもしれない。

だが、ポケモンを愛していた人間のその4代目は、その歴史を参考に、解放の次元を超えたとある計画を考え始めた。「人間を全て、消せないだろうか……」と。

まさにその計画は実行された。多大な財力を使った研究により、世界規模すらを超えるようなある病原菌が開発された。もはや、世の中には偶然その計画に気付いてくれる正義の味方などいなかった。そして、そのウィルスにより、人間だけが死に至っていき、そのウィルスの影響を受けないポケモンは生き残った。

しかし4代目自身も、その影響によりこの世を去った。貴族「シュリット」の人間も消え去り、ポケモンだけが残っていた。そして世の中は、ポケモンだけでも生活ができるようになっていた。

「シュリット」で飼われ、住んでいたポケモンもまた、生きていた。カーネルという名前のサンダース。彼も元飼い主に似て優秀だった。

そんな時、ダーグライと名乗るとある男から話を持ちかけられた。

「世界を変革させた者達よ、共に王とならないか」と。カーネルはその男の話に乗った。神々のポケモンとは別に、世を支配するということをやり遂げようとした。だが、そんなポケモンは特に必要とされず、それぞれの場所で思うがままに生きていた。そして彼自身も年齢には勝てず、時が経ち、新時代が間違いなく形成されたというタイミングで、カーネルはこの世を去った。

しかし子は生まれていた。人間時代のサイクルが、未だ続いていたのである。しかし、その子であるブースターの男は、悩んでいた。彼の名はブレインという。

ブレインと名乗る彼はポケモンの「能力」というものをほとんど把握している。しかも彼はなんと、全世界のポケモンの基準値となる能力を、全て数値化してしまったのだ。時にはそれは個体差が出て参考にはならないが、指標にはなる。その学習能力の高さは、魅力的だった。

しかし、彼はダークライから無能扱いされていた。ダークライ側が求める研究を全くこなすことができずにいる。

もっともその頃から、ダークライは世の中を暗黒化させる計画を持っていた。様々な不満、欲求が爆発し始めていたのである。

その様子を見たブレインは、ダークライに従えながら内心思っていた。ダークライを放置していては世が危険なのではないか、と。しかし、倒すにしても彼自身に戦闘能力はなかった。自分の能力を調べても、全く数値がない。物理攻撃の能力はあるが、それを生かす技もない。絶対に、倒せる力などなかった。

でも、どうにかしてこの学力を生かせないか。そこで彼は考えた。優秀な個体を生み出して、最強のポケモンを作り出して、あのダークライの力を奪い取らせる。この家には、古代からずっと、世界最強のメタモンがいる。このメタモンを利用して、能力を引き継がせてイーブイのタマゴを作る。能力の限界を超えたとも言えるイーブイを作るのだ。彼の生物学、遺伝子工学の知識なら、あらゆる研究技術を駆使すれば達成できることだった。

基本的に、タマゴの中のポケモンの能力は、親元に依存する。しかし、それを上回る可能性だってある。更に、その能力が形成されるのには様々なタイミングがあると言われている。そのベストのタイミングを見極める方法も彼は学んでいた。それも生かすのだ。加えて、自分自身の独自研究による操作で、限界以上の能力を持つように調整するのだ。

古代の伝記にあるような、ある人間の老人が作り出したミュウツーを作るのとはワケが違う。伝記によれば、人間は、ミュウというポケモンを見つけた後、様々なポケモンの戦闘データを加えてミュウツーを作り出したという。

しかしそれとは全く違う。違うポケモンを作るのではなく、本来と同じポケモンで、最強のポケモンを作り出すのだ。遺伝子を利用するわけでもない。まるで偶然のような、この世で最高の形で作るのだ。自分が考えて産み出した子供は、自身の能力より下であろうダークライには従わず、やがて危険な計画に気付き倒してしまうだろう。それをブレインは望んでいた。

やがてブレインは、これらの計画を快調に進めていった。

そうして誕生した二匹のイーブイ。♀、♂だ。最初にタマゴから産まれた♀のイーブイが、まず完全無欠。本来の最強の能力すら上回っているような勢いだ。後に産まれた♂のイーブイは、ややそれよりも見劣りするが、悪くはないはずの能力だった。ブレインはそれぞれ、♀のイーブイをエルザ、♂のイーブイをシュバルツと名付けた。すくすくとこの双子となった二匹が兄弟として育った後、事件が起こる。

ある日、シュバルツが、ブレインが残した記録で、失敗して能力が低く生まれてしまったという事実を知ってしまい、激怒し絶望したシュバルツがブレインを殺してしまった。

そこから分かるように、ブレインはある最大の失敗を犯していた。もちろん、彼は独自研究による結果を実験したことはなかった。シ

ミュレーションして、彼が調べようと思わなかったことがある。人格だ。彼の行動は、子供達の人格をねじ曲げる結果になってしまった。

独善的で、唯我独尊。人格破綻したポケモンが出てきたとはブレインは思わなかっただろう。そして、没落したも当然ではあるシュリットの兄弟は、ブレインの意思とは違うことを野望に持ってしまう。

確かに、ダークライに従わなくなったのはその通りだった。だが、その二匹がどのような暮らしをするのかということまでは考えてはいなかった。

ブレインは、ポケモンのことを研究することが生きがい。ダークライと共に、研究によって生み出した物で、世界の創世など考えたことがなかった。それが考えない理由だったのかもしれない。

自分達は最強であり、自分達以外のポケモンは全て支配できるだろうと考えた双子は、研究を進めた。その間、もはや協力する気配がないと考えたダークライは去って行った。開発品を一部持ち出して……。一応、ブレインの目論見は成功したことにはなった。

だが、子達も危険な研究をするとは思ってもみなかった。エルザとシュバルツは、ポケモンの自我を失わせ、目の前の者を全力で破壊することだけを考えるという人格を埋め込み、実質的に操ることができる道具を開発した。これも、シュリットの研究結果が残っており、データとして活用が可能だったからである。

これを世界に広め、やがて世を掌握するという計画が実行されようとしていた。しかし、それが一部で流出し、事件が起きたことで捜査が始まってしまった。流出させたのはダークライで、この二匹を潰すのが目的だった。

そして潜入捜査により、それを気付かれるが、ブレインにより誰も叶わぬような力を手に入れたエルザ達と戦って勝てるはずがなかった。結果、凄腕の探検隊ですら行方不明ということがあった。

帰ってこれないという時点で危険。まず、お尋ね者ポスターとし

て貼り出すのを、探検隊連盟ＰＥＬはやめさせた。
そして最終手段。並のポケモンならまず耐えられないような、大量のマルマインの大爆発で、丸ごと建物を爆破してしまうというものだ。しかし、勝手にやれば探検隊達の反感を買う。そこで、連盟のメンバーとギルドの親方に許可を求めて回った。９割がいいなら、実行される。
その結果、名のあるプクリンのギルドの親方以外は賛成し、その大爆発させるという手段は実行されることとなった。
それにより、建物は全損した。……ただし、地上の建造物のみが。地下が存在するなど、誰も知り得なかった。計画は未だ、続いている……。

69話　絶対的な力

凍てつくような狂気が充満する牢。暗躍しようとするダークライを倒す為に作られた二匹のポケモン、エルザとシュバルツ。見た目は普通でも、中身の能力は化け物じみていて、この世で勝てるポケモンはいないぐらいである。

そんな双子に、我を忘れたようにエムコルスは立ち向かっていた。つい今、目の前でパートナーが不安定な地面の罠にかかり、奈落の底へ突き落とされた。

その前から、彼は精神的に不安定であった。悪夢に近い不穏な夢に、経験したことのあるような不安、そして、今の大きな衝撃。いつも強みであるはずの精神面が崩壊しかけていた。

何一つ、物事がまともに考えることができない状態。まさに野生の獣と化していた。

ずっと、未来にいた者に言われ続ける、心の中に埋め込まれた闇。仲間の力で、心はその闇に呑まれずに済んでいた。

だが、闇が心を支配すれば、本来の自我が失われる。彼にとって心の拠り所であるチコがああして奈落の底かも分からない場所に落とされれば、そうなってしまうのも致し方ない結果なのかもしれない。

「無駄ですよ」

そんなエムと対照的な、冷静なエルザの口振。エムは獣の咆哮のように牢に響く音と共に、無我夢中の後先考えないボルテッカーでエルザに突進していく。しかし、エルザはその空気の流れで動きを読み切り、サイコキネシスで軽々しく動きを止めて再び後ろへと吹き飛ばす。　エムは壁に後頭部をぶつけたが、そんな痛みなど感じるまでもなく立ち上がる。頭部から水滴のように流れる血が顔を通る。それと相まって吸血鬼にでもなったような目で顔を動かして、

エーフィのエルザを睨む。
「今、さりげなく首を振りましたね。きっとおかしいなとでも思ってるんでしょう。何もおかしくありませんよ？　これが、普通なのです」
「……黙れ」
エムの心の中、心理の動きすらもエルザは見透かそうとする。
「こういった事実を叩きつけられても諦めないその顔……。実は虚勢。内心ではもう無理なのではないかと思い始めているのです」
「黙れっつってんだろ！」
エムはそう言いながら顔をぬぐう。
「今、血を拭くように片目を覆い隠しましたね。それは、目から心の内が漏れてしまう危険性を感じたが為に無意識に取った行動。本音を吐きたくないのが良く分かります。
それにその怒りの大半の原因は、今、奈落の底に突き落とした女にあるようですね。本音を吐けないのと繋ぎ合わせて考えると……。フフ、実に面白い方で。
あなたが今多く吐いてる息がそう言ってるのですよ」
「……てめえも血まみれにしてやる！」
全く関係がないような心理の分析をしてくるエルザに、ますます怒りを増幅させたエム。今度は体に加速をかけて側面に回り込む。
「図星ですか。しかしね、無駄だと言っているじゃないですか……。カゴの鳥があがいても無駄なように！」
意地を嘲笑うように一歩も動かずに攻撃を続けるエーフィ。何度やろうと、どんな方法で攻撃しようと、エルザが一瞬にして無力化し、そしてサイコキネシスで吹き飛ばしてしまう。
技術により残されたポケモンの力は強烈だった。その絶対的な力は、誰も寄せ付けない。エルザはこの戦いで負ける可能性はゼロであると確信している。
「……っ！　あの野郎……っ」
彼の体は最初に爆風に巻き込まれた時以上に疲弊していた。足元

には赤い血だまりができてきていて、痛々しい。
だが、そんな体をものともせずに、体から込み上げてくる怒りが、まだ意識と体を動かし続けていた。
それに対して、エルザのは表情はまるで無気力。エムの攻撃を圧倒的な威力のサイコキネシスで封じ、壁にまで投げるように吹き飛ばすという、同じことを繰り返していた。冷静さを完全に失っているエムは思考することなど全くない。今まで一度もあり得なかったはずの、攻撃が一つも通用しない相手。
何故通じないのかも、どうすればいいのかも、考えることがない。息も絶え絶えの状態ながら、再び目を合わせて立ち上がろうとする。しかし、体の一部分の力が完全になくなり、姿勢が崩れていく。
「へぇ、驚きましたね。これほどまでやられてまだやろうとは。何かに取り憑かれてでもいるんでしょうか？　ならそろそろ終いにしましょう。シュバルツ」
「……えっ？　ああ、分かったよ姉さん」
エルザの命令で、倒れたままのエムにシュバルツは近寄ってくる。さっき、少しだけシュバルツは過去の光景がフラッシュバックしていた。
無能な父、ブレインが、自分の手により命を落とす時、やたらと抵抗していたことを思い出したのだ。そんなブレインと、このピカチュウが、重なり合ってしまう。
「全く腹が立つよ。君の姿には。……っ！？」
シュバルツが何かを刺せる距離になった時、エムは瞬時に反応して起き上がり、シュバルツの顔面に、溜まり込んだ負の感情を拳に入れ込み、パンチを喰らわせた。
シュバルツは何が起きたか分からない痛みを感じた。顔が破裂しそうな衝撃だ。
「何の……つもりだ！」
まだ抵抗する気のエムに、シュバルツは驚いていた。
それに対して、エムの頭の中の思考は乱れに乱れていた。幻聴の

ように何かを伝えられた感覚すらある。
――何故いつもこうも、世は俺から何かを奪おうとするんだ？　何故？　ああ、そういうことか。だったら……。
「何のつもりかって？　この場所をゲス野郎のてめえらの血で真っ赤にしてやるってことだよ！」
息を荒げながらシュバルツに浴びせるエムの言葉。最近の性格からは想像もつかなくなったような言動だ。
「死に損ないが！　……ふぅ、どんなに悪あがきをしようが、今から君は実験体となる。
この事実に変わりはない。それは、僕達のような、天から選ばれた血統にだけに許されることなのさ」
一瞬だけ声を荒げて、すぐに元に戻る。刹那、シュバルツは激しい劣等感に襲われていた。
この能力に勝る者は姉以外にはいないはず。事実、家族なのだから、実質的に絶対的な力があるに等しい。
それなのに、この満たされない気持ち。全ては、あの愚かな父の行為に起因していた。自分の力は失敗して造られたもの……。そのやるせなさを直接父にぶつけた。
それでも満たされなかったこの気持ち。それをここに潜り込む愚者にぶつける。自分達だけが許されると思い込み、満たされない感情を、満たそうとしていた。
「ハハハハハ……くたばれっ！」
自嘲気味な笑ったシュバルツは、目の色を変えて襲いかかる。
返り討ちにしてやると、エムは攻撃を迎え撃とうと身を屈めて態勢をつくる。
「無駄だっ！」
「ぐぁっ……」
近距離で視界外にまで移動したシュバルツは、死角から飛び込み、エムの今の戦いで負った傷痕のある背中を討つ。
まるで弱点を討たれたように傷をえぐられて、背中が痛んでしょ

うがない。
「ふふふ……」
姉以外が愚民と考える彼は、弱者を砕いて、愚民の価値の軽さを証明して、自身の存在を浮かび上げようとする。今の彼も、同様だった。
まだ立ち上がろうとするエムを見て、すかさずダメ押しの一撃を与えた。もはや、全身を打ち砕いたつもりだ。
それでもまだ、エムは動いていた。しかし、柱が折れている建物のように、不安定で、体が震えている。
「……っ」
次の瞬間に、心より先に体の中の力を全て失ったエムが、力尽きてうつ伏せに倒れ込んだ。
――何がエレンシアだ……。何が探検隊だ……。何が、正義……？
その時、一瞬だけ落ち着きを取り戻したエムはその屈辱の思いが頭の中をめぐり、瞬時に心身共に弱まって意識が途切れた。
シュバルツの顔から笑みがこぼれた。
「汚い言葉で僕たちを侮辱した罪さ。後悔するがいいよ……」
この今までにない抵抗をしてきた男を倒し、支配したことで、彼は愉悦を覚えていた。
「まぁ、終わりましたね。あえて言いませんでしたが、こいつはかなり強力になりそうです。この袋のネズミを早速使用してみますか。まだこれより地下で、何匹か生きてるようですからね……。空気の感覚的に」
攻撃、心理、何もかもが読み取れるエルザ。いずれ支配する世すら見える。
そして、今から面白いことを起こせそうだと、趣味の一環として、新たな企みを始めた。

70話　共闘

チコは夢の世界にいた。全く力が及ばなかった戦い、最後は地底に落とされるように終わり……。そこからは気を失って覚えていない。

夢の中。しばしば、嫌なものを見せられることもある。だが、瞬時に頭の中に叩き込まれたショックが、悪夢を作り出そうとする。

夢の中には、生涯最高の相棒、エムコルスがいた。

その向こう側に現れたのは、紛れもなくエーフィ、そしてブラッキー。心なしか、いや、ここでは何故か間違いなく、奴らの体が大きくなっているように感じられる。

それなのに、呆然としている。ずっと、呆然と。

エムコルス、彼は奴らに立ち向かおうとしていた。しかし、エーフィとブラッキーに簡単に念力の力で操られて吹き飛ばされたり、急所を討たれたりと、何度も何度も返り討ちにされていた。

そんな光景を見ても、チコは立ち尽くしていた。体は動かない。恐怖だけが増していき、何もできない。

そして、チコは見てしまった。とうとう彼が倒れたまま動かなくなったことを。負けてしまったのか？　そんなこと、自分の中での常識では考えられない。

エーフィとブラッキーは、チコの方を向いた。背を向くと、処刑台のような針が見える。それでも体を翻して走りたいが、まだ動かない。そして、ゆっくりと歩いてあの二匹は近付いてくる。

やがて、あのエーフィのサイコキネシスで吹き飛ばされ、そしてあの針に背中から突き刺され、殺される。いやだ。いやだ。いやだ――

「い……おい、大丈夫なのかい？」
そんな時、チコの意識の彼方で、どこかでかすかに聞き覚えのある女の声が聞こえた。目が開き、声がする方に顔を向けると、そこにはあのポケモンがいた。手から三本の爪を伸ばし、頭上には赤い突起がある、黒の体をしている。
「う……。あ、アンタは、あの盗賊団『ＭＡＤ』の、マニューラ！？」
「ほう、覚えてたのか。その通りさ。じゃあ、お前もエレンシアのチコリータってことか」
チコを起こしたのはＭＡＤのマニューラだった。今まで、エレンシアは、このチームと二回、対面したことがある。
「ど、どうしてここに？　他の二匹は？」
「それはこっちの台詞さ。何故こんなところにいる？　いつも一緒なはずのお前の相棒はどうした」
チコが状況を掴めていないのに対して、マニューラはいやに冷静だった。
「そ、それは……」
「フッ、どうせ一緒にしてあの女（エルザ）にやられたんだろう？」
マニューラは手を腰に当てたまま尋ねた。
「くっ……」
気を失う前の戦いで、全く叶わなかった現実を思い出して、チコは唇を噛み締める。
そして、夢の中で見たことも思い出して、急に不安になる。何せ、エムは取り残されているのだ。相当な強さで、到底今までの敵の数十倍も強い。そんな相手に、夢の中のようになっているのではないかと、考えた。
「そうか。まぁ、アーボックもドラピオンも、あの女（エルザ）の手にかかってここの地下の最奥部のどこかに落とされてしまった。ゼロの島から帰る途中の突然の爆発から逃れ、施設を見つけた。何かを奪おうかと思ったが、それが失敗だった、というわけだ。

今は私はアイツらを探す為に、逃げてここまで降りてきた。だが、ここはダンジョンみたいなもので、未だに再会できない。代わりにお前に会ったけど」

表情で察したマニューラは、今までの状況の説明をした。迷いに迷った末に、チコを見つけたという。

「そう……。ところでアイツらはどうしてあんなに強いのか分かる？」

「知ってたら苦労はしないさ。……ただ、あまりにも異常すぎたとは思った。あんなのは絶対的な力としか言いようがない。

空気の流れだとかなんだとか言ってたが、その空気の流れの中に、奴には未来でも見えてるのかと思う。その力が自然でできたとは思えない。何か弱点があればいいんだけどね」

その強さは、自然なものでは不可能と、マニューラは思っていた。自分たちを含めた実力者達を、恐らく指一本触れさせず倒しているのだから、世の中のどのポケモンよりも強いに違いない。

だが、諦めるわけにはいかなかった。なんせ、倒せなければほぼ脱出は不可能なのだから。そして何より、許されまじきことを行っている連中に、負けるわけにはいかないのだ。マニューラは言葉を続ける。

「さて、そうなれば今から一緒に手を組むかい？」

今まで目を合わせていなかったチコだが、それを聞くと、流し目でマニューラの方を見た。

「……いいよ。こういうことも慣れてるし」

この状況は、どちらにとっても最悪であり、とてもお互い争う状況ではないということを、チコは理解できていた。以前ならば拒んでいたかもしれないが、経験上それはまずいということを理解している。

こういった件に、エムとは対立したことがある。結局、正しいかったと言えるのは彼の方。判断は彼に任せるものだと、それ以降強く思い始めたのだ。それで、敵であるはずのＭＡＤのマニューラを

受け入れようとしている。
「案外あっさり承諾してくれたもんだね。てっきり拒否するかと思ってたからさ。でもなんだ、やっぱり嫌そうな顔をしてる。私らが盗賊団だからだろう。
捨てた方がいい、下手な正義感は。それに纏わりつかれたら苦しいからね。ちなみに言っておくが、私はお前やその相棒よりも強い」
「何よ、エムはチャームズ相手にすら互角以上に戦ったんだからね」
少しムッとしたチコは、以前の出来事を持ち出す。その話の反応は、想像以上にマニューラには大きかった。
「なっ……チャームズと？　……まぁいい。今私にとって重要なのは、アーボックとドラピオンを探し出した後に、あの女（エルザ）をぶちのめすことだ。利害関係が一致している以上……」
チャームズという名前に少し驚くマニューラ。何せ、昔に戦った経験があるからだ。その話は置いておかなければと、昔の出来事の振り返りは打ち切った。
「うん、行こう」
チコはゆっくり頷いた。何がともあれ、チコとマニューラが共に同行することとなった。どこまでも奥深く存在する、エルザ達の施設の探索の為に。マニューラは、エルザによって離れ離れにさせられた、部下であるアーボックとドラピオンの行方を追う。
そして、チコは、まだエルザ達と対峙しているはずのエムの無事を祈っていた。
――無事だよね、大丈夫だよね？　私は力になれなかったけど、きっとやってくれてるよね……？
チコは嫌な予感を、寄せている信頼で振り払おうとする。それでも、不安は拭い去れなかった。

「何だコイツは！　俺と同じ姿だと！？　」
マニューラが探しているのとほぼ逆側の場所で、静寂とした空気の中で戦いが繰り広げられていた。同じ姿をした大きな蛇が、二匹。腹部に見るだけで恐ろしくなるような顔にも見える模様が、お互いを睨めつけている。
「アーボック、コイツはあのエルザだとかシュバルツだとかいう奴の手下じゃねぇのか？」
「違いねぇな」
ドラピオンと、アーボック。今、マニューラが探しているポケモン達がここにいた。彼らもＭＡＤのメンバー。昔は、エレンシアと対決したこともあった。どうやら、彼らも無事であったようだ。だがしかし、彼らの向こう側にも、同じ種族のアーボックがいた。
「ただの創世者だ。邪魔をするなら排除する」
「排除？　できるならやってみろ。それに、同じ姿の奴がいると気持ち悪いからくたばれ！」
アーボック（ＭＡＤ）は、大量の物体を、頂上から地上に落とすように、アーボック（創世者）に向けて投げつける。
対して、アーボック（創世者）も同じような攻撃で対抗する。お互い力は互角らしく、威力が譲らず、物体は側面の壁へと弾き飛んでいった。
「ちっ、なかなかやるな」
そうアーボック（ＭＡＤ）は言いつつも、あのエルザやシュバルツほどではないと感じる。あの力は群を抜いていた。
ゼロの島の帰りの、まさに突然の出来事だった。爆発が起きた後、地下施設を見かけて侵入したところ、エルザとシュバルツに発見された。
マニューラも含めて共に挑んだものの、全く力が及ばなかった。更に悪いことに、落とし穴にアーボックとドラピオンはかかり、突き落とされてしまった。だから、今の二匹はマニューラの安否を知らない。
今の気持ちとして、同種族に負けたくないという気持ちよりも、

ボス（マニューラ）と無事に再会したいという気持ちが強い。
そんな心境で、アーボック（MAD）は腹部の模様を利用してアーボック（創世者）を睨んだ。
「ドラピオン、お前もやっちまえ」
「おっ、お得意のアレか？」
ドラピオンはアーボック（MAD）の様子を見て、爪の毒気を高めて彼の横を抜け、アーボック（創世者）に向かっていく。しかし、動く様子はなく、顔がひきつっていた。
「おらぁ！」
静寂の中で一際目立つドラピオンの叫び声と共に繰り出されるこのクロスポイズンがアーボック（創世者）の胴体を切り裂く。彼は体が横を向いて、この狭い通路の壁に尻尾を挟まれた。相性の都合で、こっちの方がダメージが大きい。
脆くなった壁が、今の衝撃で一部分崩れて、破片が地面に飛び散った。
「同じクセに蛇睨みに気付かないとは、マヌケだな」
アーボック（MAD）はニヤリとしながら、そう吐き捨てる。威嚇に怯まなくても、技の効果は出るという典型だ。
続けてアーボック（MAD）は、爆弾状の泥をアーボック（創世者）に投げ付けた。
「……こんなのと戦ってる暇はねぇ。早く行くぞ」
腹部にその攻撃が当たり、相性抜群の攻撃で倒れてくれたのを確認すると、アーボック（MAD）はドラピオンに呼びかける。
ドラピオンは頷き、二匹は倒れたアーボック（創世者）を踏み越えて行く。
「ああマニューラ様。どうがご無事で……！」
「ボスならきっと大丈夫だ」
ドラピオンはマニューラの無事を祈っていた。それに対してアーボックは無事だと確信している。
だが依然として危険な状況には変わりがない。そしてまた創世者だとか言った奴が起き上がって追いかけてくる可能性も考慮し、アーボックとドラピオンは急ぎ足になった。

すると、今度は前方から足音が聞こえてきた。さっきのアーボックではないが、また別のポケモンであるのには違いない。音は軽い。だから、大体想像がついた。

「誰だ、まさかあの女（エルザ）なのか？　それとも……」

71話　悲愴

チコとマニューラは、地下施設より奥底、使った痕跡すら見られないような、地底の施設を探索していた。血なまぐさいところで、あちらこちらに血痕が見られる。濃縮された狂気が感じ取れた今までの場所とは性質が異なり、誰も長年来ていない廃墟にやってきたかのようだ。

「どうしてこんな場所まで……」

チコは首を傾げる。異臭漂うこの施設は何故あるのか。

「ここは随分と錆び付いた場所だ。普段ではここはもう使われないようになり、その代わりに処理場にしたのだろう。だからあんな落とし穴を設置し、度々そこから突き落すことにより処分する。お前やアーボック、ドラピオンが落ちたのは奴らの意図ではなく、偶然なのかもしれないね」

マニューラは、降りる度に古びた場所になっていくことからそう推測して述べた。

「なるほどね……」

チコはマニューラの説明に納得して頷く。そして、二匹の目に入ったのは、何のポケモンかも分からないミイラ化したもの。良心の呵責も感じられない。

「見るといい。ここにずっと死んだまま放置されているポケモン達。奴らが口走ってたように、こんなことをするのが娯楽の一部だと本気で思っている。これは同じポケモンとしての風上にも置けないと、お前も思わないかい？」

マニューラは表情を変えて、チコに尋ねた。

「盗賊団が良く言うよ。……言いたいことは分かるけど」

チコはマニューラがこれで怒ることを意外に思い、真っ先に浮かんだ言葉はそれだった。

「悪党にだってそれぐらいの良識はあるさ」
マニューラは、どこかで言ったような言葉を再び使った気がした。宝を探す探検は好きだったが、他人を思いやったり、ルールに縛られることが嫌で盗賊団を結成した。
強さに自信があったからこそその道を選び、そして失敗をしていない。決して後悔はない。戻る気もない。あのエルザ達とは同じ悪人としても、根本的な情緒と、倫理観が違うのだ。

仲が良いわけでもない、利害関係が一致しただけとも言える二匹は、そんな少量の会話を挟みつつ探索を続けると、誰かが苦しむような声が聞こえてきた。一匹でなしに二匹だ。一体誰なのか。
「まさか……。早く行くよ！」
「う、うん」
マニューラには声に聞き覚えがあったらしく、急ぎ足で声が聞こえる方に向かった。
「マニューラ！　あれはっ！」
「ああ、こんな予感はしていたが……」
そこにいたのは、誰かにやられたらしく、傷ついて倒れている、アーボックとドラピオンだった。
「マ、マニューラ様っ……！　ご無事で……！」
ドラピオンが真っ先にマニューラの存在に気付き、何よりも先にマニューラの無事を喜んでいた。だが、声と見た目が痛々しく、マニューラとしては安心できない。顔をしかめてアーボックとドラピオンの体の傷を確かめる。命に別状はなさそうだ。
「ボス……。そしてあの女（チコリータ）がいるってことは……」
マニューラの後ろにいるチコも、ドラピオンとアーボックの目に入った。そして、その時二匹は確信するが、とても言い辛くなってしまう。
「アーボック！　ドラピオン！　お前たちずっとこのままだったのか？　それとも……」

「いや……俺達は最初にもう一匹いた部下か誰だか知らないアーボックを倒しましたが、別の奴に倒されてしまいました……。以前なら倒せたのに、力及ばず申し訳ありません……」

ドラピオンはそう説明する。

「別の奴とは誰なんだ？」

マニューラは爪を立ててすぐに訪れるであろう戦闘に備え、更に詳しく尋ねる。

「ま、まず、俺の分身みたいな奴もまた追ってくる可能性もありますし。その、別の奴とは……。そ、それが……」

アーボックは言葉を詰まらせる。マニューラはそれを疑問に思うが、とりあえずエルザやシュバルツが再びやったという可能性はない。

つまり、全く別のポケモンがやったということになる。見ず知らずのポケモンは倒せたのだから、アーボックやドラピオンの調子が悪かったとは考えにくかった。

「来るよ！」

その時、アーボックとドラピオンの背後から誰かの足音が聞こえてきた。推察するに、その足音の正体となるポケモンが、二匹を倒した正体に違いなかった。

どちらにせよ、じきに正体は明らかになると、マニューラもチコも身構えた。

「……！」

だが、そうは行かなかった。本来なら、この瞬間そのポケモンに飛びかかっても良かった。だが、やがて姿を現したポケモンに対して、マニューラもチコも、今回ばかりは、とてもそんなことはできない。

表情以外の全てが一致している。種族だけでなく、身に付けた道具が、それを物語っている。

「エム……コルス……。嘘……でしょ？」

チコが呼んだ名前に偽りはない。信じられない。そこに立ってい

るのは間違いなく、ピカチュウであるエムコルス。彼がアーボックやドラピオンを倒してしまったのは間違いないだろう。

この状況であの二匹を倒すとは言い難い。要するに彼は今、正気ではない。でも、やっぱり信じられない。しかし、チコに対して何の反応も示していない時点で、普通のエムコルスではない。

その予兆はあった。実験台になれと、エルザやシュバルツは繰り返し自分達に向けて言っていた。しかしそれは、何かしら長時間かけて体へ改造でも施すものだと思っていた。だが、こんな短時間で……。

考える間もなく、エムは、何も言わず、表情一つ変えずに攻撃してきた。空中から一気に飛び込んでくる。どちらかと言えば近い、マニューラの方へと向かってきた。しかも、速い。

だがマニューラも速さでは負けない。素早く攻撃に対して反応し、飛び込みに対して反応し、爪で迎え撃とうと、少し飛び上がる。だが、エムはそれを見たのかすぐさま姿勢を変えて、尻尾を爪に叩きつけて、直後にマニューラの顔面にパンチを思いっきり叩きつけた。

「ぐぅっ……！」

地面が割れ、埃が大量に立つほどの威力で叩きつけられたマニューラ。起き上がって目の前を見ると、やはりそこには表情一つ変えていないエムがいた。

「そ、そんな……。エム！　目を覚ましてよ！　私が分からないの？」

今のマニューラとの交錯の一部始終を見たチコの叫びも、まるで声として届いていない。それどころか、うるさい雑音を発しているとしか見られていない。そして、エムはやがてチコの方へと目を向けた。もちろん、誰だかを認識をしていない。見たこともないスピードで突っ込んでくるエムを見て、チコはとっさに避けるしかなかった。だが、避けても再びこちらに光を失った冷たい目を向けて、電光石火で突っ込んでくる。

「ひっ……」

攻撃を避けながら、チコはかつてない恐怖を感じていた。まだ臆病で恐れたくなるものが、世の中にあっただなんて知らなかった。しかし、何をどう恐れているのか、自分でも分かっていなかった。体が、夢の中で見た時のように動かない。夢が現実になってしまったかのようだ。

「チコリータ、何をしている！　そいつはお前が知っているエムコルスではないんだよ！　容赦をするな！」

マニューラが、無力に逃げ回っているだけのチコを見て叱咤する。しかし、それでもチコは攻撃する気のない動きを変えようとはしなかった。

悲しいが、これが現実であるのだと、直視をしたくなかったのだ。何が彼を変えたのか、頭で全く理解ができない。今のエム以上に、頭の中が混乱していた。

71話　悲愴（後書き）

ｔｗｉｔｔｅｒではもっと文字数いったかのように言ってたけど、分割することに決定しました。

72話　激情

ＭＡＤのアーボックとドラピオンを倒した正体は、他でもない、エレンシアのエムコルスだった。

その姿を見れば見るほど、絶望の淵に追い込まれそうだった。エムコルスの喜怒哀楽も何もない、光のない無機質な目線が、チコの目の中に入り込んでくる。その時、あのシュバルツが、陰から現れる。

「ふふふ、宴は楽しんでいるかい？」

「お、お前はっ！　エムに何をしたっ！」

チコは、感情が全て恐怖からあの笑っている顔のシュバルツに対してへの怒りに打って変わられる。

「この男は自身に絶望し、僕たちと共に歩むことを決心したのさ。諦めるといい」

「そんな嘘が通じるとでも……！」

明確な嘘を付くシュバルツを、エムを止める前に叩きのめしてやりたい衝動に襲われる。

にしても、シュバルツがここにまで来たのは意外だった。しかしこの様子だと、お互いに手を取り合う仲間の二匹が潰し合うという地獄絵図を楽しみに来たとしか思えない。

「……しまった！」

シュバルツに話しかけているその隙を突かれて、チコはエムの切り裂くような振り方のアイアンテールで突き飛ばされてしまう。

「うっ……！　本当に、誰だか分かってないの？」

「おい！　そんな奴の嘘に騙されるんじゃない！　エムコルスは操られているに過ぎない！」

「……そ、そんなのは分かってる……」

ひたすら目の前にいるポケモンを全力で攻撃をするだけのエムは今、大事なパートナーを攻撃しておきながら、未だ何一つ表情を変

えない。とはいえ冷静に考えて、彼は自我を失っているだけなのだ。それをチコはそう言い聞かせようとする。だが、対処法が分からない。

「さぁ、本当にそれはどうかな。精神的に弱かったりしなければ、こんなことにはできないのさ。一生効果が続くとされる洗脳のタネの効果は発動しない」

初めてシュバルツが、使った道具の名前を言った。洗脳のタネ。特に思考を持ち合わせさせてはないことから、操りのタネとも言える。

ここで開発された、タネの一種であるのに間違いなかった。それを使われて、エムはこうして操られているのだと、チコとマニューラは確信した。

しかし、精神的に弱かったり、という条件が引っかかった。勇敢な彼が精神的に弱いだなんて考えられない。一体どういうことなのか理解ができない。

「まぁ、誰か高めの能力を持つポケモンを実験に使うという目標は達成された。想像以上の結果さ。この廃棄所の地面が破壊されるぐらいすごいじゃないか。体の限界まで力を開放させたらこれだからね。

ここからの運命はただ一つ、死のみ。愛しの彼に殺されるか、もしくは殺すかの、どちらかしかない。最高の展開だろう？　じゃあ、僕はこれで……」

「待てっ！　逃げられると思うな！」

シュバルツは語るだけ語って、その場から去ろうとする。マニューラはすぐさま彼を追いかけようとする。しかし、エムがそれを逃がすまいと、マニューラを超えるスピードで追った。

「なにっ！　私より速いだと？」

このままだとやられる、とマニューラが思ったその時、ムチが彼の体を捕らえた。チコの反射的な行動だった。ツルのムチを精一杯伸ばして、決して大きくない体を巻きつけた。

追って潰してやりたいけれど、エムがいて追えない。だからマニューラに代わりに、と思っての行動。

「……よし。私は奴(シュバルツ)を追いかける。このエムコルスを倒せるのは、その戦い方を良く知るお前しかいないだろうね。そいつは頼んだよ！」

「あ、ちょっと待ってよマニューラ！」

お互いにまともに今後の作戦も言わずにマニューラは奥へ、シュバルツを追って去って行ってしまった。それだけ追いかけるための時間の猶予もなかったのだ。それに、マニューラはシュバルツ単体なら小物だと踏んでいた。

これで1対1の状況になった。そしてムチで捕らえた今はチコの方が有利であったはずだが、マニューラの判断とは裏腹に、まだ本気でやり合う決心がまだ付いていなかった。

それより別の方法がないかと思っていた。彼とは本気で戦いたくない。

ほんの少し躊躇しているうちに、エムはすぐにムチを引っ張ってきた。小柄な体からは信じられないぐらいの力強さに耐えきれずにチコは体ごと引っ張られ、巻き付けていたムチを体から離してしまう。

「うわあっ！」

エムは掴んだムチで、体ごと物を投げるように軽々しく投げつける。エムは、チコが自分の手によって狭いこの場所の壁へ叩きつけられても、何一つ何かを考えることはない。

「……ね、ねぇ、答えてってば……！　私だよ、チコだよ、チコリータだよ！　良く見てよ！」

チコの、目をうるわせながら叫ぶ、悲痛の声。だが、それでも何もエムが変わる様子はない。

だが、今の投げ付けられた衝撃の痛みの中で、彼のことを悟った。精神的に弱くなっている前兆はあった。ここ数日、彼は何となく様子がおかしかった。それに、爆発に巻き込まれてここに閉じ込め

られた後、いつものエムなら前向きなはずが、明らかに後ろめたく、ネガティブだった。

それが、精神的に弱って、簡単に自我を乗っ取らせてしまうことに繋がってしまったのだと、チコは分かった。そうやって心が弱くなってしまった原因が、チコには何となく分かる。

（……そうなのかな。本当は、最初からエムも臆病だったのかな……）

基本的に彼は強がっている。他者に弱さを見せようとしない。だが、それは心の弱さをひた隠しにする為だったのか。

戦いとは全く別の部分。彼は戦いには強く、より一層弱さを隠す自信になっていたのかもしれない。しかし、今さっき、彼は全く叶わず、その自信が砕かれて……。

もしかしたら、もっとも重要なファクターは、自分が死に至ったと、エムが思ってしまったからだかもしれないと、チコはようやく考えついた。そう思わせるに十分なぐらい、あの穴はとても深かったように記憶している。不思議ではない。そう考えると、それが彼の心に大きな傷を付けたことは想像に難くない。

だが、チコは、それを含めてエムの心の中を想像しただけで恐ろしくなってきた。もしかして、半分程度しか、今まで知ってこれていなかったのかもと思うと、少し嘆かわしい。

唯一、自分にだけ本音を語ってくれた。今日の、この場所に入り込んだ時だって。しかし、それでも根本が足りなかったのかもしれない。

少し心を鬼にして、捕まえて何とかしようと決心する。全力で力を出せば今度は何とかなると思い、ムチを伸ばす。しかし、エムはそのムチをの上を渡って高く飛び上がる。信じられない運動能力の高さに、今まで見ておきながら舌を巻いていた。いや、正直今までより明らかにすごい勢いのように見える。

だが、次に来る攻撃は大体予想がつき、頭の葉からリフレクターを作る。案の定、エムはアイアンテールを出してきた。だが、その

攻撃は簡単に壁を破り、出の早いサマーソルトをチコに喰らわせた。
「わ、忘れてた……。エムはボルテックリングを持ってる……。それは防御の壁を突き抜けて攻撃できる効果が……くっ……」
チコはエムの所持品の効果を忘れていた。迂闊だったと思った頃にはもう遅い。疲れが最初から溜まっていたせいか、体の力が抜けて、うつ伏せに倒れた状態から起き上がれない。
更に言えば、エムも身体中傷だらけなのにも関わらず、全力を出し続けている……。
そんな一時の心配も束の間、エムは攻撃の手を緩めなかった。
倒れているチコに向けて、嵐が吹いているかのような、強い電流の雷を放ってきた。チコは僅かにその場から這いずり、直撃を免れる。しかし、その電気の一部が地面から伝わり、チコの体を麻痺させた。
「うぅっ……。痺れが……」
チコは、実際にエムに痺れさせられたことはなかった。動こうとしているのに神経が鈍って動かないことは、初めての経験だった。
それでも手を止めない。徐々にチコに歩み寄るエムの右手の拳には、ドス黒い気が立ち込めている。
「エム、やめ……て……。お願いだから……」
チコは、相棒がいざ敵になると、どうしようもできないのかと、自責の念にとらわれる。
それでも相手は、ずっと一緒にいた、あのエムコルス。乞うしかない。
だが、エムは表情一つ変えずに、チコの目の前に立ち、邪悪に思える気を溜め込んだ右手を振り上げ、チコにそれを叩き付ける姿勢に入る。
「しっかりしてよっ！　エムコルスっ！」
この麻痺という状態異常を、痺れる体にムチを打つようにして出したアロマセラピーで治したチコは、エムの目前でそう声を張り上げた。

「……」

すると、エムは無言ながらも攻撃を止め、チコから離れる。だが、表情は相変わらず無愛想。そして目も冷たい。状況も変わらない。

今のは何だったのか。アロマセラピーの香り、もしくは声に覚えがあったのか。ただ単に、動かれて技が当てられないと判断したからなのか。

ともかく、僅かに可能性が見えたような気がした。それと同時に、チコはあることを思い出した。

（そういえば、ポッチャマがムウマージに誘拐されていなくなったあの時、ポッチャマは襲いかかってきた……。だけど、エムがあっさり倒したらすぐに元に戻った。つまり、あれも……。ということはできればしたくはなかったけど、ここで倒すしか方法は……）

チコはとある事に気が付いた。ポッチャマにも一瞬我を失っていた時があった。しかし倒せば取り戻していた。つまり、エムにももしかすれば同じことが言えるかもしれない。でも、一番したくなかったことである。

しかし、このままだと危険。いくら言葉をかけてもエムは正気を取り戻す気配はないし、チコの方も体力が持たない。だから、やるしかない。これ以上、彼に遠慮してはいられない。

だが、ポッチャマとエムとでは、今やって分かる通り、実力が段違い。しかも、普段は無意識に抑制している力すらも解き放っている。倒すのは簡単なことではない。以前、勝負をしたことはあって、引き分けていたが、あの時は途中で終えたからこその結果だ。本気で最後までやったら分からない。今の彼には、情熱がない。ただそれだけが、彼自身を弱くしているファクターだった。

そして、チコは今まで、少し彼に頼りすぎていたかもしれないことに気付いた。彼がこの世界に戻ってきてから、チームリーダーは、状況によって変えようと決めていた。だが結局、中心にいたのはエムコルス。立場関係的に言って彼が上である感は否めなかった。それも、彼の負けず嫌いな性格が無意識に出ていたからなのか。

それでも、ためらいがあった。一番、自分を心から信頼してくれて、冷静で、でも一緒にいるうちにちょっと抜けてる一面が目立ってきて、本当にパートナーなんだなと思える存在。一度失ったけれど、奇跡が起きて戻ってきてくれた。その時に二度と離れたくないと思った。そんな彼に、多少ならともかく本気で攻撃すれば、今のあの体には致命傷を与えてしまうだろう。どうしても後ろめたい気持ち、そして恐れがある。

「……挑発？　どうして？」

手をしゃくる仕草を取り、再び臨戦態勢に入ったエムを見て、チコは決心が付いた。「やれ」という言葉が、頭の中で響いてくる。それが、躊躇する心の壁を消し去るようだった。

「そういうこと……ね。本気でお互いの実力を確かめ合う、最初で最後のチャンス……。そう、そうよね。エムコルス」

チコは、エムと目を合わせる。感情のこもらない目から、苦しみが伝わってくるようだ。その苦しみから解放させようと、チコは意を決した。後のことなど考えずに、今は目の前の自分を失った相棒（エムコルス）を倒すことだけを考える。

チコは生の輝きを失った相棒（エムコルス）を正面からさっきまでのように臆することなく迎え撃つ。ただ、負けるわけにはいかないというがむしゃらな感情が、体を突き動かしていた。

73話　Ｓａｄ　ｂｕｔ　ｔｒｕｅ

チコは、我を失ったエムコルスに向けて、容赦せず葉っぱカッターを放つ。きっと、初めて放った本格的な攻撃。

だが、何とも言わずエムは身を屈めて避けた。しかしこれで終わりではなく、葉は小さな円を描くようにして再び反対方向へ進路を向け、エムの背中にと向かっていく。

そのチコの攻撃のテクニックの記憶がないのか、エムは後ろを向かなかった。チコは決まったと思った、しかしエムは、まるで背後に目があるかのように、今度は後方転回して、その二度目の奇襲もかわした。感情が無になった状態において、察知能力が普段より高くなっている。

そのままの姿勢で、今度は尻尾を向けて叩きつけてくる。

チコは横っ飛びに避けると、その勢いでエムは地面を叩き割った。整備されていかいが為に溜まった埃があがる。

「ごほっ、ごほっ……」

チコが思わず咳き込むが、エムは埃をもものともしない。彼の体は、痛みを感じておらず、しかも怪我をしていると言える状態。だから、埃などに影響されることがない。

エムはチコの方に向き直り、直前状に１０万ボルトの電圧を放った。普段より激しく、耳をつんざく猛々しい音の電撃はもしかすると、２０万ボルトぐらいにもなっているかもしれない。

しかし、チコはそれからは逃げようとせず、葉っぱカッターを電撃の中に入れるように放った。電撃はチコに直撃するが、葉を盾にしてできるだけ衝撃を抑えようとした。

一方で、葉の刃は電撃を何事もないように通り抜けた。電気タイプの効果を半減する草タイプ。チコはそこから考えて、電撃に押し殺されないと考えた。

そして、思い通りに葉が、電撃を放った直後で動いてないエムに

直撃した。既に、体のことを考えずに激しい攻撃を続けていた彼には致命傷となり、威力に耐えきれずに地面に倒れた。

「くっ……」

チコは今の１０万ボルトを受けきった。しかし、ただならぬ威力。心の中に溜め込んできたものを、吐き出したかのよう。体の麻痺は免れたものの、無茶な行動で、甘く見ていたと感じた。

「はぁ、はぁ……でも、今だ！」荒げる息を抑えて、チコは、立ち上がろうとするエムを上からのしかかって押さえつけた。

「さぁ、正気に戻って！」

チコは間近に近寄って改めてエムに声を呼びかける。

「……ぅぅぅ」

エムは手を一瞬少し震わせて、獣のうなり声をあげて、立ち上がるのにのしかかって邪魔なチコを押しきろうとする。

「な、なんて力なの！」

その体からは考えないような力で抵抗するエムコルス。体の自由を奪うことで、我を取り戻すことを頭で考えさせようと思ったが、やはり無駄だったらしい。

それでも、躊躇するかのような手の震えは、ほんの少し効果があったことを意味する。しかし、それも一瞬。

「……ぅぅ」

再びうめいた後、エムは、力を溜め込んだもう片方の手でチコを殴り飛ばし、身の自由を取り戻す。

「きゃっ！」

チコは身を吹き飛ばされるほどの渾身の一撃で悲鳴をあげる。せっかく追い込んだのに、また正気を取り戻させようとして裏目に出た。

それに、体力がもう持たない。本当なら、もう終わらせてしまいたいぐらい。

（やっぱりエムは強い……。でも、経験だって何だってほとんど一緒じゃないか！

今やって分かった。情熱を失っていると。そんなエムに負けやしないっ！）

チコはそう思って、同じく体力を失いかけているエムに向けて、思い切って体当たりを仕掛ける。だが、正面からの攻撃など物ともせずに横に避け、直後に横に一回転してアイアンテールを叩き込む。チコはその行動を読みきっていた上で縦方向に避ける。

（次は反撃しようとしたらサマーソルト……）

そう読んで攻撃の当たる距離内にチコが入り、直後に横方向に避ける動作に入る。

（やっぱり！）

予想通りにエムは尻尾サマーソルトを放ってきた。空振りをして宙返りした状態になっている所に、チコは飛躍して体当たりを背中に叩き込んだ。

エムは姿勢を崩されて、頭を地面にぶつけてうつ伏せになるが、すぐさま立ち上がり、チコの方に向き直る。随分と、体力を消耗しているのが目に見えた。

そして、エムは身構えて、体を電気で包み込んだ。その瞬間、チコは察した。

（来る、ボルテッカー！）

エムは遂に、必殺技を出そうとする。これを超える威力を持つ技はそうそうない。

だが、チコは持っていた。それに対抗するだけの、草タイプ究極の技、ハードプラントを。しかし、それには大きなリスクが伴う。これで倒せなければ、間違いなくやられるだろう。つまり、これは最後の攻防。

チコの頭の葉が光に包まれる。体から力が湧いてくる感覚がある。つまり、あの新緑が発動し、体が限界を迎えていることが分かる。

エムはチコに向けてボルテッカーで突っ込んできた。チコはそれを迎え撃とうとする。その時、戦う前に駆られた思考とは別の気持ちが頭の中をよぎった。

エムコルス、君はとても頼もしかった。

元々ね、探検隊誘ったのって、あれは実はほとんど勢い。いい戦いぶり見たってのもあるけれど、本当は、仲間が欲しかった。だって、意気地無しだったし。

いつでも、冷たいようで優しかった。弱虫だった私を差し置いて、誰にでも立ち向かって、勇気をくれた。

でも、一緒にいても、常にどこかで距離が置かれてたよ。何もかも違う気がしたから。元々人間だから？　ニンゲン？　そんな風には感じたことがなかったけど、

彼は強すぎた。戦いだけじゃない。心が強い。何事も冷静にこなすものだから、世界が違うんじゃないかと思ったよ。

でも、本当は違う。自身の感情を無理に押さえつけているよう。耐えきれずに、怒ったり、隠すように涙を流したり。結局、私と同じ。その時、ずっと一緒にいたいと感じたんだ。

そのおかげで、お互いが幸せな時間になったはず。だから分かるでしょ？　究極の技を交じり合わせて、今度こそ――

チコは、一瞬のうちに想いを巡らせた。それが力となり、両隣の壁を破壊しながら、木を地中から生み出し、電気に包まれたボルテッカーを包み込むかのように、今まで使ったどのハードプラントよりも、大きく強い木々が、稲妻の音とぶつかり合って響く轟音と共に生み出され、目の前を埋め尽くす勢いで奥へ放たれていく。

エムは地面から出た木々の中に身を包む電気の壁と共に突っ込んだ。

木がボルテッカーの勢いを殺していく。だが、エムはハードプラントの中でも物ともせず、攻撃の動きを止めなかった。そして、ハードプラントを打ち終え、木々がなくなる最後尾部分から、エムが飛び出してきた。

「……っ！」

エムは、勢いのなくなったボルテッカーをチコに、まるで普通の体当たりのように当てた。

それでもチコは反動で立つだけの気力を失い、その攻撃に耐えきれず横向きに倒れた。

そしてエムは、今の無尽蔵な勢いのハードプラントを無理矢理突き抜けようとしたが為に、ますます大きな傷を負い、そして、今のボルテッカーで体の力を使いきり、うつ伏せに倒れ込んだ。

「ああっ！」

チコは体をふらつかせながら、すぐさま倒れたエムの元へ近寄った。酷い傷だった。一体、どれぐらいの戦いをしてきていたというのか。

「ねぇ、大丈夫!?　エムコルス!?」

チコは赤い瞳を潤わせながら、体を揺する。息があるかを確かめると、それは無事だった。

だが安心できない。体のあちこちが傷だらけ。これは自分だけでやったのではなく、あのエルザ達によるものであろう。諦めずに戦った結果かこれに違いない。

エムは目を覚まそうともしない。完全に意識を失っている。

「どうしよう。エムがこれじゃあ、置いて先に行けないよ……」

「おい、無事だったか？」

「やっちまったのか」

チコが、先にシュバルツを追いかけたマニューラを追いたくても、エムの介抱が最優先で、どうしようもなくなったところに、ドラピオンとアーボックがやって来た。

「アンタ達は……」

「ようやく動けるようになったぜ。ちょっと探したら、明らかに戦いの跡が残ってたから探すのは楽だったな。そいつ、前とは段違いだったから困ったもんだ」

アーボックがそう説明する。操られたエムに勝てなかった。最初の頃に比べて、付けた実力が段違いであることも示している。

「そういやマニューラ様はどこへ行かれたのだ？」
ドラピオンが、マニューラがいないことに気付き、尋ねる。
「マニューラなら、シュバルツという男を追っていったよ」
チコが言った。
「何だと？　なら俺達も早く……」
「待てドラピオン。ボスの足を引っ張るだけだろ」
「し、しかし……」
「ボスの戦力になるのなら、チコリータに先に行ってもらえばいい。俺達が倒せなかった奴を倒したってのはそういうことだろう。さっきも行動してたようだしな。このエムコルスとやらは俺達が面倒見ておくからな。それでゆっくり後を追う」
アーボックはそう提案する。もはや最初から味方であるかのような前提だ。
「う、うむ……。それでいいか？」
ドラピオンは、アーボックの提案にしぶしぶ納得して頷いた。
「いいけど……。しっかりとお願いね」
時間がないと、提案を承諾し、痛む体を押しきって、チコは独り身で挑んでいるマニューラを追って行った。

74話　決死のバトル

シュバルツはずっと、言い聞かせていた。自分は優れた一族の一員である。自分は高貴なポケモンである。決して劣ってなんかいない。負け犬ではない。才に恵まれずに落ちぶれてなんかいない。

なら何故、心の内からこんなにも嘲笑う声が聞こえてくるというのか。今だって、一匹を我らの手で操り、思うがままにしたではないか。この全く潤うことない、乾いたままの感情が分からなかった。

幸いにも、追ってきてくれた獲物がいた。血祭りにあげようと、シュバルツは考えた。

「やぁ、よく追いついたね……」

追ってきたのは猫型のポケモンのマニューラ。あの餓鬼共を倒したその前、逃げていった奴である。シュバルツはマニューラに向き直った。

「さぁ、とりあえずアンタから倒させてもらうよ」

マニューラは鋭くできた大きな爪をブラッキーのシュバルツに向ける。

素早さに長ける彼女は、恐れをなして逃げる者を決して逃がさない。

「できるのかい？　この僕を倒すだなんて……」

「できないならアンタを追いかけたりはしないよ！」

そう言ってマニューラは両手の間に小石のような大きさの氷を数個作り出し、シュバルツに向けて両手をクロスさせて飛ばす。

だがその石はシュバルツには当たらず、シュバルツはマニューラの視界外へと消えた。

さっき戦った経験のあるマニューラは、後方へ回転する。すると目の前に横向きでシュバルツが出てきた。間一髪だが、彼の騙し討ちが失敗した。隙だらけの所にマニューラは爪で顔を切りつけた。

「くっ……！」

「アンタはやり方がワンパターンなのさ。攻撃的な戦いには向いていない無能だ。実は、エルザとかいうゲス野郎のサポート役に徹しているとか、ね！」

一気に攻勢に傾いたマニューラが、今度は爪を食い込ませるように冷気をたたみ込む。

「この……」

「信じられないのかい？　覚えておけば良かったのにね。ＭＡＤに逆らったらこうなるのってことを。

本来なら降参すれば許してやっても良かった。だが今回は認めない！　だってね、情緒と倫理観に障害のあるアンタらを誰が許すと……」

反撃のそびれを見せないシュバルツ。マニューラは手を止めない。

「思うんだいっ！」

冷気のこもる右手をシュバルツの顔に続けざまに叩き込んだ。

しかし不思議なのは、シュバルツがなかなか倒れる素振りを見せないことだった。

「僕に障害がある？　馬鹿馬鹿しい。自分より等価かそれ以上じゃない奴は死んでもいいのは当然じゃないか」

「……イカレてる」

シュバルツの言葉を聞いて、マニューラはそう吐き捨てた。

この男もあの女も精神構造がこの世のポケモンとは違うのだと確信した。

マニューラは少し距離を置いて氷の礫を再び飛ばす。シュバルツは今度は避けずに受けた。しかし代わりに毒を飛ばしてきた。

「っ！？」

思わぬ反撃に気付かなかったマニューラ。体の中に、力を弱らせていく猛毒が侵攻してくるのを感じた。

「さっき無能だと言ったね。有能であると証明してあげるよ。この体でね」

シュバルツはそうぼやいた。彼は打たれ強い体を持っていること

にマニューラは初めて気付いた。
つまりこの男は隠していたのだ。強さを見せつける為の戦い方。それを破っても、この耐久型の戦い方が出てくる。
相手は毒で弱らせていくが、自身は一向に倒れない。やがて相手を毒で倒す。通常とは異なるズル賢いやり方だ。
探検隊は普通はそんな戦いはしない。また、最初からこうしない時点で、彼自身も望んでいなかったのだろう。
「毒……。さすがに真っ向勝負じゃ勝てないと分かったのか」
「結果が全てさ。勝てばその正しさが認められ、負ければ裁かれる。それが歴史さ」
「そんなことをクズの分際で……くたばれ！」
急所を探し出そうと、横に爪を振り切る、シュバルツはバックステップで避けるが、すぐさまマニューラは氷の礫を投げつけて追撃する。
礫を受けて動きが止まった所にマニューラは急所と思われる顔の下の胴体に鋭く尖った爪を叩き込んだ。
「き、貴様……！」
「ふっ……。もっと攻撃的に来なよ」
今の辻斬りが急所に当たったらしく、彼の息が一瞬詰まった。急所を狙いやすい特徴のこの技ならではだった。だがマニューラの体にも、シュバルツの放った毒が効いてきた。
（とはいえ、早めに勝負をかけないと……）
体を生き物のように蝕んでいく毒。このままではシュバルツの思うつぼだった。
そう思った時、マニューラは体が楽になっていくのを感じた。体から突然、毒が抜けたようだった。理由は分からないがとにかく、そのようだ。
シュバルツは暗黒に染まった波導を飛ばしてきた。動きが鈍ったと確信したのだろう。しかし、マニューラの動きは俊敏に戻っていた。

マニューラは壁を蹴って後回転し、漆黒の「球」の上を通過する。
そして、シュバルツの目に爪を叩き入れた。
「め、目が……！」
右目を潰されたシュバルツ。半分の眼差しが使えなくなった。潰された目が、現実を直視するハメとなる。
――なんだこのザマは……！　僕では所詮この程度なのか？　……それはそうだ。元はと言えばあの愚かな父親が悪いのだ。仕方がない。諦めもつく……。
愚民をいたぶることでは自身はごまかせないのか。そうシュバルツが思った矢先の出来事だった。姉であるエルザが背後から近付いてくる。そうだ、姉だ。姉がいる限り、終わりはない。考えを改めようとした。だかそこで、彼の思考は止められた。
「なっ……！」
マニューラは信じられない光景を目にしてしまった。シュバルツがただのあのリンゴへと変えられてしまった。
変わり目に映るポケモンはエルザ。そのエルザは何のためらいもなく、シュバルツであったはずのリンゴを踏み潰して粉々にした。それはすなわち、ブラッキーであるシュバルツの存在の消滅を意味した。
「ア、アンタ何をしたっ！」
「何って……処分ですよ。思い通りに動かないコマなど不要なのです。
今のように、実験材料を扱えないようだと、計画に支障をきたす。そうなると、処分するのが一番合理的なやり方なのですから」
「その……実験材料にも、扱いの難易度に差が出るとは思わないのかい？」
同じ悪党としても、根本的な倫理観が違うが為に、マニューラはあえて話を合わせるようにして尋ねる。
「いいえ。私どもより上のポケモンというのは存在しませんので、関係ありません」

冷ややかな声と相まって、何かの機械の話すような言葉としかマニューラは思えなかった。
「大体、アンタは何が目的なんだい？」
「最近、種の効果に興味を持ちましてね、それに関する研究を……」
「とてもそれだけとは思えないけどね？」
マニューラは爪の中に冷気を溜め込み、礫を作り上げる。
「フフフッ、さぁ？　どうでしょうね」
「……話す気はないらしいね！」
エルザは自身の野望は語る気がないと思ったマニューラは、話すだけ無駄だと思い、エルザに向けて氷の礫を放つ。
ここであまり行わない策を練る。礫の直撃は確認せずにスライディングし、念力で操られないようにする。
エルザの脅威は何と言っても相性の影響を微塵も感じさせないという点。エスパータイプの技が効いてくるなど初めての経験なのだ。相性を覆されるという脅威。
だがエルザは何事もないように礫を横に念力で追い払い、次に下から接近するという予想通りに攻撃を仕掛けてきたマニューラをサイコキネシスで動きを止め、壁へと突き飛ばした。
「くっ……」
エスパータイプの技がこんなにも体にダメージを与えることが、やはりマニューラには不思議だった。爪を立てて、エルザの方を睨む。
やはりあのリーダーのエルザを倒さねば、脱出は不可能。だが、そのリーダーはこの世のものとは思えない力を誇る。
「あなたは仲間の救出の為に、勝てないと分かっている相手に戦いを挑んでいる……。しかし、次にまた実験材料がやって来る……」
心情を見透かしてエルザがそう言った時、マニューラはまさかと思い背後の足音を確認する。
後ろを振り向けば攻撃されるので、振り向かない。その時マニューラは見た。ほんの少し、エルザの様子がおかしいように見られた

のだ。
「マニューラ！　アロマセラピーの反応があったと思ったら！」
チコの足音、そして、名前を呼ぶ声が聞こえてきた。どうやら追いつくことができたようだ。
どうやらマニューラの毒を抜いたのはチコで間違いない。アロマセラピーは状態異常を治す効果があるからだ。
「チコリータ……。お前がここに来たということは、やるべきことは残り一つ」
「分かってる。……でも、もう一匹は？」
チコは、エルザが静かに立っているのを確認するが、もう一匹、シュバルツがいないことに気付く。
「ああ、信じられないかもしれないが、奴は仲間を手にかけ、存在を抹消した」
マニューラの淡々とした語りを聞いて、それだけで事実だと理解ができた。今まで色々なお尋ね者を見てきて、あり得る話と思ったからだ。
チコは「安心感」と、エムコルスをあんなことにしたあの男に報復攻撃ができない「失望感」の両方に抱かれる。
「……で、残りはあのエルザってことね」
「そう。絶対に許してはならない奴だ」　チコとマニューラが体の向きをエルザの方に向ける。
チコは自我を失ったエムと対峙して負った傷も、治癒能力で回復した。新緑は失ったが、そうなるまで追い込まれる戦いというのは理想的でない。
しかし、そうならないといけないぐらい、相手は強大だった。
「こちらを睨む材料二匹。力を合わせれば勝てると可能性ゼロのことを考えて、こちらに複雑にも攻撃を……」
小声でエルザが呟いた通り、チコ、マニューラが、まるでチームのような阿吽の呼吸で分散する。しかもサイコキネシスの当たる範囲外だ。

マニューラが側面から先に突っ込む、と見せかけ、サイコキネシスを受けないように地面に手を付けて身をかためる。本来効果がないならば、こうすればいいと思ってのことだった。

一方ではチコが、葉を振って葉っぱカッターを繰り出す。ブーメラン状の放物線を描く葉の刃は、エーフィが軽々しく避けてもまだ攻撃が止まらない。

しかし葉っぱカッターがブーメランのような運動だと気付いたエーフィはすぐさま背後を振り向き、サイコキネシスで葉を止め、逆にチコへと葉を飛ばした。

チコはとっさにもう一度葉っぱカッターでその葉を止める。

その隙を見逃さず、マニューラは気まぐれな判断でエーフィの真上を飛び越えてから、もちろんエーフィもマニューラが攻撃すると思っていた。しかし、マニューラの気まぐれには気付かず、マニューラの行った方向と正反対を向いてしまい、背後に回られた。

「確定状況……」

エルザはそう呟きながらすぐさま向き直るが、マニューラの爪により繰り出された辻斬りは、エーフィであるエルザの体をとらえた。相性抜群で、効かないはずがない。それでもダウンしなかったので、右手を使って追撃する。

「やった！」

チコは初めてエルザに攻撃が当たったことを確認し、思わず声をあげる。

マニューラは喜ぶ暇もなく体をおさえつけ、爪を首に向けた。

「さぁ、観念しろ！　私は自分のしてることがどんな事か知っていて、立場を理解し生きている！　だがお前は生きる資格すら失わせる行為を平然と行い、なおかつ立場を理解していない！」

「……やりますね。想像以上に力を使いますね。ですが、所詮その程度。私は自分の立場を知っています。最強であるが上の頂点です」

エルザがゆっくりともがき始めた。マニューラは徐々に力を入れていくエルザに気が付いた。段々と限界にパワーを近付けていくの

かもしれない。だとしたら危険だ。
チコも加担してエルザにのし掛かって捕らえようとする。
「……アンタは、恐らくその絶対的な力で権力に固執しているのだろう。その恐るべき力で支配して……！
だが、今ここにいるチーム、エレンシアは、世界を守り抜いた！
アンタのようなポケモンがいない平和に固執するしたからこその行動！
あまりにも真っ直ぐすぎて、悪党である私ですら感心したよ。それで少しだけ考えが改まったさ！　どうだい！？　私らは世の中はアンタのような時代遅れの思想は望んでないんだ！」
抵抗するエルザを押さえながら、マニューラは語った。
「マ、マニューラ……」
チコは初めてエレンシアというチームに肯定的なことを言ったマニューラに心動かされた。本当は、認めて褒め称えたかったのかもしれない。だが、ＭＡＤというチームである以上、そんなことはできなかったのだろう。
そんなことを考えるうちに、エルザはマニューラもチコも振り払って起き上がり、すぐサイコキネシスで二匹を操り、吹き飛ばした。
「ぐっ……！　あれではダメか……！」
「ううっ、せっかくあそこまで行ったのに……！」
まだ終わらないと二匹は立ち上がるが、もう一度チャンスを作り出すのは難しかった。
「時代遅れ？　より強い者が上に立つことは人間の時から変わらないルールですよ……？
まぁ、そんなくだらない愚民の戯言を言うのも終わりです。そろそろ使いない材料の二匹の息の根を止めて差し上げましょう」
エルザはゆっくりと近寄っていく。どうやらマニューラもチコも死に、絶命する空気を感じられるようだ。
自分以外をゴミのようにしか思わないエルザが、マニューラの言葉で熟考し、思想を改めるようとするはずもなかったのだ。

だが、まだ余力を残す彼女達は、反撃の手段を練っていた。お互いに静かに何かを語り合い、頷き合う。負けてはいられない。

未来へ、あの世へと消えたポケモン達が残した平和という遺産を守り抜く為に、戦い続ける。

７４話　決死のバトル（後書き）

あのエルザの目的に、深い意味はありません。ただ、力を持ちすぎるあまり、そして、唯我独尊であるが故に、自身の繁栄を求めているだけ。

75話　末路

エルザはチコとマニューラを、ここまでだと追い詰めようとしている。

ほんの少し、エルザを追い込んだ。しかし、無尽蔵の力を発揮され、取り押さえに失敗した。

しかし彼女にとっても、予定を狂わせられるということは久しぶりだった。たかだかエーフィの体では限度があるはずだが、その限度を超えた力を持つ。

「時間がない、あの女を誘導する」

「うん、やってみよう！」

もはや一刻の猶予も許されない。それぞれのチームの代表として立っているようなもの。チコとマニューラは狭い通路の中に逃げ込み、エルザを誘い込んだ。

「逃げましたね。だがそれは逃げても無駄と言わせ、それと同時にもう抵抗する気はないと思わせて油断を誘う、考えているのはそんな策」

エルザはやはり見切っていた。生きている以上は吐く息。その息から相手の思考を読み取る。

まさに空気の流れを読み取るというエーフィの能力を極限にまで発揮したと言える。

「さぁ、どうだろうね？　アンタにも技を止めるには限度があるはずだ」

マニューラがそう言うと、チコは一歩前に出る。

「そう、例えばこれ！」

チコは、今日二発目のハードプラントを放つ。多くの木を生み出して、今までの報復の意のこもった木々がエルザに襲いかかる。

「ハードプラント、……予定より強い？」

エルザは体の底から力を捻り出して、止めようと試みるも、上辺

の木が折れるのみで無効化には至らなかった。
「まさか、誤算……？」
エルザは技の程度を読めなかった自分にに失望し驚きながら、ハードプラントの中に包み込まれていった。
そして、チコもマニューラも、エルザにハードプラントが衝突した音を確認した。
「……やったか？」
マニューラはこれによりエルザも倒れたかもしれないと思った。
チコは、大技を出し続けていたことで、隣で疲れきった表情をしていた。
ありったけの力を押し込んでやった。今日、これまでその絶対的な力に押し込まれ、仲間をいいようにされて、苦い思いをしてきた分も今の一撃で吹き飛ばしてやった。
……と、その時チコは一瞬にして念に体を封じ込まれて、抵抗する力もなく後ろへと突き飛ばされた。
「っ……まさか！」
チコはこの瞬間エルザを倒せていなかったと察した。しかし、立とうにも大きな反動で立てない。
マニューラは一瞬背後を振り向いた後にすぐに向き直ると、そこには全身に小さな葉がこびりつき、そして傷を負ったエルザがいた。
「……」
マニューラは憎悪を深めてエルザを睨みつける。
「この私を追い詰める力があるとは……予想外でした……。しかし……それもここまで……！　今こそ終わりが告げられるのです！」
「アンタにね！」
エルザは息を荒げながらも、猛突進を仕掛けてきた。マニューラはそれを迎え打つ為に走り、突進してくるエルザの体に爪の尖った両手を突き刺した。
確かに爪はエーフィのエルザの首元に刺さったが、エルザが怯む様子はない。

「くっ……」
エルザの出してくる唸るような声でのサイコキネシス。その念のパワーに操られまいと、マニューラは地面にしゃがみこみ、両手を体の前に持ってきて防御姿勢を取る。
しかしその抵抗も虚しくエルザに側面の壁へ突き飛ばされる。常軌を逸する威力はとどまることを知らない。
「だから言ったでしょう……。私の敗北などいかなることがあろうが、あり得ない。世界の頂点に立つのですから……！」
エルザはそうはっきりと言い切った。彼女は自分中心の未来の世界構図を思い浮かべていた。
「……っ、言わせておけばっ！」
チコが反動から立ち直り、起き上がってエルザに向けて葉っぱカッターを放つ。そして間髪入れずに特攻を仕掛けた。
エルザは葉は左へと身をかわし、そしてブーメラン状に帰ってくるのが空気の流れで読めたエルザは身をかがめた。
だが、チコが姿勢の低くなったエルザの上からのしかかる。そしてチコは押さえ込もうとするが、エルザはすぐに上にいるチコを振り払った。
「くっ、後少しなのにっ……」
「フフフ、じゃあまずはあなたから……」
エルザがチコに向かってきた。チコが今度こそもうダメかもしれないと思った。何せ、これ以上抵抗できる策も体力も残っていない。
エルザは身を震わせて何かを仕掛けようとした。まさにその時だった。
「ごふっ……」
「えっ！？」
エルザが多量の血を吐き、何かを呟きながら倒れ込んでいくのを、マニューラとチコは目撃した。
マニューラは恐る恐る倒れたエルザに近付き、様子を見る。首を持ち上げて、顔に耳を近づけて、あらゆることを確認する。そして、

エーフィのそのエルザの首から手を離して、複雑の表情の浮かばせてチコに顔を向けた。
「マニューラ！　これは何が起こったの？　突然何が！？」
「まず言えること……こいつは死んでいる」
チコは何が起きたか分からず慌て気味だ。マニューラは冷静になって、起きたことを理解した。
「まさか、既にどこかで致命傷を与えていたとか……」
「いや、それはないね。それならこうなる前に倒れていたはず」
マニューラは壁にもたれこむ。今、エルザは吐血をして死んだ。ほっと安堵する一方、どうしてそうやって突然死を遂げたのか、マニューラは熟考する。
「で、でもこれで……みんな、助かったんだ……」
誰もいなくなった。もう敵はいない。倒したわけではないが、生き延びて、皆を救った。チコはそのことに満足した。
「そのようだね。やるべきことはやったんだよ。ひたすら逃げていれば良かったのさ」
「それはどういうこと？」
「あの女は絶大な力を持っていた。だがその分、体を酷使していた。想像だが、それにあのエーフィの体が耐えれなかったんだろう。
そして、体が悲鳴をあげて不治の病に冒され、そして、気付かずにいた」
壁にもたれかかって膝を立てるマニューラ。やりきって、今になって疲れがどっと体にのしかかった。
「病……？　どこが？」
チコは再びマニューラに問う。チコには病を携わっているようには見えていなかった。
「私には少し見えていた。様子がおかしなあのエルザの姿を。追い詰める前にね。その時に見た時には、気のせいかと思ってたけど、今となればそれは気のせいじゃなかったと言えるね」
マニューラは覚えていた。ほんの少し、余裕の表情から乱れてい

たエルザを。
　あまりのパワーに、それはすぐに勘違いと一旦結論を出していたが、それを改めた。
「そ、そうだったんだ……。じゃああの力は、身を滅ぼすものだった……。そりゃそうだよ、あんな力、誰にも負けやしない。そんなのが存在していいはずがないよ……」
　チコは冷静になって考えた。それでも驚きの表情。都合のいい話というのは世の中に存在しない。そう聞かされたことを思い出させた。
「そう、最初からなかったのさ。絶対的な力なんてものはね」
　そう結論付けながらマニューラは立ち上がった。まだやるべきことがある。アーボックやドラピオンと再会しなければならない。もう、敵はいないから安心だ。
　チコも元の方向を見た。息の止まったエルザの体に背を向けて、マニューラと共に歩き始める。
　絶対に、犯罪者は死なせてはならなかった。罪を償わせるチャンスを与える為に、何があってもそうさせることはいけなかった。
　だが、こうなれば仕方がない。諦めるしかない。でも、良く考えれば、殺しでもしなければ止められやしない相手。
「昔なら死刑だっただろうねぇ、確実に」
　マニューラの言う通り、以前ならば確実に死をもって償わなければならない刑になっていた可能性もあった。
　マニューラからすれば、エルザは自業自得で、死に対する同情の余地はなかった。
　マニューラとチコが、それぞれチームの仲間と会えたのはそのすぐ後だった。

75話　末路（後書き）

現在人気投票中。
皆さんの投票を待ってます。（割とマジで！）

76話　戦いの終わり

待っていたのは衝撃の結末だった。シュバルツは姉のエルザの手にかかり、死んだ。そして、そのエルザも、体が耐えられないほどの力を出し続けたことが原因で死んだ。

死体を連れていく訳にも行かないので、エレンシアとＭＡＤの五匹はあの施設の抜け道を見つけ、そのまま外に出た。

しかし、エムコルスは依然として目を覚まさない。施設を出るまで、とりあえずポケモンを容易に運べる体格のマニューラが抱えていて、そして、外に出てからまた様子を見る。

チコは無言でエムを見つめる。マニューラに爪で抱えられているが、彼は全くそれに気付くことはない。

元々敵だったポケモンにそうされていたら、本来ならすぐに彼は嫌悪感を露にするはずだが、そうしないのだからまだ意識がないということだ。

「……なんだい、不満そうな顔して」

「えっ、いや、別に」

チコが訝しげな表情をしているように感じるマニューラ。しかしチコは否定する。

「やられてオネンネ中のコイツを私が運んでいるのは、あくまでそうするのが私が一番容易だからに過ぎない。それでも不満ならお前が運んでやればいいじゃないか。相棒なんだろう？」

「……ふっ」

そう言ってマニューラがエムをチコの背中に乗せる。すると、ドラピオンは少し安心するように微笑んだ。

「け、結構、重い……ね。と、当然だけどさ」

そうされて、チコは妙な気分になった。

「しかし、さすがですねボス。あの女の秘密を見破ったってことで

すから」
「さすがはマニューラ様ってところ！」
安全な場所に出て、アーボックとドラピオンはマニューラを褒め称えた。
「まぁ秘密ってより、必然的にああなったってだけだね。私のしたことは大したことはない」
マニューラはクールに言い切った。
「ちょっと、自分だけでやったみたいに言ってさぁ……。大体、君はエルザと戦っていたあの時、私達を持ち上げてたじゃないか」
「持ち上げ？　さぁ、何のことだろうね」
「……は、はぁ！？」

チコがマニューラに対して、戦闘中に言っていたことを指摘すると、マニューラはしらばっくれた。まるで、その時の記憶が最初から無かったかのように。
チコは唖然とするが、「全くもう」と、仕方なさそうに首を縦に振る。
「困った時はお互い様だからね。あくまでその時は、利害関係の一致、協力しなければならない状況だった」
「そうだね、協力なしじゃあっちが自滅する前にやられていたかもしれなかったよ」
改めて予測できない幸運が自分には転がり込んできたのだとチコは思った。
「精々マニューラ様に感謝するんだな！」　鼻高々にドラピオンは言った。
「まぁ……そうだね」
満更でもなさそうなＭＡＤの態度を、チコは受け入れて微笑んだ。
「……ふっ、さてと。ここで緊急事態が収まったところで、アンタ達の道具と金を全て、普段ならいただきたいところだが、

せっかく世界的に迷惑な奴をこの世から追い払ったわけだし、今日はそれに免じて見逃してあげるとするよ。

さぁお前達、帰るよ！」

マニューラはチコに背を向けて、そしてドラピオンとアーボックを連れて、去っていった。

「マニューラ！　今日は本当にありがとね！」

チコはＭＡＤの去り際に叫んだ。マニューラは左手を上げるという形で答えた。素直に仲良くなろうというつもりはないらしいが、少なくとも認める気持ちは感じられた。

とにかく、終わった。あの爆発に巻き込まれてから今まで、精神的に張りつめていて、一時も気を抜けなかった。体にもムチを打ち続けた。倒れたら、そこで終わりだったから。

下手すれば、敵以外に犠牲が出たかもしれない。操られて襲いかかるエムコルスをギリギリで止めることができたのは奇跡に近かった。

「ちょっと、疲れちゃった……」

すっかり陽が沈んで暗くなり、帰るべきだが、気が抜けて座り込む。エムを隣で寝かせて、じっと見つめる。

体はひどい傷付きようだった。その傷の中には、自分が与えたものも混じっている。でも、意識を失っていても、彼の顔は気の引き締まった勇敢な顔つきに見えた。

無事に目を覚ましてくれるのを待つ為に、この場で看病する必要がある。今はとてもじゃないが、背負って連れて帰る為の体力がない。

・
・
・

「ううう……」

待つこと数十分、何もないが為に、疲れ果てて眠りかけていたチ

コの目を、声が覚めさせた。ようやく、エムコルスが目を開いたのだ。
「エム？　気付いたのね」
「チコ……無事だったのか」
エムがほっと、安堵した表情のチコに向けて放った第一声はそれだった。
「ま、まぁね」
やっぱり、とチコは思った。エムの記憶の中に、自我を失って暴走していた時のものは一切入っていない。
当然、そのことは言うつもりがない。絶対にそのことで悩んでしまうだろうから。
「奴らは……」
「死んだよ。力を使いきって、自滅。普通のポケモンの体じゃ耐えられない力だったらしいよ」
「そ、そうか……。結局お前がそれまで戦ってたってことか……。にしてもどうやって生き残れたんだ？」
傷が大きいからかもしれないが、虚ろな声と表情でエムは様々なことをチコに尋ね続けた。本当に、エルザ達に負けてからのことは知らないようだ。
「あそこはどうやら廃棄施設に繋がっていたみたい。そこに偶然、協力者が現れて……」
「協力者……？」
「そう。あのＭＡＤがいたのよ」
「へぇ……奴らが……。分からないものだな」
エムは妙に納得しつつ、体を起こそうとする。
「っ！」
「ちょっとちょっと！　まだ無理しちゃダメだよ」
エムは、体を動かすと痛み、腹部を押さえた。チコはエムを再び寝かせた。はぁ、とエムは深く溜め息をつく。
「悪いな、本当に。ごめん」

エムは心境的に入れ乱れていた。エルザが死んだのが自業自得であったこと。派手な悪事としたことを何もせずに終わってくれたことが何より安心していた。

それでも、今までの経験も何もかもが通用しなかったショックは癒えない。それと同時に、信じがたい事実に気付いていた。あまりに自分自身に対して自信過剰になっていたこと。

しかし、現実はこれだ。今までの自分すら良く見えなくなってきた。きっと、消えた仲間達からは恨まれている。夢がそう語っていたのだから。そんな者が、身の程知らずに振る舞っていたこと自体が愚かだった。

「いいって、別に。気にしなくても」

チコはそう言葉をかけるが、エムは視線を微妙に逸らしながら、切ない笑みを浮かべた。

「何も責任はないってば」

「……今日、俺ははずっと迷惑しかかけてない。それでもまだ容認してくれるのか」

チコは呆然とした。エムはこんなポケモンではないはずと思っていた。

普段ならば、表情は違えど常にどこか自信に満ち溢れている。多少苦しんでいても、抜け殻のようになりはしなかった。

それなのに――

これ以上は見たくはない。

「大丈夫だって。アイツには誰も勝てっこなかった。その代わり結末は一緒だから、いいようにやられても何も気にする必要はないんだって」

チコは目を逸らして、ムチを後ろに伸ばして、うまくエムを再び背中に乗せた。

「運んであげるよ。それまで休んでおくといいよ」

チコは疲れきった体をおしてでも帰ることを決心した。それまで、何か方法を考える必要があった。こういう時こそ、支えてあげなけ

ればと思った。
「そうか……。ありがと……う」
一方でエムは、それでも味方してくれるパートナーの有り難みを感じた。他者ならば放っておいてくれと言い切ったかもしれない。でも、チコだけはそうは決して思うことができなかった。
頭を使って何かを考えようとする度に苦しくなるだけの今。早くそれを止めたくなり、言葉に甘えて再び眠りに入った。

77話　クレセリア

エムコルスにとって悪夢のような日が終わった。悪夢と言っても、実際には負けるまでがそうだったに過ぎない。

結果的には皆が無事だった。奈落の底へ落とされようともチコは生きていた。でも何だかそれでも、気分は晴れない。

それは理由も単純。自分のせいであんな目に遭わせたのだと思うからだ。

自己嫌悪に陥ってきたエムは夢の空間の中にいた。周りには何もない。夢の中、最近は何か嫌なものを見せられる。

所詮は夢だ。現実で味わったことと比べれば、取るに足らぬこと――

そう思いつつ、何者かのシルエットを発見した彼はそれを見つめる。誰かいる。

「誰だお前は……」

見覚えのない姿を見て、エムは呼びかける。

「……私は……。私は、クレセリア」

「クレセリア？」

クレセリアと名乗るポケモンは、少しためらって名乗った。聞き覚えのあるような、ないような、そんな曖昧な名前だった。

「世界を破滅へ導く存在が今日消えたことは周知の事実です。しかし未だ、その破滅を呼ぶ存在は生き残っています。

破滅の道へと導く存在とは、あなたのことです」

「お、俺が？　何故？」

「あなたがこの世界にいる為に、あなたがここに存在する為に、このままだと世界が滅んでしまうのです！」

クレセリアが呪いのように言葉をかけてきて、エムには何かが飛んでくるように見えた。

何かやられる……やられる――

「……っ！」

エムが目を覚ますと、そこは自分達の基地、サメハダ岩だった。

動かしても何も痛まない。体は動くようになったようだ。

――また夢？　……本当に、夢なのだろうか？　どうも、ただの夢ではないような気が……。

嫌なことだらけで、深くは考えていられないエムは、熟睡しているチコを一目見た後に再度眠った。

そして、朝になった。嵐の吹き荒れた最近の日とは違い、今日は綿雲が流れていて爽快な天気だ。でも、心の天気は晴れない。

「うーん、今日もいい天気だね」

チコが西側の崖から空を見上げてそう言う。でも、いつもは外の眺めを見たりはしていない。

「ああ……。そうだな」

全く気力の感じられない声でエムが答えた。変にチコに気遣われているようで、悪い気がしてならない。

本当は、彼は今日はもうずっと休んでいたい。でも、そんなことをすればますますおかしな目で見られるだろう。

しかし、昨日の出来事が頭から離れない。ずっと見てきた夢の内容も頭から離れない。平静を保って活動しなければならないという理性と、休みたいという本性が頭の中を揺れ動かせた。

「さぁ、今日も頑張っていこう！」

「あ、ああ……」

チコの呼びかけに生気のない表情で言うエム。

「ど、どうしたの？　昨日のあんなの、もう忘れていいんだよ。これから倒す必要はないし、そもそも倒す必要がなかったんだってば」

「それもあるが……」

エムは口ごもる。あの敗北だけが悩ませているとチコは考えているんだとエムは考えた。でも、とてもじゃないがチコにすら言えないことがある。

「まぁ、次から何とか……」

これ以上心配されないようにエムは必死に言葉を作り、エムはチコに背を向けて出かけて行った。チコは一先ずついて行った。しかし、どうも気になって仕方がなかった。

トレジャータウンを通って、ギルドまで来る。つい昨日、エムもチコも死線を潜り抜けたことは誰もいざ知らず、一言二言弟子達と会話をする。

非日常の翌日は変わらない日常。しかし、何か重大なことを隠してしまっている気がする。昨日の出来事を警察すらにも誰にも伝えていない。だが、それよりも深刻な、もっと別のことを――

「げっ、探検隊だ！　逃げろー！」　森の奥深くで、パラスが探検隊らしき姿を確認して、逃げ始める。だがしかしすぐに電撃を受け、直後に捕らえられた。

「ま、参った……」　誰がそう降参させたかと言えば、エムコルスだ。彼は無言でパラスを捕まえ、パラスが、依頼主のコンパンから盗んだとされる何らかの種を奪い取る。

「さぁ、このダンジョンはもう来たことがあるし、もう帰ろう」

もはやチームにとっては朝飯前。今更気を張ることもなく成功させて、チコの提案でこれ以上の探索もせずにギルドに戻る。

「取り返してくれてありがとうございます！　これがお礼の技マシンです！」

そしてギルドで、エムはコンパンから「火炎放射」の技マシンを受け取る。これを使えば、すぐに技を覚えることができるという代

物。しかし、エレンシアでこの技が使える者はいない。よって、あまり意味はない。

「くそー！　探検隊なんて呼びやがって！」

依頼主にとってのお尋ね者のパラスまでギルドにやって来た。まだ懲りていないというより、直接文句を付けに来たらしい。

「私の爆裂の種を奪うからですよ！」

「だってあれは俺が先に手に入れたからだ！」

「しかし一度落としたから……」

しょうもない会話を続けるコンパンとパラス。終わったことだと、もはや関心一つ持たずにエムもチコも帰ろうとする。

「ルーチンワークしに来たようなやる気ない顔のポケモンにやられて、納得が……」

パラスのこの一言が偶然エムの耳に入り、エムは足を止めてパラスの方に目を向けた。

「ん、どうしたの、エム……」

「なんでもない」

所々、エムの様子を気にし続けているチコが尋ねると、エムはすぐ向き直って早足でギルドから去った。

こうして「ただの日」が過ぎ去った。

でも、彼は一日中、自身の心中だけて思い悩んでいた。自分の存在意義というものを。

憎まれつつ生きることが楽しくていいのだろうか。自分は、他（未来）の者達を裏切ったに違いない。裏切られたという恨み、妬みが精神に入り込んできたのかもしれない。

もう考えてなんかいられないと、エムは眠りに入る。しかし、彼に安息の時などなかった。

――ま、また夢……。

エムは、今日「も」夢の中に入り込んでいた。それにしても、不思議だった。こんなにも現実に本当にいるかのような夢が続くだなんて。

また昨日のように、目の前にクレセリアがいる。もう少し話を聞きたかった。

「クレセリアって言ってたっけ。教えてくれよ。俺がこの世界を滅ぼすというのは、一体どういうことだ？」

エムはクレセリアに尋ねた。心なしか、クレセリアからどこか邪悪な雰囲気が漂っている。まるで、呪い殺したがっているように。

「あなたは未来から来た人間であり、この世界の者ではないからです」

「な、何故それを……」

クレセリアはエムが元々ピカチュウなんかではなく、人間であったことを知っているようだ。

「空間が歪んでいることに気付き、この世界にいては不自然なポケモンがいると思い、調べましたから……。

それで、あなたの存在が空間の歪みを生み出していることが分かったのです」

「空間の歪み……？」

「そうです。これ以上空間の歪みが大きくなると、しまいにはこの世界が崩壊してしまうのです。崩壊すると、新たなる別の世界になってしまう……。

しかしその世界は、今とは全く違う環境の世界となり、受け入れる者は限られてしまうでしょう。あなたなら良く知っているでしょう、そんな世界を」

クレセリアの言葉でエムは背筋がゾクゾクとするのを感じた。聞きたくもないようなことを聞かされた。早く覚めさせるべき夢だ、しかし、もっと聞かねばならない。

「おい、それってつまり……」

「あなたの実績は知っています。しかし、あの行為による対価で、本来なら生きているべきではないのに生きている、あなただけが。それにより世界を崩壊させることは、立派な裏切りであり、あの行為が無意味なことであるとは思いませんか？」

時の止まった暗黒世界のことか、と言おうとするエムに割り込んでクレセリアは言葉を続けた。まるで彼に誰かを殺されたかのような目で。

エムは何も言い返せなかった。あの行為とは、星の停止を食い止めたこと。あれで、誰も未来からの仲間はいなくなった。

「だからあなたはこの世界にいてはならないのです、絶対に……！」

エムの意識が夢から遠退こうとする。クレセリアの姿が歪んでいく。まだ聞きたいことは山ほどあるというのに。

「ま、待て……！　何故そこまでお前はそんなに俺に詳しいんだ？おい、まだ話をっ……！」

断末魔のようなエムのクレセリアの叫びも虚しく、エムはただの眠りに落ちていった。

彼は追い求める必要があった。生きる意味というものを――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3574i/

ポケモン不思議のダンジョン 探検隊物語?―闇の創世者

2011年11月16日03時13分発行